親知実見

パオ・セヤドー

翻訳: Paññādhika sayalay



『親知実見』Knowing and Seeing [緬甸] パオ・セヤドー講述パオ・セヤドーによる台湾禅修リトリートにおける法話及び問答 瑪欣徳、持法、聖行 共訳 <台湾南伝上座部仏教学院 出版>

《叢書総序》

本叢書は、2008年、パオ・セヤドーに、出版に関する我々の事業について指導をして頂く旨願い出ると共に(叢書出版に賛同する旨のサヤドーの)サインを頂く事から始まり、我々は順次 「上座部仏教叢書」 を出版する事となった。「上座部仏教叢書」 は、5 つの小さなセットになっている。(出版された)順序で言えば、一番目は「パーリ三蔵訳叢」、二番目は「パオ・セヤドー叢書」、三番目は「禅師(パオ・セヤドー)弟子叢書」、四番目は「上座部仏教選集」、五番目は「上座部仏教弘(法)護(持)叢書」・・・これらが、本叢書の構成であって、パーリ聖典の解釈と弘法と護持を目的とし、三蔵を教示し、修行を趣とし、煩悩を断じ尽くす事に帰結する事を通して、衆生を利益、楽するを旨とする。

「パーリ三蔵訳叢」の内容は、すなわち、三蔵聖典の「訳」本である。パーリ三蔵は、 当然の事ながら、パーリ三蔵の本体を主体として、かつ、伝統的な、三蔵を解釈する所の 註と疏を含み、三学を教示し、修行する為のもので、一括してパーリ三蔵と呼ぶものであ る。それらは律、経と論の三蔵を広く含み、律、経と論のどれか一つに偏向する事がない 上、三蔵にのみ依拠するという事もない。「パーリ三蔵訳叢」は、当学院が出版する叢書 のトップの位置を占め、三蔵を翻訳する事は、外国語に暗い人々に聞法の盤石とならんと 欲するものであり、我々が最も力を入れている所のものである。

本叢書の最後の1セットは「上座部仏教弘(法)護(持)叢書」で、これは、パーリ三蔵(すなわち「蔵内文献」)に重きをおいているものあるが、それは、現代においてたやすく見る事の出来る、緬甸第六次結集版のパーリ聖典の「蔵外文献」の様なものをいう。端的に言えば、この四種類の小さなセットの叢書は、パーリ聖典の如くに、三蔵を主体とし、蔵外の文献を付帯するものである。蔵外文献は、内容が多元的であり、それは例えば、上座部仏教史伝(例えば三宝の世間的伝承、讃仏頌)、パーリ語文法書、現代緬甸

Ledi Sayadaw 大師の著作及び通世俗的な、才徳兼備の書物(例えば 《Lokaniti》)など、また三蔵の義註と見做す事の出来る 《清浄之道》 も含むものとする。

前の三種類の叢書は、三蔵聖典を翻訳し、解説する事を主としている;弘法護持関連の 叢書は、法蔵外の文献の精神に則り、蔵外の文献を訳したり、また解説したりするもので ある。後者は広く、僧団(サンガ)に代表される所の三宝の宗教文化、上座部仏教を主と した仏教世界の歴史的また地域的文化民俗を含むもので、上座部仏教本体と、教外との相 互的な交流による顕著な特色を有するもの、または教外にあるものなどを厳密に分類して (紹介する)、個別の地域または道場の紹介、古今長老宗師の伝記行状、護法の弟子伝 (例えば、仏陀の世における給孤独長者、阿育王等)、芸術絵図詩文歌(例えば、Pagan 古城)、聖地巡礼訪問記等。

本叢書の第四番目の小セットは「上座部仏教選集」で、その内容は、パーリ三蔵の解説と弘法・護持を含み、上座部仏教の名著など、比較的自由で多元的な選択方針を保ち、上座部仏教の伝統的な教区に限定せず、著作の多くは、パオ・セヤドーのものでもなく、その弟子のものでもない。本叢書は、単に台湾の必要に迫るだけでなく、更に広く華人に用いられるものである。叢書の著作、書写、編集、編纂、出版、流通と大衆の受用を通して、我々は菩提資道糧を育成し、更に多くの、師となる資質の人々が排出する事を期待し、師資の育成、訓練の計画を擁し、教学センターを建設し、もって、上座部仏教が台湾等の新しい教区に根付く事に協力するものである。



目次

《叢書総序》	1
中国語(翻訳)版序文	10
禅者序文(第一版)	12
英語版序文(第一版)	14
英語版再版序文(第二、第三版)	15
緒論(序論)<注 12>	20
第一節 仏陀の教法	20
第二節 何が徹底的に知られねばならないか	21
第一と第二聖諦	23
第一聖諦——苦聖諦とは何か?	23
第三節 第一聖諦を知見する	32
如何にして第一と第二聖諦を知見するか	35
一、定力の育成	35
二、智慧の光の育成	
三、定力の保護	
四 勝義諦への通達(到達)	38
究極名法への通達(到達)	39
三種類の清浄	43
第四節 第二と第三聖諦を知見する	44
如何にして第三聖諦を知見するか	45
一 縁起を知見する	47
二、観の修習	49
三、無為法を知見する	50
四、完全に四聖諦を証悟する	51
第一講 如何にして入出息念を修習してジャーナに到るか	59
)_	.

なぜ禅修行をしなければならないか?	. 59
禅の修行とは何か?	. 60
八支聖道	. 60
ロ何にして禅定を育成するか	. 63
如何にして入出息念を修習するか	. 63
禅相	. 68
如何にして五根をバランスするか	. 70
如何にして七覚支をバランスするか	. 74
如何にしてジャーナを証得するか	. 74
答 (一)	. 81
二講 如何にしてその他の業処によって安止定を育成するか	. 90
ロ何にして 32 身分を修習するか	. 91
涅槃の三門	. 92
ロ何にして白骨想を修習するか	. 93
ロ何にして十遍を修習するか	. 95
色逼	. 95
如何にして白遍を修習するか	. 95
如何にしてその他の色遍を修行するか	. 98
如何にして地遍を修習するか	. 98
如何にして水遍を修習するか	. 99
如何にして火遍を修習するか	. 99
如何にして風遍を修習するか	. 99
如何にして光明遍を修習するか	100
如何にして虚空遍を修習するか	100
U無色禅	100
如何にして空無辺処定を修習するか	101
	如何にして入出息念を修習するか 禅相 如何にして五根をバランスするか 如何にしてジャーナを証得するか 如何にしてジャーナを証得するか 「講 如何にしてその他の業処によって安止定を育成するか 「理槃の三門 「回にして自骨想を修習するか 中何にして十遍を修習するか 如何にして中遍を修習するか 如何にしてその他の色遍を修行するか 如何にして水遍を修習するか 如何にして水遍を修習するか 如何にして水遍を修習するか 如何にして水遍を修習するか 如何にして水遍を修習するか 如何にして水遍を修習するか… 如何にして水遍を修習するか… 如何にして水遍を修習するか… 如何にして水遍を修習するか… 如何にして光明遍を修習するか… 如何にして光明遍を修習するか… 如何にして光明遍を修習するか… 如何にして光明遍を修習するか… 如何にして光明遍を修習するか… 如何にして光明遍を修習するか… 如何にして光明遍を修習するか… 如何にして光明遍を修習するか… 如何にして光明遍を修習するか… 如何にして虚空遍を修習するか… 如何にして虚空遍を修習するか… 如何にして虚空遍を修習するか…

如何にして識無辺処定を修習するか	102
如何にして無所有処定を修習するか	102
如何にして非想非非想処定を修習するか	102
問答(二)	104
第三講 如何にして四梵住と四護衛禅を修習するか	115
はじめに	115
如何にして慈を修習するか	115
如何にして各種の人々に逐一慈愛を散布するか	117
如何にして限界を突破するか	120
22 種類の逼満	121
如何にして無限界と有限界慈心遍満を修習するか	122
如何にして十方遍満を修習するか	
如何にして悲を修習するか	124
如何にして喜を修するか	125
如何にして捨を修するか	125
如何にして四護衛禅を修習するか	126
如何にして仏随念を修習するか	126
如何にして不浄を修習するか	128
如何にして死随念を修習するか	129
結び	130
止を修する利益	131
問答(三)	133
第四講 如何にして色法を識別するか	149
はじめに	149
三種類の色聚	150
三種類の色聚の中の色法	151

業生色	153
心生色	154
時節生色	156
食生色	156
観の修習の始め	158
如何にして四界差別を修習するか	158
如何にして 12 の特徴を識別するか	160
定力を育成する 10 種類の善き方法	164
如何にして究極色法を見るか	165
身体の透明な塊の如くの状態にあるを見る	165
如何にして色聚を見るか	166
(定力の利益)	166
明浄色聚と非明浄色聚	167
如何にして色聚を分析するか	
如何にして四界を見るか	167
如何にして色彩を識別するか	169
如何にして香を識別するか	169
如何にして味を識別するか	170
如何にして栄養素を識別するか	170
如何にして命根色と性色を識別するか	171
如何にして心処色を識別するか	171
如何にして一つひとつの感官を分析するか	172
如何にして浄色を分析するか	172
如何にして性色を分析するか	173
目の中の 54 種類の色法	174
如何にして心生色法を識別するか	175
如何にして時節生色を識別するか	175
如何にして食生色法を識別するか	176
グキッド	170

問答(四)	92
第五講 如何にして名法を識別するか2	17
はじめに2	17
名法を識別する四つの段階2	18
如何にしてジャーナ心路を識別するか2	18
如何にして欲界心路を識別するか	24
如理作意と不如理作意2	24
如何にして意門心路を識別するか2	24
如何にして五門心路を識別するか2	25
如何にして外在の名法を識別するか2	29
先に内外の色法を識別する29	29
次に内外の名法の識別をする2	30
問答(五)2	35
第六講 如何にして縁起の連結を透視するか2	49
はじめに2	49
第五法	49
縁起の三輪転2	
如何にして過去世を識別するか2	
実例	
一名の女性禅修行者による識別2	
一名の男性禅修行者の識別	
如何にして更に多くの過去世を識別するか2	56
如何にして未来を識別するか	56
第一法	58
問答(六)20	63
第七講 己自ら涅槃を見る為に如何にして観智を育成するか	81

<はじめに>	281
如何にして思惟智を育成するか	281
如何にして観智を強化するか	283
40 行相	283
色七法	284
非色七法	286
如何にして生滅智を育成するか	288
<はじめに>	288
如何にして縁起第五法に基づいて生滅智を育成するか	289
生起随観の法	289
壊滅随観の法	290
生滅随観の法	291
如何にして縁起第一法に基づいて生滅智を育成するか	292
如何にして 10 種類の汚垢(汚れ、汚染)を克服するか	294
如何にして壊滅智を育成するか	294
己自ら前の 11 種類の観智を知る	295
涅槃を知見する	296
省察智	297
問答(七)	303
第八講 仏陀の弟子と教法に対する期待	324
仏陀寿行の捨棄	324
仏陀の期待	325
仏弟子の責任	326
我々は如何にして世間を利益するか	327
我々は如何にして信心(=確信、以下同様)を表現するか	327
我々は、何を学び何を修行しなければならないか	328

	修行の基礎	328
	止禅と観禅	331
	仏陀のサンガに対する教誡	335
	仏陀の比庫に対する提案	337
第	九講 最も殊勝な布施	342
	はじめに	342
	師長(指導者)の弟子への恩徳	343
	失ってはならない良機(チャンス)	345
	14 種類の個人施(個人による布施)	347
	七種類のサンガ施	349
	四種類の布施清浄	350
	功徳無量なる布施の六種類の要素	354
	リトリート期間における布施	356
	施主の心願	357
	最も殊勝な世間的布施	358
	如何にして最も殊勝な布施を実践するか	361
	付録1 40 種類の禅修業処	364



中国語(翻訳)版序文

本書は英語版 "Knowing and Seeing"からの訳本であるが、それは、西暦 1998 年 4 月 17 日から 6 月 16 日まで、緬甸のパオ・セヤドー(Venerable Pa - Auk Tawya Sayadaw)<注1>が、台湾新竹壱同寺において止観禅修営(止観禅リトリート)を指導した時に開示された法話と問答である。当該の禅修の期間、パオ・セヤドーの華人の弟子は、セヤドーの法話の原稿と問答を先に中国語に翻訳しておき、その後、編纂して書籍とし、その題は《如実知見》、台湾で出版されたものである。1999 年、当該の書籍の第二版が広東で印刷、発行され、2000 年 5 月、再び台湾において、第三版が出版された。近年、増々多くの華人が南伝上座部仏教の止観禅法を学び実践するに従って、当該の英語版の内容もまた不断に追加され、改訂され続けてきたが、20 年前に翻訳して流通した中国語版《如実知見》もまた、増々日毎に増加する所の、禅修の愛好家需要に応える事ができなくなってきた。ここにおいて、筆者は、パオ・セヤドーの版権許可の慈悲の下、2010 年の当該の英語版の第四版(Fourth Revised Edition)に基づいて、全体的な重訳を行ったが、それがここにおいて、読者の目の前におかれた、この著作 『親知実見』 である。

今回、この書籍に対して中国語の重訳を行った際、その書名に、旧版の《如実知見》を用いなかったのは、実は「知見」という語彙は、もし、それを名詞として理解するならば、漢文化の伝統的仏教の語感においては、多少蔑むの義が有される、すなわち、「知見」とは、「己自身の思慮分別に依って、立てた見解。智慧とは別物。智慧の般若とは、無分別智で、思慮分別とは離れている心識である。」とする(《仏学大辞典》)。例えば、禅宗のいう所の「知見に落ちる」云々。本書の英語版の原題は "Knowing and Seeing"で、それは強くて力のあるジャーナを基礎として育成された慧眼でもって、究極名色法及びその因・縁の自性相(各種の特徴)、及び無常・苦・無我の共相(共通の性質)を、己みずから了知(Knowing)、如実知見(seeing)し、かつ、この種の親知実見(己みずから知り、己みずから実際に見る事)を通して、煩悩を断じ除き、涅槃を証悟する、という意味をもつものである。故に、我々は、この本の書名を 『親知実見』 とした。

仏陀は《増支部・二集》において、文言言語の間違い(Dunnikkhittassa padabyañjanassa)と意味の誤解(atthopidunnayo)の、この二種類の法は、正法の混乱と埋没を齎すと述べた。(A.2. 20) 本書が紹介している内容は、南伝上座部仏教の伝

統的止観禅法であり、その作者は伝統的な上座部大長老で、また、中国語訳を担当した者も皆、上座部の仏弟子である。故に、本書は、上座部仏教の幾つかの仏教用語もまた、上座部仏教の伝統に基づいて、パーリ語の音訳を採用するものである。例えば:パーリ語bhikkhuは、音訳して「比庫」、pātimokka は音訳して「巴帝摩卡」、arahant は音訳して「阿拉漢」等々とし、読音と意味・解釈が漢文化地域における仏教の伝統と重なる「比丘(bhiksu)(s下部点あり)」、「波羅提木叉」(prātimoksa)(同左)、「阿羅漢」(arhant)等(は採用しない)。当然、我々が「比丘」「比丘尼」を使用する時、それはすなわち、中国大陸、台湾、韓国、日本、ベトナムなどの漢文化地域の伝統的大乗仏教の僧尼を指すものである。

この書籍を翻訳するに当たって、多くの人々の手を経た。2011年、聖行(Ariyācāra)賢友が、先に当該の書籍を翻訳する事を承諾したが、彼は当該の2000年中国語第三版の主要な部分を校正し、翻訳した。その後、筆者が原稿を引き取り、その内の前三講について、校正と翻訳を行った。2013年始め、筆者は、西双版納(=雲南省シーサンパンナ)法楽禅修園にて止観禅リトリートを指導し、また、法住禅林の建設と結界の準備等(で多忙になったの)が原因で、当該の原稿はやむなく、脇に置いたままになってしまったが、その時、持法(Dhammadhara)賢友が、引き続き、校閲と重訳の任務を受け継いでくれた。持法賢友は改めて、書籍全体の文字と内容に関して翻訳を行い、二度の校閲も行った。聖行と法持という、二名の賢友は、皆文学部英文科を卒業した者で、彼らの訳文はほぼ完璧ではあったが、筆者の、直訳の風格を保持したい由、及びその前に出版されて流通している所の、上座部系列の書籍の文字、表現の風格を統一したいという思いから、筆者は2014年から、法住禅林における教学の暇々に、上に述べた二名の賢友の翻訳原稿に対して、全編通読して、校閲と翻訳を行った。

書中、パーリ経典の全ての引用部分に関して、すべてパーリ原文と対照し、それらのパーリ語に基づいて翻訳した。本書は多くの人々の手を経、多くの時間を費やして出版されたものであるが、それでも、瑕疵と不足の部分があるのは免れない。もし、筆者の錯誤及び粗忽が原因で、本書の中において、パオ・セヤドーの元々の表意、表現が巧みに表す事が出来ていないならば、筆者はその責を負う事に吝かではなく、かつ、読者と禅修行者に対して、許しを請うものである!

パオ・セヤドーが慈悲をもって、本書の翻訳の版権許可頂いた事に感謝し、聖行と持法という二名の賢友の、細心の翻訳に感謝します。また、シンガポールの伊氏、湯氏、粛氏の賢友の方々の中国語・英語の校閲、関連するパーリ語原典の査察、幾度となく、パオ・セヤドーに教えを乞い、英語第四版の中の、多くの誤植や漏れを改正してくれた事に感謝します; 黄氏、巴利氏などの賢友が、本書の編纂と校正の作業を引き受けてくれた事に感謝し、本書の編纂と翻訳、出版、流通に関わったすべての人々に感謝し、すべての人々が一日も早く正法の清涼を獲得して、一日も早く、一切の苦から解脱する事を祈ります!

Sādhu! Sādhu! Sādhu!

瑪欣徳(Mahinda) 西双版納法住禅林にて 2016 年 10 月 15 日

禅者序文 (第一版)

皆様ご存知の通り、戒・定・慧の三学は、仏法の修学(修行と学び)の次第であり、この三学は、凡夫をして涅槃を証悟せしめて、聖者と成す事ができる。仏音尊者が編纂・著作した《清浄之道》(Visudhimagga、または《清浄之道》)はすなわち、この三学を大綱とし、かつ、パーリ三蔵と義注(ママ、以下同様)に基づき、七清浄及び16観智を解説したものである。しかし、それらを成就するにはどうしたらいいかは、歴代の仏教徒が対面せざるを得ない難題である。

我々は、幸いにして、緬甸のパオ禅林の Venerable Pa-Auk Tawya Sayadaw

に出会う事が出来た。彼の教法と《清浄之道》は一脈相伝であると同時に、(《清浄之道》より)非常に詳細で実際的である。彼は、《清浄之道》に依拠するだけでなく、またパーリ三蔵聖典及びその義注に依拠して、段階を追って、禅修行者が如何にしてこれらの清浄を成就するのか、観智を育成するのか、を指導している。パオ禅林の修学の目標は、今世現証涅槃である。涅槃を証悟する為に、禅修行者は名色(五蘊身心)の無常・苦・無我の三相を観照しなければならない。観の修習における所縁は、内部と外部の五蘊だけでなく、過去、現在と未来、粗い、微細、劣等、優秀、及び近い、遠い五蘊が含まれる。

唯一、すべての、これらの一切が、無常・苦・無我であると、徹底的に観照できた時にのみ、禅修行者は、聖道聖果を証悟する事が出来、かつ、漸次、異なるレベルの煩悩を断

じ除く事ができるか、または、減じる事ができる。己みずから、初めて涅槃を証悟した後、禅修行者は、已に証悟した所の初道初果、已に断じた煩悩及び断ずべきではあるが、未だ断じていない煩悩をはっきりと観察する事ができる。この後、禅修行者は、更に高度な道果を証得し、阿拉漢聖果を獲得し、不受後有、命尽きる時、般涅槃を証する為に、引き続き観を修習するのである。仏法が衰微する時代に、筆者が完全な原始禅法を修学する事が出来るとは、実に慶祝すべき幸福であり、それは将に仏陀の時代に回帰したかの如くの法の喜びである!

Venerable Pa-Auk Tawya Sayadaw が、長年隠遁修行し、パーリ聖典と義注を研究、 実践し、この教法を再び復活せしめた事に恩に感じ、感謝する!

衆生への慈悲から、彼は己自身の時間を捧げて禅の修行を指導し、有情に利益し楽を齎した。彼の教導する七清浄の段階は明瞭で、明晰で詳しく、この事は台湾だけでなく、世界全体における得難く、出会うに値する禅法である!

この度(1998年4月~6月)、Venerable Pa-Auk Tawya Sayadaw 初めて来台し、新竹壱同寺において、二か月の間、禅リトリートを開催した。彼の指導は、台湾人の原始禅法への興味を引き起しただけでなく、かつ、大乗禅法の幾つかの不足を補うのに大きな助けとなった。読者の皆様には、パオ・セヤドーの、台湾におけるこれらの緻密な法話と問答を閲読した後、更に深く仏陀の教導を理解出来る様にと希望するものである。

正法久住を願う!

また、この本の世に出る事が、世界各地の、生死の迷いを破り除きたいと思い、解脱を探し求める者に依拠を与え、更に多くの人々を、真正に解脱の道に歩み入って、己みずから「諸行無常、諸法無我、涅槃寂静」を証悟せん事を願う。これは水月空花(水に映る月、掴めない花)ではなく、己みずから証する事のできる境である。ただ己みずから<親知実見>する者のみが、ただ己みずから証する者だけが、その中にある法の楽を享受する事が出来る。

台湾比丘尼 緬甸パオ禅林にて 1998年9月22日

英語版序文(第一版)

本書の法話は、緬甸モーラミャインパオ禅林 パオ・セヤドー (Venerable Pa - Auk Tawya Sayadaw) が、台湾新竹壱同寺において、禅リトリートを指導した時に話された事である。この2か月間のリトリート中、セヤドーは、毎日、個別の禅修行者に禅の指導をするだけでなく、事前にパオ禅林にて準備してあった所の、七篇の法話の原稿を読み上げられた。これらの法話は、合計七回の問答と相呼応するものである。すなわち、すべての問題・疑問は事前に禅修行者によって書き出され、セヤドーは先にその回答を準備したのである。これより外に、セヤドーは、二回、法話を行った:

一度目は、ウェーサカ祭(仏陀の誕生、成仏と般涅槃の記念日)において、一般の大衆に対して行った法話;もう一度は、リトリートが終結する時、伝統に基づいて、施主――壱同寺住職、其の他の施主、リトリートの主催者及びその協力者――の為に行った布施に関する法話である。

16 回のすべての法話の原稿は、英文が使用されていて、セヤドーが英語で読み上げた。 聞法者(すべて華人)の利益・受用の為に、これらの原稿は、事前に中国語に訳されてあって、セヤドーが英語で読み上げた後、即刻、中国語で読み上げられたのである。これらの法話は、主にセヤドーの、観禅の修習の原則――先に止禅を修習し、その後にこれをもって乗り物として、観禅の修習をするものである。セヤドーはまた、純観行道も指導されるので、故に、彼はこの二種類方法によって、正統な指導を行うものである。

(中略)

この書籍の編纂作業において、真っ先に考慮したのは、必要な精度と正確性の確保、及び初心者、禅修行者、または学者であっても、誰が読んでも理解できる事、とした。故に、編纂の完璧な統一性は多少調整される事となった。本書の翻訳、編纂等において、多くの人々の手を経た。もし、本書に過失と誤謬があるならば、関与者全員がその責を負うに吝かではない。

英語版編纂者 緬甸パオ禅林にて 西暦 1998 年

英語版再版序文 (第二、第三版)

第一版"Knowing and Seeing"(《如実知見》)は、最も尊敬する、パオ禅林セヤドー(the Most Venerable Pa-Auk Tawya <注 2>Sayadaw)の、台湾における止観禅リトリートの法話録である。当該の書籍が出版された時、最大の努力を払ってはいるものの、それでも少なからぬ誤謬があった。これらの誤謬は、主に言語上の問題で、大きな障碍にはならないものの、しかし、書籍の内容に、ネガティブな影響を齎したのも事実である。この度の改訂版は、誤植などの間違いを正すだけでなく、初心者が更に学習し易い様に、全面的な改訂を行った。

改訂版は、言語表現について注意を払うと同時に(一つの事物に対して一つの語彙のみ使用する事)、必要のない重複語<注3>及び余分な内容は削除したが、一方、多くの必要な内容を追加した、例えば図表、脚注、引用文のソース、内容の詳細な一覧表、問答に関する索引等など<注4>、またある部分においては、内容を一から改めた。また、パオ・セヤドーは、大量の相関するパーリ聖典を引用して<緒論(序論)>を書かれたが、これは止観禅修習の大綱<注5>であると言える。最も尊敬するパオ・セヤドーご本人もまた幾つかの術語の使い方を調整された、例えば、パーリ語の cittavīthi(心路)は、mental-process を採用し、以前使用していた thought-process は廃止した;consciousness(心)を、一つ一つ数える事の出来る名詞とした(one consciousness 一個の心、two consviousness 二個の心)。the Buddha(仏陀)はすべて、二つとも大文字で始まる The Buddha として、文字における表現上の敬意を表す事とした。

いくつかの緬甸語で、礼儀的な修飾語は、改訂版においても、引き続き使用した。例えば、第一人称単数の「私」、「私の」は、第一人称複数の「我々」、「我々の」と表現する・・・というのも、緬甸語においては、第一人称単数の「私」でもって、己自身を表現するのは、謙虚さが足りないと言われるが故に、などである。当該の改訂版に関して、我々はよくセヤドーに教えを乞い、セヤドーもまた、原稿全体を再度校閲して下さった上に、彼自身の評定、更に一歩進んだ解釈、内容の修正等なども加えて頂いた。

本書第一版への反応を鑑み、また、最も尊敬するパオ・セヤドーの教導の全体性を考慮 するならば、以下の四点をぜひとも指摘しなければならない;

- 1) ある種の人々は、便宜性の為に「パオ・メソッド」という語彙を使って、パオ・セヤドーの禅修の指導内容を表現するが、しかし、実際にはいわゆる「パオ・メソッド」というものは存在しない。パオ・セヤドーの指導する禅修次第は、「彼の」ものではない。それは、上座部仏教の伝統<注7>、すなわち、パーリ三蔵、義注と復注、特に傑出した古代の義注と禅修指導書《清浄之道》に、直接、厳格にソース・来源しているものである。
- 2) 直接、パオ・セヤドーご本人の指導を受けるか、またはセヤドーの指定する業処教師に指導される禅修行者は、全部または部分的にも、本書で表明している所の、システム的な教導を禅修の実践に運用しなければならない。正に、パオ・セヤドーが、パーリ聖典(律、経、論三蔵)の目的は実践の運用にある、と述べている様に。また、正に、仏陀の教導した教理(pariyatti)と禅修(paṭipatti)は並行して進められるべきである。教理に基づいた指導によって実修し、また体験して、最終的には証悟(paṭivedha)に向かうものである。
- 3) 法話で話された内容は、処方の様に詳細なものではない。というのも、本書は、禅修 ハンドブックではなく、単なる禅修便覧であるが故に。

今回の改定に当たり、本書に、已然として誤謬があるならば、編集者は、再度、読者と 彼らが最も尊敬するパオ・セヤドーの許しを乞うものである!

この書籍の出版に携わったすべての人々、その最初から、彼らが付与したものの内において、無量の功徳を得る事が出来ます様に!

書籍出版の為に付与したすべての功徳を祈願し、未来の読者がこの書籍を読む功徳を祈願 し、この書籍による支援または禅修行の成功の功徳を祈願し、世間と出世間における成就 獲得の功徳を祈願し、これらの功徳をもってして、最も尊敬するパオ・セヤドーの健康と 楽を祈願する!

経典略語(本書引用の経典)

A.=Aṅguttara-nikāya (增支部)

A.A.=Aṅguttara-nikāya-aṭṭhakathā<注9>(增支部義注)

Abs.=Abhidhammatthasangaho (摂阿毘達摩義論)

Ap.=Apadāna (本行)

D.=Dīgha-nikāya (長部)

D. A.=Dīgha-nikāya-aṭṭhakathā (長部義注)

Dhp.=Dhammapada (法句)

Dhp.A.=Dhammapada-aṭṭhakathā(法句義注)

Dhs.=Dhamasaṅgaṇī (法集 [論])

Dhs.A.=Dhammasangaṇī-aṭṭhakathā(法集[論]義注)

D. T.=Dīgha-nikāya-ṭīkā (長部の復注)

M.=Majjhima-nikāya (中部)

M.A.=Majjhima-nikāya-aṭṭhakhā (中部義注)

M.T.=Majjhima-nikāya-ṭīkā (中部復注)

Pc.=Vinaya Pācittiya (律蔵)

Ps.=Paţisambhidāmagga (無礙解道)

S.=Saṃyutta-nikāya(相応部)

S.A.=Saṃyutta-nikāya-aṭṭhakathā(相応部義注)

Sn.=Sutta-nipāta (経集)

Thg.=Theragāthā(長老偈)

U.=Udāna (自説)

Vbh.=Vibhaṅga (分別[論])

Vbh.A.=Vibhaṅga-aṭṭakathā (分別[論] 義注)

Vbh.T.=Vīsuddhimagga-ṭīkā<注 10>(分別[論]復注)

Vm.=Visuddhimagga(清浄之道(ママ))

Vm.T.=Visuddhimagga-Mahātīkā(《清浄之道》大復注)

本書の略語の番号は、緬甸版パーリ三蔵の順序を踏襲する、たとえば、M.1.132は、

M=Majjhima-nikāya (中部)

1=第一冊、Mūlapaṇṇāsapāļi(根本五十)

132=第 132 段

S. 5.1091

S=Saṃyutta-nikāya (相応部)

5=第五品、Mahāvagga(大品)

1091=第 1091 経

A.4. 141

A.=Aṅguttara-nikāya (增支部)

4=Catukkanipātapāļi (四集)

141=第 141 経

Vm. 223

Vm=Visuddhimagga(清浄之道)

223=第 223 段

脚注

<注 1>=セヤドー、緬甸語 sayadaw の音訳(またはサヤドーとも表記)。意味は尊敬する教師、指導者。緬甸人による、徳の高い人望のある大長老または寺院の住職への尊称。ある種の人々は「パオ・セヤドー」を「パオ禅師」と呼ぶが、しかし、緬甸語では、「セヤドー」と「禅師」(kammathan saya)は二種類の異なる呼称である。ある種のセヤドー(大長老)は、禅師であるとは限らず、ある種の禅師(例えば禅を教える僧尼指導者)も、セヤドーであるとは、限らない。

<注 2>=多くの"Pa-Auk"寺院が存在する為、最も尊敬するパオ・セヤドーは、屡、その呼び名の中に"Tawya"を入れて、区別する事がある。

<注3>=英語の立場から見ると、緬甸語(とパーリ語)は、重複表現の多い言語である、と言える。

<注4>=《第四講 如何にして色法を識別するか》を加えた。

<注5>=パオ・セヤドーの厳密な指導と監督の下、ある一人の<優秀者>が代筆したもの。

<注 6>=第一人称複数を用いて謙虚さを表現する修飾語。パーリ聖典の義注の中において、見ることができる。セヤドーの弟子の一人が指摘する様に、セヤドーの教導は、パーリ聖典を解説しているのであって、他ではない。彼の教導は、実際に彼自身の声・意見ではなく、それは歴代の比庫(南伝の男性出家者 bhikkhu、以下同様)たちが伝承してきた伝統的な声である。それは、仏陀ご本人の指導・教導を、自らの耳で聞いた、あれらの比庫にまで遡る事ができる。

<注 7>=本書第一版においては、仏音尊者 (Ven. Budhaghosa) の「己自身の意見は最も弱い・・・」 (D.A. 2. 188) とパオ・セヤドーの「これは私の禅法ではない。私はただパーリ三蔵と義注の中からそれらを取り出しただけである」という言葉を引用した。この事は、本書の初めから終わりまでの、引用文の中で見てとれる。

<注8>=脚注63参照の事。

<注9>=パーリ三蔵義注の名称

A. A. =Manorathapūraṇi《満足希求》;

D.A.=Sumangalāsinī《吉祥悦意》;

Dhs.A.=Atthasālinī《殊勝義注》;

M.A.=Papañcasūdanī《破除疑障》;

S.A.=Sāratthappakāsinī《顕揚心義》;

Vbh.A.=Sammohavinodanī《除遣痴迷》。

<注 10>復注の名称:

Vbh.T.=Mūlaţiīkā 《根本復注》;

Vm.T.=Paramattha-mañjūsā《勝義宝箱》;

<注 11>Vm:Visuddhimagga《清浄之道》は義注に属するが、更に一歩進んで《清浄之道》を解釈する復注がある(Vm.T.)。



緒論(序論)<注12>

第一節 仏陀の教法

ある時、跋葛瓦が瓦基人(ワッジ人)の村の際に住んでいた。そこで、跋葛瓦は、比庫(南伝の男性出家者 bhikkhu、以下同様)たち<注13>に言った:

「比庫たちよ。四聖諦 (catunnaṃ Ariyasaccānaṃ) に対して不随覚 (ananubodhā) であり、不通達 (appaţivedhā) であるが故に、私とあなた方は、永い間流転し、輪廻した。四種類とは何か?

比庫たちよ。苦聖諦 (Dukkhassa Ariyasaccassa) に対して不随覚であり、不通達であるが故に、私とあなた方は、永い間流転し、輪廻した。

比庫たちよ。苦集聖諦 (Dukkhasamudayassa Ariyasaccassa) に対して、不随覚であり、不通達であるが故に、私とあなた方は、永い間流転し、輪廻した。

比庫たちよ。苦滅聖諦 (Dukkhanirodhassa Ariyasaccassa) に対して、不随覚であり、 不通達であるが故に、私とあなた方は、永い間流転し、輪廻した。

比庫たちよ。苦の滅に向かう道聖諦 (Dukkhanirodha-gāminiyā Paṭipadāya Ariyasaccassa) に対して、不随覚であり、不通達であるが故に、私とあなた方は、永い間流転し、輪廻した。故に、四聖諦は、仏陀の教導と教法の基本である(事が分かる)。

彼は引き続き、次の様に解説する:

「比庫たちよ。 [私は] この苦聖諦に対して、已に随覚し、通達している。苦集聖諦に対して、已に随覚し、通達している。苦滅聖諦に対して、已に随覚し、通達している。苦の滅に向かう道聖諦に対して、已に随覚し、通達してる。已に有愛を切断し、已に有を断じ尽くし、今已に、再び、後有がある有る事はない。」 (S.5. 1091) <注 14>次に、我々は、四聖諦間の、相互関係を見てみよう。

第二節 何が徹底的に知られねばならないか

仏陀が四聖諦を教導するのは、我々が第三聖諦──涅槃、すなわち、輪廻と輪廻の苦の完全なる止息を証悟できる様にする為である。当然、適切な条件がなければ、証悟する事はできない。《尖頂閣<注15>経》(Kūṭāgāra Sutta)の中において、仏陀は先に、諸々の苦を徹底的に止息する事の出来ない条件を指摘している:

「比庫たちよ。ある人がこの様に言うとしよう: 『我々は、尖頂閣の下部の部屋を建てなくても、上部の部屋を建設することができる。』この様な事は決して有り得ない! 同様に、比庫たちよ、若しある人がこの様に言うならば:

- 『「1] 私は苦聖諦を如実に証悟しなくても、
- [2] 苦の集聖諦を如実に証悟しなくても、
- [3] 苦の滅聖諦を如実に証悟しなくても、
- [4] 苦の滅に向かう道聖諦を証悟しなくても、

完全に苦から離れる事が出来る』

その様な事は決してありえない! (S.5. 1114)。

この事は、我々は、まず先に徹底的に第一聖諦――苦(dukkha)と第二聖諦――苦集 (samudaya) を知る必要がある、という事を意味している・・・そうでなければ、出世 間第四聖諦、すなわち、出世間八支聖道を証悟する事が出来ない、とう事である。

上に述べた事柄を成就する為の唯一の道は、まず先に、世間第四聖諦――世間道諦 (lokiyamaggasacca)、すなわち、世間八支聖道、三学を修習する事である:

- 1) 戒 (sīla)
- 2) 定 (samādhi)
- 3) 慧 (pañña) <注16>

比庫について言うならば、戒とはパーティモッカサンバラ(pātimokkha saṃvara、巴帝摩卡防護戒)を指し;在家居士ならば、八戒または五戒を指す。戒行を確立させた後、我々は近行定と安止定(appanā samādhi)――禅那(ジャーナ、jhāna)を育成することができ、また、更に一歩進んで智慧を育成することができるが、それはすなわち、観禅の修習を言うのである。観禅とは他でもなく、唯一、苦聖諦と苦集聖諦の無常・苦・無我及び無我の本質を了知する為のものである。ただ善くて巧みに、徹底的に観を修習して初めて、かつ、完全にこの二種類の聖諦を証知してのみ、我々は、出世間第四聖諦、すなわち、

出世間道諦(lokuttarā maggasacca)——

入流道(sotāpatti-magga)、

一来道(sakadāgāmi-magga)、

不来道(anāgāmi-magga)、

阿拉漢道(arahatta-magga)——

と相応する所の八支道を証悟することができる。

簡単に言えば:第四聖諦(八支聖道)の目標は、第三聖諦(涅槃)を証悟する事にあるのであるが、しかし、唯一、第一と第二聖諦(苦及び苦集)を徹底的に知る事を通してのみ、それは証悟され得るのだという事である。

第一と第二聖諦

第一聖諦——苦聖諦とは何か?

仏陀は《転法輪経》(Dhammacakkappavattana Sutta)の中で、以下の様に説明する:

「比庫たちよ。これは苦聖諦である――生は苦であり、老は苦であり、病は苦であり、死は苦であり、怨憎会は苦であり、愛別離は苦であり、所求不得(求めるを得ず)も苦である。言い換えれば、五取蘊(pañcupādānakkhandhā)はすなわち、苦である。」(S.5. 1081)

仏陀は、苦聖諦を教導する時、五蘊(とは何か)を教え示した。彼は我々に、五蘊を了知し、照見する必要があると教導した。我々が所属する人世間は、五蘊有

(pañcavokārabhava)世間に属するが、五蘊を了知し、照見するより外に、我々は、仏陀の教導を領悟する方法はないのである。仏陀は《花経》(Puppha Sutta)の中において、以下の様に説明する:

「比庫たちよ。すべての、世間的な世間法(loke lokadhammo) に関して、如来はすべて徹底的に悟り、それらを領悟した。徹底的に領悟した後、それらに関して、宣言説法し、教説し、施設し(概念化し)、建立し、掲示し、分別し、解明、解説した」

比庫たちよ、[1] 色 (rupa) ・・・ [2] 受 (vedanā) ・・・ [3] 想 (saññā) ・・・ [4] 行 (saṅkhāra) <注 17>・・・ [5] 識 (viññāṇa) は、

世間的な世間法であり、如来は、すべて徹底的に悟り、それらを領悟した。徹底的に領悟した後、それらに関して、宣言説法し、教説し、施設し(概念化し)、建立し、掲示し、分別し、解明、解説した。

比庫たちよ。如来がこの様に宣言説法しても、説教し、施設し、建立し、掲示し、分別 し、解明、解説しても、ある種の人々は、知らず、見る事もない。

比庫たちよ。この様な愚人、凡夫、盲目者、無眼者、知らない者、見ない者に対して、私に何が出来ようか?」(S.3.94)

仏陀がここで言う所の世間法とは、五蘊を指し、又それはすなわち、苦聖諦と苦集聖諦 (の事)である。例えば仏陀は《大念処經》(Mahāsatipaṭṭhāna Sutta)において、以下の様に言う:

「比庫たちよ。所謂 『簡潔に言えば:五取蘊とはすなわち、苦である』 という事はどういう事であるか?それは:

- [1] 色取蘊(rūpupādānakkhandho)、
- [2] 受取蘊(vedanupādānakkhandho)、
- [3] 想取蘊(saññupādānakkhandho)、
- [4] 行取蘊(saṅkhārupādānakkhandho)、
- [5] 識取蘊(viññāṇupādānakkhandho)。
- (の事である)。」 (D.2. 399;M.1. 132)

仏陀は《蘊経》(Khandha Sutta)の中において、一つ一つの蘊を 11 種類に分類した; <注 18>

「比庫たちよ、五取蘊(pañcupādānakkhandhā)とは何であるか?

比庫たちよ、すべて色(rūpam)、以下のものすべてが、有漏(sāsavaṃ)であり、執取 (執着、以下同様) 出来るもの(upādā niyaṃ)であり、これを色取蘊と言う。

- [3] 過去、未来、現在(atītānātapaccuppanaṃ)
- [4-5] 内、外 (ajjhattaṃ vā bahiddhā vā)
- [6-7] 粗い、微細 (oļārikaṃ vā sukumaṃ vā)
- [8-9] 劣等、優秀(hīnam vā paṇītam vā)
- [10-11] 遠い、近い (yam dūre santike vā)

如何なる識もまた、過去のもの、未来、現在、内、外、粗い、微細、劣等、優秀、遠い、 近いに関わらず、すべて有漏であり、執取出来るものであり、これを識取蘊と言う。

比庫たちよ、これらを五取蘊と言うのである。」(S.3.48)。

この五取蘊はすなわち、第一聖諦――苦聖諦である。まさに、仏陀が解説した様に、一つ一つの蘊は、皆、11種類の形式によって組成されている。故に、五取蘊を知見すると

は、すなわち、この 11 種類の形式における色、受、想、行、識を知見する、という事を意味するのである。五取蘊の中の第一蘊は、単独に「色」(rūpa)と言い、残りの四取蘊(受、想、行、識)は、「名」(nāma)と言う。この事から、五取蘊は、名色(ñānrūpa) <注 19>とも言うことができる。名色を如実に知見する為には、我々は、それらの相互関係もまた知見する必要があるが、それはすなわち、五蘊有(pañcavokārabhava)世間、名法は色法に依拠して生起する、を知見しなければならない。五蘊有とはすなわち、五蘊世間の事であり、仏陀は《世間経》(Loka Sutta)の中において、この事に関して解説しているが、彼は、名色を 18 界(dhātu)、すなわち:六根、六境と六識(viññāṇa)として説明している。

仏陀は言う:

「比庫たちよ、世間の集とは何か?」

[1] 目と色 (cakkhuñca paţicca rūpa <注 20 > ca) の縁によりて、眼識が生じる、 三者が結合して触 (phasso) となる;

触の縁によりて受 (vedanā)

受の縁によりて愛 (tanhā)

愛の縁によりて取 (upādāna)

取の縁によりて有(bhava)

有の縁によりて生 (jāti)

生の縁によりて老死(jarā-maraṇa)、愁(soka)、悲(parideva)、苦(dukkha)、憂(domanassa)、悩(upāyāsa)が生起する。

- [2] 耳と声(音)の縁によりて耳識が生じ・・・
- [3] 鼻と香の縁によりて鼻識生じ・・・
- [4] 舌と味の縁によりて舌識生じ・・・
- [5] 身体と触の縁によりて身識生じ・・・
- [6] 意と法<注 21>の縁によりて意識生じ・・・。」(S.2.44)

以上の事から、名色法を知見したいのであれば、我々は以下の事柄を知見しなければならない:

- 1)根門
- 2) 根門を衝撃する所縁
- 3)これを縁として生起する心と相応する心所。

仏陀の解説の如く、合計で六根門がある;

- 1) 眼門 (cakkhudvāra)
- 2) 耳門 (sotadvāra)
- 3) 鼻門 (ghānadvāra)
- 4) 舌門 (jivhādvāra)
- 5) 身門 (kāyadvāra)
- 6) 意門(有分) (manodvāra)

前の五根門は、色法(rūpa)、すなわち、五依処(vatthu)<注 22>である、しかし、第六の根門――意門(有分(bhavaṅga))は名法(nāna)に属し、それは、第六色処――心処(hadayavatthu)に依存して生起する。五種類の根門に依存して生起する五根識は、それぞれ個別の色法所縁をのみ、縁に取ることができる。名法としての意門は、すなわち、前の五種類の所縁及び己自身の所縁を縁として取ることができる。

仏陀は《白毫光婆羅門経》(Uṇṇābha - brāmaṇa Sutta)の中において、「根 (indriya)」 <注 23>という語彙を用いてこれらの事柄に関して解説している:

「婆羅門、この五根(indriya)は、それぞれ個別に対境があり、個別の範囲があり、それらの相互の範囲、対境を体験(paccanubhontānaṃ)する事は出来ない。どの様な五種類であるか?

- 1) 眼根 (cakkhundriyaṃ)
- 2) 耳根 (sotandriyam)
- 3) 鼻根 (ghānindriyaṃ)
- 4) 舌根 (jivhindriyam)

5) 身根(kāyandriyaṃ)

婆羅門よ。この五根にはそれぞれ個別の対境があり、個別の範囲があり、それらの相互の 範囲、対境を体験することができない。意のみがそれらの範囲、対境を体験することが出 来る。」(S.5.512)

色法所縁が相応する色法根門を衝撃する時、それらは、時を同じくして、意門(有分)<注24>をもまた、衝撃する――すべての、その他の所縁は意門を衝撃するのである。

意門をのみ衝撃する所縁は、非名色、非世間的所縁を含む。故に、合計六種類の所縁がある事になる;

- 1) 色所縁(rūparammaṇa)
- 2) 声(音) 所緣 (saddārammmaṇa)
- 3) 香所縁(gandhārammaṇa)
- 4) 味所縁 (rasārammana)
- 5) 触所緣(phoṭṭabbārammaṇa)
- 6) 法所緣 (dhammārammana)

法所縁は、前の五種類の色法所縁を除いた所の、一切の所縁;世間においては、唯一、 心意によってのみ、識知される所縁しか存在しない。

法所縁は六種類に分類することができる。

- 1) 眼浄色、耳浄色、鼻浄色、舌浄色と身浄色である。それらは粗色(oļārikarūpa)に属 する<注 25>
- 2) 16 種類の細色(sukumārūpa) <注 25> (ママ)
- 3) 89 種類の心 (citta) <注 26>
- 4) 52 心所 (cetasika) <注 27>
- 5) 涅槃界、すなわち無為界 (Asankhatadhātu)
- 6) 無数の概念(paññatti): たとえば、呼吸の概念、遍所縁、究極法の名称等。概念を離れて、我々はコミュニーケーションがほぼ不可能である。

まさに仏陀が述べるが如く、六根門の一つが、適切な(対応する所の)所縁に遭遇した 時、心識は生起する。故に、合計六種類の識が存在する:

- 1) 眼識 (cakkhuviññāna)
- 2) 耳識 (sotaviññāna)
- 3) 鼻識 (ghānaviñnāṇa)
- 4) 舌識 (jivhāviñnna)
- 5) 身識(kāyaviññāṇa)
- 6) 意識 (manoviññāna)

また、仏陀が、婆羅門に対して解説した如く、所縁が五種類の色法根門の一つを衝撃する時、それは同時に意門を衝撃する。あなたが、強くて力のある禅定を育成した後において、当該の所縁が、ちょうど鏡の中の映像の如くに、意門(有分)に顕現するのを見ることができるであろう。あなたはまた、ある一つの色法根門に依存して生起した心識は、非常に微弱なものである事を見ることができるが、それらは「ただの収集」

(abhinipātamattā) 所縁である。実際に所縁を認知するのは、その後に生起する所の、 一系列の意識 (manoviññāṇa) によって完成されるのである。<注 28>

例えば、ある一つの色法所縁――例えば色彩――が眼門色法を衝撃する時、かつ、同時に意門(有分)を衝撃する時、即刻、一個の意識と眼識が生起するが、しかし、それらは所縁を「認知」する事はできないし、また、当該の所縁が色彩であるという事も知ることがない。所縁に対する認知は、その後に生起する意識によるのである。故に、我々は、名色法を了知したいのであれば、種類毎の名法、種類毎の色法及び、それらは如何にして、共同的に運用されるのかを知らねばならないのだ、という事が理解されるのである。我々は以下の事を了知しなければならない:

- 1) 根門色法
- 2) 所縁色法
- 3) 色法根門と意門において生じる名法。

我々は、眼門、眼門の所縁(色彩)及び色彩が眼門を衝撃する時に生起する所の意識と 眼識を知見しなければならない。我々は、眼門色法がなければ、眼識が生起する事がない ということを知見しなければならない;心処色がなければ、意識が生起することはないことを知見しなければならない;所縁色法(色彩)がなければ、眼識も意識も生起しないことを知見しなければならない。我々はまた、上記の如くに、耳、鼻、舌と身体を知見しなければならないし、かつ、心処色に依存して生起させられた所の意識が識知する所の所縁を知見しなければならない。

ただし、これらの実相をただ概念によってのみ、了知したと言ってはならない。というのも、そうであれば、その表象を知見したに過ぎないが故に。また、この様にであるならば、我々は已然として仏陀の言う所の「愚人、凡夫、盲目者、無眼者、不知者、不見者」である事を意味するが故に。これらの現象を如実に知見したいと思うならば、我々は勝義諦(paramatthasacca)を見る必要があり、究極名色法(paramatthanāmarūpa)を知見する必要があるのである。

脚注

<注 12>=当該の緒論(序論)は、『親知実見』改訂版において増補された。

<注 13>=未翻訳のパーリ術語は、(付録二 パーリ語術語解説)等を参照の事。

<注14>=経典略語と文献索引は、<経典略語>を参照の事。

<注 15>=ここで言う尖頂閣とは、外部に四本の柱を立て、上部を梁で支えた頭の尖った 単層の建築物。

<注 16>= 《大牧牛者経》(Mahāgopālaka Sutta)において、仏陀は、比庫がこの 法、律の内において成長できない、11 種類の情況について、説明している。(M.1. 346) <注 17>=行(saṅkhāra): 当該の語彙の意味・含意は、上下左右の文章、文脈から決定する。

- 1) 「識」の縁とする場合、それは業行を指し、すなわち、身口意の造作行(行為としての行)である。
- 2) 第四番目の取蘊とする場合、それはすべての心(果報心、唯作心または業識)に相応するすべての心所(受と想の二つの心所を除く)であって、それはすなわち、心行である。他の文脈の中において、それは、また別の意味を持つ場合も有り得る。

<注 18>=《大月円夜経》(Mahāpuṇṇama Sutta)の中において、一人の比庫が「蘊」はなぜ「蘊」と呼ばれるのか、について仏陀に質問した。仏陀は、一つ一つの蘊は、皆 11 種類の形式で組成されているが故に「蘊」と称せられる、と述べた。(M.3. 86)。

<注 19>=別の角度から見ると、仏陀は縁起について解説する時、名色を六処 (sālāyatana: 六内処と六外処)と呼んでいる。彼の教導を総覧すると、仏陀は聴衆の意向と理解能力に基づいて説法をする為、各種の異なった方式で名色を解説している。それらは結局は、最終的には同じものを指すのであるが。問答 2、注 422 を参照の事。

<注20>=ここでいう「色」は「色彩」の事。すなわち、眼識が識知する対象の事。

<注 21>=ここにおいて、仏陀が解説するのが世間的 18 界である為、ここで言う「法」とは、16 種類の微細色とすべての心所を指す。その他の文脈、語境の下において、仏陀は、ある時は「法」を、涅槃と概念(pañnatti)を含む所の、一切の対象とする事もある。但し、涅槃と概念の二者は世間に属さない為(非名法であり、また非色法でもあるが故に第一と第二聖諦に属さない)、《世間経》においては、それらを含むことがない。注422 参照の事。

<注 22>= 依処: 五種類の物質的依処は、すべて "vatthu" または "āyatana" と称する事ができる。しかし、第六番目の物質的依処は、ただ "vatthu" と呼ぶ、例えば "hadayavatthu"は、すなわち、心処である。「意処」(manāyatana)と呼ばれ

る所の第六処は、非色法である為、ただ "āyatana" と呼ばれるが、その物質的依処は、すなわち、心処(hadayavatthu)である。すべての六処は、六界(dhātu)とも呼ぶ。

<注 23>=ここで言う根 (indriya) は、「処」、「門」、「界」等と、意味は同じ。 仏陀はここにおいては、婆羅門が提出した「五根」に関する疑問に対して、回答している のである。

<注 24>=パオ・セヤドーは、《殊勝義》の中の比喩を引用している;ちょうど飛ぶ鳥が、木の枝に止まる時、その影もまた同時に地面に映る。同様に、所縁が五根を衝撃する時、同時に意門をも衝撃するのである。

<注 25> =粗色/微細色: 28 色の二分法。粗色(oļārikarūpa)がその様に称せられるのは、衝撃性色法(sappaṭigharūpa)(其の他の色法を衝撃する事のできる色法)であるからである。2 種類の粗色がある:

- 5) 五浄色(上に述べた)。
- 6-9) 色(色彩)、声(音)、香、味;

10-12) 地界、火界、風界。

浄色は、意門心によって認知される。その他は、意門心と五門心によって認知される――それらは、観智によって容易に識別される。微細色(sukhumarūpa)がその様に称せられるのは、非衝撃性色法(appaṭigharūpa)であるからである。

16 種類の微細色がある;

- 1) 水界
- 6) 食素、命根、心処色及び男性/女性根色;

7-16) 10 種類の非完成色法(「表 2a:28 色法」参照の事)。

微細色は、唯一、意識を通してのみ、認知することができるが、しかし、観智でもって識別するのは困難である。

<注 26>=89 種類の心: すなわち、六識――眼識、耳識、鼻識、舌識、身識と意識。

<注27>=52心所。

通一切心心所:

七遍一切心心所と六雑心所;

不善心所:四通一切不善心心所、十雑不善心所;

美心所:19通一切美心、三離、二無量、一無痴。

美心所の例は、後出の表を参照の事:

初禅の33心所。

<注 28>=「表 1 b: 意門心路」及び《去除愚痴》(Vbh.A)の引用を参照の事。

第三節 第一聖諦を知見する

我々は、逐一、一つ一つの名法を知見しなければならない。また、五依処において生起する所の、二種類の識(双五識(dvepañcaviññāṇa))の一つを見なければならない:

- 1) 善果報識(kusala-vipākaviññāṇa): すなわち、眼識、耳識、鼻識、舌識と身識の五種類。
- 2) 不善果報識(akusala-vipākaviññāṇa): 上と同じ眼識、耳識、鼻識、舌識と身識の五種類。

この 10 種類の識は、五依処に依存して生起する。其の他のすべての心識は、心処に依存 して生起する。

合計 89 種類の心がある:

12 不善心 (akusalacitta) : 8 貪根心、2 瞋根心と 2 痴根心。

18 無因心(ahetukacitta):上に述べた 10 種類の「双五識」を含み、その他には二種類の領受心、三種類の推度心、及び五門転向心、意門転向心と阿拉漢生笑心。

24 欲界美心(kāmasobhaṇacitta): すなわち、8 種類の欲界善心、8 種類の欲界果報心と 阿拉漢の8 種類の欲界唯作心。

15 色界心 (rūpavacaracitta) : すなわち、5 種類のジャーナ善心、5 種類のジャーナ果報 心と阿拉漢の5 種類のジャーナ唯作心。

12 無色界心(arūpavacaracitta):4 種類の無色ジャーナ善心、4 種類の無色ジャーナ果報 心及び阿拉漢の4種類の無色ジャーナ唯作心。

八世間心 (lokuttarācitta): すなわち、4種類の道心と四種類の果心。 以上が89種類の心である。

そのどれでも、一種類の心が生起する時、必ず若干の相応する心所が随伴して生起する;心所の数は、合計 52 種類である。この様に、名法は、89 種類の心と 52 の相応心所によって組成されており、故にそれらは皆、苦聖諦に属するのである<注 29>。

しかしながら、もし、未だ覚悟(覚醒)していないのであれば、我々はただ、89種類の心の中の54種類の心と心所しか、識別できない。

すなわち、12 不善心 (akusalacitta)

17 無因心 (ahetukacitta) (未だ、阿拉漢の生笑心は識別する事はできない)

16 欲界善心(未だ、阿拉漢聖者にのみ生じる事のできる 8 種類の欲界唯作心は識別することはできない)、

5 色界善心(未だ、五種類の色界果報心<注 30>と五種類の色界唯作心を識別する事はできない)

4 無色界善心(未だ、四種類の無色界果報心<注 30>と四種類の無色界唯作心を識別する事はできない)

こうした事から、苦聖諦を如実に知見する為には、我々は己みずからこの 54 種類の心 及び相応する心所を知見しなければならない(事が分かる)。ただ、まさに仏陀が言うよ うに、我々が処する五蘊世間においては、名法は色法に依存して生起し、一つ一つの心識 は皆、それぞれ個別の依処に依存して生起するのであるが、この事は、我々をして、己み ずから色法を知見する必要がある事を意味しているのである。

色法を如実に知見したいのであれば、我々は、物質現象はパーリ語で rūpa-kalāpa (色聚) と呼ばれる所の、極微細の粒子によって構成されている事を、知らねばならない。色聚は極めて高速に生起し、また壊滅するが、しかし、これは真実の概念法 (vijjamānapañnatti) に過ぎず、未だ究極色法 (paramattharūpa) ではない。色法を如

実に知見する為には、我々は、色聚の概念を突破しなければならないし(密集の錯覚を破り除く事<注 31>)また勝義諦(paramatthasaccā)を見なければならないが、それはすなわち、一粒一粒の色聚を構成する所の、異なる種類の究極色法(paramattharūpa)を見る事である。

仏陀は《大牧牛者経》(Mahāgopālaka Sutta)の中において、一人の比庫が、正しい 法と律の中で成長する為には、色法を了知する事が不可欠である、と強調している:

「比庫は如何にして色(rūpañňu)を知るのか?ここにおいて、比庫たちよ。比庫は、如何なる色、すべての色は、四大種(cattārimahābhūtāni)と四大種所造色(catunnañca mahābhūtānaṃ upā dāyarūpaṃ)であると如実に了知する。比庫たちよ。この様な比庫は、色を知る。」(M.1. 349)

この種の了知がない場合、仏陀は、当該の比庫は、「この法、この律の中で成長、増広、 広大に到達することができない。」と言う。これは、我々は、28種の色法すべて、すなわ ち、四大種 (mahābhūta) を知見しなければならない事を意味している:

- 1) 地界(pathavīdhātu)
- 2) 水界 (āpodhātu)
- 3) 火界(tejodhātu)
- 4) 風界(vāyodhātu)

及び 24 種類の所造色(upādāyarūpa)で、それは以下の通りである:<注 32>

五浄色(pasādarūpa): 眼浄色、耳浄色、鼻浄色、舌浄色と身浄色。それらは身体の五種類の根門を構成している。

四境色(gotararūpa): 色彩、声(音)、香、味。

食素 (ojā)

命根(jīvitindriya)

心色(hadayarūpa): 意識(manoviññāṇa)及び相応する依処色。

脚注

<注 29>=名業処 (nāmakammaṭṭhāna) を修する時、禅修行者は、それらを自ら知見することができるが、それ以前においては《摂阿毘達摩議論》を参考にすることができる。

<注 30>=パオ・セヤドーは以下の様に解説する:色界または無色界に生まれた梵天人は、結生心を識別する時、この9種類の色界または無色界果報心を識別する可能性があるが、しかし、欲界の衆生にとっては少々困難である。過去世において、これらの梵天界に生まれた事のある禅修行者は、これらの果報心を識別する事が出来る可能性がある。しかし、禅修行者が過去世において、梵天界に生まれた事がないのであれば、上記の可能性は存在しない。

<注 31> =密集の錯覚を破り除く事に関しては、問答 3、及び「如何にて色聚を分析するか」を参照の事。

<注 32>=28 種類の色の完全な図表は「表 2a:28 色法」を参照の事。

如何にして第一と第二聖諦を知見するか

一、定力の育成

一つひとつの色聚の中の、それぞれ一種類の色法を見る事が出来るならば、それは究極色法を見たのだと言えるが、しかし、これには強くて力のある禅定を具備する必要がある。唯一、強くて力のある禅定によってのみ、如実知見<注 33>する事ができる。例えば、仏陀は《諦相応・定経》(Samādhi Sutta、Saccasaṃyutta)の中において以下の様に強調する:

「比庫たちよ。定 (samādhi) を修習しなければならない。

比庫たちよ。定力(samāhito)のある比庫は、如実に了知することが出来る。何を如実に 了知するのであるか?

- [1] 『これは苦である』と如実に了知する、
- [2] 『これは苦の集である』と如実に了知する、
- [3] 『これは苦の滅である』と如実に了知する、

[4] 『これは苦の滅に向かう道である』と如実に了知する。

比庫たちよ。定を修習するべきである。

比庫たちよ。定力のある比庫は、如実に了知することができる。」(S.5. 1071)。

こうした事から、パオ森林僧院において、我々は、禅修行者に対して、先に入出息念 (ānāpānassati) と十遍の修習を教導する事を通して、強くて力のあるジャーナ (安止定 (appanāsamādhi))を育成するか、または四界差別 (四界分別、catudhātu vavatthāna) によって、近行定 (upacārasamādhi) を育成する<注 34>。<注 35>(ママ)。

二、智慧の光の育成

強くて力のある禅定は、強くて力のある光を生じせしめることができる。この、強くて力のある光を頼りに、あなたは勝義諦(paramatthasacca)に通達(到達、以下同様)することができる。仏陀は、《増支部・光耀品》(Ābhāvagga、Aṅguttaranikāya)の中で、以下の様に言う:

比庫たちよ。四種類の光耀がある。どの様な四種類であるか? 月の光耀、太陽の光耀、火の光耀、智慧の光耀(Paññābhā)である。 比庫たちよ。この四種類の光輝がある。どの様な四種類であるか? 月の光輝、太陽の光輝、火の光輝、智慧の光輝(Paññāpabhā)である。 比庫たちよ。この四種類の光輝がある。

比庫たちよ。この四種類の光明がある。どの様な四種類であるか? 月の光明、太陽の光明、火の光明、智慧の光明(Paññāloko)である。 比庫たちよ。この四種類の光芒がある。どの様な四種類であるか? 月の光芒、太陽の光芒、火の光芒、智慧の光芒(Paññobhāso)である。

比庫たちよ。この四種類の光照がある。 どの様な四種類であるか?

月の光照、太陽の光照、火の光照、智慧の光照(Paññāpajjoto)である。(A.4. 14145)

仏陀は、その教えの一番目の経――《転法輪経》の中において、彼の覚悟(覚醒、悟り)の時の説明をし、また、光に関して言及している:

「比庫たちよ。私は以前に聞いた事のない法(dhammā)に於いて、眼(cakkhu)が生じ、智(ñāṇa)が生じ、慧(Pañña)が生じ、明(vijjā)が生じ、光(āloka)が生じた。」(S.5. 1081)

世間的観智の心は、強くて力のある「観の光明」(vipassanobhāso)を生じせしめるが、しかし、出世間的観智の心は、更に強くて力のある光明を生じせしめることができる。例えば、仏陀の覚醒の時の光は、一万個の輪囲世界を返照することができる。<注 36 >。

この種の光明は、如何にして生じるのか? 慧(Paññā)と相応する高度の専注の心 (が原因)である。この種の心は、多くの代の、非常に明るい心生色法(cittajarūpa) <注 37>を生じせしめることができる。この種の光を頼りに、我々は勝義諦

(paramatthasacca) に到達して、諸法を如実知見することができる。正に、暗室に入る時、我々は光明でもって、内部のものを見極める事が出来る様に。

三、定力の保護

しかし、ただ、深厚な(深くて厚い、重厚な、以下同様)定力を育成するだけでは足りない。というのも、勝義諦に到達する事ができるという事は、甚だ深く、奥妙(奥深く、妙なる事)であると同時に、それは我々が見失ってはならない好機であるが故に。故に、我々は、あなたが、あなた自身及びあなたの禅修行を保護する為に、あなたがジャーナまたは近行定を証得するまで、四梵住(brahmavihāra)の修習をもまた、指導するものである<注39>;

- 1) 慈心 (mettā) の修習でもって、瞋と恚を取り除く;<注 40>
- 2) 悲心 (karunā) の修習でもって、憎悪と残忍性を取り除く;
- 3) 喜心 (muditā) の修習でもって、嫉妬心を取り除く;
- 4) 捨心(upekkhā)の修習でもって、有情への嫌悪と愛着を取り除く。

同様の道理で、我々はまた、ジャーナまたは近行定を証得するまで、あなたに四護衛 禅(caturārakkha bhāvanā)<注41>を教導する。

- 1) 慈心 $(mett\bar{a})$ の修習によって、その他の衆生の迫害からあなたを守る。<注 42>
- 2) 仏随念 (Buddhānussati) の修習によって、恐懼 (恐怖) <注 43>とその他の衆生からの迫害からあなたを守る。
- 3) 不浄観 (asubhabhāvanā) の修習によって、貪愛と欲望を防ぐ。<注 44>
- 4) 死随念 (maraṇānussati) の修習によって、禅修行上の怠慢を避ける様にあなたを保護する。 (saṃvega) でもってあなたを啓発、激励する。 <注 45>

もし、あなたがすでにジャーナまたは近行定を育成してあるならば、あなたがこれらの業 処を修習するのに、多くの時間を必要としないであろう。

四 勝義諦への通達(到達)

究極色法への通達

もし、あなたが止乗者で、強くて力のある禅定を擁し、かつ、それを適切に保護する事ができるならば、我々は、あなたに、四界差別(四界分別、catudhātuvavatthāna)<注47>によって、色法を如実に知見する方法を教導するであろう。しかし、あなたが、止の修習に向かう事なく、ただ近行定を育成するのを希望するならば、あなたは、直接四界差別の修習を直ちに始める事ができる。我々が、先に、色法の識別を教導するのは、幾つかの理由がある。一つは、色法を識別するという事は、非常に精緻で、奥深い事柄である事、色法の生・滅の回数は、毎秒毎に十数億回であったとしても、その生・滅は、それでも、名法の速さには及ばないが故に。

この事は、あなたが、色法の奥深い識別を完了してのち、初めて、これよりも更に奥深い名法を、容易に識別する事できるようになる、という事を意味している。もう一つの理由は、名法は色法に依存して生起する為、禅修行者が、生起するために心識が依存した所の具体的な名法を見る事ができないのであれば、あなたは、根本的に、名法を見る事が全くできないからである。名法を見る為には、禅修行者は、その生起を見る必要があるのである。<注 48>

四界分別を修習する事はすなわち、物質現象の中の四界を識別する事を意味しているが、 それはすなわち、あなた自身の色法から開始するのであるが、仏陀の言う所の、内 (ajjhatta) の色から始めるのである。 仏陀は《大念処經》(Mahāsatipaṭṭāna Sutta)<注 49>の中において、以下の様に、四界差別を教導する:

次に、比庫たちよ。比庫がこの様に立ち、この様に処する時、界(dhātu)によってこの 身体を観察する:「この身体の中に、以下のものがある

- [1] 地界(pathavīdhātu)
- [2] 水界(āpodhātu)、
- [3] 火界(tejodhātu)、
- [4] 風界(vāyodhātu)。

己自身の色身から識別に着手するのは、比較的容易である、というのも、己自身の色身の熱さまたは冷たさ、柔かさまたは硬さを了知する事は、外部にある色身、例えば別の有情の色身の中のこれらの現象を了知するよりは、より容易である。一たび、あなたが内色の識別に熟練した後、あなたは、仏陀の列挙したその他の 10 種類の色法を識別しなければならない:過去、未来、現在、外、粗さ、微細、劣等、優秀、遠いと近い色法である。<注 50>

仏陀が四界差別(四界分別)を教導する目的は、我々をして、究極色法を知見する能力を擁せしめる為である。まず先に、あなたは己自身の身体を、一個の色法の密集した塊であると見做し、かつ、この身体の塊の中において、四界の各種異なる特徴を知見する能力を育成するのだと見做す。(その修習に)熟練すると同時に、また、定力の深まりにつれて、あなたは、最終的に色聚を見る事ができるであろう。次に、すでに育成された禅定の光の助けを借りて、あなたは、密集の錯覚<注51>を破り除くことができ、究極色法(を知見する事)に通達(到達)し、異なる類型の色聚の中の各種の色法を了知し、観照し、識別し、分析する事ができる。

究極名法への通達(到達)

真正に、異なる種類の究極色法を知見した後、あなたは、更に一歩進んで、究極名法を 了知し、かつ照見することができるが、それはすなわち、名業処(Nāma・

 $kammatthar{a}$ na) の修習である。我々は、六依処または六根門を通して、名法<注 52>を識別することができる。ただし、あなたはすでに、根門を通して色法を識別したのである

から、《清浄之道》では、あなたはまた、同様の方法でもって、名法を識別するべきであると言う:

「彼は斯くの如くに、門を通して、色の摂受をするが、それはすなわち、非色が鮮明になる事でもある。」 (Vm.664)。

復注では、更に一歩進んで、門を通して、名法を識別すれば、「混乱しない」と説明している。<注53>。

上ではすでに、六根門及びその所縁について説明したが、それはすなわち;

- 1) 眼門、色彩を所縁に取る。
- 2) 耳門、声(音)を所縁に取る。
- 3) 鼻門、香(匂い)を所縁に取る。
- 4) 舌門、味を所縁に取る。
- 5) 身門、触を所縁に取る。
- 6) 意門(有分)、前の五種類の色法根門の五種類の所縁を及び法所縁<注 54>を所縁に 取る。

心の定律(cittaiyāma)によると、六種類の所縁の中の一種類が、相応する根門を衝撃する時、一系列の心識(citta)が生起するが、その一つひとつの心識には、皆、若干の相応する心所(cetasika)が共に生起する。この一系列の心識と相応する心所は、すなわち、「心路」(cittavīthi)と言う。合計 6 種類の心路がある:

- 1) 眼門心路 (cakkhudvāra-vīthi)
- 2) 耳門心路 (sotadyāra-vīthi)
- 3) 鼻門心路 (ghānadvāra-vīthi)
- 4) 舌門心路 (jivhādvāra-vīthi)
- 5) 身門心路 (kāyadvāra-vīthi)
- 6) 意門心路 (manodvāra-vīthi)

ある一つの法所縁が相応する色法根門を衝撃する時、前五門心路は即刻生起するが、これを「五門心路」(pañcadvāra-vīthi)という。第六門、すなわち、意門(有分)心路

は、「意門心路」(mano d vāra-vīthi)と呼ぶ。すでに、上に述べた通り、五種類の色法の所縁の内の一つが、相応する色法根門を衝撃する時、それは同時に意門(有分)<注 55>をも衝撃する: 五門心路と意門心路は、押しなべて皆生起する。例えば、色彩の所縁が眼門を衝撃する時は、また同時に意門(有分)をも衝撃する。ここにおいて、先に一個の眼門心路を誘発し、次に引き続き継続して、多くの意門心路<注 56>を誘発するのである。

これ(らの現象)は、心の定律(cittaniyāma)に依拠して、発生するのである。このことから明確にわかる事は、名法を知見したいのであれば、先に色法を知見しなければならない、というのも、これらの名法を知見する為には、先に根門及びその所縁を知見しなければならないが故に。この事は、あなたが色法を識別する(修行において)すでに完成させてあるものである。〈注 57〉。名法を識別する時、先に異なる類型の心路を識別しなければならないが、それはすなわち、一つ一つの心路の中に、一体幾つの心識刹那(cittakhaṇa)が存在しているかを識別すると同時に、異なる種類の心識刹那を識別する事を意味しているが、しかし、これは未だ究極名法(paramattha - ñāma)に属さない。ちょうど、色法を修習する時に、色聚密集の錯覚を破り除く必要があるのと同じ様に、この時、あなたは心路密集の錯覚を破り除かなければ(看破しなければ)ならないのである。〈注 58〉

一つ一つの心路は皆、多くの数の「心識刹那」(cittakkhaṇa)によって構成されており、かつ、一つ一つの心識刹那とは、すなわち、一個の心識(citta)及びその相応する心所(cetasika)の生、住、滅の時間を言うのである。心識は、単独では生起しない。それは必然的に相応する心所に随伴して、心所と一緒に生起する。同様に、相応する心所もまた、単独で生起する事はなく、それらは必然的に、心識に随伴して、心識と一緒に生起する。

こうした所から、心識及び相応する心所は、一組の密集体として生起する(ことが分かる)。そして、この種の密集を破り除く(看破する)為には、あなたは、一種類毎の心識利那を分析し、かつ、個別の心識及び相応する心所を知見しなければならない。それはすなわち、異なる種類の究極名法(paramatthanāma)を了知し、照見する事を意味する。それは、異なる種類の究極色法の了知と照見より、更にレベルの高い精緻さ(を要する

が)、しかし、あなたはそれを完成させる事が出来る・・・というのも、あなたはすで に、強くて力のある禅定の光を育成しており、かつ、色法を識別する時に、あなたはすで に、その識別能力を育成してあるが故に。

上述の通り<注59>、名法は89種類の心と52種類の心所に分類することができる。しかし、その中の8種類は、出世間(lokuttarā)心に属するが、それはすなわち:四道心と四果心である。それらは唯一、その他の、81種類の心(すべて世間心)及び相応する心所に対して、観の修習をする事によって初めて生起することができる。言い換えれば、観智の対象は、81種類の世間心及び相応する心所<注60>であり、観智の結果がすなわち、8種類の出世間心であると言える。これ以外に、ジャーナ心もまた、この81世間心に属する・・・あなたがジャーナを証得していないのであれば、あなたはそれらを識別することができない。こうした事から、もしあなたが、純観乗者である場合、あなたはジャーナ心を識別する事が出来ない(事が分かる)。

あなたが今識別しているのは、まさに仏陀が《大念処經》 (Mahāsatipaṭṭhāna) において教導しているが如く:

「では、比庫たちよ。比庫は一体、如何にして、心随観心において住するのか? 比庫たちよ、

- [1] 貪心 (sarāgacitta) がある事に対して『貪心がある』と了知する;
- [2] 離貪心 (vītarāgacitta) がある事に対して『離貪心がある』と了知する;
- [3] 瞋心 (sodasacitta) がある事に対して『瞋心がある』と了知する;
- [4] 離瞋心 (vīadosacitta) がある事に対して『離瞋心がある』と了知する;
- [5] 痴心 (samhacitta) がある事に対して『痴心がある』と了知する;
- [6] 離痴心 (vītamohacitta) がある事に対して『離痴心がある』と了知する;
- [7] 昏昧心 (sańkhittacitta) がある事に対して『昏昧心がある』と了知する;
- [8] 散乱心 (vikkhittacitta) がある事に対して『散乱心がある』と了知する;
- [9] 広大心 (mahaggatacitta) <注 61>がある事に対して『広大心がある』と了知する;
- [10] 不広大心 (mahaggatacitta) がある事に対して『不広大心がある』と了知する;

- [11] 上心 (sa-uttaracitta) <注 61>がある事に対して『上心がある』と了知する;
- [12] 上心がない (anuttaracitta) 事に対して『上心がない』と了知する;
- [13] 定心を得た心(得定心=samāhitacitta) がある事に対して『得定心がある』と了知する;
- [14] 定心がない (asamāhitacitta) 事に対して『無定心がある』と了知する;
- [15] 解脱心 (vimuttacitta) <注 61>がある事に対して『解脱心がある』と了知する;
- [16] 未解脱心(avīmuttacitta)がある事に対して『未解脱心がある』と了知する。

この様に、内(ajjhattaṃ) に、心随観心において住し、または外(bhhiddhā) に、心随観心において住し、または内外(ajjhattabahiddhā) に、心随観心において住する。」 (D.2. 381)

ここにおいて、仏陀は名法を 16 種類の心に分類している。それはすなわち、あなたは、六根門を通して、一対ごとの心を如実に知見しなければならない事を意味しているが、それは例えば、貪を伴った心と離貪を伴った心に対して、内観、外観、内外観を実践する。この様にすれば、あなたは究極名法に通達(到達)する事が出来るし、かつ、如実知見することができる。

三種類の清浄

すでに名色法を如実に知見したならば、あなたは三種類の清浄<注 62>を成就したのだと言える。《清浄之道》(=《清浄之道》、以下同様)<注 63>は、以下の様に解説する

- [1] 戒清浄(sīlavisuddhi)、善清浄という名を持つパーティモッカ等の四種類の戒。
- [2] 心清浄(cittavisuddhi)、近行定を含む八定と呼ばれる清浄。
- [3] 如実に名色法を見る事を見清浄(ditthivisuddhi)と言う。



第四節 第二と第三聖諦を知見する

しかしながら、涅槃を証悟する為には、我々は苦集聖諦を知見しなければならない。仏 陀は《転法輪経》 (Dhammacakkappavattana Sutta) の中において、以下の様に解説 する:

「比庫たちよ、これは苦集聖諦である――この愛(taṇhā)が、再びの有を引き起し、喜、貪を俱し、処々において喜楽する、それはすなわち、

- [1] 欲愛(kāmataṇhā)
- [2] 有愛 (bhavataṇhā)
- [3] 無有愛 (vibhavataṇhā) 。」 (S.5. 1081)

仏陀は、苦集聖諦を詳細に解説して、(それを)縁起(paţiccasamuppāda) <注 66> と呼ぶ。

「比庫たちよ、何が苦集聖諦 (Dukkhasamudayamariyasaccam) であるか?

- [1] 無明 (avijjā) の縁によりて行 (saṅkhārā) (あり、以下同様)、
- [2] 行の縁によりて識 (viññāṇa)、
- [3] 識の縁によりて名色(nāmarūpa)、
- [4] 名色の縁によりて六処 (saḷāyatana)、
- [5] 六処の縁によりて触(phassa)、
- [6] 触の縁によりて受 (vedanā)、
- [7] 受の縁によりて愛(tanhā)、
- [8] 愛の縁によりて取(upādāna)、
- [9] 取の縁によりて有 (bhava)、
- [10] 有の縁によりて生(jāti)、
- [11] 生の縁によりて
- [12] 老、死(jarā-maraṇa)、愁(soka)、悲(parideva)、苦(dukkha)、憂(domanassa)、悩(upāyāsā)。この様にして、苦蘊全体が生起する。

比庫たちよ、これを苦集聖諦と言う(Idaṃ vuccati、bhikkhave、dukkhasamudayaṃ ariyasaccaṃ)。」(A.3. 62)

上記の事柄は、同じく如実知見しなければならない。ある一生の五種類の因(無明、 行、愛、取と有<注 67>)が、如何にして再生、すなわち、五種類の果(識、名色、六 処、触と受)を齎したのかを、知見しなければならないのである。あなたはこの一連の過程が如何にして生じ、連続し、輪転して止まる事がない事を見る必要があるのである。

如何にして第三聖諦を知見するか

しかし、諸行の生起をのみ観照して、それをもって縁起の観照、理解とするのでは足りない。あなたは、諸行の壊滅と止息を観照する事によって、縁起の観照としなければならない:<注 68>

「比庫たちよ、何が苦滅聖諦 (Dukkhanirodham ariyasaccam) であるか?

- [1] 無明の無余の離と滅(avijjā tveva asesavirāganirodhā)
- [2] すなわち、行が滅する (sankhāranidodho)
- [3] 行が滅すると、すなわち、識が滅する (viññāṇanirodho)
- [4] 識が滅すると、すなわち、名色が滅する (nāmarūpanirodho)
- [5] 名色が滅すると、すなわち、六処が滅する(saļāyatananirodho)
- [6] 六処が滅すると、すなわち、触が滅する (phassanirodho)
- [7] 触が滅すると、すなわち、受が滅する (vedanānirodho)
- [8] 受が滅すると、すなわち、愛が滅する (tanhā nirodho)
- [9] 愛が滅すると、すなわち、取が滅する(upādānanirodho)
- [10] 取が滅すると、すなわち、有が滅する(bhavanirodho)
- [11] 有が滅すると、すなわち、生が滅する (jātinirodho)
- [12] 生が滅すると、すなわち、老、死、愁、悲、苦、憂、悩が滅する (jarāmaraṇaṃ,sokaparidevadukkhadomanassupāyāsā nirujjhanti) 。

かくの如くに、苦蘊全体が滅尽する。比庫たちよ、これを苦滅聖諦と言う

(Idam vuccati, bhikkhave, dukkhanirodham ariyasaccam) . 1 (A.3. 62)

あなたは、諸々の行法、すなわち、一個の心識刹那からもう一つ別の心識刹那に至る、 その刹那の壊滅を見なければならないが、これがすなわち、(世間的) 苦聖諦を知見す る、という事である。あなたはまた、あなたが未来において、阿拉漢を証悟し、かつその 後に般涅槃するのを見るまで、観照を続けなければならない。あなたが阿拉漢を証悟する時、無明(1)は、断じ除かれ、行(2)、愛(8)と取(9)は、すべて無余に滅尽する(anavasesanirodhā) ——そして、この事によって、苦の因は止息するが、しかし、苦自体は未だ止息していない、というのも、過去の業の果報は未だなお、作用しているが故に ——あなたはいまだなお五蘊<注 69>を擁している。(たとえ仏陀であっても、五蘊を擁していた時があり、かつ、楽受と苦受を体験した。<注 70>)。

唯一、般涅槃の時においてのみ、五蘊はようやく無余に止息する;唯一、般涅槃の時においてのみ、苦が止息する。こうした事から、二種類の滅尽がある事が分かる:

- 1) 阿拉漢を証悟する時の滅尽
- 2) 般涅槃の時の滅尽

この二種類の滅尽の因は、涅槃(無為(Asaṅkhata))を知見する事である――これは、苦滅聖諦(Nirodha ariyasacca)における阿拉漢の道智ではあるが、しかし、この事は、あなたが現在において、未来を観照する時、己自身でもって、阿拉漢と般涅槃を証悟する、すなわち、涅槃を知見すると言う事を意味している訳ではなく・・・現段階では、あなたは未だ涅槃を知見してはいないのである。現段階では、あなたは、ただ、諸々の行法を生起せしめる五つの因が止息する時、諸々の行は二度と生起しない、という事を知見する事ができるだけである。この種の観智の助けを借りて、あなたは、涅槃を証悟するであろう事が、明確になるのである。

仏陀は以下の様に言う、もし、この点を見る事が出来ないのであれば、あなたは沙門として、婆羅門として目標とする所の涅槃を証悟する事はできない; <注 71>

「比庫たちよ、どの様な沙門または婆羅門(samaṇā vā brāhmaṇā vā)であっても、

- [1] 老、死を了知しない、
- [2] 老、死の集(samudaya)を了知しない、
- [3] 老、死の滅 (nirodha) を了知しない、
- [4] 老、死の滅に向かう道 (nifodhagāmini paṭipadaṃ) を了知しない、ならば 生・・・有・・・取・・・愛・・・受・・・触・・・六処・・・名色・・・識・・・行を 了知しないならば、

行の集を了知しないならば、

行の滅を了知しないならば、

行の滅の道を了知しないならば、

比庫たちよ、私はこの様な沙門または婆羅門が沙門の中の沙門、婆羅門の中の婆羅門であると認めない。この様な具寿者は、現法の中において、己自身の証智でもって、証悟し、かつ成就して、沙門の目標に住するまたは婆羅門の目標に住する事はできないのである。」(S.2. 13)

あなたはすでに強くて力のある禅定を育成してあるので、あなたは、沙門の目標に進入し、安住することができ、かつ、上に述べた諸法を己みずから見ることができる。仏陀は、《蘊相応・定経》(Samādhi Sutta、Khandhasaṃyutta)の中で以下の様に言う:「比庫たちよ、定を修習するべきである(Samādhiṃ bhikkhave、bhāvetha)。 比庫たちよ、定力のある比庫は、如実に了知(yathābhūtaṃ pajānāti)することができる。何を如実に了知するのか?

- [1] 色の集と滅;
- [2] 受の集と滅;
- [3] 想の集と滅;
- [4] 行の集と滅;
- [5] 識の集と滅。」(S.3.5)

ー 縁起を知見する

すでに育成されている智慧の光耀、光耀、光明、光芒と光照を借りて、今あなたは、名色相続流を遡る能力がある・・・今現在から逆に遡って今生の結生の刹那まで進み、更に遡って過去世において死亡する刹那、また、あなたの出来うる限りの能力に基づいて同様の方法で、多くの過去世を識別する。その後、未来世を、涅槃の時までを観照する。<注72>

名色法の個別の要素を観照する事を通して、あなたは因と果を識別できる。禅の修行に精進する事と、強くて力のある禅定によって浄化された心を運用して、究極名色法を識別する所の、甚深で微妙な修行を実践する事を通して、あなたは、未来に置いて、究極の滅一

一涅槃を証悟する事を見ることができる。しかし、もしあなたが禅の修行を停止するならば、因と縁において変化が発生する為、未来の結果もまた相応に変化する。

大財長者子及びその妻は、その一例である。彼ら夫妻は、巨額の財産を相続したが、しかし、大財長者子は、それを飲酒と遊びに使ってしまった。ついに、彼と妻は、赤貧洗うが如く、街頭の乞食に堕ちた。仏陀はアーナンダに言った、もし、大財長者子が、若い時に出家して比庫になったならば、彼は阿拉漢を証悟する事ができた;もし、彼が中年の時に出家して比庫になったならば、彼は不来果になれた;彼が年老いて出家して比庫になったならば、彼は不来果になれた;彼が年老いて出家して比庫になったならば、彼は一来果になれた;これは彼のハラミツである。しかし、彼が飲酒に耽溺した為、何一つ成し遂げる事が出来ず、乞食になる他なかった。<注 73>

この事によって、我々の未来は、我々の現在によって決まる事が分かるのである。この事はまた、なぜ、あなたは、長時間の甚だ深くて微妙なる禅の修行を持続的に実践した後、 今世または未来世において般涅槃を証悟することができるのか、の説明でもある。

過去世と来世を見る事が出来ないのであれば、あなたは、縁起を如実に了知する事ができない;過去の因が、如何にして現在の果を齎すか、現在の因が、如何にして来世の果を生じせしめるか、及び因の滅が如何にして果の滅を齎すかを、知見する事ができない。そして、縁起を了知し、観照する事ができないのであれば、苦集聖定を如実に知見する事はできない。《清浄之道》では以下の様に言う:

「この [有輪] は実に極めて深く、立脚の場なく、 [同一性理等] の種々の理の密林は超越しがたい。殊勝な定石でもって鋭利に磨いた智慧の剣でもって有輪を切り裂くのでなければ、何人も、雷電の輪の如くに恒常的に圧迫する輪廻の畏怖を超越する事はできない。譬え夢の中であっても [不可能] である! 跋葛瓦はかつてこの様に言った:

『アーナンダ、この縁起は奥深い、奥深い相を具備している。アーナンダ、もし、この法に対して不随覚であり、不通達であれば、この人は、絡まった綿糸の玉の様に、穀喇鳥の巣の線の様に、萱草の様に、灯心草の様に、苦界、悪趣、堕処、輪廻を超越する事が出来ない』<注74>」(VM.661)<注75>

ひとたび、第二聖諦(苦集聖諦)を如実に知見したならば、あなたは過去、未来及び現在の三時への疑惑を超越することができる。《清浄之道》では以下の様に言う:

「彼は、斯くの如くに、名色が、縁に依りて(paccayato)転起した後、今まさにその様であるが通り、過去世が縁によって転起する事を観察(samanupassati)する(のであるから)、未来もまた縁によって転起する(事が分かる)のである。」(Vm.679)この段階に到達したのであるならば、あなたはすでに度疑清浄(Kaṅkhāvitaraṇavisuddhi)<注 76>を成就したのだと言える。唯一、この段階にきて初めて、観の修習を始めることができる。というのも、この段階にきて初めて、あなたは勝義諦を見ることができるが故に。諸法<注 77>を如実に知見する前、観の修習をすることは出来ないのである。

二、観の修習

観の修習の時、あなたは苦聖諦と苦集聖諦を復習し、再度如実にそれを知見しなければならない、すなわちそれは、11 種類すべての名色法の生と滅を知見する事であるが、しかし、この時、あなたはそれらを、無常(anicca)、苦(dukkha)、無我(anatta)として知見しなければならない。あなたは、如実に諸々の行法を知見しなければならないと共に、仏陀が五人の比庫(pañcavaggiyā bhikkhū)に教導した第二経――《無我相経》(Anattalakkhana Sutta)に基づいて省察を実践しなければならない;

[1] 比庫たちよ、あなた方は、如何に考えるか?色は常または無常であるか? (niccaṃ vā aniccaṃ vā ?)

無常です、尊者。

[2] もし、無常であるならば、それは苦であるか、楽であるか? (dukkhaṃ vā taṃ sukkaṃ vā ?)

苦です、尊者。

[3] もし、無常で、苦で、変易の法であるならば、それを以下の様に認めるのか否か?:

『これは私のものである (etaṃ mama) これは私である (esohamasmi) 、これは私の自我である (eso me attā) 』。

決して不可能です、尊者。

こうしたことから、比庫たちよ、

[1] すべての色、(その)過去、未来、現在、内、外、粗い、微細、劣等、優秀、そして遠と近、一切の色は皆

『これは私のではない(netam mama)、これは私ではない(nesohamsmi)、これは私の自我ではない(na meso attā)』<注 78>、この様に、正しい智慧でもって、如実に照見しなければならない!

- [2] すべての受、(その)過去、未来、現在、内、外、粗い、微細、劣等、優秀、そして遠と近、一切は受は皆・・・
- [3] すべての想、(その)過去、未来、現在、内、外、粗い、微細、劣等、優秀、そして遠と近、一切の想は皆・・・、
- [4] すべての行、(その)過去、未来、現在、内、外、粗い、微細、劣等、優秀、そして遠と近、一切の行は皆・・・
- [5] すべての識、(その)過去、未来、現在、内、外、粗い、微細、劣等、優秀、そして遠と近、一切の識は皆

『これは私のではない、これは私ではない、これは私の自我ではない』 この様に、正しい智慧でもって、如実に照見しなければならない!」 (S3. 59)

言い換えれば、諸行 (saṅkhāra) とは、すなわち、名色法及びその因が生起するやいなや、滅し去るが故に、無常 (anicca) である事;それらは生・滅の圧迫を受け続けているが故に苦 (dukkha) である事;それらは自我 (atta) または永久不変の実質がないが故に、無我 (anatta) である、と言える。

三、無為法を知見する

一系列の修習を通して、先に諸行の生と滅を思惟し、その後に、ただ諸行の壊滅をのみ観じる。あなたは、次第に、その他の観智(\tilde{N} āṇa)を成就し、かつ、最終的には、無為 (Asaṅkhata)を知見するであろう。無為を知見するとは、すなわち、不死(Amata)を知見する事である。かつて仏陀は以下の様に述べたことがある:〈注 79〉

「世間を空と観じて、摩克拉哲(Mogharāja)、常に念を具備する者は、我執の見を放棄する、この様に死を度し脱する;この様に世間を観ずる(者を)、死王は見ることができない。」(集経 1125)

仏陀は、我々に対して、世間を空として知見する必要があると教導する。彼の(言う)意味とは、世間とは常(nicca)の空、楽の空と我(atta)の空である、という事である。 通俗的に言えば、絶対的空を見る必要がある、という事である。しかし、この事は、あなたの心が、絶対的に空である、という事を意味しているのではない。あなたの心は完全に目覚めていて、そして、あなたの心が、絶対的空を知見しているのである。あなたの心が、完全に目覚めている時で、かつ知見の対象が涅槃界――無為界(Asaṅkhata dhātu) <注81>である時、それはすなわち、出世間八支聖道を証悟したのであり、そしてその時、八項目のすべての要素は、涅槃を所縁とするものである。 <注82>

四、完全に四聖諦を証悟する

この段階に到ると、あなたは四聖諦を如実に証悟するであろう。そして、それが成し遂げられるのは、すべての必要とされる条件が、完全に整ったが故である。先の述べた所の《尖頂閣経》(Kūṭāgāra Sutta)の中において、仏陀は、どの様な条件が具備されて初めて、苦の完全な止息が可能であるかを、述べている:

「比庫たちよ、ある人がこの様に言ったとしよう:

『私は尖頂閣の下部の部屋を建設した後、上部の部屋を建設する』これは実現可能である。

同様に、比庫たちよ、もしある人がこの様に言うならば:

- 『[1] 私は已に如実に苦聖諦を証悟した、
- [2] 私は已に如実に苦の集聖諦を証悟した、
- [3] 私は已に如実に苦の滅聖諦を証悟した、
- [4] 私は已に如実に苦の滅に向かう道聖諦を証悟した、そうであるならば、完全に苦の解決を成す事ができる』;これは実現可能である。」

彼は更に一歩進んで言う:

故に、比庫たちよ、

- [1] 『これは苦である』 (idaṃ dukkhan'ti) と了知する努力をなさねばならない (yogo karaṇīyo)
- [2] 『これは苦の集である』 (idaṃ dukkha samudayan'ti) と了知する努力をなさ ねばならない

- [3] 『これは苦の滅である』 (idam dukkha nirodhan'ti) と了知する努力をなさねばならない
- [4] 『これは苦の滅に向かう道である』 (idam dukkhanirodhagāminī paṭipadā'ti) と了知する努力をなさねばならない。」 (S.5. 1114)

一切の衆生が、この度の機会を得て、必要な精進を実践し、完全に四聖諦を証悟し、かつ徹底的に諸々の苦を止息せん事を願う!

Venerable Pa-Auk Tawya Sayadaw パオ森林僧院にて



脚注

<注 33>=これは、vipassanā の基礎となるジャーナ(vipassanāpādakajjhāna)と呼ばれる。脚注 289 を参照の事。多くの經文では、以下の様に言う。例えば、仏陀は《沙門果経》(Sāmaññaphala Sutta)の中において、比庫について、四種類のジャーナを育成した後(の事柄について説明した後)、続いて以下の様に言う:

「彼の心がこの様に定(samāhite citta)、清浄(parisuddee)、明浄(pariyodāte)、無穢(anaṅgaṇe)、離諸汚垢(vigatūpakkilese)、柔軟(mudubhūte)、作業に適合して(kammaniye)、住と立において不動である時(ţhite āneñjappatte)、その心を導いて、智見に向かわせる(ñāṇa-dassanāya cittaṃ abhinīharati abhininnāmeti)。」(D. 1. 234)。

<注34>=異なった定力に関する言及は、問答3-1を参照の事。

<注35>=入出息念に関しては「如何にして入出息念を修習するか」を参照の事。

十遍に関しては「如何にして十遍を修習するか」を参照の事。四界差別に関しては 「如何にして四界差別を修習するか」を参照の事。

<注 36>=<観の汚垢論> (vipassanupakkilesakathā)。この種の光は善法の結果であり、それ自身は汚垢ではない。しかし、それを体験した修行者がこの種の光に執着し、かつ、己自身は道果を悟ったのだと誤解するならば、それは汚垢の基礎となる。《転法輪経》及び「如何にして十種類の汚垢を克服するか」を参照の事。

<注 37>=重厚な定力と、観の修習が原因の光。詳細は「心生色」、問答 4-10 を参照の事。

<注 38>=《基瓦芒果林定経》(Jīvakambavanasamādhi Sutta)の中において、仏陀は、六処に基づいて、以下の様に解説している:「比庫たちよ、定力を育成しなければならない。比庫たちよ、[諸々の法は]定力のある(samāhitassa)比庫において、如実に顕現する。どの様に如実に顕現するのであるか?眼の無常が如実に顕現する。色・・・眼識・・・眼触・・・この眼触の縁によりて、生じた楽、苦または不苦不楽受・・・(耳、鼻、舌、身、意及びその所縁、相応する識、触と受:義注では「顕現」(okkhāyati)の意はすなわち、それらが明確になる(paccakkhāyati)、知る事が出来る(paññāyati)、明らかになる(pākataṃ)、と言う。paccakkha(識別できる、認知できる、感知される、顕著な)と anumāna(比量、推定)が、対応する。《Sāla Sutta》の中において、仏陀は、初心者の比庫は、

「専一性 (ekodibbhūtā) 、明浄心 (vippasannacittā) 、定を得る (samāhitā) 、一境 心 (ekaggacittā) にて、四念処において安住し、身体 (等の四念処) に対して、如実に了知する (kāyassa yathābhūtam ñānāya)」。 (S.5. 370)

<注 39>=仏陀の四梵住に対する分析は、《応出離経》(Nīssāraṇīya Sutta)(A. 6. 13)と《Mahārāhulovāda Sutta》(M.2.120)、問答 2 を参照の事。

<注 40>= 《美奇亜経》(Meghiya Sutta)(Ud.31)の中における教え、及び「結び」の章、問答 7-13 を参照の事。

<注 41>=これらは、四護衛業処(ārakkhammaṭṭhāna)とも呼ばれる。

<注 42>=仏陀は《慈経》(Metta Sutta)(A. 11.15)の中において、慈を修する利益に関する説明にこの経が引用されている。この業処を活用する例に関しては、問答 2 を参照の事。

<注 43>=《族旗頂経》(Dhajagga Sutta)の中の教えを参照の事。

<注 44>=この業処に関しては、不浄の修習の章を参照の事。

<注 45>= 《第一念死経》(Paṭhama-maraṇassati Sutta)と《第二念死経》 (Dutiya-maraṇassati Sutta)の中の教えを参照の事。

<注 46>= 梵住と護衛禅に関しては、「第三講 如何にして四梵住と四護衛禅を修習するか」を参照の事。

<注 47>=四界差別に関しては、「如何にして四界差別を修習するか」を参照の事。

<注 48>=《清浄之道・名色摂受論》(Ñāmarūpapariggahakathā)(Vm.669-671)は、この事柄に関する解説である。その中において、以下の様な補足もある:もし、いまだ、色法に対する識別が完成されていないのに、直接名法を識別しようとするならば、「彼は業処から退堕する、それはちょうど、地遍で説明した通りの「愚かな」母山牛の様である・・・」この事はしかし、欲界名法に適用される。色界名法(ジャーナ)では適用されない。

<注 49>=D. 2. 378; M.1. 111

<注 50>= 《蘊経》(Khandha Sutta)を参照の事。

<注 51>=密集の錯覚に関して、詳細に理解したい場合は、問答 3 及び「如何にして色聚を分析するか」を参照の事。

<注 52>=依処を通して名法を識別する時、一つ毎の依処において生起する所の心及び相応する心所を識別しなければならない。例えば、眼識依処(眼浄色)を識別して、その後に、眼処に依拠して生起する所の眼識(1)と相応の心所(7)を識別する。六根門に基づいて識別する時、一つ毎の門の心路に中において生じる所の異なる種類の心識を識別しなければならない。例えば、眼門心路の中の異なる種類の心及び相応する心所(を識別する事)。

<注 53>=五つの依処の、一つ毎の処は、ただ一つの種類の、相応する心識が生起するのみであるが、しかし、心処においては、すべての、その他の各種の類型の心識が、それに依拠しながら、生起する。この時、初心者は混同してしまう事が多い、彼が、已にアビダンマにおいて、異なる心路の中に生起する所の、異なる種類の心識の論述に熟知していない場合は。

<注 54>=「法所縁」の説明に関しては、緒論の章を参照の事。

<注 55>=前に述べた《白毫光婆羅門経》(Uṇṇābhabrāhmaṇa Sutta)等を参照の事。

<注 56>=表 1b と、表 1c を参照の事。

<注 57>=「如何にして浄色を分析するか」を参照の事。

<注 58>=密集の錯覚を商才に理解したい場合は、問答 3 を参照の事。

<注 59>=第一聖諦の知見の章を参照の事。

<注 60>=観智の対象は、18 種類の真実色法も含む。ここで検討されているのは名法である為、ただ 81 種類の世間心と相応する心所にのみ言及した。

<注 61>=昏昧:昏沈、怠惰、無力、所縁に対して興味を感じない;散乱:躁動、不安、 焦燥;広大:色界または無色界ジャーナ;不広大:欲界;有上:欲界;無上:色界または 無色界ジャーナ;得定:近行定またはジャーナ;無定:禅定の無い事;解脱:この段階で は、如理作意によって、または五蓋が定力によって鎮伏されている為に、暫定的に解脱し た心の事。未解脱:解脱の反対。9-10、112、13-14、15-16の、これら一対の心は、あらゆ る種類の世間心を含む。

<注 62>=問答 3 を参照の事。

<注 63>=《清浄之道》(Visuddhimagga):権威のある、全面的な禅修解説書。それは、古老の、正統的なパーリ語義註(主には、仏陀の時代と第一次結集時の「古注」に遡る事ができるシンガラ訳本、及び後期シンガラ義註の編纂、著作によって構成されているが、西暦 5 世紀に、インドの学者仏音尊者によってパーリ語に訳し戻された。)

<注 64>=<説見清浄品>(Diţthivisuddhiniddesa)(Vm.662)

<注65>=定の修習によって、心が如何に清浄になるか、は問答7-8を参照の事。

<注 66>=《外道依処等経》(Titthāyatanādi Sutta)

<注 67>=二種類の「有」(bhava) が存在する。

- 1)業有(kammabhava)、業の造作、作用を言う。
- 2) 生有(upapattibhava)、業の果報(何かの生存界に生まれ変わる)。注 321 を参照の事。

<注 68>=《外道依処等経》(Titthāyatanādi Sutta)

<注69>=五蘊とは、識(3)、名色(4)、六処(5)、触(6)、受(7)。

<注 70>=例えば、仏陀は、背中の痛みという苦を受けた、また、年老いた時に、老いの苦に遭遇した。

<注 71>=《沙門婆羅門経》(Samaṇabrāhmaṇa Sutta)。仏陀は、《中部・韋克那思経》(Vekhanasa Sutta)(韋克那思は一遊行僧の名前)の中において、以下の様に言う:「もしあれらの沙門、婆羅門が前際を知らず、後際を見ないのに、己みづから『我々は、生が已に尽きた事を知っている、梵行は已に立ち、成すべきことはなしおえて、再び、後有のある事が無い』と言うならば、法に依りて、彼らを叱責する事ができる。(M.2.~281)

<注 72> =詳細は、「如何にして未来を識別するか」、及び「表 1d:死亡と結生」を参照の事。

<注 73>=<大財長者子物語>(Mahādhanaseṭṭiputtavatthu)を参照の事。Dhp.A.」 155-156.

<注 74>=上記経文に関する引用と分析は問答 2-3 を参照の事。

<注 75>=<有輪論> (Bhavacakkakathā) :経文は、《大因縁経》 (Mahānidāna Sutta) からの引用である (D.2. 95)

<注 76>=縁起、縁の滅及び過去、未来の名色法の識別に関しては「第六講 如何にして 縁起の連結を透視するか」を参照の事。

<注 77>=「諸法」に関しては、注 21 を参照の事。

<注 78>=《中部・教誡闡那経》(Channovāda Sutta)の義注は以下の様に言う:

「これは私のではない」は、苦を思惟する事、「これは私ではない」は、無常を思惟する事、「これは私の自我ではない」は、無我を思惟する事。(M. A. 391)

<注 79>=<摩克拉哲学童問> (Mogharājamāṇavapucchā) 、《清浄之道・行捨智論》 (Saṅkhānupekkhāñāṇakathā) (Vm.765) もこの經を引用している。

<注80>=空の想に関しては、問答5-9を参照の事。

<注 81>=涅槃を証悟する時、必然的に、完全に目覚めている事に関する討論は、問答 3-2 を参照の事。

<注82>=涅槃の証悟に関しては、「涅槃を知見する」の章を参照の事。



第一講 如何にして入出息念を修習してジャーナに 到るか

はじめに

我々は、幾人かの台湾の比丘、比丘尼法師の要請を受けて、台湾を訪問した事に、大き く喜びを表明するものである。この幾人かの法師は、かつて緬甸のモーラミャイン

(Mawlamyine) の近郊にあるパオ禅林 (Pa-Auk Tawya) において、禅の修習をした事がある。台湾に滞在する間、我々は、パオ禅林で実践されている禅の修行体系の知識を教えるが、それはパーリ (Pāļi) <注 83>の仏典及び《清浄之道》 (Visuddhimagga) < 注 84>の教えに依拠したものである。我々は、パーリ仏教聖典が教える修行方法は、まさに仏陀ご本人が修行した方法であり、また、仏陀ご在世時に、弟子たちの修行を指導した時に用いた方法である、と信じているものである。

なぜ禅修行をしなければならないか?

先に、我々は、己自身に問うべきである:「仏陀はなぜ禅修行を教導したのか?」または「禅修行の目的とは何か?」

仏教の禅修行の目標は、涅槃(Nibbāna)を証悟す事にある。涅槃とは、名法(nāma)と色法(rūpa)の止息である。故に、涅槃を証悟する為に、我々は無貪、無瞋、無痴を根とする善思と、貪、瞋、痴を根とする不善名法を完全に滅しなければならない。これらすべては、おしなべて輪転して止まない生、老、病、死を引き起こすが故に。もし、聖道(ariyamagga)によって、完全にそれらを滅することができたならば、我々は涅槃を証悟する事ができる。言い換えれば、涅槃とは生死輪廻(samsāra)の諸々の苦から解脱する事であり、それは生、老、病、死の滅である。我々は皆、生、老、病、死の苦を受けており、各種の苦から解脱する為に、我々は、禅の修行を実践しなければならない。諸々の苦から解脱したいという希望に鑑み、我々は、涅槃を証悟する為に、どの様にして禅の修行を実践しなければならないかを、学ばなければならない。

禅の修行とは何か?

では、禅の修行とは何であるか?

禅の修行は、止禅(samatha)と観禅(vipassanā)がある。この二者は皆、身体、言葉の徳行(戒)を基礎としている。言い換えれば、禅の修行とは、八支聖道(aṭṭhaṅgikaariyamagga)を育成し、円満することでると、言う事ができる。

八支聖道とは:

- 1) 正見 (sammādiţţi)
- 2) 正思惟 (sammāsaṅkappa)
- 3) 正語 (sammāvācā)
- 4) 正業 (sammākammanta)
- 5) 正命 (sammā-ājīva)
- 6) 正精進 (sammāvāyāma)
- 7) 正念 (sammāsati)
- 8) 正定 (sammāsamādhi)

正見は、二種類ある:観正見(vipassanā-sammādiṭṭhi)と道正見(magga-sammādiṭṭhi)である。正見と正思惟は合わせて、智慧(Pañña、慧学)の訓練と称する。正語、正業と正命は、合わせて戒行(sīla)の訓練と称する。正精進、正念と正定は、合わせて禅定(samādhi、定学)の訓練と称するが、それは止禅(samatha-bhāvanā)の事である。

八支聖道

今、我々は、八支聖道の八つの項目について、幾つかの説明をしてみたいと思う。第一の項目の要素は正見(sammādiţţhi)である。正見とは何か?

正見は以下の四種類の智慧を含む:

- 1) 苦聖諦に関して――五取蘊の観智;
- 2) 苦集聖諦に関して――五取蘊の因の観智; 言い換えれば、すなわち、縁起の観智;
- 3) 苦滅聖諦に関して――五取蘊の止息、すなわち、涅槃の証悟と(涅槃の)智慧;

4) 苦の滅に向かう道聖諦に関して――涅槃を証悟する為の修行方法、すなわち、八支聖道の智慧。

八支聖道の二つ目の項目の要素は正思惟(sammāsaṅkappa)である。正思惟も四種類ある:

- 1) 心を苦聖諦に投入する――五取蘊;
- 2) 心を苦集聖諦に投入する――五取蘊の因;
- 3) 心を苦滅聖諦に投入する――涅槃;
- 4) 心を苦の滅に向かう聖道諦に投入する――八支聖諦

であり、正見とは、それを如実に了知する事である。この二種類の項目の要素は、共同で運用され、心をして一つ一つの聖諦に投入せしめ、かつそれらを了知せしめる。故に、合わせて慧学(Pañña sikkhā)と称する。

八支聖道の第三項目の要素は正語(sammāvācā)である。正語はすなわち、虚妄語、離間語、粗悪語と雑穢語を避ける事である。八支聖道の第四項目の要素は正業

(sammākammanta)である。正業とはすなわち、殺生、不与取、欲邪行と放逸の因である諸々の酒類<注 85>を避ける事を言う。八支聖道の第五項目の要素は正命(sammā-ājīva)である。正命とはすなわち、不適切な言語また行為によって生活を維持する事を避ける事を言うが、それは例えば、殺生、窃盗または嘘などである。在家者で言えば、五種類の不適切な貿易、売買を避ける事;武器の売買、人身売買、犠牲用の家畜、動物の売買、酒類等の麻酔品の売買、及び毒薬の売買である。正語、正業と正命という、この三項目の要素は、合わせて戒学(sīla sikkhā)と呼ばれる。

八支聖道の第六項目の要素は正精進(sammāvāyāma)である。正精進も、四種類ある;

- 1) いまだ生起しない不善法の生起を防止する事に努力する
- 2) すでに生起した不善法を取り除く様、努力する
- 3) いまだ生起していない善法が生起する様、努力する
- 4) すでに生起した善法が増長する様、努力する。

この四種類の正精進を育成する為に、我々は戒・定・慧の三学を修行し育成しなければならない。八支聖道の第七項目の要素は正念(sammāsati)である。正念もまた、四種類に分類することができる、すなわち、四念処(satipaṭṭhāna)である。

- 1) 身随観念処(kāyānupassanā satipaṭṭāna)
- 2) 受随観念処(vedanānupassanā satipaṭṭāna)
- 3) 心随観念処(cittānupassanā satipaṭṭāna)
- 4)法随観念処(dhammānupassanā satipaṭṭāna)。

ここにおいて、「法」とは「受」以外の 51 種類の心所、または五取蘊、内外 12 処、18 界、7 覚支、四聖諦等を指している。実際、四念処は、二種類に分類することができるが、それは色念処と名念処である。

八支聖道の第八項目の要素は正定(sammāsamādhī)である。正定とは、初禅、第二禅、第三禅と第四禅を言う。《大念処經》(Mahāsatipaṭṭhāna Sutta)では、これらを正定と呼んでいて(D. 2. 402; M.1. 135)、《清浄之道》では、更に一歩進んで四種類の色界禅(rūpa-jhāna)、四種類の無色禅(arūpa-jhāna)と近行定(upacāra samādhi)であるとしている。<注86>

ある種の人々は、すでに重厚な巴拉密(ハラミツ、pāramī、以下同様)を累積しているので、簡単な、または詳細な仏法の説法を聞いただけで涅槃を証悟することができる。しかし、大多数の人々は、この様な巴拉密を具備していない為に、順序に従って八支聖道を修行する必要があるが、これらの人々は「可引導之人」(導かれる人々)

(neyyapuggala) と呼ばれる。彼らは、八支聖道を育成する必要があるが、それはすなわち、戒・定・慧の次第に従って修行する事である;持戒が清浄になった後、禅定を育成しなければならない。定の修習によって、己自身の心を浄化した後、智慧の修行に取り組まなければならない。



如何にして禅定を育成するか

止禅には合計 40 種類の業処があり、その内のいずれか一種類を選んで、禅定を育成する為の修習をする事ができる。どの種類の業処を選べばよいか、決定する事ができない人は、入出息念(ānāpānasati)から始めるのがよい。大部分の人々は、入出息念または四界差別を修習する事を通して、禅の修行を成就させる事ができる。こうした事から、我々は、如何にして入出息念の修習を行うかを、簡単に説明したいと思う。

如何にして入出息念を修習するか

仏陀は《大念処經》の中において、入出息念の修法を教導している。仏陀は、以下の様に言う:

「では、比庫たちよ。比庫は如何にして身随観身(身体に随順して、身体を観ずる事)に おいて住するのか?

比庫たちよ、ここにおいて、比庫は林野に赴き、木の下に赴き、または空き地に赴き、結 跏趺坐して座り、その身体を正直にし、念を面前において [業処の禅修行を行う] 彼は、 ただ入息において念じ、ただ出息において念ずる。」

次に、仏陀は入出息念を教導する:

「入息が長い時、『私の入息が長い。』と了知する

出息が長い時、『私の出息が長い。』と了知する

入息が短い時、『私の入息が短い』と了知する

出息が短い時、『私の出息が短い』と了知する

彼は学ぶ:『私は全身(息全体、以下同様)を覚知しながら、入出をする。』

彼は学ぶ:『私は全身を覚知しながら、出息する。』

彼は学ぶ:『私は身行(息の出入、以下同様)を静かにして入息をする。』

彼は学ぶ:『私は身行を静かにして出息する。』」

(D . 2. 374 ; M_{\circ} 1. 107) $_{\circ}$

禅の修行を始める時、まず、快適な、リラックスした姿勢で座り、かつ、鼻の先において、出入りする息を覚知する様にチャレンジする。あなたは、鼻のちょうど下の方、または鼻孔の出口の所の、ある一か所において、それを感じる様にする;当該の場所を接触点と呼ぶ。(意識は)息の出入りに従って、身体の内部に入ったり、外部に出たりしてはならない。この様にすれば、あなたは、禅定を成就することができないが故に。唯一、息が通り過ぎる、及び唇の上方の接触する所または鼻孔の出口の周囲の、(息が)最も鮮明な所において、息を覚知する事。この様にして初めて、あなたは禅定を育成し、成就することができる。

息の自性相(sabbāva-lakkkhana)、

共相 (sāmañña-lakkhana) <注87>

また、禅相(nimitta)の色彩に注意を払ってはならない。自性相とは、息の中の四界の特徴である;例えば:硬さ、粗さ、流動性、熱さ、支持性、推進性等。共相とは、息の無常(anicca)、苦(dukkha)、無我(anatta)の相。この事は、「入る、出る、無常」または「入る、出る、苦」または「入る、出る、無我」と黙念してはならない、と言う事を意味している。ただ単純に、入出息をして、概念法として、覚知する様にする。

呼吸の概念とはすなわち、入出息念の所縁であり、また、あなたが定力を育成する為に、専注しなければならない所縁でもある。この方法によって、呼吸の概念に専注する時、もし、あなたが、かつて、過去世において、この業処を修習した事があり、かつ一定程度の巴拉密を累積しているのであれば、あなたは入出息に対して簡単に専注することができる。もし、その様に出来ないのであれば、《清浄之道》では、息を数える事を提案している。あなたは、毎回、一回ごとの呼吸を完成させた後、数を数えるのがよい「入る、出る、一。入る、出る、二・・・」<注88>。

少なくとも5まで数える事。しかし、10を超えてはならない。我々は、あなたが8まで数えるのを推奨する、というのも、それは、あなたに、あなたが、八支聖道を育成している最中である事を思い出させることができるが故に。こうした事から、あなたは己自身の希望に沿って、5から10までの間の、任意の数字を選び、その後、この時間内において、心をその他の場所に漂い出さない様にして、ただ静かに息を覚知するのだと、決意する。あなたは、この様に息を数えている時、心を所縁に専注せしめ、ただ静かに呼吸を覚

知するのみ(という風に実践する)。あなたの心は、この様にして、少なくとも半時間専 注できる様であれば、この業処の第一と第二の段階に進むべきである。

[1] 入息が長い時、『私の入息は長い』と了知する 出息が長い時、『私の出息は長い』と了知する [2] 入息が短い時、『私の入息は短い』と了知する 出息が短い時、『私の出息は短い』と了知する。

この段階において、あなたは、入出する息が長いかまたは短いかについての覚知を、育成しなければならない。ここで言う所の、長いまたは短いは、寸法の事を言っているのではなく、持続する時間の長短を言うのである。あなたは自分自身で、(息が)どれくらい長いと、「長い」と言い、どれくらいの長さを「短い」と言うかを、決めなければならない。

一回毎の入出息の持続時間を覚知する様になると、あなたは、入出息が時には長く、時には短い事に気が付くであろう。この段階において、あなたは、この様に、ただ知っている、と言う状況を維持するだけでよい。「入る、出る、長い、入る、出る、短い」と念じてはならない。ただ、「入る、出る」と黙念し、かつ、呼吸の長いか、または短いかを覚知するだけでよい。

あなたは、以下の様に了知しなければならない――ただ呼吸が通り過ぎる所、または唇の上方の(息が)接触する所、または鼻孔の出口における、息の進出の時間的長短を覚知するのである。ある時は、息はまるごと常に長い時があり、ある時には短い時がある。しかし、それを故意に長く変えたり、短く変えたりしてはならない。この段階において、禅相が出現する可能性がある。ただし、あなたがこの様に平静に約一時間ほど(息に)専注することが出来ても、禅相が未だ出現しない時、あなたは第三の段階に進むのがよい:

[3] 彼は学ぶ:『私は全身(息の全体、以下同様)を覚知しながら、息を吸う』 彼は学ぶ:『私は全身を覚知しながら、息を吐く』

ここにおいて、仏陀は、あなたに対して、冒頭から最後までの息(全身:息の全身、すなわち、呼吸の始め、真中、最後まで)を覚知する様、指示する。この様に修習する時、禅

相が出現する可能性がある。もし、この時、禅相が出現したならば、急ぎ、心をそれに向けてはならず、引き続き息を覚知し続ける事。もし、息全体を約一時間、平静に覚知し続ける事ができているのに、いまだ禅相が出現しないならば、第四の段階に入るのがよい。

[4] 彼は学ぶ:『私は身の行を平静にして息を吸う』

彼は学ぶ:『私は身の行を平静にして息を吐く』

上記の事柄を成功させるには、あなたは、息を平静にするのだという決意をし、その後に、息の冒頭から最後までを継続して、覚知し続ける必要がある。これより他の、どの様なものであっても、他の方法を用いてはならない、そうする事によって、定力が退失するが故に。《清浄之道》では、四種類の、息を平静にする事のできる要素を説明している:

- 1) 思惟 (ābhoga)
- 2) 専念 (sammannāhāra)
- 3) 作意 (manasikāra)
- 4) 省察(paccavekkhaṇa)。

書中では、それを比喩で説明している:

「例えば、有る人が山の頂から駆け下りて来たとして、または重い荷物を頭から降ろして、そこに立っているとして、その時の入出息は粗く、鼻から [呼吸] できないくらいで、口で入出息をして、立っていなければならない。彼が疲労を癒し、お風呂に入り、水を飲んで、濡れたタオルを胸に巻いて、涼しい場所に横になる時、彼の入出息は微細に変化するか、または、息があるのか無いのか、分からないくらいになる。《清浄之道》では、以下の様に言う、同様に、比庫の入出息は、その始まりは粗いものであっても、徐々に微細になり、最後にはあるか無いか、判別できない程になる。

更に一歩進んで、比庫――はなぜ、入出息を掌握しなければならないか、という事について、《清浄之道》は以下の様に説明する:

「以前、彼が [入出息] を掌握していない時、思惟無く、専念なく、作意無く、『私は粗い身行(息の動き)を平静にしよう』という省察がなく、 [入出息] を掌握した時初めて、その様になる事が出来る。故に、彼の身行、 [入出息] は、掌握する前に比較して、更に微細に変化するのである。」 (Vm. 220)

- 1) 思惟(ābhoga):息に注意を払い始める、息を知り察する、意念を息に向けて、「私は息が平静になる様にチャレンジする」の効果に到達する事。
- 2) 専念 (samannāhāra):この様に実践する事を継続する。すなわち、息に対して、注意を払う事を持続する事、息に対して、注意を払う事を反復する事、心において息を保持する事。「私は息が平静になる様にチャレンジする」の効果に到達する事。
- 3) 作意 (manasikaāra):その元々の意味は「息を平静にせんと決意する」である。作意 とは、心をして、所縁に向かわせる心所である。作意は、心をして、息を識知(認識し、 知る事。以下同様)せしめる。
- 4) 省察(paccavekkhaṇa):息を省察<注89>して、心において息が鮮明になる事。「私は息が平静になる様にチャレンジする」の効果に到達する事。

こうした事から、この段階において、あなたがなさねばならない事は、ただ息を平静に せんと決意して、かつ、それを持続的に、不断に、覚知する事である。この様にすれば、 あなたは、息が更に平静に変化している事を発見するであろうし、(この時)禅相もまた 出現するであろう。禅相が出現せんとする時、多くの禅修行者は、幾つかの問題に遭遇す るであろう。大多数の禅修行者は、息が非常に微細で、かつ不鮮明になっているのを発見 する。その時、彼らは、息がすでに停止したのではないかと、思ってしまう。もし、この 様な状況が発生した場合、あなたは、最後に息を知り・察した所で、覚知を保持し、か つ、それが出現するのを待つ(のがよい)。

七種類の人だけが、呼吸をしない:死者、胎児、溺水者、悶絶者、第四禅に入った者、入滅定者<注90>と梵天人である。禅修行者は、己自身は上記の者の内の一人ではない事を省察しなければならない。実際、あなたには呼吸があり、ただ、正念が不足しているが故に、息を覚知できないでいるだけある。息が微細になった時、息が鮮明になる様に意図して、加工をしてはならない、というのも、この様な努力は、(心の)かく乱と不安を呼び起こし、その為、あなたの定力が上昇していかないが故に。ただ、息を如実に覚知する事。もし、それが不鮮明であるならば、それを最後に覚知した所において、静かに待てばよい。この方式によって、正念と智慧を投入すれば、あなたは、息が再度出現するのを発見するであろう。

禅相

ある種の禅修行者は、禅相が出現する前、先に光を体験する。ある種の人々には、禅相が直接出現する。禅相と光は、同じものではない。 <注 91>両者の違いは、正に太陽と太陽光の違いであると言える。入出息念における禅相の出現方式は、人によってそれぞれ異なる。ある種の人々の禅相は、清らかで精緻なコットンボールの様であり、または長く引いた綿花の様であり、またはふわふわ浮いてそよぐ空気の様であり、または気流の様であり、または燦然と耀く明けの明星の様であり、煌めくルビーまたは宝石の様であり、または真珠の様である。ある種の人々にとって、それは、綿の木の幹、または尖った枝の様であり、また別の人々にとっては、長い紐、細い線、花輪、煙幕、広がったクモの巣、薄い霧、蓮の花、車輪、月または太陽であったりする。

多くの場合、コットンボールの様に純白な禅相は取相(uggaha-nimitta)である。それは、多くの場合、明るく耀いておらず、また透明でもない。禅相が明瞭で、明るく輝き、清らかで、明けの明星の様である時、これは似相(paṭibhāga-nimitta)である。それが曇ったルビーまたは宝玉の様な時、それは取相である。それが明るく発光する時、それは似相である。(修行者が)修行するのは、すべて同じ入出息念業処ではあるが、しかし、それぞれ、異なる形態の禅相が生じる――異なる人に、異なる禅相が出現するのである。

《清浄之道》では、上記の事柄は、禅相とは、「想」によって生じるものであるから、と説明する(Vm.231)。禅相の異なる事は「想」が原因である。しかし、「想」は、単独で生じるわけではなく、それは、名法の一種として、それぞれ個別の心識を随伴しながら、その他の名法と共に生起する。それぞれ個別の心識に相応するこれらの名法は、相応心所(cetasika)<注92>と呼ばれる。例えば、一人の禅修行者が、楽しい心でもって、入出息禅相に専注するならば、その心所は、ただ一つの「想」ではなく、合計33個になるが、それは、すなわち、触、思、一境性、作意、尋、伺、勝解、精進、欲などである一「想」が異なるだけでなく、その他のすべての心所もまた異なるのである。

実際、《清浄之道》は、ほかの所においても、類似の説明をしている、例えば、第四無色禅――非想非非想処定(nevasaññā-nāsaññāyatana)を説明する時。<注 93> 《清浄之道》が、非想非非想処定を説明する時、以下の様に言う、「想」は非常に微細であって、そうであって初めて「非想非非想処定」と呼ぶことができる。しかし、この時、 「想」だけが非常に微細なのでは無く、受、識、触とその他のすべての名法もまた非常に 微細なのである。故に、《清浄之道》では、非想非非想処定は、また、「非受非非受」、 「非識非非識」、「非触非非触」等々と呼ぶ事ができる、という。 (Vm. 287)

こうした事から、義注が、禅相のそれぞれ異なる事について、「想」が原因である、と

述べる時、それはただ「想」という、単一の角度から入出息禅相を説明したもので、「想」(saññāsīsa)について述べて、「想」を(代表的な)例にしたものである。しかし、あなたの禅相がどの様な形状、どの様な色彩であっても、あなたの入出息の想がどの様なものであっても、重要な事は、禅相を弄んではならない、という事である。それが消失する様な事をしてはならない。また、故意にその形状や外観を変えたりしてはならない。もし、その様にするならば、あなたの定力は更に向上する事は望めないし、停滞してしまうであろうし、禅相は消失するかもしれない。故に、禅相が出現し始めた頃、心を息から禅相に向けて転向してはならない、もし、その様にするならば、禅相は消失してし

まうであろう。もし、あなたが、禅相がすでに安定していて、かつ、心は自動的に禅相に

固定されるのを発見したならば、その時、心をして、禅相に専注せしめる。もし、あなたが、心を禅相に無理矢理に移転するならば、あなたの定力は退失するであろう。<注 94>

もし、禅相が、あなたの面前の遠い所でしか出現しないのであれば、今は、その事を気にしない様にする。というのも、それは消失するかも知れないが故に。もし、あなたがそれに対して、知らぬふりをして、単純に接触点上の息に専注するならば、禅相は近くに移動してきて、かつ、そこに留まる。禅相が接触点上に出現して、かつ、安定に向かい、また、禅相は息であり、息が禅相であるという場合であっても、余りに早くから、禅相に専注してはならなず、引き続き、息に専注する事。あなたが、この様に息所縁に対して、持続的に専注するならば、息と禅相の二つは一に合一して、心は自動的に禅相の上に固定される。

この時、初めて、禅相に専注する様に。<注95>

この時、心をして禅相に固定させると、禅相は増々白くなるが、それが綿花の如く白くなる時、それは取相である。

あなたは、心をして平静である様にし、白色の取相に専注する事、一時間、二時間、または三時間または更に長く・・・。もし、あなたが、この様に、あなたの心を取相の上に

一時間または二時間、固定し続ける事が出来たならば、それは清らかに、明るく、光耀く様になる、これが似相である。心をして、似相の上に、修習が成功するまで、一時間、二時間または三時間、維持できる様に決意し、かつ練習をする。この段階において、あなたは近行定(upacāra)または安止定(appanā)に到達するであろう。それを近行定と呼ぶのは、それがジャーナに近く、ジャーナの前に出現する為であるが、安止定はジャーナそのものである。

この二種類の定は、双方とも、似相を所縁としているが、二者の違いは、わずかの以下の情況の違いによる:近行定における諸々の禅支は、いまだ完全に展開されていない。この事が原因で、「有分」(bhavaṅga)が尚生起し、かつ、禅修行者をして「有分」に落ち込ませる。禅修行者は一切が停止した、と言うが、場合によっては、これこそが涅槃であると誤解する事もある。実際は、心は未だ停止しておらず、ただ、禅修行者が、いまだそれを覚知する充分な能力を有していないが為に(その様に誤解するのである)、というのも、有分心は非常に微細であるが故に。

如何にして五根をバランスするか

有分に落ち込むのを避ける為、また定力を更に一歩進んで育成する為、あなたは五根 (pañcindriyā) の助けを借りて、心を策励して、それを似相に固定せしめなければならない。この五根とは:

- 1) 信 (saddhā)
- 2) 精進 (vīriya)
- 3) 念 (sati)
- 4) 定 (samādhi)
- 5) 慧 (pañña)

五根とは、五種類の、心をコントロールする力であって、心をして、涅槃に向かう止観の道から離れない様にするものである。もし、五根の中の、いずれか一つの根または幾つかの根が過度である時、修行者は、(修行上の)アンバランスに見舞われる。一番目は信根であるが、それはすなわち、信じるべき事柄、例えば三宝、または業と果報を信じる、という事である。仏陀の証悟に対して信心(=確信)があるという事は非常に重要であ

る、というのも、それが欠乏する時、人々は、禅修行の努力を放棄するからである。仏陀の教法、すなわち、四道、四果、涅槃などを信じる事も非常に重要である。仏陀の教法は、我々に対して、禅修行の方法を明らかに提示してくれたものであり、故に、この段階において、それに対して完全な信心(=確信)があるという事は、非常に重要である。

例えば、ある禅修行者が、以下の様に考えたとする:

「ただ入息と出息に注意を払うだけで、ジャーナを証得する事ができるのだろうか?取相が白いコットンボールの様で、似相は透明な氷またはガラスの様だと言うのは、本当だろうか?」

この様な考えを長く続けていると、以下の様な見解を導くことになる:

「現今の時代に、ジャーナを証得する事は困難である。」

やがて、禅修行者は、教法に対する信心(=確信)が消失し、同時に、己自身が定の修習を放棄するのを止める事ができなくなる。故に、入出息念を禅修行の業処として、定力の育成を実践する禅修行者は、堅固な信心(=確信)を擁する必要がある。(その様な禅修行者は)全く懐疑することなく入出息念の修行をするであろう。彼は以下の様に思惟するべきである:

「ただ系統的に、正自覚者(正しい覚醒者)の教えに従って禅の修習をしさえすれば、私はジャーナを証悟する事が出来る。」

しかしながら、若し、禅修行者の信心(=確信、以下同様)が過剰に強い時――ここで言うのは、似相の修習に対する信心であるが――その場合、彼の定力は却って、弱まるのである。行き過ぎた確信は、強すぎる喜(pīti)を伴っており、故に、感情的な波を引き起こす、そしてその場合、禅修行者の心が容易に喜悦の興奮の干渉を受ける結果、慧根が似相を了知する事ができない、という事態が生じるのである。ここにおいて、過度の信心(=確信)が所縁に対して決定(勝解)を行い、結果、慧が不鮮明、不安定になり、その他の精進根、念根及び定根もまた、それにつれて、弱まってしまうのである:精進(の力)は、相応する名法を策励し、維持して似相に向かわせることができず、念は似相への覚知を確立する事ができず、定は心がその他の所縁に向かうのを阻止する事ができず、慧もまた、徹底的に似相に通達する事ができない。故に、信心(=確信)が過度に強い時、却って信心をば、弱めてしまうのである。もし、精進根が強すぎる時、その他の信、念、定、

慧の諸々の根が、勝解(決定)、確立、散乱の防止及び洞察力の育成という、各種の作用を実行する事ができない。故に、過度の精進は、心をして平静に、似相に専注する事をできなくしてしまう。

ソーナ(Soṇa Koļivisa)尊者の例で説明する。彼は王舎城(Rājagaha)で、仏陀の教えを聞き、信心(=確信)を生じ、父母の同意を得て、出家した。仏陀に、禅修行の業処を授けてもらった後、彼は寒林(Sītavana)に行って、禅修行に、非常に精進した。経行の時、彼の足裏が摩損して破れた。彼は横にもならず、睡眠もとらず、これ以上歩行が困難になった時、両手と膝を使って這って修行した。過度の精進の為に、彼の経行の道は、血で塗られていた。ただ、状況はこの様であっても、彼は何等の成就も得られず、失望するばかりであった。仏陀は、鷲峰山(Gijjhakūṭa)にいて、彼が失望しているのを知って、彼に会いに行った。仏陀は、ソーナ尊者に、以下の様な注意を与えた。彼がまだ在家者であった時、琴(vīṇā)を弾いていたことがあるが、もし、琴の弦をきつくはりすぎたり、ゆるすぎたりするならば、美しい音色を奏でることはできない。唯一、きつくも無く、ゆるくもなく、弦の張り具合がちょうどよい時にのみ、(演奏が)上手くいく。 仏陀は、修行もまた同じことで、精進の度合いが過度である時、その結果は躁動となり、精進の不足は怠惰となる、と教えた。何度も繰り返し考えて、ソーナ尊者は仏陀の教えから受益し、久しからずして、阿拉漢果を証得した。

信根と慧根、定根と精進根のバランスを取る事は、智者の讃嘆する所である。もし、信が強く、慧が弱い場合、この人は、無用な、または意義の無い事柄を信じる様になる、例えば、正統な仏教以外の宗教が崇拝する所の対象、すなわち、守護霊とか保護神などを敬い奉る様になるのである。反対に、若し、慧が強く、信が弱い時、この人は非常に狡猾になる。己自身は、実際には修行を実践しないのに、批評や批判ばかりして、時間を浪費する。この種の人は、薬をたくさん服用しすぎて、病気を併発した様で、治療が甚だ難しい。しかしながら、信と慧のバランスがとれている人は、信じるべき対象に対して、信心(=確信)を擁することができる:三宝、業と果報である。彼は、仏陀の教えに従って禅修行をしさえすれば、似相を見ることができるし、またジャーナも証得する事ができると確信している。

次に、もし、定が強くて、精進が弱い時、この人は、怠惰になってしまう。例えば、禅修行者の定力が向上した時、彼は、リラックスした気楽な気持ちで入出息似相に専注する様になって、それを明確に覚知する事がない為に、怠惰になる可能性がある。この様な状況の下では、五禅支は強度が不足し、その為に、高度な定力を維持する事ができなくなる。この事は、彼の心は、有分に落ち込む事を意味する。しかしながら、もし、精進が強くて、定が弱い時、彼は躁動、不安になる。唯一、定と精進にバランスがとれている時にのみ、彼は、怠惰でもなく、躁動でもなく、かつ、ジャーナを成就させることができる。止業処を修習したいと希望する人にとって、非常に堅固な信心(=確信)を持つことは、どの様な時にでも、良い事である。若し、彼が:「私が入出息似相に対して定力を育成しさえしたならば、私は必ずやジャーナに到達する事が出来るに違いない!」と思うなら、信心(=確信)の力と、似相への専注によって、彼はジャーナを成就することができる、というのも、ジャーナは専注に基づくが故に。

観の修行者にとって、慧が強い事は、非常に良い事だ。というのも、唯一、充分に強力な智慧を擁する者だけが、無常・苦・無我の三相を徹底的に透視する事ができるが故に。定と慧がバランスしている時にのみ、世間ジャーナ(lokiyajjhāna)は生起することができる。仏陀は、この事は、出世間ジャーナ(lokuttarajjhāna)にも適用する事ができるのであり、かつ、定、慧はまた、精進と信とを合わせてバランスを保たねばならないと、教えている。念はどの様な状況の下においても、必要である、というのも、それは、心を保護して、過度の信、精進または慧によって、躁動が生じるのを防ぎ、過度の定によって怠惰に陥る事も防ぐことができるが故に。それは信と慧、定と精進、定と慧をバランスすることができる。

故に、念は常に適用される。ちょうど、塩がすべての料理に適用される様に、または、 総理が国家の大事のすべてを処理するのに適している様に。故に、古代の義注では、跋葛 瓦の話を引用して以下の様に言う:

「念はどの様な業処にも適合する。」なぜであるか?

それは、禅修行における、心の帰依処であり、(心を)保護(する役目を負う)が故に。 念が帰依処である、というのはそれが、心が以前には到達した事なく、了知した事の無 い、殊勝で、高度で、深遠な境地に到達するのを支援するからである。もし、念がないの であれば、心は、如何なる殊勝で非凡な境地をも、成就することができない。念は心を保 護し、かつ、心をして、禅修行の所縁を忘れない様にする。故に、禅修行者が観智でそれを分析する時、念は常に禅修行の所縁と禅修行者の心を保護する役目を負って出現する事を発見する。もし、念がないならば、禅修行者は、心を策励したり、抑制したりすることができない。故に、仏陀は、念は一切に適合する、と言うのである。

如何にして七覚支をバランスするか

もし、入出息念でもってジャーナを成就したいのであれば、七覚支(bojjhanga)をバランスする事もまた、非常に重要である。それらは:

- 1) 念 (sati) : 忘れない事、似相を識知しつづける事;
- 2) 択法(dhammavicaya): 似相を徹底的に了知する事;
- 3)精進(vīriya):諸々の覚支を統合し、かつ、似相において、それらをバランスする。特に、それ自身及び択法覚支を強化する;
- 4) 喜 (pīti):似相を体験する時、心が歓喜する事;
- 5) 軽安 (passadhi) :似相を所縁とする時、心と相応心所が平安である事;
- 6) 定 (samādhi) :心が似相に専注する事。一境性;
- 7) 捨(upekkhā):心の平等性。似相に対して興奮しないし、また飽きない事。

禅修行者は、すべての七覚支を育成し、バランスを取る必要がある。もし、精進が不足するならば、心は、禅修行の所縁から離れていく(ここでは似相を指す)。この時、彼は、軽安、定と捨を修習してはならず、択法、精進と喜を修習しなければならない。この様にして初めて、心をして奮い立たせることができる。しかしながら、精進が過度である時、心は躁動と不安が大きくなる。この時は、反対に、彼は択法、精進、喜を修習してはならず、軽安と定と捨を修習しなければならない。この様にして初めて、躁動して止まない心に、抑制と平安を得ることができる。以上が、如何にして五根と七覚支をバランスするのか、という方法である。

如何にしてジャーナを証得するか

信、精進、念、定、慧という、この五根が充分に育成された時、定力は近行定を超えて、ジャーナ――安止定に到達することができる。ジャーナに到達する時、あなたの心は不断に似相を覚知する事ができるが、それは数時間または一昼夜、一日中持続する。あな

たの心が、似相への専注を、一時間または二時間持続する事が出来る様になった後、心臓の中の有分心の生起する場所、心色であるが、これを識別する様チャレンジするべきである。

有分心は、明るく輝いて清らかなものであって、義注ではそれこそが意門

(manodvāra) であると説明している。何度も反復してチャレンジした後、あなたはそこに出現する意門(有分)と似相を識別するであろう。その後、あなたは五禅支を、一回につき一つの禅支を、逐一、識別しなければならない。修行を続けていく時、あなたは、五禅支すべてを同時に識別できる様になる。入出息念の五禅支とは:

- 1) 尋(vitakka):心を入出息似相に向かわせると同時に、心をして、似相に置かせしめる;
- 2)伺(vicāra):心をして、入出息似相において維持せしめる;
- 3)喜 (pīti):入出息似相を喜ぶ;
- 4)楽 (sukha):入出息似相の楽しさを体験する;
- 5)一境性 (ekaggatā):心が唯一、入出息似相に専注する。



表 1a:禅定心路(jhānasamāpaṭṭivīthi)<注 96>

心識刹那 Cittakkhaṇa	(心路の前)	3⇒	4⇒	5⇒	6⇒	7⇒	$\Rightarrow\Rightarrow\Rightarrow\Rightarrow\Rightarrow\Rightarrow\Rightarrow\Rightarrow\Rightarrow\Rightarrow$	(心路の後) ⇒⇒⇒⇒⇒⇒
所緣 Ārammaņa	前世臨終の所緣	ジャーナ 所縁 Jhānārammaṇa						前世臨終の所緣
	有分	意門転向	第一速行	第二速行	第三速行	第四速行	千万の速行	有分
	Bhavaṅga	Manodvār-	Javana	Javana	Javana	Javana	Javana	Bhavaṅga
心		āvajjana						
Citta	$\uparrow \downarrow$	$\uparrow \downarrow$	$\uparrow \mid \downarrow$	$\uparrow \downarrow$	$\uparrow \downarrow$	1 ↑ ↓	1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	1
		唯作	預作	近行	隨順	種姓	安止	
		Kiriya	Parikamma	Upacāra	Anuloma	Gotrabhu	Appanā	
界	欲-/色-/無色-			欲-			色-/無色-	欲-/色-/無色-
Āvacara	Kāma·/Rūpa·/Arūpa·	Kāma· Rūpa·/Arūpa·					Rūpa/Arūpa	Kāma·/Rūpa·/Arūpa

「表 1a: 禅定心路」に関する説明

- ●禅定(jhāna)心路の順序:
- 1) 意門転向心: 禅修行業処の似相を所縁に取る。
- 2-4) 予作、近行、随順という、この三つの予作速行は、同一の所縁を縁に取るが、それらの尋・伺・喜・楽・一境性は、普通の欲界心より更に強い。それらの作用は、それぞれ、安止に入る為の準備であり、ジャーナ、随順の前の心、及びその後の種姓心に近い。(利根者には、予作心は生起しない)。
- 5) 種姓心: 微細な種姓 (patittagotta) の欲界心から広大種姓 (mahaggatagotta) に変化する時に指標となる色界または無色界ジャーナ心。
- 6) 無数の安止速行心(名法 sankhāra) は、同一の所縁を縁に取る;
- 一つ一つの速行心は、その後の速行心<注 97>を強化する。安止速行の数は、禅修行者の 入定の時間と禅修行の良しあしによる。それは一秒にも満たない場合もあれば、一時間、 幾日も持続する事もある。すでに五自在に到達した禅修行者は、入定の前に、入定の時間 の長短を決めることができる。しかし、初めてジャーナを証得した初心者は、ただ一個の 禅ジャーナ心しか生じない。出世間果定の順序も同様である。<注 98>
- ●欲界五門心路と意門心路の中の速行心は、皆同じであるが、しかし、禅定心路(色界と無色界のもの)の速行心は異なる。禅定心路の中の第五速行は、実際には、ジャーナ心であり、一個だけではなく、億万個であり、かつ、それらは皆同じである。もし、長時間入定するならば、第五速行の数は、数えきれない程になる。
- ●禅修行者は、己自身の希望(yathābhinīhāravasena)に応じて、ジャーナに進入することができる:禅修行者は、どの種類のジャーナに入るのかを決めることができる。
- ●もし、臨終心路までジャーナを維持できて、退失する事がないならば、ジャーナ善業は 重善業となる。

諸々の禅支は、全体を合わせてジャーナと呼ぶ。ジャーナの修習を始めたばかりの頃、 長時間ジャーナに入れる様練習するべきで、禅支の識別にあまり時間を割いてはならい。 あなたは、ジャーナ自在(vasībhāva)の練習もしなければならない。五つの自在があるが、それは:

- 1) 入定自在:いつ入定したいか、願望に応じて入定できる
- 2) 決意自在:決意した時間内において、ジャーナに安住することができる。
- 3) 出定自在:決意した時間に出定する事
- 4) 転向自在:禅支において、転向する事
- 5) 省察自在:禅支の省察<注99>

《増支部・母山牛経》(Pabbateyyagāvī Sutta) <注 100 > において、仏陀は、いまだ 初禅に熟練しない前に、第二禅に進んで修行してはならない、と言う。彼は以下の様に解 説して言う。もし、禅修行者が、いまだ初禅に習熟しない内に、更に高度なジャーナに入 ろうとチャレンジするならば、彼の初禅は退失し、その他のジャーナも成就することができない。そして、彼はすべてのジャーナを失ってしまう。

あなたは初禅に習熟した後であれば、第二禅に進む様チャレンジすることができる。あなたは、すでに熟練したであろう初禅に入り、出定した後、それの欠点と第二禅の長所を思惟する;初禅は、五蓋に近く、その尋・伺の禅支もまた粗くて劣っているため、無尋、無伺の第二禅の静寂に及ばない。その為、もはや、この二つの禅支を求めることなく、ただ、喜、楽、一境性を求めて、再度、似相に専注して、かつ、初禅に入る。初禅から出定した後、正念と完全な覚知でもって、禅支を省察するが、その時、あなたは、尋・伺という二つの禅支は粗くて劣っている事、喜、楽、一境性が静寂である事を、発見するであろう。粗い禅支を取り除いて、平静な禅支を残す為、あなたは再度、似相に専注しなければならない。この様にすれば、あなたは、喜・楽・一境性という三種類の禅支のみを擁する第二禅に到達することができるであろう。次に、第二禅の五自在を修習しなければならない。

あなたが(第二禅の成就に)成功した後で、かつ、第三禅の修習を希望する時、熟練した第二禅から出定して、その欠点及び第三禅の長所を思惟しなければならない:第二禅は、尋・伺というふたつの劣った禅支を擁する初禅に近く、かつ、第二禅もまた劣悪な喜く注 101>禅支そのものであり、このことによって、それは無喜の第三禅の寂静に及ばな

い事が分かる。その為、もはや、粗くて劣った禅支を求めず、ただ平静な禅支を求めるという事になる。あなたは、再度、似相に専注して、第二禅に入る。第二禅から出定した後、禅支に対して省察を行い、その時、あなたは喜禅支は非常に粗くて劣悪で、楽と一境性が非常に平静である事を発見するであろう。劣悪な禅支を取り除く為、かつ、平静な禅支を保持する為、あなたは、再度似相に専注する。この様にして、あなたはただ楽と一境性をのみ擁する第三禅に到達することができる。次に、第三禅の五自在を修習しなければならない。

あなたが(第三禅の成就に)成功した後で、かつ、第四禅の修習を希望する時、熟練した第三禅から出定して、その欠点及び第四禅の長所を思惟しなければならない:第三禅は、喜禅支という劣った禅支を擁する第二禅に近く、かつ、第三禅もまた劣悪な楽禅支を擁しており、このことによって、それは無楽の第四禅の寂静に及ばない事が分かる。第四禅を成就する為、あなたは、再度、似相に専注して、第三禅に入る。第三禅から出定した後、禅支に対して省察を行い、その時、あなたは楽禅支は非常に粗くて劣悪で、捨と一境性が非常に平静である事を発見するであろう。劣悪な禅支を取り除く為、かつ、平静な禅支を保持する為、あなたは、再度似相に専注する。この様にして、あなたはただ捨と一境性をのみ擁する第四禅に到達することができる。次に、第四禅の五自在を修習しなければならない。第四禅に入定する時、呼吸は完全に停止する。ここにおいて、あなたは入出息念の第四段階の修習を完成させたのである:

[4]彼は学ぶ:『私は身行を平静にして入息をする。』

彼は学ぶ:『私は身行を平静にして出息をする。』

この段階において、すなわち、禅相が生起する前、かつ定力が四種類のジャーナを修習するにつれて強化される時、呼吸は徐々に、増々平静になり、第四禅において、完全に停止する。この四種類のジャーナはまた、色界ジャーナ(rūpavacara-jhāna)と呼ぶが、それは、色界天の結生を齎すからである。しかし、我々は、あなたに、色界天に生まれる為にジャーナの修習をするのを奨励している訳ではなく、それら(の力)を借りて、観禅の修習をするべきであると考える。禅修行者は、入出息念を通して、第四禅に到達し、かつ五自在の練習をしたならば、その禅定の光は、輝き、明るく燦爛としているものである。もし、希望するならば(この時)彼は、観禅の修習に転換することができる。また、禅修行者は、引き続き、止禅の修習を続けることもできる。それは、我々が次に説明する内容

である: すなわち、如何にして 32 身分、白骨想<注 102>、十遍などによって止禅を修習するか、である。

脚注

<注83>=パーリ語術語に関しては<付録二パーリ語術語解説>を参照の事。

<注 84>=Visuddhimagga《清浄之道》は、注 63 参照の事。(Visuddhimagga の直訳は「清浄之道」である。水野弘元の日本語訳は「清浄之道」であり、葉均の中国語訳もまたこの訳語を援用している。しかしながら、南伝上座部仏教の《論蔵》は、七部のみであり、この著作の性質は義注に属するものであるが故に、論に属するものではない。>

<注85>=放逸の原因になる諸々の酒類から離れる事。注420を参照の事。

<注 86>= 《清浄之道・説見清浄品》(Diţţhivisuddhiniddesa)(Vm.662)。ここでは、「心清浄」を「近行定を含む八定」と説明している。この解釈は、正定と一致する。

<注 87>=自性相(sabhāva-lakkhaṇa): 究極色法または究極名法が具備する特徴の一種。各自特相(paccatta-lakkhaṇa)とも言う; 共相(sāmañña-lakkhaṇa): すべての行法(色法または名法)が共に擁する三種類の特徴: 無常、苦、無我。

<注 88>=《清浄之道・入出息念論》(Ānāpānasatikathā)(Vm.223)

<注 89>=ここでいう paccavekkhaṇa と vīmaṃsa は同義語である。復注では vīmaṃsa を使用している。

<注 90>=滅定(nirodha-samāpati)は、心、心所と心生色法が暫定的に停止した境地。この種の定に関しては、問答 5-1 を参照の事。

<注91>=この句は、第五版による。

<注92>=ジャーナ名法に関しては、ジャーナ心路の識別の章の図表参照の事。

<注 93>=このジャーナの解説は、非想非非想処定の修習の章を参照の事。

<注94>=この段落は、英語版を参照にした。

<注 95>=パオ・セヤドーは、以前は下記の様に指導した:もし、接触点において出現する禅相が、すでに安定して、禅相が息、息が禅相であると言う状態になったならば、心を息から禅相に向けて移動して、ただ禅相を覚知すればよい、と。2015年から、セヤドーは、禅修行者が、定力の基礎を更に強固に打ち立てる為に、入出息念の教えを更に細分化した。この部分は、セヤドーの指示に従って追加したものである。

<注 96>=禅定心路は、欲界、色界または無色界のいずれか三つの地の意門心路において発生する。この表に列記する内容は、《清浄之道・初禅論》(paṭhamajjhānakathā) (Vm. 69) に基づいている。

<注 97>=安止の心の一つ一つの名法は、「如何にしてジャーナ心路を識別するか」を参 照の事。

<注 98>=「涅槃を知見する」を参照の事。

<注 99>=転向と省察は同じ意門心路(manodvāravīthi)に出現する。転向は、意門転向心(manodvārāvajjana)によって執行される。ここでは、五禅支の一を所縁とする。その後に、4, 5、6 または七つの省察速行心が続くが、それらの所縁はみな、同じである。詳細は「表 1 b:意門心路」を参照の事。

<注 100> = 《母山牛経》または《山牛比喩経》($G\bar{a}v\bar{i}$ - upamā Sutta)(A.9.~35)とも言う。

<注 101>=パオ・セヤドーは以下の様に言う:喜(pīti)禅支は禅悦(jhānasukkha)に対して執着を生じる助因の一となるが、しかし、所縁が非常に微細な為、それが欲楽(rāga)に転化する事は無い。それは微細(pīha)なだけである。

<注 102>=白骨想:パーリ語 aţţhisaññā で、または骨想とも言う。北伝仏教では「白骨観」と訳する。上座部仏教の伝承の中においては、これに類似する仮想観に当たる「観想法門」というものはない。ここで言う想(saññā)は、定力の力を借りて、真実の骨の相、または記憶中の真実の印象を(瞑想の対象)とするものである。同時に、白骨想は、定力を育成するための止業処であり、「観」ではない。



問答(一)

問1:

入出息念を修行する時、四つの段階があります。我々は、一つの段階から次の段階に行く のを、どの様に決定すればよいですか?

答1:

仏陀は、入出息念の順序は――長息、短息、全息、微息がある、と教えたが、これは修行者の理解を助ける為の、一種の方便である。実際の禅修行では、四っつの段階すべて同時に発生する。もし、あなたが長息と短息の過程全体を、約一時間専注する事ができるなら

ば、定力の上昇に伴って、呼吸は自動的に微細になる為、あなたは微細な息に専注する様に、(瞑想の対象を)変更する事ができる。微細な息が長くなった時、あなたは長い微細な息全体を覚知する様にチャレンジする;微細な息が短い時、あなたは短い微細な息全体を覚知する様にチャレンジする。もし、息自体が微細になっていない時、あなたは作意を通してそれを微細にして、それに<注 103>専注(作意)する。この様にすれば、それは微細に変化する。しかし、あなたは、故意に息を微細にせしめてはならず、また故意に息を長くしたり、短くしたりしてはならず、ただ、息が平静になる様に決意するだけでよい。

この様に、長い息、短い息、全息、微細な息の四つの段階は、すべて一つの段階の中に包括されているのである。第四番目の段階が始まる時、呼吸は非常に微細に変化するものの、完全には止まってはいない。呼吸は、唯一、第四禅に入った時にのみ、完全に停止するが、これは最も微細な段階であると言える。

問2:

禅修行の時、必ず禅相 (nimitta) は必要でしょうか?

答 2:

ある種の業処(kammaṭṭhāna)、例えば入出息念、十遍、十不浄(Asubha)には、禅相 は必要である。もし、その他の業処を修したい場合、例えば仏随念(Bhddhānussati)に は、禅相は必要ない。慈(Mettābhāvanā)の修習に関しては、限界突破を禅相と呼ぶ事 がある。

問3:

ある種の人々は、入出息念を修行する時、彼らの霊魂が体外に出て行くと言います。この 様な状況は本当にあるのでしょうか?それとも、彼らは間違った修行をしているのでしょ うか?

答3:

専注する心は、禅相を生じせしめる。定力が重厚で、かつ、強くて力がある時、異なる想が原因で、異なる禅相が生じる。例えば:もし、あなたが禅相を長くしたい時、それは長く

なる;それを短くしたい時、それは短くなる;それを丸くしたい時、それは丸くなる;それを赤くしたい時、それは赤くなる。この様に、入出息念の修習をする時、各種の、異なった想が生じる可能性がある。あなたは、己自身が、己自身の身体から抜け出た様な感覚を覚えるかも知れないが、それはただの心的錯覚に過ぎず、霊魂とは関係がない。この事は大きな問題ではない、それに構わず、(心が)戻ってきて、引き続き息に専注すれば、それでよい。ただ内外の究極名色法(paramattha-nāma-rūpa)を識別できる様になった時にのみ、あなたは、霊魂の問題を解決することができる、所謂「霊魂」はどこを探しても見つからないものだ。故に、あなたは名色法の密集(ghana)を看破し、究極名色法を透視しなければならないのである。

"Nānādhātuyo vinibbhujitvā dhanavinibbhoge kate anattalakkhṇaṃ yāthāvasarasato upaṭṭhāti."

「異なる界を分別し、かつ密集を看破する時にのみ、無我相(anatta-lakkhaṇa)が、自性に基づいて現起(現象)してくる。」(Vm. 739)。

密集の概念があるが故に、霊魂の概念が生じる。色法に関しては、三種類の密集 (ghana) <注 106>がある。

1) 相続密集(santati ghana):物質的現象は、一個の、不断に相続する、密集した全体物として見えるが故に、人々は、己自身の身体、四肢は、実際に存在しているのだと思ってしまい、かつ、同一の自我が異なった形式でもって(この)一生から、もう一つ別の一生に「遷移」するのだと思ってしまう。この種の錯覚を打破するためには、我々は、この身体における密集を看破しなければならず、身体は、刹那に生・滅する色聚

(rūpakalāpa) によって構成されている事を見なければならない。この様に(修行するならば)、我々は色聚が皆、恒常でない事、それらは生じるや否や、即刻滅し去るのを見ることができる。色聚は、全くもって、どこかへ行く時間を持たないが故に、この一生から次の一生へと行く事はできないし、ましてや、この一秒から次の一秒へも行けないのである。

2) 構成密集(samūha ghana):物質現象は、一見した所、構成された全体という風に見えるが故に、人々は、色聚(kalāpa)を究極色法であると思いなし、またこれこそが、彼の「自我」である、と思ってしまう。この種の錯覚を打ち破るために、我々は、異なった類型の色聚の見かけ上の密集を看破し、異なった類型の色聚を分析しなければならない。

この様にすれば、我々は、色聚を構成する諸々の界すなわち:地界、水界、火界、風界、 色彩、匂い、味と栄養素、命根などが、本来、構成された全体ではありえない、という事 を看破する事が出来る様になるのである。

3)作用密集(kicca ghana):究極色法に対する理解が不足している為、人々は、諸々の界は、一個の「自我」によって存在しているのだと考える、ちょうど、種と植物は、大地に依存して存在しているという風に。この種の錯覚を打ち破るために、我々は、一つ一つの界は、それ自身に特相(特徴 lakkhaṇa)、作用(rasa)、現起(現象)

(paccupaṭṭhāna) と近因 (padaṭṭhāna) を擁しており、それが例えば、「自我」などの様な、外部にある何かに依存しているのではない、という事を見て取らねばならない。

如何にして、物質現象の密集を看破するのか?まず先に、あなたは色聚(微細な粒子)を 識別しなければならない。そして、次には、異なる色聚を分析して、かつそれらの異なる 色法の構成を見る。一粒毎の色聚の中には、少なくとも8種類の色法があるが、それを確 認した後、一つ一つの種類の色法を分析する。この様に実践しないのであれば、霊魂の問 題は解決する事が出来ない。同様に、心理的現象の密集を打ち破らないのであれば、霊魂 の概念もまた、消失する事がない。例えば、あなたの心が色々な妄想をする時、その妄想 する心は、あなたの霊魂である、と思うかもしれない。一個の心路の中には、四種類の密 集があるが、それは観智でもって、看破しなければならない:<注 107>。

1) 相続密集(santati ghana):心理現象は、一個の相続して不断の密集した構成の全体である様に見える為に、人々は、同一の「心」が目、鼻、舌、身体と意を通して対象を識知しているのだと思い、かつ、同一の「自我」、同一の「心識」、同一の「純意識」等が、一つの生から次の一生に「遷移」して、別の身体に入るのだと思っている場合が多い。そして、この人生において、人々は、己自身の心識が、身体の外に飛び出す事があると思う。この種の錯覚を取り除く為に、我々は、この心識の見かけ上の密集を看破しなければならず、認知の過程は、生・滅する心路によって完成されているのだという事を見なければならない。この様にして、我々は、心はみな、恒常でなく、それらは生起するや否や、即刻、滅し去っている事を見る。心識は、根本的に、どこへ行く時間も持たず、この一生から、次の一生へと行くこともできないし、この一秒から次の一秒へさえも行くことができないのである。

- 2) 構成密集(samūha ghana): 心理現象が、一個の、構成された全体のものに見える為、人々は、「純意識」が対象を識知しているのだと思い、かつ、それを彼の「自我」であると思ってしまうのである。この種の錯覚を打ち破るために、我々は、異なる種類の、心識上に見える密集を、看破しなければならないし、異なる類型の心路の中の個別の心識を、分析しなければならない。この様にすれば、我々は、心識を構成する所の、心と、若干の数量の心所、例えば、受、想、思、尋、何または瞋、痴、邪見、慢、疑、または無貪、無瞋、無痴、喜、念、信と正見が、元より構成された全体ではない事が分かる。
- 3)作用密集(kicca ghana): 究極名法に対する理解が不足している為、人々は、心と心所は、一個の「自我」に依存して存在しているのだと考えてしまう、それはちょうど、種と植物が大地に依存しているかの様に。この種の錯覚を打ち破るために、我々は、一つ一つの心と心所は、みな、己自身の特相(特徴)、作用、現起(現象)及び近因を擁していて、「自我」等の、外部に存在する如何なるものにも、依存していない事を見なければならない。
- 4) 所縁密集(ārammaṇa ghana):上述の三種類の密集を透視した後、人々はなお、「『私』が究極名色法を見た」とか、「『認知の出来る私』が究極名色法を見た」<注 108>と言うかもしれない。この種の錯覚を打ち破る為に、三種類の密集を透視する事のできる観智の心路に関しても、我々は、後生の観智によって、その三種類の密集を看破しなければならない。我々は、能観の作用を持つ観智名法を見る必要があり、また、名法(当該の名法は、同様に所縁を擁する)の三種類の密集を透視する能力を擁する必要があるが、この種の能観の観智名法は、同時にまた後生の観智の所縁となる。

では、如何にして、心理的現象の密集を看破するのか?入出息似相を所縁とする近行定意 門心路を例とする。この種の心路は、一個の意門転向心と七個の速行心(javana)が含ま れる。意門転向心識刹那の内には、12個の名法があり、一つ一つの速行心識刹那の中に は、34個の名法がある。もし、この種の方式によって、名法の四種類の密集を看破する事 ができるならば、あなたは、極めて快速に生・滅する、心及びその相応心所のみを見る事 になるであろう。無常想によって、人々は二度と、心識をば霊魂であると誤認する事はな くなる、というのも、通常、無常想は、無我想へと導くことができるが故に。

まさに仏陀が《美奇亜経》 (Meghiya Sutta) において言う様に:

" Aniccasaññino, Meghiya, anattasaññā saṇṭhā ti."

「メギヤよ、無常想を有する者は、無我想を建立する。」(A.9.3; U.31)。

間 4:

(入出息) 禅相はどこから来ますか?何に依って生起しますか?

答 4:

心処に依存して生起した大部分の心識は、みな、呼吸を生じせしめる。真正の入出息禅相は、呼吸による。しかし、どの種類の心もが、禅相を生じせしめる、という事ではなく、唯一、深く専注することのできる心だけが、禅相を生じせしめることができる。と言う事は、深く専注することのできる心によって生じた呼吸が禅相を出現させるのである。若し、当該の相が、鼻から遠く離れている時、それはいまだ真正な禅相ではない。当該の相は、定力によって生じたものであると考えられるが、しかし、真正の入出息禅相であるとは、限らない。唯一、ジャーナの相を生じせしめる事のできる相のみを、我々は、入出息禅相と呼ぶ。もし、それがジャーナを引き起こさないのであれば、それは真正の禅相ではない。例えば、あなたがこの種の相に専注するものの、ジャーナが生起しないのであれば、通常、定力もまた強くて力のあるものに変化することはない。もし、あなたがこの種の相に対して禅の修習をするならば、それは非常に速くに消失する。

問 5:

七清浄と16観智とは何ですか?

答 5:

七清浄とは:

- 1) 戒清浄 (Sīla-visuddhi)
- 2) 心清浄 (Citta-visuddhi)
- 3) 見清浄 (diṭṭhi-visuddhi)
- 4) 度疑清浄 (Kankhāvitaraṇa-visuddhi)
- 5) 道非道智見清浄(Maggāmaggañāṇa-visuddhi)

- 6) 行道智見清浄(Paṭtipadāñāṇadassana-visuddhi)
- 7) 智見清浄(Ñāṇadassana-visuddhi)。

16 観智とは:

- 1) 名色限定智(Nāmarūpapapariccheda-ñāṇa)
- 2) 縁摂受智 (Paccayapariggaha-ñāṇa)
- 3) 思惟智 (Sammasana-ñāṇa)
- 4) 生滅智 (Udayabyaya-ñāṇa)
- 5) 壊滅智 (Bhaṅga-ñāṇa)
- 6) 畏怖智 (Bhaya-ñāṇa)
- 7) 過患智 (Adīnava-ñāna)
- 8) 厭離智 (Nibbidā-ñāṇa)
- 9) 欲解脱智(Muñcitukamyatā-ñāṇa)
- 10) 省察智 (Paṭisaṅkhā-ñāṇa)
- 11) 行捨智(saṅkhārupekkhā-ñāṇa)
- 12) 随順智(Anuloma-ñāṇa)
- 13)種姓智(Gotrabhu-ñāṇa)
- 14)道智(Magga-ñāṇa)
- 15)果智(Phala-ñāna)
- 16)省察智(Paccavekhaṇa-ñāṇa)

今、あなたは、これら観智の名称を知ることができた。あなたは、それらを体験する事ができますか?出来ないであろう。故に、理論を聞くだけ、または考えるだけでは足りないのである。あなたはそれらを、自ら領悟する為に、実地の修行において、非常に精進しなければならない。

(今回の問答の最後に、パオ・セヤドーは五蓋(五種類の障礙)に関して、以下の様な補充を行った。)

今、我々は、簡単に、五蓋(nīvarana)について検討してみたいと思う。

1) 欲貪 (Kāmacchanda)

- 2) 瞋恚 (byāpāda)
- 3) 昏沈睡眠 (thīna-middha)
- 4) 掉挙後悔 (uddacca-kukkucca)
- 5) 疑 (vicikicchā)

一番目の欲貪(kāmacchanda)、これは、財物または人への貪愛を言う、すなわち、感官の対象になるものへの欲望である。例えば、あなたは己自身の住まいである所のクティ(kuṭi) <注 109>または小部屋に執着するかもしれない。座禅・瞑想する時、あなたは以下の様に考えるかもしれない:

「ああ、もし、私のクティが、もっと素敵だったらいいのに!」または 「この部屋全体が私一人のものだったらいいのに!」

もし、貪欲(の感情)に支配されてしまうならば、あなたは、禅修行の所縁に落ち着いて 専注する事ができない。あなたは、強くて力のある正念を発揮すると同時に、精進もしな ければならないのである、それによって、欲貪の生起を阻止するのである。

二番目の蓋は、瞋恚(byāpāda)であり、それは、人または物への憎悪、怨恨または不満である。例えば、あなたの傍にいる修行者が、座席に座る時、袈裟がガサガサと音を立てたならば、あなたは怒りに満ちて以下の様に考える:

「フン、彼はなぜ、こんなに大きな音を立てるのだ!」

その結果、あなたの心は怨恨、憎悪または不満に征服されて、あなたは禅修行の所縁に落 ち着いて専注する事ができなくなる。

三番目の蓋は、昏沈睡眠(thīna-middha)である。もし、心の力が微弱または、禅修行の 所縁に対して興味を覚えない時、昏沈、睡眠が発生する。しかしながら、昏沈は、疲労、 疾病、休息の不足が原因である場合もある。

第四番目の蓋は、掉挙後悔(uddhacca-kukkucca)である。もしあなたの心が躁動して不安な時(掉挙)、それは、灰の山に一個の石を放り入れた時、灰があちらこちらに飛び散る様に、あなたの心も散乱する。禅修行の時、あなたは、あなたの心が、禅修行の所縁から離れない様、心がばらけない様に、気を付けなければならない。もし、あなたの心がばらけるならば、掉挙は発生する。後悔は、過去にあなたがなした悪い事、または良い事をしなかった事に対して、後悔の念を覚える事をいう。この様な時、あなたは、上に述べた

のと同じ様に、強くて力のある正念を発揮して、かつ、掉挙と後悔が生起するのを阻止しなければならない。

五番目の蓋は疑 (vicikicchā) である、すなわち、以下の八項目を疑うこと:

- 1) 仏。2) 法。3) 僧。
- 4) 戒・定・慧の三学。
- 5) 過去の五蘊(khandhā)、過去生。
- 6) 未来の五蘊、来世。
- 7) 過去と未来の五蘊、すなわち、過去生と来世の両者。
- 8) 縁起(paţiccasamuppāda)、現在の五蘊を含む。

例えば、定学に対して疑惑がある時、あなたは、禅修行に励むことができない。例えば、 あなたは「入出息念の修行をして、本当にジャーナを得る事が出来るのか?入出息禅相に 専注したなら、ジャーナを証得することができるのか?」と考え込んでしまうであろう。 五蓋は、禅定に敵対する法である。

脚注

<注 103>=如何にして息を平静にするかの詳細な研究は、P72 を参照の事。

<注 104>=慈心の修習:パーリ語では、mettābhāvanā。北伝仏教では「慈心観」と訳されているが、しかし、上座部仏教では、慈しみを修習するのは、定力を育成する止業処であり、故に「観」と称する事はできないと考える。

<注105>=名称があるのみで、実際には、それは禅相ではない。

<注 106>=《清浄之道・四界差別の修習》(Catudhātuvavatthānabhāvanā)

(Vm.306)の中において、以下の様に解説して言う:《長部・大念処經》(D.2.378)と《中部・念処經》(M.1.111)において、仏陀は、牛をと殺する人が、牛の肉を一欠片(ひとかけら)づつ分けていくのを例えとしている。復注は、更に一歩進んで、如何にして、当該のたとえ話を応用して、三種類の密集を打破するのかを解説している。

<注 107>=《大復注・汚垢を離れる生滅智論の解釈》 (Upakkilesavimuttaudayabbayañāṇakathāvaṇṇanā) 。

<注 108>その他の類似した錯覚もある。例えば「能知者は知っている」、「造作者(創造神)は知っている」、「覚知者は知っている」などなど。人々は:「究極名色法は変化するが、しかし、『認知する事が可能な心』は変化しない」と誤解する事がある。

<注 109>kuţi: クティ。上座部仏教の僧侶、尼僧の住居、部屋または小屋。



第二講 如何にしてその他の業処によって安止定を 育成するか

前回の法話の中において、我々は、如何にして入出息念を修習して、第四禅を証得するところまで到達するのかということと、如何にして五自在を練習するのかを討論し、また、禅定の光が輝き、明るくかつ燦爛とする時、もし、禅修行者が希望するならば、観禅に転換する事も可能であると、話した。

但し、禅修行者は、この段階において、引き続き止禅を修習する事もできる。本日、我々は、如何にしてその他の業処:32身分、白骨想、十遍(kasiṇa)などを修習するのかを検討する。

如何にして32身分を修習するか

もし、32 身分を修習したいと思うならば、あなたは先に再度復習として、入出息第四禅に入り、禅定の光を輝かせ、明るくかつ燦爛とさせなければならない。その後で、この種の禅定の光を利用して、身体の32 個の部分を逐一、識別するのである。32 身分は、地界の最も鮮明は20 個の部分及び、水界の最も鮮明な12 個の部分が含まれる。地界の20 個の部分は、四つのグループに分けることができ、一つのグループは五個となる:

第一グループ:

1) 頭髮。2) 体毛。3) 爪。4) 歯。5) 皮膚。

第二グループ:

6) 筋肉。7) 筋腱。8) 骨。9) 骨髄。10) 腎。

第三グループ:

11) 心臟。12) 肝。13) 膜。14) 脾。15) 肺。

第四グループ:

16) 腸。17) 腸間膜。18) 胃中物。19) 糞便。20) 脳。

水界の 12 個の部分は二つのグループに分けることができる。すなわち、一グループは 6 個でる。

第一グループ:

1) 胆汁。2) 痰。3) 膿。4) 血。5) 汗。6) 脂肪。

第二グループ:

7) 涙。8) 油膏。9) 唾液。11) 鼻水。11) 関節潤滑液。12) 尿。

上述の順序で識別するが、一回に一個を識別する事。明るい鏡の中の己自身の顔を照見しているが如くに、一つ一つの部分を明晰にはっきりと識別する事。この様に修行する時、もし、禅定の光が暗くて淡いならば、識別している身体もまた不鮮明になる。この時、あなたは、再度入出息第四禅に入り、禅定の光を再度明るく輝くものにして、その後に、再度、身体の部分毎の識別に戻らなければならない。毎回、禅定の光が暗くて淡くなった時には、必ずこの様にしなければならない。頭髪から尿に到るまで、または尿から頭

髪までの純順序で練習して、透視する智慧でもって、一つ一つの部分をはっきりと鮮明に 見ることができる様になる事。これを熟練するまで修行する。

次に、目をつぶったまま、あなたは、禅定の光を運用して、あなたから最も近くにいる 衆生の識別にチャレンジする。最もよいのは、あなたの目の前にいる人である。その人、 または衆生の 32 身分を、頭髪から尿まで、または尿から頭髪までを、識別する。この順 序、正順または逆順で 32 身分を多数回識別する。成功したならば、己自身に内在する 32 身分を一度識別し、その後に外在するその他の人の 32 身分を一度識別する。この様に、 内外を交代で識別する。それを不断なく何度も重複して行う事。

あなたがこの様に、内外(の身分を対象にして)識別する時、禅定の力は強化される。その後に、漸次、識別の範囲を、近くから遠くへと、拡大する。あなたは、遠方の衆生を識別できないのではないか、と心配する必要はない。明るく輝く第四禅の光を運用して、あなたは、簡単に遠方の衆生を見ることができる。それは肉眼で見るのではなく、慧眼(ñāṇacakkhu)を用いるのである。あなたは、識別できる範囲を十の方角に広げることができる:上、下、東、西、南、北、東北、東南、西北、西南。この十の方角において、あなたが識別しているのが、人間であっても、動物またはその他の衆生であっても、毎回、一人の人間または、一個の衆生を対象として選び、一度は内在のもの、次は外在のもの、という風に、交代で32身分を識別しなければならない。あなたに、男性、女性、天人、水牛、乳牛またはその他の動物等などが見えなくなって、いつ何時、どこにおいても、内在であっても、または外在であっても、見えるものすべてが32身分の構成のみになる。この時、あなたは、32身分の識別を成就し、識別に熟練し、精通したのだ、と言える。

涅槃の三門

今ここにおいて、我々は、涅槃の三門について話したいと思う。《大念処經》の中において、仏陀は、四念処は涅槃への唯一の道(一行道)であると指導した(D.2.373;M.1.106)。

義注では、更に一歩進んで、三つの門が涅槃の道へと続いているが、それらは止業処の色逼(vaṇṇakasiṇa)、厭悪作意(paṭikkūla-manasikāra)と我空(suññatā)——四界差別である、と言う。<注 110>

こうした事から、禅修行者は、内在の、また、外在の32身分の識別に熟練したならば、彼は、この三つの門の内の一つを選んで修習する事が出来る。我々は、先に厭悪作意について説明する。

如何にして白骨想を修習するか

厭悪作意(paţikkhūla-manasikāra)を修習するために、あなたは、32 身分のすべてを 所縁として取る事も出来るし、また、身分のある一部分だけを所縁として取る事もでき る。我々は、32 身分の一つである所の、白骨を例にして、如何にして、厭悪作意を修行す るのかを説明する。あなたは、先に再度、入出息第四禅に入り、禅定の光を明るく輝か せ、燦爛とさせる。次に、この光を借りて、己自身の身体の32 の部分を識別し、その後 に、近くにいる衆生を識別する。

この様に、内外において、交代に一、二回ほど識別を行った後、(自己の)内在にある 骨格を一個の全体と見做して、智慧で以てそれを識別する。骨格全体がはっきりと見えた ならば、骨格の厭嫌不浄を所縁として――これは概念法であるが、一回一回、「厭悪、厭悪」または「厭悪な骨、厭悪な骨」または「骨」「骨」と、黙念する。あなた自身が好む 所の、どの様な言葉でもよいので、それでもって黙念する。骨格の厭悪の相というこの所縁に対して、一時間または二時間、心を平静にして専注する事が出来る様、チャレンジしなければならない。骨格の色彩、形状、位置と境界を見る様に注意を払い、それによって 厭悪の相を顕現させる様にする。

入出息第四禅の定力の力と推進力によって、あなたは、この種の業処もまた、重厚で、かつ完全に安定している事を知り、それはまた、厭悪に対する覚知と智慧を生じせしめ、(生じた後、それを)維持し育成することができる事を発見するであろう。一たび、骨格に対する厭悪相への定力が建立されたならば、素早く「骨格」の概念を捨棄し、唯一、厭悪相にのみ専念する。《清浄之道》に基づけば、ある種一つの身分の色彩、形状、位置と境界を見るという事は、取相(uggaha-nimitta)が見えたという事である。そして、当該の部分における厭悪相が見えて、かつ識別する事ができて初めて似相(paţibhāga-nimitta)を見たのだ、と言えるのである。(Vm.214)

骨格の厭悪似相に専注する事を通して、初禅を証得することができる。初禅には以下の 様に五禅支がある:

- 1) 尋(vitakka): 心をして、骨格の厭悪似相に導き、かつ安置せしめる。
- 2) 伺 (vicāra) : 心をして骨格厭悪似相において、維持せしめる。
- 3) 喜 (pīti): 骨格の厭悪似相を喜ぶ。
- 4) 楽(sukha): 骨格の厭悪似相の楽しさを体験する。
- 5) 一境性 (ekaggata): 一心に、骨格の厭悪似相に専注する。

あなたは、同様の方法を用いて、身体のその他の部分の厭悪相を対象にして、初禅を証得することができる。一つ問題がある:骨格の厭悪相を所縁としていながら、なぜ、喜と楽が生じるのか?答えは:あなたが専注しているのは厭悪相であり、また、実際に、それが真実、非常に厭悪であることを体験しているのではあるが、しかし、それでも尚、喜が生じるのは、あなたがすでに、この種の業処を修習したことがあり、故にあなたは、その利益を理解しており、同時に、あなたはそれが、あなたをば、最終的に老・病・死から解脱するのを助けてくれることを、知っているからである。喜と楽が生じるということは、あなたがすでに心による熱い悩みと、心を疲労せしめる五蓋による煩悩を、取り除いているからである。ちょうど、ゴミ集めを業としている人が、ゴミの山を見つけた時、「私はこれでお金を稼ごう」と思って、嬉しくなるのと同じ様に・・・。また、重病を患う人が、嘔吐したり、下痢をしたりして、その事によって病状が緩和される時、彼は楽しさや愉快を感じる様に。

アビダンマの義注のよる解釈では、骨格厭悪相によって初禅を証得した人は、引き続き 初禅の五自在を練習しなければならない。その後、禅修行者己自身から最も近い衆生を選ぶが、最もよいのは、彼の面前に座っている人である。禅定の光によって、当該の人物の骨格を所縁とする。彼は、それをば厭悪である、として専注し、かつ、五禅支が鮮明になるまで、修習しなければならない。義注によると、五禅支が鮮明であっても、それはいまだ近行定(upacāra-samādhi)でも、安止定(appanā-samādhi)でもない、というのも、対象が生命であるが故に。(Vbh.A.356)

しかしながら、アビダンマの復注である《根本復注》(Mūlaṭīkā)によると、もし、外在の骨格を死者の骨格として専注するならば、あなたは、近行定に到達することができる。 (Vbh.T.356)

五禅支が明晰な時、あなたは再度、内在する骨格を厭悪として専注しなければならない。この様に、内在を一度、外在を一度という風に、交代して、何度も繰り返す。この方法を用いて、骨格の厭悪相の修習が、強固で安定していて、かつ完全に展開された後、あなたは識別の方向を十の方角へと広げていかねばならない。一度に一つの方角を取る。あなたの禅定の光がどこを照らそうとも、常に、同様の方法によって、一つ一つの方角に対して修習する。あなたは、透視の智慧を運用して、近い所、遠い所の、十の方向にある衆生に対して、内在を一度、外在を一度という風に、交代しながら、あなたが、十の方向のそのどれにおいても、見えるものすべてが骨格であるという風になるまで、識別を繰り返し、修習する。一たび、修習が成功したならば、あなたは白遍業処を修習することができる。

如何にして十遍を修習するか

色漏

四種類の色が逼(kasiṇa)の修習に使用することができる:青、黄色、赤、白である。 青(nīla)は、「黒色」、または「褐色」とも訳せる。この四種類の色逼は、身体の異なる部分の色彩を相として取って修習することができるが、この方法は第四禅を証得することができる。アビダンマの義注によると、頭髪、体毛、瞳孔は、青遍を修して第四禅に到ることができる;脂肪と尿は黄遍を修することができる;血液と筋肉は、赤遍を修することができる;骨格、歯と爪の白色の部分は、白遍を修することができる。(Vbh.A.356)

如何にして白遍を修習するか

経典の中において、四種類の色遍の中では、白遍が最もよい、と言う。というのも、それは、心をして、清らかに、かつ明るくすることが出来るが故に。<注 111>

故に、我々は、まず、如何にして白遍を修行するのかを話したいと思う。あなたは、先に再度、入出息第四禅に入り、禅定の光を輝かし、明瞭にし、燦然とさせ、次に、この光を運用して、己自身に内在する、及び己の外部に外在する所の、自分の近くにいる衆生の、32身分を識別し、その後に、骨格を識別する。もし、あなたがそれ(外在)の厭悪相を識別したいのであれば、それでもよいが、そうでないならば、ただ外在の骨格を識別する。

その後に、この骨格の中の、最も白い部位を選ぶ。もし、骨格全体がみな白色であるならば、その骨格全体を対象の取ってもよいし、または、頭蓋骨の後部を選んで、「白、白」として、専注する。もう一つの方法は、もし、あなたの定力が充分に鋭利であって、すでに、内在の骨格を厭悪として(修習しており)、かつ、それによって、初禅を証得しているのであれば、あなたは、己自身の願望に基づいて、己自身の骨格の白色を、修習の始まりの所縁とする事も出来る。

あなたは、先に、外在の骨格の厭悪相を識別して、当該の相が安定して強固である様にし、かつ、骨格の白色が更に鮮明である様にする。その後に、あなたは、厭悪の概念を「白、白」に転換して、白遍の修習とする。もし、外在の骨格の白色を所縁として取るとするなら、あなたは、心をして平静にせしめて保持し、一時間または二時間専注する。入出息第四禅の定力の力と推進力によって、あなたは、あなたの心が平静に、白色の所縁に専注するのを発見するであろう。あなたは、白い色に対して、一時間または二時間専注した後、骨格が消失して、白色の円相のみが残されている事を発見するであろう。

白色の円相が、ちょうどコットンボールの様に白くなる時、それは取相である。それが、明るく清らかで、明けの明星の様である時、それは似相である。取相が出現する前の骨格相は予作相(予備相、以下同様。parikamma-nimitta)である。遍の相が似相になるまで、それを「白、白」と黙念する。初禅に入証するまで、当該の似相に持続して専注し続ける。しかしながら、その時、あなたは、定力が不足している為に、定が安定せず、長い時間維持する事ができないことを発見する。定力を安定させて、定を持続せしめる為に、あなたは、遍相を拡大しなければならない。

この事を実践する為に、あなたは白色似相を一時間または二時間に専注し、その後に、 ーインチ、二インチ、三インチまたは四インチ(一インチ=2.54cm)という風に白色の円 相を拡大していくが、具体的な大きさは、あなた自身が拡大可能であると判断して、成功 するかどうか、その範囲とする。但し、若し事前に遍相を拡大する範囲を予定していな い、決定していないのであれば、その場合、遍相を拡大する事にチャレンジしてはならな い。拡大する範囲を決定する場合は、一インチ、二インチ、三インチまたは四インチと し、その後に更に拡大するのがよい。 白色の円相を拡大する時、あなたは、それが不安定になっているのを発見するかもしれないが、その時は、あなたは、それに対して「白、白」と黙念して、それを安定させなければならない。但し、定力の安定するに従って、遍相は安定し、かつ静止する様になる。最初に拡大した遍相が、安定した時、あなたは、上に述べた段階を踏む;次に、若干の寸法を拡大していく。この様に、逐次、遍相を一ヤード(=91cm)まで拡大し、次に二ヤード・・・最後には、あなたの周りすべて、十の方向、際限なく、あなたがどの方向を見ても、見えるものすべてが白色である様に実践する。内在であろうとも、外在であろうとも、一筋の物質の痕跡もないほどに(すべてが白色となる様に)実践する。

もし、あなたが、あなたの過去世において、現在仏または過去仏の教えの下において、白遍を修習した事があるならば、それはすなわち、あなたに、白遍の巴拉密(pāramī)があるという事であるが、その時、あなたは似相(paṭibhāga-nimitta)を拡大する必要はない。というのも、あなたがそれに専注する時、それは自動的に十方すべてに拡大するが故に。この状況の下、あなたは、心をして平静に保ち、拡大した白遍に専注しなければならない。それが安定する時、ちょうど帽子を壁にあるフックに掛けたかの如く、あなたの心は、白遍のどこか一か所に安置されるであろう。心をして、そこに留まる様にし、かつ、引き続き不断に:「白、白」と黙念する。

あなたの心が、平静で安定している時、白遍もまた、静止して安定し、かつ、非常に潔白に、明るく、清らかになる。これもまた、似相である。それは、元々あった白遍似相が拡大された後生じたものである。あなたは、引き続き、白遍似相を継続して、一時間または二時間専注できる様になるまで、修行しなければならない。この時、五禅支が、あなたの心の中において、非常に顕著になり、明晰になり、力のあるものになり、あなたは初禅に証入する事になる。

五禅支とは:

- 1、尋(vitakka):心をして白遍似相に導きかつ安置せしめる。
- 2、同(vicāra):心をして白遍似相において、維持せしめる。
- 3、喜(pīti):白遍似相を喜ぶ。
- 4、楽(sukha): 白遍似相の楽しさを体験する。
- 5、一境性(ekaggatā):一心に、白遍似相に専注する。

諸々の禅支を合わせてジャーナと言う。この時、入出息念の説明の中で話した方法に基づいて、白遍初禅の五自在<注112>を修習する。その後に、第二禅、第三禅と第四禅、及びその他の五自在を修習する。

如何にしてその他の色遍を修行するか

もし、あなたがすでに、外在する骨格の白い色を通して、白遍を修行して、第四禅を証得しているのならば、あなたは、外在する頭髪でもって、青遍を修習することができ、外在する脂肪または尿でもって、黄遍を修習することができ、外在する血液でもって赤遍の修習することができる。あなたは同様に、己自身の体内のこれらの部分を用いて、色遍を修習することができる。修習に成功した後、あなたは、花びらまたはその他の外在する対象の色彩を用いて色遍を修行することができる。すべての、青い色と茶色の花びらが、あなたに、青遍の修習をする様、呼びかけている;すべての黄色の花びらが、あなたに、黄遍の修習をする様、呼びかけている。すべての、赤い色の花びらが、あなたに、赤遍の修習をする様、呼びかけている;すべての白い色の花びらが、あなたに、白遍の修習をする様、呼びかけている。

故に、一人の巧みな禅修行者は、己自身が見る事のできるどの様なものでもってしても、それが、生命のあるもの、または生命のないもの、内在のもの、外在のものに関わらず、逼処定と観の修習をすることができる。パーリ聖典に基づくと、仏陀は十遍を教えたが、それらは、上に述べた四種類の色遍に、六種類の遍を加えたものである:地遍、水逼、火逼、風逼、虚空遍と光明遍である。<注 113> 今、我々は、如何にして、その他の六遍を修習するのかを説明する。

如何にして地遍を修習するか

地遍を修習する為に、あなたは黎明の天空の様な赤褐色で、木の枝、石ころ、または木の葉の落ちていない平地を探し、木の枝またはその他の道具でもって、直径約 30cm の円形を描く。これが、すなわち、あなたが禅修行する為の所縁――地遍である。それに専注し、かつ「地、地」と黙念する。目を開いて、一時それに専注した後、その後、目を閉じて、心の中で当該の地遍の映像を形成する。もし、この方法では相を取る事ができないのでれば、あなたは、再度入出息念または白遍の第四禅に入り、その後に、禅定の光を運用して当該の地遍を照らす。あなたが見る地相が、目を開いた時と同じ様に明晰である時、これは取相である。この時、あなた他の場所に行って修行することができる。地相の色

彩、または地界の硬さ、粗さなどの特徴に専注してはならず、ただ、地の概念にのみ専注 する事。

この取相に対して持続的に修習し、それが清らかで透明になる時、それは似相である。 その後に似相を、一度に少しずつ、十の方向に遍満するまで、拡大し、かつ、第四禅を証 得するまで、この業処を修習する。

如何にして水遍を修習するか

水逼を修行する為に、あなたは、鉢の中にある水、または桶の中にある水、または井戸の中の純潔で透明な水を用いることができる。水の概念に対して「水、水」と専注する。 取相に成功するまで、地遍の様にそれを修習する。

如何にして火遍を修習するか

火遍を修行する為に、あなたは、蝋燭、たき火、またはあなたが過去に見たことがある 炎を用いることができる。もし、相を取ることができないのであれば、あなたは、一枚の カーテンを作り、その真ん中に 30cm ほどの丸い穴を開ける。このカーテンを、燃えてい る木材または枯草の炎の前において、あなたがこの穴を通して、炎しか見えない様にす る。煙、または燃焼中の木材や枯草に注意を払わない様にして、ただ、火の概念に対して 「火、火」と専注する。取相に成功するまで、上に述べた様に、修習する。

如何にして風遍を修習するか

触覚または視覚によって風遍を修することができる。あなたは、窓から吹きこんで来て、かつ、あなたの身体に接触する風、または風の中で揺れる木の葉または木の枝を見る事によって、(所縁に)専注することができる。風の概念を「風、風」として、相を取る事に成功するまで、専注する。あなたはまた、再度のその他の遍の第四禅に入り、禅定の光を運用して、外在する木の枝の揺れ動くのを照見して、その事によって風相を識別する。取相は、熱い牛乳粥の上から昇ってくる湯気の様であり、似相は、静止して不動となる。上に述べた方法でもって、遍の相を修習する。



如何にして光明遍を修習するか

光明遍を修習する為に、あなたは壁の隙間から室内に漏れ込んで来て、かつ、地上に投射される光線に注視したり、また、樹木の木漏れ日が地上に照射する時の光線を注視することができるし、また、空を仰ぎ見て、樹木の枝を通して、天空の光を見ることもできる。もし、相を取ることができないのであれば、あなたは、陶器の缶の中に一本の蝋燭、またはランプを置き、その缶を、光が壁に投射できる場所に置く。壁の上の円形の光明の概念を「光明、光明」として、専注する。相を取るのに成功したならば、上に述べた方法でそれを修習する。

如何にして虚空遍を修習するか

虚空遍を修行する為、あなたはドア、窓または鍵穴の空間を注視する。もし、相を取ることができないのであれば、あなたは、一枚の板の上に直径約 20~30cm の丸い穴を開ける。板を立てかけて、あなたは、この丸い穴を通して、樹木やその他のものが全く見えず、天空しか見えない様にする。丸い穴の中の空間の概念を「虚空、虚空」とし、かつ、上に述べた方法によって遍相を修習する。

四無色禅

あなたがすでに十遍の、一つひとつの遍でもって、四種類のジャーナを成就した後であれば、あなたは、四無色処と呼ばれる所の四無色禅(arūpa-jhāna)を修行することができる。

それらは:

- 1、空無辺処(Ākāsānañcāyatana)
- 2、識無辺処(Viññāṇañāyatana)
- 3、無所有処(Ākiñcaññāyatana)
- 4、非想非非想処(Nevasaññānāsaññāyatana)

あなたは、虚空遍以外のすべての遍を用いて、これらを修習することができる。<注 114 へ

如何にして空無辺処定を修習するか

四無色禅を修行する為、あなたは、先に物質の過患を思惟しなければならない。人間の身体は、父母の精卵が結合して生じたものであり、それは、所生身(karajakāya)と呼ぶ。所生身を擁している為に、刀、槍、弾丸などの武器による傷害を受けるし、攻撃や殴打、虐めにもあう;所生身はまた、眼病、耳病、心臓病などの各種の疾病を罹患する事もある。故に、あなたは智慧でもって、色法によって構成された所生身があるが故に、各種の痛苦に出会うのだということを理解するべきである;もし、色法を離脱する事ができるのであるならば、痛苦を逃れることができる、という事である。たとえ、色界第四禅が、粗くて劣等な有形の物質を超越するものであるとしても、しかし、やはり、それ(所生身)を基礎として、はじめて(色界第四禅を)成就する事ができるが故に、あなた遍処色を超越する必要がある。

この様に思惟して、もはや遍処色を求めない様にして、九遍の中<注 115>の、ある一つの逼(例えば地遍)を利用して、再度第四禅を復習し、出定の後、その欠点を省察する;それは、もはや色法を求めないという基礎の上に、第三禅の楽を近い敵として、四無色禅より粗くて劣っている(と思惟する)。しかし、あなたは、名法(二つの禅支)の欠点を思惟する必要はない。というのも、それらは、無色禅のものと同一であるが故に。色界第四禅を求めないと決めた後、あなたは、無色禅の、さらなる寂静の本質を思惟しなければならない。

次に、地遍の遍相を拡大し、それを無辺無際とするか、またはあなたが希望する所の大きさまで拡大し、遍処色が占拠していた空間を虚空で代替えし、当該の虚空をば「空、空」または「無辺の虚空、無辺の虚空」として、専注する。この時、そこに残るのは、元々遍相が占拠していた所の、無辺虚空である。もし、これが達成できないのであれば、あなたは、地遍の遍相の、ある一部分の空間を識別し、かつ専注して、その後に、これを無辺の宇宙にまで拡大する。この様にすれば、地遍の遍相全体は、無辺の虚空に代替えされることになる。ジャーナを証得するまで、無辺虚空の相に専注し続け、その後に五自在を修習する。これは、一番目の無色禅であり、空無辺処定と呼ぶ。

如何にして識無辺処定を修習するか

二番目の無色禅は、識無辺処定という。この定の所縁は、無辺虚空を対象とする無遍処禅心(Ākāsānañcāyatana citta)である。識無辺処定を修習する為、あなたは空無辺処定の欠点を思惟しなければならない;それは色界第四禅を近い敵として、かつ、識無辺処定の寂静に及ばない。もはや空無辺処定を求めないとしたその後、あなたは、識無辺処定が、更に寂静である事の本質を思惟しなければならない。その後、無辺虚空を所縁とした識を対象にとり、それに対して、一心に専注し、かつ、それを「無辺の識、無辺の識」または「識、識」と黙念する。絶え間なく、無辺識の相に専注し、ジャーナを証得し、その後、五自在を修習する。これが第二番目の無色禅であり、識無辺処定と呼ぶ。

如何にして無所有処定を修習するか

三番目の無色禅は、無所有処定と言う。その定の所縁は識無辺処定の対象――空無辺処禅心――の不存在である。無所有処定を修習する為、あなたは、無辺処定の欠点を思惟しなければならない;それは、空無辺処定を近い敵として、かつ、無所有処定の寂静には及ばない、という欠点を思惟する;もはや識無辺処定を求めない(という決意)の元、あなたは、無所有処定のさらなる寂静の本質を思惟しなければならず、その後に、無辺虚空を所縁とする識の不存在(を対象として)それに専注する。ここにおいて、二種類のジャーナ心が存在する。一番目は、空無辺処禅心で、二番目は、識無辺処禅心

(viññāṇañcāyatana citta)である。一個の心識刹那(cittakkhaṇa)は、同時に二個の心識を生じさせる事は出来ない為、空無辺処禅心が存在する時、識無辺処禅心は存在しない、その反対も同然である。故に、あなたは、空無辺処禅心の不存在を所縁として取り、かつ、それを「無所有、無所有」または「不存在、不存在」と黙念する。ジャーナを証得するまで、当該の相に持続的に専注し、その後に、五自在を修習する。これが三番目の無色禅であり、無所有処定と呼ぶ。

如何にして非想非非想処定を修習するか

四番目の無色禅は、非想非非想処定と言う。この様に呼ぶのは、このジャーナの中において、「想」が極めて微細であるからである。実際は、このジャーナの中の、すべての名法は皆極めて微細である;故に、同様に、以下の様に描写する事も出来る:非受非非受、非識非非識、非触非非触等など。ただ、このジャーナは「想」でもって、命名しており、かつ、無所有処禅心を所縁としているのである。非想非非想処定を修習する為に、あなた

は無所有処定の欠点を思惟しなければならない:それは識無辺処定を近い敵として、かつ、非想非非想処定の寂静には及ばない(と思惟する)。

次に、想は病、傷、棘であると(思惟する)。もはや無所有処定を求めない事とし、その後に、あなたは非想非非想処定のさらなる寂静の本質を思惟し、その後に、無所有処禅心を「寂静、寂静」と、継続して専注しなければならない。当該の寂静相に、ジャーナを証得するまで、持続的に専注し、その後に五自在を修習する。これが第四番目の無色禅であり、非想非非想処定と呼ぶ。本日、我々は、如何にして十遍及び八定:四種類の色界禅と四種類の無色界禅を修行するかについて学んだ。次回の法話では、我々は、如何にして慈・悲・喜・捨。の四梵住(brahmavihāra)と、慈心、仏随念、不浄修習と、死随念の四護衛禅(caturārakkhabhāvanā)を修行するのかについて学ぶ事にする。

脚注

<注 110>=色遍の門は《大般涅槃経》《勝処經》(A. 8. 65)、《法集[論]義註・勝処論》(Dhs.A. 204-246)に記載されている。不浄と(我)空の門は《大念処經・身随観》に記載されている。空の想に対する更なる論述は、「無為法を知見する」の章と問答5-9を参照の事。

<注 111>=《Pathamakosala Sutta》 (A. 10. 29)

<注 112>=P77 五自在を参照の事。

<注 113>=《Mahāsakuludāyi Sutta》(M.2.250)と Dhs.203"Aṭṭhakasiṇaṃ Solasakkhattukam"

<注 114>=虚空は物質(色法)ではない為、虚空遍を用いて、遍処色を超越して、無色 禅を成就することはできない。

<注 115>=前の注を参照の事。

<注 116> = この件に関しては、入出息念の異なる禅相に言及した時に、すでに説明した。「禅相」の章を参照の事。



問答(二)

問1:

初心者は、如何にして定根と慧根をバランスすればよいのか?如何にして入出息念でもって智慧を修行するのか?

答 1:

一回目の法話の中において、我々は、すでに、五根をバランスする方法を述べたが、しかし、ここにおいてもまた、再度簡潔に解説する。初心者にとって、定と慧をバランスする事は、特別重要としない。というのも、かれらは初心者であり、五根はいまだ、育成されていないが故に。禅の修行を始めたばかりの時、通常、内心には多くの妄想がある。故に、五根は、いまだ強くなく力も無い。唯一、それらが強くて力のある時にのみ、初めてそれらをバランスする必要が生じてくる。しかし、もし、初心者が、修行の始まりの段階において、五根をバランスする事ができるのであれば、それは当然、良い事である。例を挙げて説明するならば、あなたは、今まさに入出息念の修習をしている。入出息念は呼吸に対する正念であり、呼吸を覚知するのは慧(Pañña)である。呼吸に専念するのは念(sati)であり、一心に、呼吸に専注するのは定(samādhi)である。呼吸を明晰に覚知せんとして努力するのは、精進(vīriya)であり、入出息念がジャーナに向かわせる事ができると信じるのは、信(saddhā)である。

初心者は、強くて力のある五根を育成する様チャレンジするべきである:彼らの、入出息 念への信念は、充分に強くあるべきであり、呼吸を明晰に覚知する為の努力は、充分に強 くあるべきであり、呼吸への専念は、充分に強くあるべきであり、呼吸への専注もまた強 くあるべきであって、(それらを通して)呼吸を明晰に了知する必要がある。彼らは、五 根が強くなる様にチャレンジするべきであり、また同時にそれらがバランスする様にチャ レンジするべきである。もし、ある一つの根だけが強すぎる時、その他の、諸々の根は適 切に運用ができなくなる。例えば:もし、信が強すぎる時、(心が)感動、感激するが、 この事は、精進根をして、相応する名法を呼吸において、維持せしめることができなくな る事を意味する;念は、呼吸において建立する事ができず;定根もまた同様であり、深く 呼吸に専注する事が出来ないし;慧もまた、明晰に呼吸を覚知することができない。

精進が強すぎる時、それは、心をして躁動不安にならしめて、その結果、その他の諸々の根が弱くなり、かつ、適切に運用するのが難しくなる。念が弱くなる時、あなたは、何事も実践できなくなる、というのも、あなたは呼吸に専注する事が出来ないし、呼吸を識別する為の精進は減退して、消失してしまう事もあり、同時にまた、信心(=確信)が失われてしまう。あなた今、まさに止を修行している。止禅に関しては、強くて力のある定はよいものである。しかし、過度の定は、怠惰を引き起こす。怠惰が原因で、その他の諸々の根もまた弱くなってしまい、結果、適切な運用ができなくなる。初心者の段階においては、智慧はまだ鈍くて劣っていて、ただ、自然の呼吸を知ることができるだけである。故に、今現在、止禅を修習する最中の初心者にとっては、ただ、明晰に呼吸を知覚できるだけで充分である。取相または似相が出現したならば、智慧が、取相または似相を覚知する。

また、多すぎる知識、学問(を擁する事)は、良い事ではない、というのも、あなたは、 討論や批評ばかりする様になるが故に。もし、禅修行者が、入出息念に対して、多くの討 論や批評をする時、我々は、彼の慧根は過度であると言い、この場合もまた、その他の 諸々の根を弱くしてしまい、かつ、適切に運用する事ができなくなってしまう。こういう ことから、初心者にとって、5根のバランスがそれほど重要ではないとは言っても、しか し、バランスを保持できる事は良い事である。如何にしてバランスを保つのか? 我々は、強くて力のある正念でもって、明晰に呼吸を覚知し、かつ、大いなる確信をっ て、呼吸に専注しなければならない。

問2:

第四禅に到達した後、なぜ、我々は、直接五蘊を観照して、それらの無常・苦・無我の本質を透視し、涅槃を証悟しようとしないのか?

涅槃を証悟する前、我々はなぜ、32身分、白骨想、白遍、四界差別、色業処、名業処、縁起と観禅を修行しなければならないのか?

答 2:

仏陀は、三種類の人間に五蘊に関する修観の方法を指導した:それは利慧者、名法の観智 がいまだ明晰でない者、簡略法が好きな修観者、である。五蘊とは何か?

五蘊と名色の間には、どの様な違いがあるのか?あなたはどの様に答えますか?

二番目の問題に解答する前に、我々は、先に名色と五蘊について、説明をしたいと思う。

四種類の勝義諦(paramattha sacca)がある:心(citta)、心所(cetasika)、色 (rūpa)と涅槃(nibbāna)である。第四番目の勝義諦——涅槃を証悟する為に、我々 は、その他の三者の無常・苦・無我の本質を見る必要がある、すなわち、以下のものを見なければならない:<注 117>

- 1) 89 種類の心 (viññāṇa)
- 2) 52 種類の心所 (cetasika)
- 3) 28 種類の色(rūpa) <注 118>

89種類の心は、識蘊(viññāṇakkhandha)と言う。52種類の心所に関しては、受は受蘊(vedanākkhandha)、想は想蘊(saṅkhārakkhandha)、その他残りの、50心所は行蘊(saṅkhārakkhandha)である。ある時には、心と心所は、合わせて「名」(nāma)と呼ばれ、ある時には、四つの蘊に細分される:受蘊、想蘊、行蘊と識蘊である。この四蘊は、総合して名蘊(nāmakkhandha)と呼ばれる;色蘊(rūpakkhandha)は28種類の色の事である。心、心所と色を合わせて名色と言う(nāmarūpa)が、ある時には、また、五蘊とも言う:色、受、想、行、識である。それらの因は、名色にすぎない。

これらの五取蘊はみな、苦諦法(dukkhasaccadhammā)、すなわち、苦聖諦の法である。それらに対して、この様に理解しなければならない。仏陀は《長部・大因縁經》において、以下の様に言う:

「アーナンダ、この縁起というものは奥が深く、奥の深い相を具有している。アーナンダ、もし、この法に対して随覚せず、通達しないのであれば、この人は、絡まった糸の玉の様に、穀喇鳥の巣の糸の様に、萱草、灯心草の様に、苦界、悪趣、堕処、輪廻を超越する事はできない」(D. 2.95;S. 2.60)。

上記の經文に関して、義註は以下の様に解説する:「この[有輪]は、実に極めて深く、立脚の処なく、[同一的な理等の]種々の理の密林は、超越しがたい。殊勝な定石で磨いた智慧の剣でもって有輪を切り開くのでなければ、どの様な人間であっても、雷電の輪の如くに、恒常に圧迫する所の輪廻の畏怖、恐怖を超越する事が出来ない、たとえ夢の中であってさえも「不可能である]!」(Vbh.A. 242;Vm。661)。

上記に含まれる意味とは、すなわち、禅修行者は、異なる段階の観智を通り、かつ縁起を 了知しないのであれば、輪廻を解脱する事はできない、という事である。仏陀は《増支 部・外道依処等経》において、以下の様に言う:「比庫たちよ。

何が苦集聖諦 (dukkhasamudayamariyasaccam) であるか?

- [1] 無明 (avijjā) の縁によりて、行 (saṅkhāra) (があり)
- [2] 行 (saṅkhāra) の縁によりて識 (viññāṇa)、
- [3] 識の縁によりて名色 (ñāmarūpa)、
- [4] 名色の縁によりて六処 (saļāyatana)、
- [5] 六処の縁によりて触(phasso)、
- [6] 触の縁によりて受 (vedanā)、
- [7] 受の縁によりて愛(taṇhā)、
- [8] 愛の縁によりて取(upādāna)、
- [9] 取の縁によりて有 (bhavo)、
- [10] 有の縁によりて生(jāti)、
- [11] 生の縁によりて
- [12] 老、死(jarāmaraṇa)、愁(soka)、悲(parideva)、苦(dukkha)、憂(domanassa)、悩(upāyāsa)が生起する。この様に、苦蘊の全体が生起する。比庫たちよ、これを苦集聖諦と言う。」(A.3.62)

上記の項目は、縁起と呼ぶ。仏陀は、縁起はすなわち、苦集聖諦である、という。苦聖諦とはすなわち、五取蘊の事であり、苦集聖諦とはすなわち、縁起であり、この二者は、合わせて諸行の法(saṅkhāra)と言い、それらは観智の所縁である。異なる観智の段階において、あなたは、これらの行法を無常(anicca)・苦(dukkha)・無我(anatta)として観照しなければならない。それらを了知する事も、通達する事もないならば、あなたは、如何にしてそれらを無常として観照するのか?こういう事であるが故に、我々は、vipassanā について、系統的に指導する必要があるのである。究極色法、すなわち、色取蘊を知見する為に、あなたは、四界差別を、物質現象は皆「色聚」(rūpa-kalāpa)の微細な粒子によって構成されている事を見ることができるまで、修習しなければならない。あなたは、それら微細な粒子の中の四界<注119>を見る事ができなければならないし、また、六処及びそれぞれの所縁<注120>もまた見なければならない。この様な方式で色法を識別しないのであれば、あなたは、名法、すなわち、四種類の名取蘊を識別する事は出来ない。故に、我々は、順序を踏み、段階に応じて、vipassanā を教導するのである。

次に、あなたの、二番目の問いに答えようと思う。上座部仏教の伝統によると、二種類の業処(kammaṭṭhāna)がある:それはすなわち、応用業処(pārihāriya-kammaṭṭhāna)と一切処業処(sabbatthaka-kammaṭṭhāna)である。応用業処とは、禅修行者各人が、観の修習をする為の定力を育成するのに必要な禅修行業処であって、禅修行者は、当該の禅修行業処を基礎として、常に(これを)運用しなければならない。一切処業処は、すべての禅修行者が、修習しなければならない所の、禅修業処であって<注 121>、それらは、下記の四護衛禅である:

- 1) 慈心修習 (mettābhāvanā)
- 2) 仏随念 (Buddhānussati)
- 3) 死随念(maraṇānussati)
- 4) 不浄修習 (asubhabhāvanā)

こうした事から、一人の禅修行者が、入出息念でもって、彼の応用業処としたとしても、彼は観の修習の前には、四護衛禅を修習しなければならない。これが正統的な、修行の順序である。ジャーナを証得するまで、慈心を修習する時、最も良いのは、禅修行者がすでに、白遍を修行して、第四禅に到達している事である。例えば、《応作慈愛経》<注122

>の中において、仏陀は、500名の比庫を指導したが、これら比庫は、皆十遍と八定に精通しており、かつ、観の修習においては、すでに生滅智(udayabbayañāṇa)に到達していた。彼らは森林に出向いて、引き続き修行をしようとしたが、しかし、森林に住む天人が、生活を邪魔された事から彼らを威喝した為、彼らは仏陀に会いに戻るしかなかった。そこで、仏陀は彼らに《応作慈愛経》を、禅修行の業処として、かつ、護衛経(paritta)として念誦する様に教えた。

禅修の業処としては、すでに慈心ジャーナ(mettā-jhāna)を成就しており、かつ、異なる種類の人間の間の限界を突破した禅修行者に対して説法したものである。<注 123>《応作慈愛経》は、更に進んで専門的に慈心の修行法を説いたものであって、

"Sukhino vā khemino hontu, sabbe sattā bhavantu sukhitattā"

(一切の有情は、幸せで、安穏であれ!己自ら楽あれ!)を思惟する事を通して、11種類の衆生に対して慈愛を散布し、第三禅を証得する。経典では、仏陀は、あの500名の比庫が、(仏陀の)説明した通りに実践できる事を知っていた、と言う。というのも、彼らは十遍に精通していたが故に。では、なぜ、遍禅に基づけば、慈心禅が容易に成就するのか?

《増支部》において、仏陀は、四種類の色遍の中において、白遍が最もよいと(言う)。 <注 124〉 白遍は、禅修行者の心をして、清浄に、明瞭(明亮)にするが、清浄でかつ 平静な心は、殊勝であり、また力のあるものである。もし、禅修行者が、清浄で、諸々の 煩悩を離れた心で慈(心)を修行するならば、通常、一座の内に、慈心ジャーナを成就す ることができる。故に、もし、禅修行者が、白遍第四禅に入り、出定後、慈(心)を修す るならば、非常に容易に慈心ジャーナを成就することができる(事が分かる)のである。 白遍第四禅を成就する為に、禅修行者は、先に、内外の白骨想を修習しなければならな い。というのも、この様にすれば、彼は白遍を軽々と成就する事が出来るが故に。こうし た事から、入出息第四禅(を成就した)後、我々は通常、禅修行者に32身分、白骨と白 遍を教導する。我々の経験によると、大多数の禅修行者は、白遍第四禅は、入出息第四禅 より更に殊勝である、と考える事が多い、というのも、それは更なる清浄、更なる明瞭 (明亮)、更なる平静な心を生むことができるが故に。この事は、その他の禅修業処を修 行する時にも、大いに役に立つ。故に、我々は通常、慈心禅の前に先に白遍を指導するの である。 ここに、初心者がよくぶつかる問題がある。あなたは、慈心を修行した事があるかも知れない。が、しかし、ジャーナを証得する事が出来たであろうか?実際、もし、禅修行者が同性の誰かに慈愛を届けようとする時、彼は先にその人の微笑を伴った相貌を所縁として、その後に、その人に向かって「この善き人に内心の痛苦がありません様に」等として、慈愛を散布する。初心者にとって、その笑顔はすぐに消失してしまう為、彼は慈心の修習を継続する事ができない。所縁が無いが故に、彼は慈心ジャーナに到達することができないのである。もし、彼が白遍第四禅を運用できるならば、状況は異なるものになる。当該のジャーナから出定後、彼が慈愛を散布してる時、先の定力のおかげで、その人の笑顔は消失しない。彼は、当該の映像に深く専注する事ができ、かつ、一座の内において、慈心第三禅を成就することができる。系統的に修行して、異なる種類の人々の間の限界を突破した後、彼は《応作慈愛経》の中の、11種類の方法、及びパーリ聖典《無碍解道》(Paţisambhidā magga)の中で提起されている528種類の方法〈注125〉を修習することができる。こういう事であるが故に、我々は、通常、慈心禅を指導する前に、白遍を教導するのである。

あなたはまた、仏随念を修行した事があるかも知れないが、しかし、近行定に到達したであろうか?すでに慈心禅ジャーナを成就した人が、仏随念を修行したいと思うならば、彼は一座の内に近行定に到達することができる。これは、先の定力のおかげである。彼らにとって、不浄を修習するのも非常に簡単である。もし、禅修行者が、不浄を修習して初禅に到達しているのであれば、次に死随念を修すると、一座の内に成就することができる。これが、我々が、四護衛禅を教える前に、先に白遍を教導する理由である。しかしながら、禅修行者が、四護衛禅を修したくないと思うならば、彼は直接 vipassanā を修しても、問題はない。

問3:

なぜ、名色法を識別した後、必ず、縁起の第一法と第五法を修行しなければならないので すか?<注 126>

答 3:

上座部仏教の伝統に基づくならば、七清浄(visuddhi)がある。前の五種類は以下の通り:

- 1) 戒清浄 (Sīla-visudhi)。戒 (sīla) には、下記の四種類がある: <注 127>
- (1)パーティモッカ防護戒 (pātimokk h asaṃvara-sīla)
- (2)根防護戒 (indriyasaṃvara-sīla)
- (3)活命逼浄戒(ājīvapārisuddhi-sīla)
- (4)資具依止戒(paccayasannissita-sīla)
- 2) 心清浄 (Citta-visuddhi)。

近行定(upacāra-samādhi)と八定(samāpatti)を含む――安止定(appanā-samādhi)。

- 3) 見清浄(Diṭṭhi-visuddhi)、すなわち、名色限定智(Nāma-rūpaparicchedañāṇa) < 注 128>
- 4) 度疑清浄 (Kaṅkhāvitaraṇa-visuddhi)、すなわち、縁摂受智 (Paṭicca-samuppāda) であり、言い換えれば、すなわち、己自身で自ら、縁起 (paṭicca-samuppāda) を見る事。
- 5)道非道智見清浄(Maggāmaggañāṇadassana-visuddhi)。

思惟智(Sammasanañāṇa)と生滅智(Udayabbayañāṇa)を含む。

これは、観の修習の始まりである。

故に、観の修習をする前、なお、四種類の清浄が存在している。何故であるか? 観の修習とは、名色及びその因、無常・苦・無我の本質への観照を言う。

いまだ名色とその因を見ないのであれば、それらの無常・苦・無我をどの様に観照せんというのであろうか? 如何にして観の修習を実践するのか?

唯一、徹底的に、名色及びその因を識別した後に初めて、我々は、観の修習を始めることができる。名色法及びその因は「諸行法」(saṅkhāra)と言う:それらは、一たび生起するや否や、滅し去る、故に無常である;それらは不断に生・滅の圧迫にさらされているが故に、苦である;それらには自我(atta)がない、安定と不壊滅の実質がないが故に、無我である。この様に無常・苦・無我を観照して、初めて真正の観の修習と言える。故に観の修習を始める前、我々は、禅修行者に対して、名法、色法と縁起を識別する様に指導する。

義注の中においては、以下の様に解説する: "aniccanti pañcakkhandha"<注 129> と"aniccanti khandha pañcakam"<注 130>であると。

その意味は:「無常とは五蘊の事である」

五蘊、言い換えれば、すなわち、名色とその因である。故に、真正の観の修習とは、あな たに対して、五蘊及びそれらの因と果を知見する様に、要求するものなのである。

仏陀は、法を聞く者の根性(資質)に応じて、四種類の縁起の識別法を教導したが、《無礙解道》(Paṭisambhidāmagga)では、もう一つ別の方法を提起している<注 131>。

故に合計 5 種類の方法が存在している。仏陀の教えた一番目の方法は、正順で縁起を識別するものである:

" Avijjāpaccayā saṅkhārā, saṅkhārapaccayā viññāṇaṃ, viññāṇapaccayā ñāmarūpaṃ"

「無明の縁によりて行、行の縁によりて識、識の縁によりて名色」等。

第一法は、上座部仏教で非常に流行したが、しかし、アビダンマの知識のない者にとっては、非常に難解である。また、たとえ禅修行者が、非常に良好な、アビダンマの基礎を持ち合わせているとしても、非常に多くの困難に遭遇する可能性がある。シャーリープトラ(Sāriputta)尊者が教えて、かつ《無礙解道》に記載されている第五法は、初心者にとって、相対的に、比較的容易に、実践できるものである。それは、五種類の過去の因が、五種類の現在の果を生み、五種類の現在の果が、五種類の未来の果を生じる事を識別するものである。これが、第五法の基本原理である。もし、あなたが、己自ら、それを知見したいと思うならば、禅修行において、この段階まで到達しておかねばならない。

系統的に第五法を修習した後に、第一法を修習する事は、大きな困難を伴わないであろう。故に、我々は、第一法を教導する前に、先に第五法を教導する。時間が豊富で、かつ更に一歩進んで修行したいという修行者に対しては、我々は、五種類すべての方法を教導する。仏陀は、法を聞く者の根性(資質)に合わせて縁起(を知見する修行)を指導したが、しかし、内の一種類でも、涅槃を証悟するには充分に足りる。たとえ状況はこの様ではあっても、第一法が上座部仏教において、非常に普遍的であるが故に、我々は、第一法と第五法の二者を教導するのである。

ある日、アーナンダ尊者は、四種類すべての方法で縁起の修習をした後、夕方、仏陀の所 へ行って、仏陀に拝見(礼拝して面会する)して、以下の様に言った:

「尊者、稀なるかな!尊者、未曽有かな!尊者、この縁起は奥深く、奥の深い相を具している。しかし、私からみるに、浅くて分かりやすい」

仏陀は答えて言う:

「アーナンダ、この様に言ってはならない。アーナンダ、この様に言ってはならない。アーナンダ、この縁起は奥深く(gambhīro)、奥深い相(gambhīrāvabhāso)を具している。アーナンダ、この法に対して、不随覚(ananubodhā)であり、不通達

(appaţivedhā) である時、この人は、絡まった棉糸の玉の様に、殻喇鳥の巣の線の様に、萱草の様に、灯心草の様に、苦界、悪趣、堕処、輪廻を超越することができない。」 (D. 2.95;S. 2.60)。

上記の事柄は、随覚智 (anubodhañāṇa) と通達智 (paṭivedhañāṇa) を通して、縁起を知見しないのであれば、すなわち、生死輪廻 (saṃsāra) と四悪趣 (apāya) から解脱する事ができない、という事を意味する。随覚智とは、色限定智

(Nāmarūpaparicchedañāṇa) と縁摂受智 (paccayapariggahañāṇa) の事を言い、通達智は、すべての観智 (vipassanāñāṇa) の事を言う。故に、随覚智と通達智でもって、縁起を知見していないならば、涅槃を証悟することはできないのである。この段の經文について、義註では、もし、縁起を知見しないのであれば、すなわち、誰も、生死輪廻から解脱することができない。たとえ夢の中においてさえも、と言う。



脚注

<注 117>=ここでは、簡潔な説明をしているが、詳細は「第一聖諦を知見する」を参照の事。

<注 118>=「表 2a:28 色法」を参照の事。

<注 119>= 〈結論〉を参照の事。

<注 120>=「世間経」の經文を参照の事。

<注 121>=四護衛禅を修習する方法とその必要性に関しては、「定力の保護」の章を参照の事。詳細な説明は、「第三講 如何にして四梵住と四護衛禅を修習するか」を参照の事。

<注 122>=《応作慈愛経》(Karaṇīyamettā Sutta)(Sn.i.8)またの名を《慈経》 (Mettā Sutta)という。

<注 123>=慈心ジャーナに関しては、「如何にして慈を修するか」を参照の事。

<注 124>=《Pathamakosala Sutta》(A. 10.29)

<注 125>= 《慈論》(Mettākathā)(Ps.2.22)

<注 126>=縁起第一法と第五法に関しては、「第五法」の章を参照の事。

<注 127>=《清浄之道・戒の分類論》(Sīlappabbedakathā)(Vm.13-19)

<注 128>= 《清浄之道・見清浄の説明》(Diṭṭhivisuddhiniddesa)(Vm.662)

<注 129>=《清浄之道・入出息念論》(Ānāpānasatikathā)(Vm.236)と〈離汚垢の(為の)生滅智論〉(Upakkilesavimutta-Udayabbayañāṇakathā)(Vm.740)

<注 130>=《分別[論]義註・経分別解釈》(Suttantabhājanīyavaṇanā)(Vbh.A. ii. 1)

<注 131>=《無礙解道・法住智義釈》(Dhammatthitiñāṇaniddeso)(Ps.1.45-47)

<注 132>=縁起の知見の章で引用した経文を参照の事。

第三講 如何にして四梵住と四護衛禅を修習するか

はじめに

本日、我々は、如何にして四梵住 (cattāro brahma-vihārā) と四護衛禅 (caturārakkha-bhāvanā) を修習するかについて解説する。

四梵住は:

- 1) 慈 (mettā)
- 2) 悲 (karunā)
- 3) 喜 (muditā)
- 4) 摿 (upekkhā)。

四護衛禅は:

- 1) 慈心 (Mettā)
- 2) 仏随念 (Buddhānussati)
- 3) 不浄の修習 (Asubhabhāvanā)
- 4) 死随念 (Maraṇānussati)。

如何にして慈を修習するか

慈梵住を修習したいのであれば、先に注意を払わねばならないのは、個別の異性 (Liṅgavisabhāga) 及び死者 (kālakata-puggala) を対象として、慈を修習してはならない、という事である。単独の異性を所縁としてはならない。というのも、貪欲が生起する可能性があるが故に。しかしながら、ジャーナを証得した後であれば、異性全体を対象にして、慈を修習する事はできる。例えば:「一切の女性は、皆楽しくあれ!」という風に。いついかなる時においても、死者に対して慈を修習してはならない。というのも、死者を所縁に取ると、慈心ジャーナを証得する事ができないが故に。以下の四種類の人に対して慈の修習をする:

1) 己自身 (atta)

- 2) 好ましく思い、かつ尊敬する人(piya-puggala)
- 3) 愛憎のない中立的な人 (majjhatta-puggala)
- 4) 嫌いな人 (verī-puggala)。

しかしながら、修習を始めたばかりの時、あなたは、二種類の人、すなわち、あなた自身と、あなたが好ましく思い、かつ尊敬できる人を対象に慈を修習するのがよい。

その意味は、修習を始めたばかりの頃は、以下の幾種類の人に対して慈の修習をしてはな らない、という事である:

好ましくない人 (appiya-puggala)

極めて親愛な人 (atippiyasahāyaka-puggala)

あなたが嫌っている人 (verī-puggala)。

好ましくない人、というのは、あなた又はあなたが気に掛けている人に、有益なことをしない人、を言う。嫌いな人とは、あなた又はあなたが気に掛けている人に、有害な事をなす人を言う。修習を始めた最初の頃、この二種類の人間に慈愛を散布するのは非常に難しい。というのも、瞋恚と怨恨が生じる可能性があるが故に。修習を始めたばかりの頃、中立的な人へ慈愛を散布するもの難しい。特に、あなたが極めて親しく、愛している人は、あなたが余りに彼らに執着するが故に、彼または彼女に何か不幸があったと聞くや否や、心内に心配と悲しみが充満し、泣き叫んでしまう。この様であるから、修習を始めたばかりの修行者は、(修行の所縁、対象として)この四種類の人間を選んではならない。しかし、一たび、あなたが慈心ジャーナを証得したならば、あなたは彼らへ慈愛を散布することができる。

己自身を所縁として、100年修習しても、ジャーナを証得する事はできない。それなのに、なぜ、修習を始めた最初、己自身に対して慈を修するのか?この修行は、およそ近行定でもよいから、達成しようというものではなく、己自身に慈愛を散布すると言う事は、すなわち、「私が楽しくあります様に」と思惟するのであるが、その思いは、その後、他人に及ぼすことができるからである。まさに、あなたが(人生において)楽しさを希望し、苦しみを受けたくないと思い;長寿を願い、死にたくないと思う様に;あなた以外のすべての衆生もまた、同じく楽しくありたいと希望し、苦しみを受けたくないと思い;長

寿を願い、死にたくないと思うのであるから。この様に実践するならば、あなたはその他 の衆生の安楽と幸福を願う心を育成することができる。仏陀は以下の様に言う:

"Sabbā disā anuparigamma cetasā Nevajjhagā piyataramattanā kvaci.
Evaṃ piyo puthu attā paresaṃ Tasmā na hiṃse paramattakāmo."
「注意深く、一切の、諸々の場所を探しても、その愛が、己自身の愛を超える人を見つけることはできない;この様に、衆生は皆、他人より己自身を愛しているのであるから、己自身を愛する人は、他人を傷つけてはならない。」(S.1.119)

故に、己から他人に対して思いやりを寄せる為に、また、あなたの心を柔和で、平和な、善なるものにする為に、先に下記の四種類の方式によって己自身に対して慈を修習するのである。

- 1) 己自身に危険のない様にと祈願する (ahaṃ avero homi)
- 2) 己自身の心内に、痛苦がない様にと祈願する (abyāpajjo homi)
- 3) 己自身の身体に痛苦がない様にと祈願する (anīgho homi)
- 4) 己自身が安楽で楽しくある様にと祈願する (sukhī attānam pariharāmi)

もし、一人の人間の心が柔和で、平和な、善いもの、寛容で、他人に対して思いやりの ある時、彼は他人に対して慈愛を散布する事に困難を覚えないであろう。故に、己自身に 対して、強くて力のある慈愛を育成する事は非常に重要なのである。一たび、あなたの心 が柔軟に、平和な、善きもの、寛容で思いやりがあるものになれば、あなたは他人に向け て慈愛を散布するのを開始することができる。

如何にして各種の人々に逐一慈愛を散布するか

もし、あなたがすでに、入出息念または白遍第四禅を成就しているのであれば、あなたは、再度第四禅を復習して、禅定の光を輝かせ、明瞭(明亮)にし、燦々とさせる。 特に、白遍第四禅の光明を運用する時、慈の修習は非常に容易となる。 <注 133> その理由は、第四禅の定力を通して、心内の貪・瞋・痴とその他の煩悩がすでに浄化され取り除かれているからである。特に、白遍第四禅から出定した後、心は、柔軟で、適業

で、純で清らか、耀いており、明亮で、燦々としている。故に、あなたは、非常に短時間 において、強力で完全な慈愛を育成することができる。

こうした事から、強力で、かつ、光輝く光明を運用して、あなたの心を、あなたが好む一人の同性に向けるならば、すなわち、それはあなたが好ましく思い、かつ敬愛する人であるが、それはあなたの先生であったり、または同じ梵行者であったりする。この時、あなたは、光明があなたの周囲から四方八方に向けて散布されるのを発見し、同時に、あなたが修行の為に取った対象もまた、明晰に見える事を発見するであろう。その人の、坐っているかまたは立っている姿勢の映像を取り、かつ、あなたにとって最も好ましく思える映像を選択する。以前見たことのある、彼または彼女の、最も楽しそうな映像を思い出す様チャレンジするが、それをあなたの面前2mの所に出現する様にして、結果、あなたが彼または彼女の全身が見える様になればよい。以下の四種類の方式で、彼または彼女に慈愛を散布する:

- 1) この善き人が危難を免れます様に (ayaṃ sappuriso avero hotu)
- 2) この善き人が心内の痛苦を免れます様に (ayaṃ sappuriso abyāpajjo hotu)
- 3) この善き人が身体の痛苦を免れます様に(ayam sappuriso anīgho hotu)
- 4) この善き人が安穏で楽しくあります様に (ayaṃ sappuriso sukhī attānaṃ pariharantu)

上述の四つの句を用いて、その人に三度または四度慈愛を散布した後、その中の、あなたが最も好む一種類の方式、例えば:「この善き人が危難を免れます様に!」を選んで、その後に、再度その人の映像を取り、この例では、危難を免れた映像であるが、かつ、相応の方式でもって慈愛を散布する:「この善き人が危難を免れます様に!この善き人が危難を免れます様に・・・」

一回また一回、心が平静になって、所縁の上に安定的に固定されて、かつ諸々の禅支を 識別できる様になるまで、修習する。次に、引き続き、第二禅と第三禅を証得するまで、 修行する。その後、その他の三種類の方式でもって、第三禅を証得するまで、慈愛を散布 する。四種類の方式のそれぞれ一種類に対して、それぞれ相応する映像が必要である:あ なたが「この善き人が危難を免れます様に」と思う時、その人が危難を免れている映像が 必要である。あなたが「この善き人が心内の痛苦を免れます様に」と思う時、その人に心 内の痛苦のないもう一つ別の映像が必要である、等など。あなたはこの方式で、三種類の ジャーナを修行し、かつ、それぞれのジャーナにおいて、五自在(vasī-bhāva)を練習し なければならない事を忘れてはならない。

あなたが好ましく思い、かつ尊敬し、敬愛する一人の人を対象として、慈の修習に成功 したならば、もう一人別の、あなたが好ましく思い、かつ尊敬し、敬愛する同性を対象に して修行する。この様にして、約 10 名程の、あなたが好ましく思い、かつ尊敬し、敬愛 する人に対して慈心を修習し、それぞれの人間を対象とした修習で、それぞれ第三禅に到 達できる様にする。

この段階までくれば、あなたはあなたが極めて親愛する(atippiyasahāyaka)同性に向けて、安全に慈を修行することができる。約10名の、極めて親愛する同性を対象に取り、同様の方法を用いて、彼らに対して、逐一、第三禅を証得するまで、慈愛を散布する。その後、10名くらいの、あなたと同性で、愛憎のない人を選び、同様の方法を用いて、第三禅を証得するまで、彼らに慈愛を散布する。ここにおいて、あなたはすでに、慈心ジャーナに関して、相当程度の熟練と把握がなされていると思われ、そうであれば、あなたは同様の方法を用いて、約10名の、あなたが嫌いな同性に対して慈を修することができる。

もし、あなたが、あの菩薩の様な偉人であれば――彼は過去生において、かつて、大猿 (Mahākapi) に生まれ変わった時、彼を傷つけた誰をも恨む事がなかった――あなた が、真正に、どの様な人にも、嫌いにならず、また蔑視する事もないならば、この様な対象を苦労して探す必要はない。唯一、嫌いな人がいる修行者、他者を蔑視する事がある修行者のみ、この種の人間に向けて慈を修行する。この種の方法を用いて慈心の修習をするが、容易なものから困難なものへ、一歩一歩、一種類の人々に対して、第三禅を証得するまで、定力を育成し、あなたの心を益々柔軟、平和で、善良、柔和である様にする。最後には、四種類の人間――尊敬する者、親愛なる者、中立的な者、嫌いな者――という各々一種類について、ジャーナを証得する様修習する。

如何にして限界を突破するか

継続して、上述の様に慈を修習すると、あなたはあなたの好ましく思い、かつ敬愛し尊敬する者と極めて親愛する人への慈愛が同じレベルになる事を発見するであろう。この時、あなたは、彼らを一つに合わせて、ただ、あなたが好ましく思う者という、一種類とする。そうすると、以下の四種類が残る;

- 1) あなた自身
- 2) 好ましく思う人
- 3) 中立的な人
- 4) 嫌いな人

あなたは、この四種類の人に向けて、引き続き、あなたの慈心が、バランスを保持し、 差別がなくなるまで、慈を修習しなければならない。己自身を所縁とする修行は、慈心ジャーナに到達する事ができないとしても、しかし、四種類の人々の間にバランスを保つために、あなたは、已然として、己自身をその中に含むものとする。

あなたは、再度、入出息念または白遍第四禅を復習し、(定に)入らなければならない。強くて力のある、かつ燦々と輝く光明を通して、約一分間、己自身に対して慈愛を散布し、その後に、好ましい人、次に、中立的な人、嫌いな人に、慈愛を散布して、第三禅に入る。その後、己自身に、短時間、慈愛を散布し、次に、別のグループ、異なる人選による、三種類の人に慈愛を散布する。以下の事を忘れない事。四種類の方式の、その一種類毎に、彼らに対して、「この善き人が、危険を免れます様に」等の思いに基づいて、慈愛を散布し、かつ、一種類の方式毎に、すべて第三禅に到達する必要がある事。

この様にして、あなたは好ましく思う者、中立の者、嫌いな者という、この三種類の 人々に慈愛を散布する時、毎回、異なる人選をする。この様にして、何度も、異なるグル ープの、四種類の人を交替で(修習)する。多数回、何度も重複し、あなたの心をして、 持続的に、間断なく、差別なく、慈愛を散布せしめる。

あなたが、差別なく、三種類の人々の中の、どの様な人間に対しても、慈心ジャーナを 育成出来た時、あなたは、「限界突破」(sīmāsambheda)を成就することができる。異 なる種類の(人々と)、個人の間の限界を突破した後、あなたは、シャーリプトラ尊者が 教え、かつ《無礙解道》(Paṭisambhidāmagga)に記載されている方法によって、更に一 歩進んで、慈心を修習する事ができる。

22 種類の遍満

《無礙解道》は、22種類の慈愛を遍満させる方法を提案している:

五種類の無限界逼満 (anodhiso pharaṇā) 、

七種類の有限界遍満 (odhiso pharaṇā) と

10 方遍満(disā pharaṇā)。

五種類の無限界遍満とは;

- 1) 一切の有情 (sabbe sattā)
- 2) 一切の呼吸する者 (sabbe pāṇā)
- 3) 一切の生類 (sabbe bhūtā)
- 4) 一切の個体 (sabbe puggalā)
- 5) 一切の、己自身の生命を擁する者(sabbe attabhāvapariyā pannā)、

七種類の有限界遍満とは:

- 1) 一切の女性 (sabbā itthiyo)
- 2) 一切の男性 (sabbe purisā)
- 3) 一切の聖者 (sabbe ariyā)
- 4) 一切の非聖者 (sabbe anariyā)
- 5) 一切の諸天 (sabbe devā)
- 6) 一切の人類 (sabbe manussā)
- 7) 一切の堕悪趣者(sabbe vinipātikā)
- 10 方遍満とは: 1,2,3,4,5,6,7,8,9,10 の方向

如何にして無限界と有限界慈心遍満を修習するか

この種の慈愛の放散(散布)の仕方を修行する為に、上に述べた様に、あなたは、白遍によって第四禅を復習して、定に入らなければならない。その後、己自身に、尊敬する人、親愛な人、中立的な人、嫌いな人に対して、あなたと彼らの間の限界が突破されるまで、慈愛を散布する。次に、明瞭(明亮)で、燦々と輝く光明を運用して、出来るだけの広い範囲で、あなたの周囲の建築物または寺院の区域内のすべての衆生を照らす。彼らをはっきりと明瞭に見た後、あなたは五種類の無限界と七種類の有限界、合計 12 種類の方法を用いて彼らに向かって慈愛を散布する。

あなたは、四種類の方式でもって、一種類毎の衆生に対して、慈愛を遍満する:

- 1) 彼らが危難を免れます様に
- 2) 彼らに心内の痛苦がない様に
- 3) 彼らに身体の痛苦がない様に
- 4) 彼らが安穏で安楽である様に

ここでいう「彼ら」は 12 種類の中の、一種類毎を指すのであり、それはすなわち、一切の有情、一切の諸々の天(人)等などである。この様に、あなたは合計 48 種類【(5+7)*4=48】の方式でもって、慈愛を遍満する。一種類毎の衆生は、必ず、智慧の光の光明に照らされた状況の下、明晰に見る事ができていなければならない。例えば、一切の女性に向けて慈愛を放散する時、あなたは、あなたが決意した範囲の内、光耀く光明の中において、女性をば、確実に、実際に、見なければならない。あなたは、あなたが決意した範囲の内の、男性、諸天、堕悪趣者等<注 134>を、確実に、実際に見なければならない。あなたは、一種類毎の対象に対して、第三禅に到達するまで慈心を修行し、その後に、初めて、次の一種類の対象に対して、慈心の修行をする。

あなたはこの種の方法でもって、48 種類すべての慈心遍満を修習しなければならない。 これらに熟練した後、あなたは、決意の範囲を徐々に拡大していき、それが寺院全体、村 全体、町全体、州省全体、国家全体、世界全体、太陽系全体、銀河系全体、乃至は無辺の 宇宙まで含む様にする。毎回、範囲を拡大していくが、その時、48 種類すべての方式でも って、第三禅に到達するまで慈心を修する。一たび熟練したならば、更に一歩進んで、十 方遍満を修行することができる。

如何にして十方遍満を修習するか

十方遍満慈心は、前に述べた、48 種類の方式を成就した後、それを運用して、十の方向のそれぞれ、一つひとつの方向に慈心を遍満させるものである。あなたは、東方に存在する無辺の宇宙の全ての衆生を(実際に)見ることができなければならない。(彼らを実際に)見て後、48 種類の方式によって、彼らに慈愛を散布する。次に同様の方法でもって、西方、またその他の方向に存在する衆生に対して、慈を修習する。この様に、慈愛を散布する方式は、合計 480 種類(48*10=480)。この上更に、先の 48 種類の遍満を加えると、総合計で、528 種類(480+48=528)の慈愛散布の方式がある事が分かる。

一たび、この 528 種類の慈愛を遍満させる方式に熟練し、掌握したならば、あなたは、 仏陀が《増支部》(Aṅguttaranikāya)において説明されている所の、慈心を修習する 11 種類の利益を体験することができる:

「比庫たちよ。慈心解脱において、習行し(習慣的に実践する)、修習し、多作し(多く 実践する)、習慣にし、(活動の)基本となし、実行し、熟練し、善く精勤する者は、11 種類の功徳を期待することができる。どの様な、11 種類であるか?

- (1) 睡眠が安楽である
- (2) 目覚めて楽しい
- (3) 悪夢を見ない
- (4) 人々に愛される
- (5) 非人(=天人など)に愛される
- (6) 諸天が守護する
- (7) 火、毒、刀によって傷害されることがない
- (8) 心が迅速に定を得る
- (9) 容貌が明浄である
- (10) 臨終において、混迷しない
- (11) 上位に通達しない場合でも、梵天界に至ることができる。

如何にして悲を修習するか

あなたが、すでに、先ほど述べた方法によって、慈心を育成した後であれば、悲梵住を修習する事は、決して難しいことではない。憐憫の心を修習する為に、あなたは、先に、一人の、まさに苦を受けている、生きている同性を選び、彼または彼女の痛苦を思惟する事を通して、あなたの、彼または彼女への憐憫(の心)を激発させる。白遍を利用して、第四禅を復習し、禅定を光を燦爛とした、清らかなものにし、その光でもって、当該の人物を照らす様にし、その後に、第三禅に到達するまで、慈心の修習をする。出定の後、「この善き人が痛苦より解脱します様に」(ayaṃ sappuriso dukkhā muccatu)という方式でもって、いままさに苦を受けているその人に対して、憐憫の心を育成する。斯くの如くに、初禅、第二禅、第三禅を成就するまで、不断に重複して修習し、何度も修行し、かつそのジャーナ毎の五自在を練習する。

その後、あなたは、慈を修した時と同じ様に、憐憫を育成しなければならない。それはすなわち、己自身に対して、好ましい人に対して、中立的な人に対して、及び嫌いな人に対してであるが、また、後者の三種類の人への悲の修行は、限界を突破し、第三禅に到達しなければならない。明確な痛苦に出会ったことのない衆生に対して憐憫を育成する時、あなたは、以下の事実を省察、思惟するべきでる:すべての、いまだ覚悟(悟り)を得ていない衆生は、彼らが生死輪廻の過程において造(ナ)した所の悪業が齎す結果を受け取らねばならず、故に、すべての、未だ覚悟を得ていない衆生は、皆、悪趣に生まれる可能性を擁している。その上にまた、一人ひとりの衆生は皆、同情するに値する存在である、というのも、彼らはいまだ、老、病、死の苦しみから解脱していないが故に。

この様に省察・思惟した後、慈を修習するのと同じ様に、あなたは己自身とその他の三種類の人に悲を修習しなければならない。この三種類の人に向けて、限界を突破して、第三禅に達するまで修行する。その後、132種類の、慈を修習するのと似た様な方式でもって、すなわち、五種類の無限界、7種類の有限界と、120種類の十方遍満 [5+7+(12*10)=132] (によって修行する)のである。



如何にして喜を修するか

喜梵住(muditā)を修習する為に、あなたは、一人の、生きていている、楽しげな感じのする、同性を選択する。それは、一たび会えば楽しく、好ましく、友好的な人物である。白遍を利用して、再度第四禅を復習し、禅定の光を輝かしいもの、燦爛としたもの、清らかなものとし、この光をその人に向ける。その後に、慈心第三禅修習し、出定後、次に悲心ジャーナを修習する。悲心ジャーナから出定した後、

「この善き人が得た成就、成果を失いません様に」(ayaṃ sappuriso yathāladdhasampattito mā vigaccatu)

の方式でもって、その楽しげな人への、随喜の心を育成する。この様に不断に繰り返し、何度も修行し、初禅、第二禅、第三禅を成就せしめ、かつ、一つひとつのジャーナの種類ごとの五自在を練習する。次に、あなたは、己自身とその他の三種類の人に向けて随喜を修習する。その後に、三種類の人に対して、第三禅まで到達し、かつ、限界を突破するまで、随喜を修習する。最後に、132種類の方式によって、無辺の宇宙の一切の衆生に対して、随喜を遍満する。

如何にして捨を修するか

捨梵住(upekkhā)を修習する為に、あなたは、先に白遍を復習して、第四禅に入り、その後に、一人の中立的な、生きている同性の人物を選び、彼に対して、慈、悲、喜を修行して、それぞれの種類ごとに、第三禅に到達する様にする。第三禅から出た後、前の三種類の梵住の欠点、すなわち、それらは感情的で、好きや嫌いの感情に近く、興奮と欣喜に近いという思惟をし、その後に、中捨を伴う第四禅の平静さを省察・思惟する。ここにおいて、

「この善き人は、業の所有者である」 (ayaṃ sappuriso kammassako)

の方式でもって、その中立的な人物に対して、中捨の心を育成する。この様に、不断に、繰り返して修行し、第四禅を成就させて、五自在の練習をする。慈、悲、喜における第三 禅の支援の下、あなたは多くに時間を使わずとも、捨心第四禅を成就することができる。 次に、一人の、あなたが尊敬または敬愛する人、極めて親愛な人、嫌いな人に対して修行する。 その後に、己自身、尊敬または敬愛する人、中立的な人、嫌いな人に対して、あなた方の間に存在する限界を突破するまで、修行する。最後に、上に述べた 132 種類の方式でもって、無辺の宇宙の一切の衆生に対して、捨心を遍満する。これが、四梵住を修習する方法である。

如何にして四護衛禅を修習するか

慈心の修習、仏随念、不浄の修習及び、死随念という、この四種類の禅修の業処は、「四護衛禅」または「四護衛業処」という。それらは、禅修行者を、種々の危険から守ってくれるが故に、更に一歩進んで観禅(vipassanā)の修習に入る前に、それらを学習し、修習するに値するものである。慈心の修習については、すでに説明をしたので、ここでは、残りの三種類の護衛禅について説明する。まずは、仏随念から始める。

如何にして仏随念を修習するか

経典の中において、常々提起される所の、仏陀の 9 種類の功徳を思惟する事を通して、仏随念(Buddhānussati) <注 135>を修習する事が出来る。

" Iti' pi so Bhagavā

- [1] Araham,
- [2] sammāsambuddho,
- [3] vijjācaraņasampannno,
- [4] sugato,
- [5] lokavidū,
- [6] anuttaro purisadammasārathi,
- [7] satthā devamanussānam,
- [8] buddho,
- [9] bhagavā'ti."

「あのバカワトはすなわち、

- 「1〕阿羅漢、
- 「2] 正自覚者、

- [3] 明行具足、
- [4] 善至、
- [5] 世間解、
- [6] 無上調御丈夫、
- [7] 天人導師、
- [8] 仏陀、
- [9] バカワトである。」

この段の経典の意味は以下の通りである:

- 1) このバガワトは、すでに一切の煩悩を断じ除いており、尊敬に値する; Araham——阿羅漢である。
- 2)彼は師無くして、己自ら一人で、正覚を円満証悟した: Sammāsambuddho——正自覚者。
- 3) 彼は智慧と徳行の円満者である: Vijjācaraṇasampanno——明行具足;
- 4)彼は益のある、真実の言葉のみ語る;sugato 善善至
- 5) 彼は世間を理解している:Lokavidū——世間解
- 6) 彼は他者を調伏する事のできる無上の調伏者である:

Anuttaro purisa-dammanussānaṃ——無上調御丈夫。

- 7) 彼は諸々の天人と人類の導師である: Satthādevamaussānaṃ——天人導師。
- 8) 彼は覚悟者(覚醒者): Buddho——仏陀である。
- 9) 彼は過去生における福徳行が齎した種々の、最も吉祥なる具足者である:

Bhagavā——バガワト。

我々は、一番目の功徳(Araham——阿羅漢)を例にとって、如何にして定力を育成するかについて研究する。《清浄之道》(Visuddhimagga)によると、パーリ語の Araham(阿羅漢)には 5 種類の含意がある:

1) 彼はすでに、すべての煩悩と習気を無余に断じ除いているが故に、己自身をそれらから遠離しており、故に、仏陀は尊敬するに値する阿羅漢である。

- 2) 彼はすでに、阿羅漢道の宝剣でもって、一切の煩悩を断じ、斬っているが故に、仏 陀は尊敬するに値する阿羅漢である。
- 3) 彼はすでに、無明と渇愛を始めとする縁起の輪を撃沈し、壊し、また破壊していているが故に、仏陀は尊敬するに値する阿羅漢である。
- 4) 彼は無上の戒・定・慧を擁しているが故に、仏陀は梵天、諸天及び人類の最高の崇敬を受けており、故に仏陀は尊敬に値する阿羅漢である。
- 5) 彼は、たとえ誰も見ていない隠密な場所においても、如何なる、身、口、意における 悪行をなすことがない。故に仏陀は、尊敬に値する阿羅漢である。

仏随念を修習したいのであれば、あなたは、上に述べた 5 つの項目を、空で言えるほど 覚えておかねばならない。その後に、再度入出息または白遍第四禅に入り、禅定の光を輝 かせ、清らかなものにする。この光明を運用して、あなたが覚えている所の、一尊の好ま しい、尊敬できる仏像を照らす。仏像が明晰になった時、それを、真正の仏陀だと見做し て、それに専注する。もし、あなたが、過去において、幸運にも仏陀に会ったことがある のであれば、彼の映像が、再度出現するかも知れない。もし、そうであったとしても、あ なたは、仏陀の功徳に専注するべきであって、彼の映像にのみ(専注してはならない)。

もし、仏陀の真正の映像が出現しないのであれば、あなたはとりあえず、普段見ている 仏像をば、真正の仏陀と見做して、その後に、彼の功徳を随念する。あなたが好む所の一 項目「阿羅漢」の功徳の含意を選び、その意味を所縁として、何度も「阿羅漢」「阿羅 漢」(arahaṃ、arahaṃ)と憶念する。あなたの定力が育成されて来て、かつ、強くなっ た時、仏陀の映像は、消失する。この時、あなたは、ただ単純に、あなたが選んだ功徳に 専注する。この種の業処を修習しても、近行定(upacāra-samādhi)にしか到達する事が できないが、しかし、あなたは、諸禅支が生起するまで、引き続き、当該の功徳に、専注 しなければならない。あなたは、仏陀の、その他の功徳に専注する事も可能である。

如何にして不浄を修習するか

二番目の護衛禅は、死体に対して不浄(asubha-bhāvanā)を修習するものである。不 浄を修習する為に、あなたは再度入出息または白遍第四禅に入り、禅定の光をして、輝か せ、明晰にする。その後に、当該の光を運用して、あなたの記憶の中で、見たことのある ものの内の、最も醜い同性の死体を照らす。禅定の光を運用して顕現させた所の死体は、 あなたが過去において、己自身自らみたものと寸分たがわない(ものとする)。それが明晰になった時、可能な限り、それが最も厭悪なる様相で顕現する様にし、それに対して「厭悪、厭悪」(paţikkūla、paţikkūla)<注 136>と専注し、かつ黙念する。死体の厭悪の相を所縁として専注し、取相(uggaha-nimitta)が、似相(paţibhāga-nimitta)になる様にする。

取相とは、あなたが過去において、己自身自ら見た所の死体と同じ映像で、醜悪で、恐ろしく、おどろおどろした様子を言う。しかし、似相は、肢体が肥満した人が、満腹になるまで食べて、そこに横たわっている様に見える。初禅を証得するまで、当該の相に専注し、その後に五自在を練習する。

如何にして死随念を修習するか

三番目の護衛禅は、死随念(maraṇānussati)である。《大念処經》(Mahāsatipaṭṭhāna Sutta)<注 137>と《清浄之道》<注 138>によると、死随念もまた、あなた自身の記憶の中の死体を利用して修習することができる。故に、あなたは、身体の厭悪の相をによって、初禅に入り、かつ、当該の外部にある死体を所縁として、以下の様に省察・思惟する:

「私のこの身体もまた、必然的に死を免れないであろう。ちょうど、この死体と同じ様 に。この様な事態は避けることができないものである」

心をして己自身の死亡必定の本質に専注せしめ、かつ憶念する時、あなたは悚懼感 (saṃvega、緊迫感) もまた上昇するのを発見するであろう。この悚懼智によって、あなたは、己自身の身体が、一体の厭悪を伴った死体として見ることができるであろう。その映像の中の命根がすでに断絶している事を意識したなら、あなたは、以下の方式を用いて、命根の不存在に専注しなければならない:

- 1) 私の死亡は、必然であり、私の生命は、不確定なものである (maraṇaṃ me dhuvaṃ; jīitaṃ me adhuvaṃ);
- 2) 私は確実に死ぬ (maraṇaṃ me bhavissati);
- 3) 私の生命は結局は死亡する (maraṇapariyosānam me jīvitam) ;
- 4) 死、死 (maraṇaṃ、maraṇaṃ)。

上記の内の一種類を選び、かつ、任意の原語でもってそれを黙念する。

諸々の禅支が生起するまで、己自身の死体の中の、命根の不存在、という映像に、持続的 に専注する。たとえ、この種の禅修業処は、近行定にしか到達することができなくとも。

結び

上に述べた様に、慈心の修習、仏随念、不浄の修習、死随念、というこの四種類の業処は、四護衛禅または四護衛業処と呼ぶ。というのも、それらは禅修行者が種々の危険に遭うのを防ぐことができるが故に。《小部・美奇亜経》の中において、仏陀は以下の様に言う:

"Asubhā bhāvetabbā rāgassa pahānāya, mettā bhāvetabbā byāpādassa pahānāya, ānāpānassati bhāvetabbā vitakkupaccedāya."

「貪愛を捨断するためには、不浄を修習しなければならない。瞋恚を捨断するためには、 慈心を修習しなければならない。尋(妄想)を捨断するためには、入出息念を修習しなければならない。」(U d.31; A. 9.3)"

この経文に基づくと、不浄の修習は、貪欲を取り除く、最も佳い武器であると言える。もし、死体を所縁として、かつ、それを厭悪として見做すならば、これを無意識の不浄(aviññāṇka asubha)と呼ぶ。衆生の32身分を所縁として、それを厭悪と見做すならば(例えば《増支部・吉利馬難徳経》(Girimānanda Sutta)<注139>の中において指導されている)、それは有意識不浄と呼ばれる。この二種類の不浄の修習は、皆、貪欲を取り除く武器である。瞋恚と怨恨を取り除く最も佳い武器は慈心の修習であり、散乱を取り除く最も佳い武器は入出息念である。また、禅修行者の信心(=確信、自信)が後退し、心内が殺伐とする時、最も佳い武器は、仏随念を修習する事である。悚懼感が不足する時、かつ、禅の修行に努力する事に飽きた時、最も佳い武器は、死随念である。本日、我々は、如何にして四梵住と四護衛禅を修習するかを解説した。次回の法話では、我々は、四界差別(四界分別。以下同様)を基礎にして、如何にして観禅を修習するか、及び各種の色法の分析について、説明する。

止を修する利益

法話を終える前に、我々は、止と観の間の関係性を簡潔に説明したいと思う。仏陀は 《相応部・蘊品・定経》(Samādhi Sutta) <注 140>の中において、以下の様に言う:

「比庫たちよ。定を修習しなければならない。 (Samādhiṃ、bhikkhave、bhāvetha) 比庫たちよ。定力を有する比庫は、如実に了知することができる。 (yathābhūtaṃ pajānāti) 。何を如実に了知するのか?

- [1] 色の生と滅、
- [2] 受の生と滅、
- 「3〕想の生と滅、
- [4] 行の生と滅、
- [5] 識の生と滅。」

こうしたことから、定力のある比庫は、五蘊と五蘊の因及びそれらの生と滅を了知することができる(ということが分かる)。彼は、因の生起により、五蘊が生起することを滅明晰に見ることができるし、因の完全な滅尽により、五蘊もまた完全に滅尽するのを見ることができる。前の、二回の法話と、本日解説した所の、止の修習は、強力な禅定を生起させることができる。まさに、この種の禅定の光(智慧の光)の助けを借りた時にのみ、あなたは、観の修習において、究極名色法を見ることができる。この種の重厚な、強くて力のある禅定を通してはじめて、あなたは、名色及びその因である所の、無常・苦・無我の本質を、明晰に照見することができる。この種の明晰性は、止の修習から齎されるものであって、その利益は巨大である。

止の修習は、また、あなたに休息の場所を提供する。観の修習の時、非常に多くの法を 識別しなければならないが故に、疲労が発生する可能性がある。この様な状況の下、あな たは、長時間、どれか一つのジャーナの中に安住して、あなたの心をして休息と活力の回 復を図らしめることができる。そして、その後に、戻って、引き続き観の修習を実践する のである。毎回、疲労が発生する度に、あなたは、再度、ジャーナに入り、休息する事が 出来る。次に観の修習について法話をする時、止の修習に関するこれらの利益を覚えてお く事は、(あなたの修行にとって)非常に役に立つのである。

脚注

<注133>=この点に関しては、問答2を参照の事。

<注 134>=この記述は、禅修行者が、実際に、己自身が決意した範囲内のすべての女性、男性、天人等などが見える、という事を意味しない。その意味は、禅修行者は、作意を通して、一人一人の女性、男性、天人等などに慈愛を拡散し、撒布しなければならない、と同時に、己自身の能力を尽くして、彼らすべてを照見しなければならない、という事である。

<注 135>=《巴提格経》(Pāthika Sutta)(D.3.6);《律蔵・韋蘭哲章》 (Vinaya.1.1. Verañjakaṇḍa);《清浄之道・仏随念論》(Buddhānussatikathā) (Vm.125-130)

<注 136> = ここにおいて、asubha(不浄)と paţikkhūla(厭悪)は、同じ意味である。

<注 137>=D. 2.379; M1.112。

<注 138>= 《清浄之道・説念死》 (Maraṇāssatikathā) (Vm.168)

<注 139>=A. 10.60.

<注 140>=S.3.5。 問答 4-6 においても、この事に触れている。



問答(三)

問 3-1:

入出息念には三種類の禅相があります:予作相(予備相、以下同様)、取相、似相です。 予備相とは何ですか?予備相とは、必ず灰色ですか?予備相と取相の間には、どの様な違いがありますか?

答 3-1:

入出息念には、三種類の禅相(nimitta)と、三種類の定(samādhi)と、三種類の修習 (bhāvanā) がある。三種類の禅相とは:

- 1) 予作相 (parikaammma-nimitta)
- 2) 取相 (uggaha-nimitta)
- 3) 似相(paṭibhāga-nimitta)。

三種類の定とは:

- 1) 予作相(parikamma-samādhi)、時には、刹那定(khaṇika-samādhi)と呼ぶ事もある。
- 2) 近行定 (upacāra-samādhi)
- 3) 安止定 (appanā-samādhi) 、またはジャーナ――八定、とも言う。 <注 141> 三種類の修習とは:
- 1) 予作(予備)修習(parikammma-bhāvanā)
- 2) 近行修習 (upacāra-bhāvanā)
- 3) 安止修習 (appanā-bhāvanā)

予備定の所縁は、予備相、取相で、偶に似相である事もある。予備修習とは、予備定の事である。真正の近行定と真正の近行修習は、安止定(ジャーナ)と非常に近い。故に、それらは「近行」と呼ばれる。しかし、安止定の前の、似相を所縁とする重厚で、かつ強力で安定している定力は、暗喩的に近行定または近行修習と呼ばれる事もある。<注 142 >。

完全に育成された予備定または刹那定は、近行定に転向することができる;完全に育成された近行定は、安止定(ジャーナ)に転向することができる。我々は、前回の法話の中において、三種類の禅相すなわち、

予備相(parikamma-nimitta)、

取相 (uggaha-nimitta) 、

似相(paţibhāga-nimitt)について、解説した。

- 1)予備相:自然の呼吸は、禅相の一種であり、接触点も禅相の一種である。ここでいう禅相とは、定の修習の為の所縁の事である。義注では、鼻相(nāsika-nimitta)と上唇相(mukha-nimitta)は、初心者の予備相である、と言う。定力が少しばかり強化された時、鼻孔の出口に灰色の煙状のものが出現するが、この灰色のものも予備相である。それは、他の色彩であることもある。予備相の段階の定力と修行レベルは、予備定と予備修習である。
- 2) 取相:予備定が向上して、強くて力のあるものになった後、灰色の煙状のものは、通常、綿花の様な、白いものに変化するが、しかし、それは、心想の変化に伴ってその他の色彩に変化することもある。心想が変化した時、禅相の色彩と形状もまた、経変化する可能性がある。<注 143>。
- もし、色彩と形状が変化したならば、定力は徐々に降下していく。これは、禅修行者の心想に変化のある時、彼の所縁もまた、不断に変化するのが原因であるが、それは、彼が異なる所縁に注意を払っている状態(が発生しているという事)を意味している。故に、禅修行者は、禅相の色彩と形状に注意を払ってはならず、ただ、ひたすら入出息禅相にのみ、専注するべきである。取相に専注する定力と、その修行は、已然として、予備定及び予備修習に属する。
- 3) 似相:定力が相当に強く安定し、更に力の強いものに変化した時、取相は、似相に変化する。似相は通常、明けの明星の様に清らかで、明亮(明瞭)で、燦然としている。上の場合も同様で、心想が変化する時、禅相も変化する。定力が強くて力のある様に変った時、もし、禅修行者が、禅相を長くしようと思えば、それは長くなるし;短くしようと思えば、短くなる;ルビー色にしようと思えば、ルビー色になる。《清浄之道》では、修行者はこの様な事をしてはならない、と言う。<注 144>

もし、この様にすれば、たとえ非常に深い定力であっても、徐々に弱くなってしまう。 これは、彼の異なった心想によって、異なる所縁が生じるが故である。故に、禅修行者 は、禅相を弄んではならない。もし、弄ぶならば、彼はジャーナに到達することができな い。似相に専注する初期の段階では、定力と修行は、なお、予備定と予備修習(のレベ ル)である。しかし、ジャーナに近くなった時、それは近行定と近行修習になる。安止が 生起する時、禅相は依然として似相であるが、しかし、この時の定力は安止定であり、修 行は安止修習となる。

問 3-2:

近行定と安止定の違いは何でしょうか?

答 3-2:

似相が出現した時、定力は非常に強い。しかし、この段階では、いまだ尚、近行定の段階に属しており、禅支はいまだ完全には展開しえておらず、有分(bhavanga)は依然として発生して、禅修行者は有分に落ち込む。有分に落ち込んだ禅修行者は、一切が停止した、というか、または、これこそが涅槃だと誤解して、「その時、私は一無所知(一つも知る所がない)」と主張する。彼が引き続きこの様に修行し続けるならば、有分の中において、非常に長い時間止まる様になる。どの様な種類の修行方法であろうとも、それが良いものであっても、良くないものであっても、一たび繰り返し修行するならば、彼は最後には目的を達成することができるが、これを「熟能生巧」(熟せば巧みが生じる)という。上に述べた状況もまた同様で、一たび繰り返し修行するならば、彼は、有分に非常に長い時間落ち込むことができる様になる。

なぜ彼は一無所知と言うのであろうか?

というのも、有分の所縁は、前世臨終心の所縁であり、当該の所縁は、業(Kamma)でもあり得るし、業相(kamma-nimitta)でもあり得るし、また趣相(gati-nimitta)でもあり得るからである。しかし、禅修行者はこの点を見る事ができない、というのも、彼は今なお、縁起を識別することができないが故に。唯一、縁起を識別する時にのみ、彼は、有分がこの三種類の所縁の内の一つを縁として取る事を見ることができる。<注 145>

もし、禅修行者が有分を涅槃としてとらえるならば、この観念は、彼が涅槃への道に進むのを阻む「巨石」となる。もし、この巨石を取り除かないのであれば、彼は涅槃を証悟することができない。

何故、この種の観念が生じるのか?

非常に多くの禅修行者は、弟子(sāvaka)は、仏陀が教えた名色法を理解することができないと思っており、故に、彼らは、仏陀の教え、例えば、名色法及びその因を識別するための、充分に重厚な定力を育成する必要がないと考えている。故に、彼らの定力は非常に弱く、有分心はなお、生起する。もし、故意に有分に落ち込む練習をするならば、彼は、その目的を達成する事は可能であるものの、それは涅槃ではない。涅槃を証悟したいのであるならば、我々は、七清浄を順序よく修習しなければならない。もし、究極名法、究極色法及びそれらの因を了知しないのであれば、涅槃を証悟することはできないのである。

「一無所知」を涅槃として誤認するという、この問題は、更に多くの説明を必要とするかも知れない。涅槃は「離諸行」(visaṅkhāra)である。諸行(saṅkhārā)は、すなわち、名色法及びその因であり、涅槃とは、すなわち、それらの不存在である。涅槃を了知する心は visaṅkhāragatacitta(離諸行に趣向する心)と言うが、しかし、それ自身は決して「離諸行」ではなく――己自ら涅槃を見るのは、猶、心行によって完成するものである。例えば、仏陀または阿羅漢聖者が、果定に入り、かつ、涅槃を知見する心は、相応の心所を随伴する所の阿羅漢果心(arahattaphala-citta)である。もし、阿羅漢果心が初禅において証得されたものであれば、当該の阿羅漢果心は、初禅阿羅漢果心に属し、合計 37 の名法を擁する。この種の原則は、すべての、その他の道智と果智にも適用され、それらは、相応する心所と共に生起し、かつ、皆、涅槃を所縁とし、かつ、涅槃はすなわち、寂静の楽を特徴とする。聖者(ariya)は、果定に入りさえすれば、皆、涅槃を知見することができ、かつ、果智でもって、涅槃の寂静の楽を享受することができる。故に、果定に入る者は、「一切、すべてが停止した。その時、私は一無所知であった」と言う事はできない。

果定に入る前、彼は定にどれほどの時間住むのかという決意をする、たとえば、一時間または二時間など。定に住する期間、涅槃は、持続的に、寂静の楽(santisukha)として体験される。故に、非常に明確に、もし、人が、一無所知であるならば、それは彼がすでに

涅槃を証悟した、という事ではなく、実は、定力が依然として、非常に弱い事が原因である。入出息似相が出現した時、諸々の禅支がなお、強度が不足している為、禅修行者の心が、なお、有分に堕ちる可能性がある。ちょうど、歩き始めたばかりの幼児が、弱くて小さいが故に、自分一人で立つことができず、よく転ぶのと同じに、近行定の段階では、諸々の禅支はいまだ完全に展開する事ができないが故に、禅修行者は、有分に落ち込む可能性があり、それは涅槃では有り得ないのである。

有分に落ちない様にする為、かつ、更に一歩進んで定力を育成する為、あなたは、信(saddhā)、精進(vīriya)、念(sati)、定(samādhi)と慧(Pañňa)という、この五根でもって、心を策励し、かつ、それをして、似相において固定せしめなければならない。精進心でもって、心をして、似相を覚知せしめ、念でもって、心をして似相を忘れない様にし、智慧でもって、似相を覚知する。安止定の段階において、諸々の禅支は、すでに、充分に展開されている。まさに、強健で、力のある人は、一日中立っていられる様に、禅修行者は、似相を所縁として、長時間、安止定の中において安住して、有分に落ちる事がないまま、完全に、かつ、不断に安止定の中において、一時間、二時間、三時間または更に長時間維持することができる。この間、彼には音、声は聞こえない。心は、その他の所縁に転向する事は無い。彼は、似相以外、一無所知、となるのである。

問 3-3:

どの様な条件の下でならば、我々は、ある種の禅修行の体験が近行定であるとか、安止定であるとか、言えるのでしょうか?

答 3-3:

入定している期間において、なお、多くの有分が生起する時、これは近行定である、と言えるが、しかし、その禅相は、必ず似相でなければならない。唯一、似相を所縁とする時で、かつ、長時間、絶え間なく、完全に、安止に住する事ができる時にのみ、それは安止定なのだと、言えるのである。禅修行者は、如何にして、彼の心が、有分に落ちたことを知るのか?

彼が、度々、似相に対して知覚を失う事を察知する時、彼はそれがすなわち、有分である と、知る。彼の心は、また、短時間の間、似相以外の対象に思いを致すことがある。しか し、これらの状況は、安止定では発生しない。安止定の中においては、ただひたすら、一 筋の間断なく、完全に安止する。

問 3-4:

四種類のジャーナの、その一つひとつのジャーナは、それぞれ近行定と安止定が含まれま すか?それらにはどの様な特徴がありますか?

答 3-4:

ここでは、入出息似相を所縁として取る入出息ジャーナを例にして説明する。それらは、四種類のレベルの近行定と四種類のレベルの安止定に分けることができる。一つひとつのレベルには、先に近行定があり、後に安止定がある。両者は、共に、入出息似相を所縁としているが、それらにおける、定力の強度が異なっている。初禅、第二禅と第三禅はの近行定は、それぞれ五個の禅支があるが、しかし、第四禅の近行定には、喜(pīti)がなく、尋(vitakka)、伺(vicāra)、捨(upekkhā)と一境性(ekaggatā)という、四個の禅支が存在する。それらは、同一の禅相を所縁にとってはいるものの、しかし、一つひとつ近行定の、その禅支の力量、レベルより、更に強化されるものである。

初禅近行定の諸禅支は、身体の苦受(kāyika-dikkhavedanā)を鎮伏する;

第二禅近行定は、憂受 (domanassa-vedanā) を鎮伏する;

第三禅近行定は、身体の楽受(kāyikasukha-vedanā)を鎮伏する;

第四禅近行定は、悦受(somanassavedanā)を鎮伏する。

これは、我々が、異なるレベルの近行定を区別する基準、特に、第四禅近行定の基準である。第四禅近行定においては、呼吸はほぼ停止状態と言えるほど、極めて微細になり、第四禅安止定では、呼吸は、完全に停止する。我々はまた、禅支を検査する事を通して、安止定のレベルを区分することができる。

初禅安止定は、五禅支を擁しているが、それは:

尋・伺・喜・楽・一境性、である。

第二禅は三個:喜・楽・一境性。

第三禅は二個:楽・一境性。

第四禅も二個:捨、一境性。

禅支の検査を通して、我々は、「これは初禅安止定である」「これは第二禅安止定である」等などと言うことが出来る。同時に、定力もまた、段階ごとに、強化される。第四禅の定力が最高である。何故、その様に言えのるか?

あなたは、己自ら、体験する様にチャレンジするべきである。多くの禅修行者は、皆、第 四禅は最も殊勝で、最も寂静である、という報告をする。

問 3-5:

どの様な状況の時、禅修行者は、安止定から、近行定に落ちて、近行定に戻るのでしょうか?どの様な状況の時、近行定の禅修行者は、安止定に進むことが出来るのでしょうか?

答 3-5:

もし、禅修行者が、禅の修行に対して、敬う心がなく、心が似相以外の、その他の対象に向かう時、多くの障礙(nīvaraṇa)が生じる。不如理作意(ayoniso manasikāra)によって、多くの貪愛と瞋恚怨恨による妄想が生起する。これらの対象は、定力を削り取って弱くする、というのも、善法と不善法は対立するが故に。善法が、強くて力のある時、不善法を遠離することができるが、しかし、(不如理作意が原因で)不善法の力が強い時、善法は遠離される。善法と不善法は、同じ一つの心識刹那または心路の中において同時に生起する事はできない。ここにおいて、我々は、如理作意(yoniso manasikāra)と不如理作意(ayoniso manasikāra)を理解しなければならない。

禅修行者が、入出息念を修習して、自然の呼吸に専注する時、彼の作意は、如理作意である。取相または似相が出現して、禅修行者がそれに専注する時、彼の作意もまた如理作意である。観禅の時、禅修行者は、

「これは色法である」

「これは名法である」

「これは因である」

「これは果である」

「これは無常である」

「これは苦である」

「これは無我である」

と観照する時、彼の作意は、如理作意である。しかし、彼が 「これは男性、女性、息子、娘、父親、母親、天人、梵天人、動物」などなど 「これは金銀、財産」などと思う時、彼の作意は、不如理作意となる。

一言で言えば、我々は、如理作意によって、多くの善法が生起し;不如理作意によって、 多くの不善法が生起するのだ、と言える。あなたが禅修行をする時、不如理作意を知ら ず、それに気が付かないでいるならば、諸々の蓋または煩悩は、それに従い伴って、生起 する。

それらは不善法であり、これらの不善法は、定力を削ぎ弱め、またはこれを退失し、堕落せしめるのでる。もし、あなたが如理作意によって、継続的に禅修行の業処に専注するならば、善法は生起し、かつ成長・強化されるが、ジャーナ善法もまた、これらの善法の中に含まれる。こういうことであるが故に、もし、あなたが不断に禅相、例えば入出息似相に専注するならば、これは如理作意である。もし、この種の如理作意が、完全で強力なレベルまで育成されたならば、あなたは近行定から安止定に進入することができる。

問 3-6:

一人の人間の臨終の時、過去になした善業または不善業が原因で、業相が生起する。この 種の現象は、禅修行の実践の最中に、久しく忘れていた想い出の映像が出現するのと、同 じでしょうか?

答 3-6:

それらは、相似している場合もあるが、それは、極めて限定的な状況である、と言える し、それは死亡が迅速に発生している人間に出現する所の、業相とも似ている事がある。



問 3-7:

禅修行の時、すでに忘れて久しい 30 年前の出来事の映像が心中に出現する場合、これは 正念が欠けたのが原因でしょうか?何が心をして、修行の対象から偏離せしめるのでしょ うか?

答 3-7:

そうである場合もあるが、しかし、作意(manasikāra)が原因であろう、と思われる。 多くの禅修行者は、作意を理解する事ができない。唯一、名業処を修習する時になって初めて、彼はそれらを理解する。心路の発生は、極めて快速であり、故に、彼らは、これらのイメージの表出、浮現は、作意に依る事が理解できないのである。如何なる行法も、無縁のまま、おのずと生起することはできない、というのも、すべての行法は、因と縁によって生起する(因縁生起)するが故に。

問 3-8:

臨終の時、もし、一人の人間に、非常に強い正念のある時、彼は過去の、善・悪業の業相 (kammanimitta) が生起するのを避ける事ができますか? <注 146>

答 3-8:

強くて力のある正念は、この種の業相が生起するのを防ぐことができる。しかし、何をもって、強くて力のある正念と言うのか?もし、禅修行者がジャーナに入ることができ、かつ、完全にそれを安定したまま、死亡の時まで維持できるならば、あなたは、この種のジャーナ正念は強くて力のあるものである、と言える。この種の正念は、不善の映像(イメージ)または欲界の善相が出現するのを防ぐことができる。それは、唯一、ジャーナの所縁をのみ対象に取る、例えば、入出息似相または白逼似相を。もう一つ別の強くて力のある正念は、観智と相応する正念である。

もし、禅修行者の観智が行捨智(Saṅkhārarupekkhāñāṇa)であり、かつ、観の修習が臨終の刹那まで継続する時、彼の臨終速行は、強くて力のある正念と相応した観智となる。この種の正念もまた、不善の映像が出現するのを防ぐことができるが、同時にまた、その他の善相が、観禅の相とすり替わるのを防ぐことができる。観禅の相とは、彼が観照する

為に選択した所の、行法の、無常・苦・無我の本質である。彼は、この種の相をもって、 その臨終速行(maraṇāsannajavana)の所縁として、死ぬことができる。それは、天人に 生まれる結生心(paṭisandhicitta)を生じせしめることができると共に、この事が因とな って、即刻、天人に生まれ変わることができる。

この種の禅修行者が、未来世(来世)において、天人に生まれ変わった後に、獲得することのできる利益に関しては、仏陀が《増支部・四集・入耳経》(Sotānugata Sutta)の中において、以下の様に言う:

" So muṭṭhassati<注 147> kālaṃ kurumāno aññataraṃ devanikāyaṃ upapajjati. Tassa tattha sukhino dhammapadā plavanti. Dandho bhikkhave satuppādo、atha so satto khippameva visesagāmī hoti."

「比庫たちよ。已に教法を聞きし。多く誦を習し、思惟し、かつ、観智でもって徹底的に知る凡夫、彼は、死後、天界の一に生まれ、そこにおいて、諸々の行法は、心中において、明晰に顕現する。彼は、ゆっくりと法義を思惟するか、または、観を修するが、しかし、非常に早く涅槃を証悟することができる。」(A.4. 191) <注 148>。

何故、諸々の行法が、彼の心中に、明晰に顕現するのか?

それは、前の一世の生において、人であった時の臨終速行心と、それに緊密に密接している天人の生命の有分心は、同じ所縁を縁に取るが故、であり、この様な状況は、諸々の行法の無常・苦・無我の本質なのである。「主人」としての有分心は、すでに、観智の所縁を知っている為、観智は、容易に育成される。故に、当該の經によれば、観智と相応する強力な正念は、不善の映像が出現するのを阻止することができると同時に、また、その他の善相が観禅の相と取って代わるのを防ぐことができる。死亡が発生する前、あなたは、この種の正念を擁することが出来る様、チャレンジしてみるべきである。《沙格所問経》(Sakkapañha Sutta)は、三人の、かつて、止観の修行をした事のある比庫に触れているが、これも一例である。彼らは、皆、良好な戒行と非常に良好な定力を擁していたが、しかし、彼らの心は、男性のガンダッバに生まれたいという願望に傾いていた。<注 149

彼らは、死後、天界において、非常に美しく、光明で輝く、16歳ほどのガンダッパとなって、生まれた。彼らが、前世において比庫であった時、この3人の比庫は、毎日、一人の

女性居士の家に托鉢に行き、かつ、彼女に仏法を教えた。彼女は初果入流聖者になり、死後、沙格天帝の息子ゴーパカに生まれ変わった。この3人のガンダッパは、沙格天帝の子であるゴーパカが歌舞に興じた時、彼は、彼らが非常に美しく、光輝いているのを見て、心で思った:

「彼らは非常に美しく、光耀いている。彼らは、どの様な業を造(ナ)したのであろうか?」

彼は、彼らが、彼がいまだ女性の居士であった時に、彼女の家に托鉢に来ていた 3 人の比庫であることを知っていた。彼は、彼らの戒・定・慧が、皆非常に良好である事を知っていたので、彼らに過去世を思い出す様にと促した。彼は言った:

「あなた方が、教法を聞き、修行する時、あなた方の目と耳は、何に向かいますか?」 二人のガンダッパは、彼らの過去世を思い出して、恥ずかしく思った。彼らは、再度、止 観を修習して、非常に早く、不来道果を証悟し、結果、世を去った。彼らは、梵補天 (Brahmapurohita) に生まれ変わり、かつ、ここにおいて、阿羅漢を証悟した。3人目 の比庫は、恥ずかしいとは思わず、引き続きガンダッパであり続けた。(D.2。353-354)。

こういうことであるが故に、あなたは、生命保険に加入する必要はない。この種の正念 は、最もよい保険なのである。

問 3-9:

四界差別の修習において、12 種類の特徴を識別する時、必ず、硬さ、粗さ、重さという順番を守って修行しなければならないのでしょうか?禅修行者は、その他の、任意の一種類の特徴を選んで、修行を開始してもよいですか?

答 3-9:

修行を始めたばかりの頃、我々は、一つの、容易に識別できる特徴を選んで、それから始めることができる。一たび、容易に、明晰に、すべての特徴を識別できる様になったならば、仏陀の教導した順序を遵守しなければならない: すなわち;

地界 (pathavī-dhātu) 、

水界(āpodhātu)、

火界(tejodhātu)、

風界(vāyodhātu)。

というのも、この種の順序は、強くて力のある定力を生じさせることができるからである。我々が、色聚を見ることができる時、かつ、容易に、一粒一粒毎の、色聚の中の四界を識別できた後であれば、当該の順序は重要でなくなる。重要なのは、それらを同時に識別できるかどうか、という事である。何故であるか?

色聚の寿命は非常に短く、10億分の一秒にも満たないと思える。色聚の中の四界を識別する時、「地、水、火、風」と唱える時間は、ない。故に、我々は、それらを同時に識別しなければならないのである。

問 3-10:

四界差別の修行は、禅修行者の身体の四界をバランスすることができるが、しかし、人は、四界のバランスを失って、病気になる事があります。禅修行者が病気である時、強くて力のある正念でもって、四界差別を修行して、病気を治すことはできますか?

答 3-10:

病気には色々な種類がある。ある種の疾病は、過去の業によっている、例えば仏陀が受けた背中の痛み、など。ある種の疾病は四界の失調による。過去生の業によって生じる疾病は、四界のバランスによって治療する事は出来ないが、しかし、幾つかの、四界の失調による疾病は、禅修行者が四界のバランスを取り戻す様チャレンジするならば、治癒できる場合もある。幾つかの疾病は、飲食、時節(utu)、または心(citta)によって引き起こされる。もし、心理的な要因で引き起こされた疾病であるならば、心理的な治療で、治癒できる。時節(気候、寒さ、熱さ)すなわち、火界によって引き起こされる疾病、例えば、癌などは、薬を服用する事を通して、四界をバランスして治療する。飲食によって引き起こされた疾病も同様である。

問 3-11:

我々が第四禅に到達して、無明(avijjā) <注 150>を取り除く以前、過去の悪い習慣によって、非常に多くの不善の思いが生起します。例えば、(リトリートの期間以外の)日常

生活の中において、貪愛と憤怒が常に沸き起こります。我々は、不浄 (asubha) または慈 心禅 (mettābhāvanā) の修習を通して、それらを取り除くことができますか?

あるいは、禅修行の対象に専注する事に専念して、これらの不善の思いに注意を払わない 様にすれば、それらは自ずと、消失しますか?

答 3-11:

不善業は、無明(avijjā)を潜在的因とし、不如理作意(ayoniso manasikāra)を近因とする。不如理作意の危険性は非常に大きい。もし、あなたが不如理作意を如理作意に転換することができるならば、貪愛または憤怒は、暫定的に消失する;もし、如理作意が非常に強くて力のある時、それらは、永遠に消失する可能性もある。前の問答の中において、我々はすでに、如理作意と不如理作意に関しての説明は終えた。あなたは、不浄または慈心禅の修習を通して、貪愛と憤怒を取り除くことができる。しかし、観智は、煩悩を断じ除く、最も佳い武器であり、それは、最も良質な如理作意である。

問 3-12:

有分心は、どの様に、欲界地、色界地、無色界地と出世間地において、作用しますか?出来れば、セヤドーに例を挙げて説明して頂きたい。<注 151>

答 3-12:

有分心の、前の三界<注 152>における作用は、皆同じであり、それは、一期の生命の中における、心識刹那が中断しない様に、不断に生起し、それは名法、すなわち、生命相続流を維持しているが、この事は、この一期の生命の業が、いまだ、消費しつくされていないが故である。欲界地と色界地は、共に、名色法(ñānarūpa)を具備しており、無色界地にはまた、名法が存在していているが故に、三界地には、有分が存在する。欲界地

(kāmāvacarabhūmi) においては、有分の所縁は、業 (kamma)、業相

(kammanimitta)、または趣相(gatinimitta)で有り得る。例えば、ある一人の人間の有分の所縁は、チャイティヨー・パゴダであり、もう一人の人間の有分の所縁は、シェーダゴン・パゴダである――これらの所縁は、共に概念法である。

色界地(rūpavacarabhūmi)において、有分は、唯一、業相を所縁としており、業または 趣相では有り得ない。色界の衆生の有分心は、色界果報禅心(rūpāvacaravipākajhāna) というが、というのも、それは、前の一世の臨終の時の、禅定が成就した(結果としての)、果報であるが故に。有分心の所縁は、すなわち、ジャーナの所縁であり、有分心の所縁は、当該のジャーナ(のレベル)によって決定される。例えば、入出息ジャーナによって、色界に生まれ変わった衆生の、その有分心の所縁は、入出息似相であり、慈心ジャーナによって生まれ変わった者は、すなわち、無辺の宇宙の一切の衆生を所縁とする――この二者は、共に概念法である。

無色界地(arūpāvacarabhūmi)において、有分心は、わずか二種類の業相を所縁としており、上記と同じく、業または趣相ではありえない。空無辺処の衆生の有分心は、無辺の虚空を所縁としており、無所有処の衆生は、空無辺処禅心の不存在を所縁としている――この二者は共に概念法である。識無辺処の衆生の有分心は、空無辺処禅心を所縁としており、非想非非想処の衆生は、無所有処禅心を所縁としている――(これらの所縁は)心であるが故に、これらの業相は究極法(paramattha dhammā)に属する。我々が「欲界地」、「色界地」と「無色界地」という時、それは存在の界、生存の地を指しているのであり、しかし、「出世間地」という時、ここでいう「地」は、一種の比喩であり、実際には、それは根本的に、何か一つの場所、地方ではありえない。我々が「出世間地」という時、その意味は、四道、四果と涅槃のことをのみ指すのであって、一個の場所ではない。故に、出世間地には、有分心は存在しない。四道心と四果心の中には、有分心はなく、涅槃の中には、如何なる名色法(ñāmarūpa)もない。その為、有分心によって維持・繋縛される名色もない。この事はすなわち、涅槃の中においては、如何なる有分心も存在し得ないという事を意味する。

問 3-13:

世間禅 (lokiya jhāna) と出世間禅 (lokuttara jhāna) は、どの様に違いますか?

答 3-13:

世間ジャーナは、四種類の色界禅と四種類の無色界禅(arūpāvacarajhāna)を指し、それはすなわち、八定(samāpatti)である。出世間ジャーナは、道智と果智に相応する諸々の禅支である。例えば、あなたが、世間色界初禅の名法を無常・苦・無我として、涅槃を現見している時、あなたの道智は、初禅に属する。これが出世間禅である。何故であるか?観智の対象としての世間色界初禅には、五つの禅支が含まれる:尋・何・喜・楽・一境

性であるが、出世間初禅の中においても、同様に、この五つの禅支が含まれる。これが、 聖道と聖果が、初禅聖道と初禅聖果に属する要因である。その他のジャーナもまた、この 方式に従って、各々個別の出世間ジャーナの因と縁になるのである。



脚注

<注 141>=八定:四種類の色界ジャーナと、四種類の無色ジャーナ。

<注 142>=この点に関しては、問 4-6 を参照の事。

<注 143>=禅相と想に関する具体的な関連性は、禅相の章を参照の事。

<注 144>=《清浄之道・40 業処の解釈》(Cattālīsakammmaṭṭhānavaṇṇanā) (Vm.47)

<注 145>=詳細は「表 1 d: 死亡と結生」を参照の事。

<注 146>=関連する内容に関しては、「表 1d: 死亡と結生」を参照の事。

<注 147>=Muţţhassati の元の意味は「失念」である。義註は、ここにおける「失念」はこの人が仏語を憶念するのを忘れた、という事を指しているのではなく、凡夫

(puthujjana) の身分で死亡した時、凡夫は失念の死者と呼ばれる事を言う、と説明する。

<注148>=この段の経文を直訳すると、以下の様になる:

「彼は失念して、諸々の天部の類の一に生まれ変わった。彼は、そこにおいて、諸々の法句を、明確に顕現できる。比庫たちよ、念の生起がゆっくりであろうとも、しかし、当該の有情は、非常に早く殊勝(なレベルに)に到達することができる。」

<注 149>=パーリ語、gandhabba: 天界の歌舞音楽の神。東方持国天王によって統治されている。

<注 150> = 第四禅が、無明を取り除く事は、出来ない。ただ、無明を鎮伏するだけである。問答 7-7、7-8、7-9 を参照の事。

<注 151>=有分(bhavanga):有分心は、フロイト心理学で言う所の、潜在意識または無意識とは異なる;二個の心識は、同時に生起することはできない。有分心は、果報心相続流であり、前の一世の臨終の時に熟した所の、業がこれを維持している。それは、二個の心路の間の名法が相続して不断である様にすると同時に、意門(manodvāra)を生起せしめる作用をも擁する。一たび、この期の生命を生じせしめる業が消費尽くされた時、今生の有分心は、終結を告げる。

阿羅漢の場合を除いて、新しい所縁を取る、新しい有分心が、新しく生まれた命の、一つ目の心識の後に生起する。すなわち、結生心の後に、16個の有分心が生起する。新しい一期の生命を生じせしめる所の、有分心の業は、結生心を生じせしめる業と同じであり、同じ所縁を取る(「表1b:死亡と結生」を参照の事。)故に、有分心は、六門心路の元に運用される「潜在意識」とは異なるものである。例えば、「表1c:五門心路」では、五門心路が生じる前、有分流は中断される、と示している。一たび心路が終結すると、それはまた再び新たに生起する(「表1b:意門心路」を参照の事)。有分心は、常に同一の目標を認め、それは、(心が)六門の目標に向かう現象とは、無関係であり、故に、「離心路」(vīthimutta)と呼ばれる。

<注 152>=三界:

- 1) 欲界(kāmāvacara)、人界、動物、鬼(幽霊)、阿修羅、地獄と天界を含む。
- 2) 色界 (rūpāvacara)、梵天界を含む。この界の色法は非常に微細である。
- 3) 無色界 (arūpāvacara) 、この界は、名法のみ存在する。



第四講 如何にして色法を識別するか

はじめに

本日、我々は、色業処(rūpakammaṭṭhāna)について、説明するが、それはすなわち、四界差別(catudhātuvavatthāna)及び異なる種類の究極色法(paramattharūpa)の識別(方法)の説明でもある。色法は、五取蘊の第一蘊であり、その他の四取蘊(受(vedanā)、想(saññā)、行(saṅkhārā)、識(viññāṇa))は、まとめて「名」(ñā ma)と呼ばれる。我々の、この五蘊有(pañcavokāra-bhava)の世間では、意識は物質に依存している、すなわち、心識の発生は、必ず個別の色法依処(色法の依存する場所)に依存しているのである。目、耳、鼻、舌と身体の色法の、依処(vatthu、依存場所)と門(dvāra)は、同じ事である。

故に、眼識は、眼門または眼依処と呼ばれる所の、色法に依存して生起し、耳識は、耳門または耳依処と呼ばれる所の、色法に依存して、生起する等であるが、しかし、意識は、名法に属する所の、意門(有分)に依存して生起する:我々の五蘊有世間において、名法が生起するために依存する所の色依処は、心臓の中の血液に位置しており、故に、それは心処(hadaya-vatthu)と呼ばれる。<注 153>

それらを理解したいと思うならば、あなたは、異なる種類の色法を見なければならないが、それは、あなたは、先に色聚(rūpa-kalāpa)と呼ばれる所の、極めて微細な粒子を見なければならない事を意味する。あなたは、物質現象は例外なく、これらの色聚によって構成されている事を見なければならないが、しかし、それらは、なお、究極法<注154>ではない。究極法に通達したいのであれば、あなたは、異なる類型の色聚が、すべて界(dhātu)<注155>によって構成されている事を見なければならない。唯一、この様にして初めて、あなたは、色法を如実に見る事ができるし、如実に、それと名法との関係を見ることができる。これが、四界差別を修習する目的である。しかし、この種の業処を理解する前に、我々は、以下の異なる類型の色聚及びそれらの「界」について、簡単に説明し、その後に、色法の四種類の因について、解説したいと思う。この様にすれば、皆様にとって、四界差別(catudhātu-vavatthāna)<注156>という、この奥深い業処が、容易に理解できると思うが故に。

三種類の色聚

上に述べた通り、物質現象は、すべて色聚によって構成され、成り立っているが、それ らは基本的に、以下の三種類に分類することができる:

1) 八法聚(atthaka):最も基本的な八種類の色法を(八不離色)を含む。

2) 九法聚 (navaka) : 八不離色に九番目の色法を加えたもの。

3) 十法聚(dasaka): 九種類の色法に十番目の色法を加えたもの。

一般的に、我々の身体の物質は、この三種類の色聚が、異なる方式で構成されて成り立っているものである。

三種類の色聚の中の色法

一番目の色聚は、四界(catudhātu)を含む、すなわち、四大種(mahā-bhū tā)、及び四種類の所造色(upādārūpa)<注 157>で、合計八種類の色法となる:

- 1)地界(pathavīdhātu)
- 2)水界 (āpodhātu)
- 3)火界 (tejodhātu)
- 4) 風界 (vāyodhātu) 及び
- 5)色彩(vanna)
- 6)香 (gandha)
- 7)味 (rasa)
- 8)食素(栄養素) (ojā)

上記の八種類の色法を含んでいるが故に、この類の色聚は八法聚(aṭṭhakakalāpa)と呼ばれる;また、第八番目の色聚が食素である為、もう一つの呼び名は、食素八法聚(ojaṭṭhamaka kalāpa) <注 158>とも言う。この類の色聚は、全身に分布しており、非明浄色(napasāda rūpa)に属する。

二番目の色聚は、上記の八種類の、基本的な色法(八不離色)と、九番目の命根(jīvitindriya)を含むものである。九種類の色法を含むため、この類の色聚は、九法聚(navaka kalāpa)呼ばれる;また、九番目が命根である為、命根九法聚(jīvitanavaka-kalāpa)<注 159>とも呼ばれる。この種の色聚は、全身に分布しており、同じく非明浄色<注 160>に属する。

三番目の色聚は、八不離色と九番目の命根の他に、十番目の色法を含む。十種類の色法 が存在するが故に、名称を十法聚(dasaka)と言う。十法聚はまた、以下の三種類の分類 することができる:

- 1) 眼 (=目、cakkhu-)、
- 耳(sota-)、
- 鼻 (ghāna-)、
- 舌 (jivhā-)、

身(kāya-)十法聚(dasaka kalāpa):

その内の十番目の色法はそれぞれ、眼(目)、耳、鼻、舌と身浄色(pasāda-rūpa)である。

- 2) 心十法聚(hadaya-dasaka kalāpa): 十番目の色法は、心色(hadaya-rūpa)である。
- 3) 性十法聚 (bhāva-dasaka kalāpa) : 十番目の色法は、性色 (bhāva-rūpa) である。
- 1) 眼(目)、耳、鼻、舌と身十法聚は、それぞれの感官の内部に分布しており、十番目の浄色(pasāda-rūpa)は、すなわち、それぞれの依処である。五種類の色依処(vatthu)(眼、耳、鼻、舌と身処)はまた、五種類の色根門(dvāra)<注 161>でもある。
- 2) 心十法聚は、心臓の中の血液に位置する。十番目の心処色(hadaya-vatthu)もまた依処であるが、しかし、それは意門(有分)ではない。というのも、意門は、心十法聚の中の十番目の色法によって、はじめて生起する事ができるのではあるが、しかし、それは名法に属しているからである。ある一つの所縁が、五根門の一を衝撃する時、同時に六番目の門(意門、すなわち、有分)<注 162>をも衝撃する。例えば:色彩が眼門(浄色、眼十法聚<注 163>の中の、十番目の色法)を衝撃する時、また同時に、意門(有分)を衝撃し、意門は、心十法聚<注 164>の中の、十番目の色法に依存して生起する。当該の色彩は、まずは、先に、一個の意識によって「収取」(収め取られ)され、次に眼識(が生じ)、その後に、一系列の意識(が生起する)。音声が耳門を衝撃する時、すなわち、耳十法聚の中の、十番目の色法耳浄色を衝撃する時、上記の原理と同様の事が起こる。香所縁などもまた、同じである。同時に五門と意門を衝撃する所縁以外に、なお、意門(有分)をのみ衝撃する所の所縁——六種類の法所縁<注 165>がある。
- 3) 性十法聚は全身に分布している。その中の十番目の色法が性色(bhāva)である。
- 二種類の性色がある: <注 166>

- i) 男性色(purisabhāva): それは、男性の生理の特徴を表現し、人をして「これは男性である」と知らしめる。男性色は、男性にのみ、見られる。
- ii) 女性色(itthibhāva): それは、女性の生理の特徴を表現し、人をして「これは女性である」と知らしめる。女性色は、女性にのみ、見られる。

眼(目)、耳、鼻、舌と身十法聚の中の、十番目の色法は、すべて明浄である為、これらの色聚もまた、明浄である。その他の残りのすべての色聚には、浄色がない、例えば先ほど説明した所の、性十法聚と心十法聚がそうであるが、故に、それらは皆、非明浄である。

色法の四種類の生因色法の基本的な構成の説明を終えた。今、我々は、四界差別を修習する時に、同じ様に識別しなければならない色法の生起の因について、大まかな説明を行う。色法には、四種類の生起の因がある:業、心、時節(季節)と食である;または、四種類の色法がある、ともいう;<注167>

- 1) 業生色(kammaja rūpa)
- 2) 心生色 (cittaja rūpa)
- 3) 時節生色 (utuja rūpa)
- 4) 食生色 (āhāraja rūpa)

前に述べた通り、我々の身体の物質は、みな、色聚によって構成されており、かつ、すべての色聚は、少なくとも八つの不離色を擁している:地、水、火、風、色彩、匂い、味と食素(栄養素)。その内、八番目の食素は、色法を維持することができる。もし、食素がないならば、色法は腐り崩壊する。今、我々は、更に一歩進んで、色法の四種類の生因について、説明する。

業生色

業生色(kammaja rūpa)は、命根九法聚、及び眼、耳、鼻、舌、身と心と性十法聚を含む。それらの食素(ojā)は、業生食素(kammaja ojā)である。業生色の内において、我々は、第二聖諦――苦集聖諦――の真実の面貌の概略を覗き見ることができる。業生色は、命根を擁する色法であり、それらは、結生(第一聖諦)の時に生起する。まさに仏陀が《大念処經》<注 168>の中において教導した様に、再生(苦)の発生の、その因

は愛(taṇhā)であり、そして、愛はすなわち、すべての、喜ぶべき、悦すべき処において、生起する:

色彩は、眼(目)を通して、眼十法聚の中の浄色(眼門)と有分(意門)を衝撃する; 音声は、耳を通して、耳十法聚の中の浄色(耳門)と有分(意門)を衝撃する等など。 五根門または五依処の浄色、及び心処の色法の存在する、その理由は、喜ぶべき、悦すべき色彩、音声、香、味、触と法所縁を縁とした、貪愛である。

仏陀はまた言う、結生の直接的な因は業であるが、しかし、結生が果報になり得るためには、食愛が欠かせない。人類が結生する時、人類の生命を生じせしめることのできる色法〈注 169〉の業は善業であるが、しかし、結生自体の発生は、「取」であり、「取」はまた、「愛」を縁とし、「愛」はまた、無明――四聖諦への無知を縁とする。業生色は、すべての時、一切の時において、生起することができる。それは、すべての、その他の、色法の基幹である。一つひとつの心識刹那(cittakkhaṇa)(色法の寿命の 17 分の一)は、みな、三個の小刹那に分けることができる:生(uppāda)、住(thiti)、滅(bhaṅga)。一つひとつの小刹那には、みな、新しい業生色が生じる、すなわち、一個の五門心路の期間には、51 個の小刹那(17 心識刹那*3 小刹那)〈注 170〉があり、一つひとつの小刹那において、みな、無数の業生色聚が生起する。これらの業生色聚の中の時節は、また、時節生色聚を生じせしめることができ、食素はまた、新しい食生色聚を生じせしめることができ、食素はまた、更に多くの色聚を生じせしめることができる。

心生色

心生色(cittaja rūpa)は、八法聚によって構成されている。それらの食素(ojā)は心生食素であり、しかも、心処に依存して生起する所の心によってのみ、生じるのであり、五根門または五依処より生起した心によって生じるのではない。これ以外に、結生心を除いて、すべての心処に依存して生起するすべての心は、みな、心生色法を生じせしめることができる。憤怒と焦燥を例にとる。憤怒と焦燥は、みな、瞋心(dosa)に属する。瞋心は火界が最も顕著となる心生色法を生じせしめることができるが、これが、我々が憤怒または焦燥する時、感じる所の燥熱の原因である。次に、肢体が前に向かい、また後ろに向

かう時や、上方向や下方向に向かう時の、身体動作を例にとる。我々が走行する時、心は 太ももや、脚の部分に向かう。

当該の心は、太ももや脚部及び全身において、風界を主とする心生色法を生じせしめる。まさに、風が物を巻き込んで移動させることが出来る様に、風界もまた、身体の移動を遂行する。これらの動作が完成するのは、一系列の、異なる心生色聚が、異なる部位において、順序よく生じるからである。足を上げた時に生じる心生色聚は、足を前に進めた時に生じる心生色聚とは異なるものである。一種類毎の色聚は、同一の場所において生起し、かつ、(その場において)壊滅し、滅し去るほかなく、新しい色聚が、もう一つ別の場所において生起し、かつ、当該の場所において壊滅し、滅し去るのでる。

三番目の例は、止・観及び道、果の心である。これらの心は、非常に純粋、清らかであって、力があり、殊勝なものである。というのも、それらには、汚れ(upakkilesa)がないが故に。これらの心は多くの代の、純潔で清ら、殊勝な心生色法を生じせしめることができるが、その中の地界、風界と火界は、非常に柔軟、微細である。これらの柔軟で微細な色聚が身門(身十法聚の十番目の色法)に接触する時、禅修行者は、妙なる身体的感受、まったく沈重しない(地界が軽い)という体験をする。前に述べた通り、すべての色聚の中の火界は、みな、時節生色聚を生じせしめることができる。

故に、これら殊勝な心生色聚の中の火界もまた、身体の内部と外部において、多くの時節色聚を生じせしめることができる。これらの殊勝な心に伴って生じる所の、燦然とした、光耀と光明は、心生色聚と時節生色聚の中の「色彩」という名の、この色法の光明<注 171>を源としている。この事(事象)もまた、これらの殊勝な心を持つ禅修行者を養い育てるが、これが、彼らの皮膚と諸々の根が、みな、非常に清らかで清浄で、光耀いている原因である。<注 172>

例えば、アヌルッダ(Anuruddha)尊者の天眼智(dibbacakkhu abhiññāṇa)が生じせしめる色法は、一千個の輪囲世界(地球を取り巻いている世界)に広がっているが、それらの世界は、殊勝な心生色法によって照らし出され、かつ、彼には、それを、はっきりと見る事ができた。<注 173>。

同様に、もし、あなたが、充分な専注(力)、純粋な心を育成するならば、その他の生存 世界を見ることができる可能性があるのである。

時節生色

時節生色(utuja rūpa)は、八法聚によって構成されている。それらの食素は、時節生食素(utuja ojā)であり、すべての色聚の中においてかの第三界――火界(tejo dhātu) <注 174>から源を発している。すべての色聚の中の、火界は、みな、時節生色聚を生じせしめる事ができ、これらの新しい色聚はの中の火界は、また、新しい時節生色聚を生じる事が出来、新しい色聚の中には、また火界が存在していている等など。 <注 175>。 その力量に応じて、火界は斯くの如くに、多くの代の色法を生じることができるのである。

すべての、命の無い物質は、みな、火界によって生まれ、維持されている。植物は、非常によい例であって、それらの色法は、時節生色に属し、元々は、種の中にあった火界によって生じるのである。それらの成長は、ただ、一代また一代の時節生色が相続的に生起する現象である。それは土壌、太陽(熱)と水(冷たさ)の火界の支援を必要としている。例えば、石、金属、鉱物と硬木の中の火界は、非常に強力であり、非常に多くの代の色法を生じることができる。

故に、これらの物質は、非常に長い時間存在することができる。しかし、軟木、柔かい植物、肉、食べ物と水中の火界は非常に弱い為、非常に多くの代の色法を生じるせしめる事ができないが故に、これらの物質は、非常に速くに変化して壊滅する。物質の変化と壊滅は、その中の火界が、二度と新しい色法を生じないが為であり、代を経て、自身を消費しつくす。すなわち、物質はそれゆえに腐乱し、離散し、分解するのである。物質が火によって焼かれた時、例えば、薪が燃焼する時、内在する物質(薪)の火界は、外在する物質の火界(薪を燃焼せしめる炎)の支援の下、大量の火界を発出するが、この時、火界が主導する事によって、物質が焼き尽くされるのである。

食生色

食生色(āhāraja rūpa)もまた、八法聚によって構成されている。それらの食素は、食生食素(āhāra ojā)に属し、我々が食用としている食物と飲料において生じる。食器の中の食物、消化器管道の中の食物(口中の食物、食のみ込んだばかりの、胃の中の未消化の食物、腸管の中の半消化とすでに完全に消化された食物、糞便)、膿と尿も、みな同様に、すべて無生命の時節生食素八法聚である。消化の火は、命根九法聚の中の火界であ

り、業生色(以前に述べた<注 176>)に属する。消化の火が未消化または半消化の食物の、時節生食素八法聚(utuja ojaṭṭhamaka kalāpa)の中の食素に出会うと、すぐに、新しい新しい食素八法聚が生じる;それらは、食生食素八法聚に属し、食生食素(ahāraja ojā)を第八法とする。同様に、これらの食素が(業生の)消化の火に出会う時、また一歩進んで、多くの代の食素八法聚を生じる。これがまた、業生、心生と時節生色聚の中の食素、及び現有の食生色聚の中の食素を支えるのである。

一日の内に食べた食物、その食素は、この様にして、新しい色聚を、7日の長きにおいて、生じせしめることができる。ただし、具体的にどれほどの代、生じせしめることができるのかは、食物の品質による。天界の食素は最も殊勝であり、この様にして、生じる色聚は、一か月または二か月の長きにわたる。命根九法聚が全身に分布しているため、消化器管道の中の消化の過程もまた、全身に分布している。ただし、その程度は比較的弱い。例えば、薬油を皮膚の上に塗ったならば、または、薬物の皮下注射を行ったならば、薬物は、全身に拡散することができる(「消化される」)が、しかし、大量の薬油を皮膚に塗るならば、皮膚の微弱な消化能力では、非常に長い時間をかけてそれを消化する外ない。

色法の生因の簡単な説明は、ここで一段落する。更に多くの内容に関して、更に一歩進んで解説することができるが、しかし、この内容でもって、次に説明する四界差別について、あなたが更によりよく理解するには充分である。涅槃を証悟したいと思うのであれば、あなたはこれらすべてを知見しなければならない。というのも、あなたは色法を如実に知見する必要がある、それは、ただの概念として、ではないが故に。<注 177>

あなたは先に、物質現象は、色聚によって構成されている事を見なければならないし、その後に、密集の錯覚を打ち破らねばならない。異なる類型の色聚が、異なる種類の色法によって構成されている事を見て初めて、究極色法を見たのだ、と言える。その後、あなたは色法を分析しなければならない:異なる種類の色法、それらの生因及び作用を照見しなければならない。この事を成し遂げるために、あなたは、四界差別から始めてなければならない。すなわち、四大種(mahābhūtā)——地界、水界、火界と風界を知見しなければならないのである。

観の修習の始め

今、あなたは、正式に観の修習をしている、とは言えない。しかし、我々は、これは観の修習の始まりである、と言える。というのも、四界差別の修行を終えた後、あなたは究極色法を識別する能力を育て上げたからであり、そして、これは観の修習の必要要件であるが故に。我々は、あなたは、今、観の修習の為に必要な原材料を準備しているのだと言う。

これが、四界差別(の修行)が、すべての禅修行者にとって、必要な理由である。観の修習の道に入る為に、先に止禅業処(例えば入出息念(ānāpānassati)の修習から始めてジャーナを証得するまで)に取り組むか、または直接四界差別(近行定にしか到達できない)から入るにしても、先に、四界差別の修習を終えて初めて、観の修習を始めることができる。緬甸(ミャンマー)のパオ禅林(森林僧院)では、この二種類の方法とも、教導している。もし、先に止禅業処を育成するならば、彼は、一座毎に、先に第四禅に入り、光が明亮(明瞭)になり、燦然と輝く様になった時、ジャーナから出定し、その後、四界差別を修習する。

如何にして四界差別を修習するか

パーリ聖典には、二種類の四界差別の修習方法が書かれている:簡略法と詳細法である。簡略法は、智慧の鋭い者に適し、簡略法の修習に困難を覚える者は、詳細法を選ぶことができる。仏陀は《大念処經》の中において教導したのは、簡略法である:

「比庫は、この様に立ち、この様に処し、界によって、この身体を観察する: 『この身体 において、以下のものがある

- [1] 地界(pathavī dhātu)
- [2] 水界 (āpo dhātu)
- [3] 火界 (tejo dhātu)
- [4] 風界(vāyo dhātu)。』」

《清浄之道・四界差別修習》においては、更に一歩進んで、以下の様に解説する:

「この業処を修習したい鋭い智慧を擁する者は、静かな場所に行って禅坐し、己自身の色 身全体を思惟する: 『この身において、

- 「1] 堅固性または粗さは地界、
- 「2〕粘着性または流動性は水界、
- [3] 遍熟性または熱性は火界、
- [4] 支持性または推進性は風界。』 <注 178>

彼は、この様に簡略的に諸々の界を把握し、何度も繰り返して思惟・作意し、又『地界、水界、火界、風界』を観察し、有情はない、霊魂はない(と知る)。この様に精進すれば、久しからずして、諸々の界を識別する智慧と、それらの区別を知る智慧によって増強された定が生じる。(上述の定は)自性法を所縁としている為に、安止を証得する事はできないものの、近行定であれば、生起することができる。

また、如法に、(シャーリプトラ長老が)述べた様に、身体の四個の部分、四界の中において、如何なる有情も存在しない、という事を示しており、それはすなわち、『骨を縁にして、腱を縁にして、肉を縁にして、皮を縁にして包まれた所の空間をこそ色(rūpa)と呼ぶ。』のである。彼は、一つひとつの部分において、智の手によって、それらを分別し、また、上に述べた方法によって、それらを観察しなければならない。すなわち、『この身の中において、堅固性・・・安止を証得することはできない、近行定のみが生起する』」(Vm.308)

パオ禅林 (森林僧院) の教学は、《法集 [論]》 (Dhamma saṅganī) <注 179>に基づき、12 の特徴通して、全身の四界を識別する(方法を用いる):

地

1) 硬さ。 2) 粗さ。 3) 重さ。 4) 軟らかさ 5)滑らかさ。 6) 軽さ。

水

7) 流動性。8) 粘着性。

火

1) 熱さ。2) 冷たさ。

1) 支持性。2) 推進性。

この種の業処を修習する為に、あなたは、一回毎にひとつずつ、12種類の特徴を逐一識別する事を学ばなければならない。我々は、通常、初心者にとって識別しやすい特徴を選んで指導し、その後に比較的難しいものへと進む様にする。通常、以下の順序で教導する:推進性、硬さ、粗さ、重さ、支持性、柔かさ、滑らかさ、軽さ、熱さ、冷たさ、粘着性、流動性。それぞれの特徴は、身体の中の、どれか一つの部位から識別を始めて、その後に全身に向けて展開する、という方法が取られるものである。

如何にして 12 の特徴を識別するか

1) 推進性:推進性を識別する為に、あなたは、触覚を通して、呼吸する時の頭部中央の推進を感知することができる。それを識別した後、心の中で、それが明晰、明瞭になるまで、それに専注する。次に、注意力を近くの身体の部位に移動せしめ、かつ、その場所の推進性を感じる様、チャレンジする。この様にして、あなたは、徐々に、頭部の推進性を識別し、その後に、頸部、躯体、手、肩、太もも、足などにチャレンジする。この様に、何度もチャレンジして、あなたが、身体のどの部位に注意を向けても、容易に推進性を感じ取れる様にする。もし、頭部中央の呼吸を識別するのが容易でない時、呼吸をする時の、胸の膨張と収縮、または腹部の起伏を感じる様、チャレンジするのもよい。

もし、この様にしてもなお、不鮮明である時、脈拍、または何か明白な推進性を感じる様にしてもよい。活動のある所には、必ず推進性が存在しているものである。どこから始めるにせよ、頭から足先まで、全身の各々の場所において推進性を識別できる様になるまで、感知力をば、徐々に育成していく。ある部位の推進性は非常に明晰で、ある部位の推進性は不明瞭であるが、しかし、それは、確実に、全身の各所に存在する。あなたが、満足のいくまで、推進性を識別した時、(次には)硬さの識別にチャレンジすることができる。

2) 硬さ:硬さを識別する為に、あなたは歯を咬みしめてみて、その後に、(顎を)緩めて、それらの硬さを感じてみる。硬さを感じた後、頭から足先までにおいて、系統的に、全身の各所において硬さを識別する様、チャレンジする。この方法は、推進性を識別するのと似てはいるが、しかし、故意に身体を固くしてはならない。あなたが、全身におい

- て、硬さを識別することができたならば、再度、全身の推進性を感じる様にチャレンジする。推進性と堅さの二者を、交互に感じる。一度、また一度と、何度も、頭から足先まで、全身の推進性を識別し、その後に、全身の硬さを識別する。この様に、あなたが満足を覚えるまで、重複して多数回、修習する。
- 3) 粗さ:粗さを識別する為に、あなたは、あなたの舌でもって、周辺を摩擦してみるか、または、手で以て袈裟を擦るか、または腕の皮膚を擦り、その粗さを感じる様にする。そして、引き続き、前に述べた様に、系統的に、全身の各所nおいて、粗さを識別する。もし、粗さを感じる事ができないならば、再度、推進性と硬さに戻れば、あなたは、それらと共に、粗さを識別することができる。粗さを識別した後、再度、推進性、硬さ、粗さという、この三者に戻って、識別する。一度毎に一個、何度も何度も、全身の各所を、満足を覚えるまで、識別する。
- 4) 重さ:重さを識別する為に、あなたは、膝の上に、手を置き、その上にもう一つの手を重ねて、上においた手の重さを感じる様にする。または、頭を前方に垂れて、頭の重さを感じる様にする。全身の各所すべてにおいて、重さを感じる事が出来る様になるまで、系統的に修習する。重さを明晰に識別した後、再度、全身の推進性、硬さ、粗さと重さという、この四種類を、満足するまで、識別する。
- 5) 支持性:支持性を識別する為、あなたは、背中を緩めて、身体を前方に傾斜させ、その後に、(背中を)真っ直ぐに戻して、その姿勢を保つ。身体を真っ直ぐに保つ力は、すなわち、支持性である。全身の各所のすべてにおいて、支持性を識別できる様になるまで、系統的に修習する。もし、不鮮明であるならば、硬さも同時に識別する事にチャレンジしてみる。この様にすれば、支持性を識別するのが容易になる。あなたが容易に、支持性を識別できる様になったならば、全身の各所において、推進性、硬さ、粗さ、重さと支持性という、この五者を識別する様チャレンジする。
- 6) 軟らかさ:柔らかさを識別する為に、舌でもって、唇の内側を軽く押してみて、その軟らかさを感じ取り、その後に全身をリラックスさせる。あなたが、全身の各所において、容易に軟らかさを識別できる様になるまで、系統的に修習する。その後に、全身の推

進性、硬さ、粗さ、重さ、支持性と柔らかさとい、この六者を識別できる様、チャレンジ する。

- 7) 滑らかさ:滑らかさを識別するために、あなたは、あなたの唇を湿らせて、その後、舌で唇の上を左右に滑らせる。あなたは、全身の滑らかさを識別できる様になるまで、練習しなければならない。その後に、全身の七種類の特徴すべてを識別できる様にチャレンジする。
- 8) 軽さ:軽さを識別するために、あなた手の指を上下させ、かつ、その軽さを感じる様にする。もし、感じ取る事ができないならば、先に重さを識別してみる;全身の重さを感じ取った後、再度、手の指を上下に曲げてみて、その軽さを感じ取る様にする。全身の軽さを感じ取ることができる様になるまで練習する。その後に、八種類の特徴をすべて識別できる様にチャレンジする。
- 9) 熱さ:通常は、全身の熱さ(または暖かさ)は、非常に容易に識別することができる。暖かさや熱さを感じ取ることが容易な個所から識別を開始する。その後に、9種類の特徴を識別できる様、チャレンジする。
- 10) 冷たさ:冷たさを識別する為に、あなたは、呼吸が鼻腔に入る時の冷たさを感じ取る様にする。その後に全身の各所において、系統的に冷たさを識別する。

今、あなたは、10種類の特徴を識別した。前に述べた10種類の特徴は、みな、触覚を通して、直接感知することができるが、しかし、最後の流動性と粘着性という、この二種類の特徴は、そのほかの10種類の特徴から推測・断定したものである。これが、この二種類を最後に教える理由である。

11) 粘着性:粘着性を識別する為に、あなたは身体がどの様にして、皮膚、筋肉と筋腱によって連結されているのかを感じる様にする。血液は皮膚に守られて体内に保持されるが、それは、ちょうど風船の中の水の様である。粘着性がなければ、身体は、小さな欠片か、粉末になって分散してしまう。身体を保つのは、地表に存在する地心の引力と同じ粘着性である。もし、明確にならないのであれば、全身において、10個のすべての特徴を、

一度に一個、反復して識別する。この事に熟練する時、あなたは、粘着性の特徴もまた、 非常に明確になって来るであろう、もし、未だ明確にならないのであれば、繰り返し、推 進性と硬さの特徴を識別し、その後に、あなたは、身体が縄で縛られた様に感じるであろ う。これを粘着性であると識別し、かつ、その他の特徴と同じ様に、練習する。

12) 流動性:流動性を識別する為に、あなたは口腔の中の唾液の流動、血管の中の血液の流動、肺の中に吸い込んだ空気、または全身に流れる熱のエネルギーを感じる様にする。もし、明確でないならば、それと冷たさ、熱さまたは推進性を同時に感じとる様にする。この様にすれば、あなたは流動性を感じることができる。

頭から足先までの、全身において、12個のすべての特徴を明確に識別する事が出来る様であれば、あなたは、この順序に従って、それらを繰り返し識別しなければならない。満足を得た後、あなたは、(この修習を)始めたばかりの時にアドバイスした所の順序によって、再度調整する:硬さ、粗さ、重さ、柔かさ、滑らかさ、軽さ、流動性、粘着性、熱さ、冷たさ、支持性と推進性である。

この順序に従って、頭から足先まで、一つひとつの特徴を、一度に一個、識別できる様、 チャレンジする。あなたは、一分間に少なくとも三個識別できるほど、非常に速く識別で きる様に練習しなければならない。

この様に修習する時、ある種の禅修行者は、諸界のバランスを失って、ある種の界が過度に強く感じられて、耐え難くなる、特に、硬さ、熱さと推進性が非常に強烈になる事が多い。もし、この様な状況が発生したならば、あなたは、比較的多くの注意力を、対立する特徴の上において、この様なやり方で、引き続き専注力を育成する。

例えば、もし、流動性が過剰に強い時、粘着性に多めの注意を払う;もし、支持性が過剰 に強い時、推進性に多めの注意を払う;対立する特徴とはすなわち:硬さと柔らかさ、粗 さと滑らかさ、重さと軽さ、流動性と粘着性、熱さと冷たさ、支持性と推進性である。

これが、諸界をバランスする為に、先に12種類の特徴を教導する理由である。諸界がバランスする時、定力は比較的容易に成就することができる。

全身における 12 種類の特徴を識別することに熟練し、かつ、12 種類の特徴もまた、非常に明晰である時、あなたは、前の六個の特徴を地界として、その後の二個を水界、その後の二個を火界、最後の二個を風界として、それらを、同時に識別しなければならない。あなたは、この様に、地、水、火、風を継続して識別し、心を平静にせしめると同時に、定力を成就する。

上に述べた方法によって、百回、千回ないし百万回、繰り返し識別する。心内の平静を保ち、専注するよい方法として、もはや、あなたの注意力を、身体の一部分から、別の個所へと移動させるのではなく、これに替えて、全身をくまなく見る様にする。通常、最も佳い方法は、まるで、あなたが、双肩の後ろから全身を視ている様にするか、または、頭頂部から下に向かって視る様にする。但し、この方法は、緊縛と諸界のアンバランスを引き起こす可能性もある(ので、注意が必要である)。

定力を育成する 10 種類の善き方法

《清浄之道》の復注では、今(この段階において)、10種類の方法によって、定力を育成することができるという<注180>。

あなたは四界を識別しなければならない:

- 1) 順序よく(anupubbato): 仏陀の教導した順序—地、水、火、風。
- 2) 速すぎない (nātisīghato): 四界の識別 (の速度) が速すぎる時、あなたは、それら を明晰に見ることができない。
- 3) 遅すぎない (nātisaṇikato): 四界の識別 (の速度) が遅すぎる時、あなたは、修習を 完成することができない。
- 4) 散乱を除く (vikkhepapaṭibāhanato) : 心をして、唯一、禅修行の業処、すなわち、四界の上において維持せしめて、心を散乱させない。
- 5) 概念を超越する(paṇṇattisamatikkamanato): 心をして、ただ「地、水、火、風」と念じるに任せてはならず、これらの概念が代表する所の、実際の含意——硬さ、粗さ、重さ、柔かさ、軽さ、流動性、粘着性、熱さ、冷たさ、指示性と推進性に注意を払う事。
- 6) 明晰でないものを捨てる (anupatthāna muñcanato):

ひとたび、12 種類の特徴すべてを識別できる様になったならば、あなたは、一時的に、明 断でない特徴を捨てることができる、ただし、この様にするのは、諸々の界のバランスを 失って、痛みや緊縛感が生じない場合に限る。同時に、四界の一つひとつに対して、あなたは、少なくとも一個の特徴を保留する事。三界のみ、二界のみ、または一界のみを識別するという様な事をしてはならない。勿論、12種類の特徴すべてがみな明晰である時、どの特徴も捨てないのが最も良い。

7) 特徴の識別 (lakkhaṇato) : 禅の修行を始めたばかりで、一つひとつの界の特徴がいまだ不鮮明である時、あなたは、各界の作用と現起 (現象) <注 181>に専注するのもよい。

そして、定力が上昇した時、あなたは、自性相(sbhāvalakkhṇa):地界の硬さと粗さ、 水界の流動性と粘着性、火界の熱さと冷たさ及び風界の支持性にのみ専注するべきであ る。

この段階においては、あなたは、四界のみ見て、もはや「人」とか「自我(これは私である)」等と、見做す事がない。復注は、更に一歩進んで、以下の三篇の経典に基づいて 定力を育成する様にと提案する:

- 8) 《增上心経》(Adhicitta Sutta)
- 9) 《清凉経》 (Sītibhāva Sutta)
- 10) 《覚支経》 (Bojjhṅga Sutta) <注 182>。

仏陀は、この三篇の経典の中において、五根(indriya):信、精進、念、定、慧のバランス、及び七覚支(bojjhaṅga):念、択法、精進、喜、軽安、定と捨のバランスを教導している。これに関しては、我々は、第一講において、説明をした。<注 183>。

如何にして究極色法を見るか

身体の透明な塊の如くの状態にあるを見る

四界差別を通して、引き続き定力を育成し、かつ、近行定(upacāra samādhi)に向かう時、あなたは異なる種類の光を見るであろう。有る種の禅修行者について言えば、その光は灰色をしている。もし、更に続けて灰色の光の中の四界に専注するならば、それは、綿花の如くの、白色に変化し、その後に、白雲の如くに、白く輝く様になり、あなたの全身もまた、一塊の白色の身体の塊になる。更に引き続いて、この白色の身体の塊の中

の四界に専注するならば、最終的には、透明なクリスタル様、氷かまたはガラスの様相を 顕す様になる。この種の透明な物質はすなわち、五浄色(pasāda) <注 184>である:身 浄色、眼浄色、耳浄色、鼻浄色と舌浄色。身浄色は、全身及び六依処に分布しており、故 に、身体全体が透明になるのである。あなたに、浄色が透明な身体の塊または、透明な塊 が見えるのは、あなたがいまだ、相続密集、構成密集と作用密集という、この三種類の密 集(ghana) <注 185>を看破できていないが故である。

如何にして色聚を見るか

引き続き、透明の身体の塊(または塊)の中の四界を識別し続けるならば、それは燦爛として発光する様になる。あなたがその透明の身体の塊(または塊)の中の四界を、少なくとも半時間、継続して専注する事ができるならば、それはすでに近行定に到達したのだと言える。この種の光を利用して透明な身体の塊の中にある微小な空間を探す事によって、その空界を識別することができる。あなたは、透明な身体の塊が粉々に粉砕されて小さな微粒子になるのを発見するが、それを色聚と言う<注 186>。この段階に到達した場合、心清浄(Citta-visuddhi)と呼ぶ。あなたは色聚の分析を通して、更に一歩進んで、見清浄(Ditthi-visuddhi)を育成することができる。これが、観禅の始まりである。

(定力の利益)

如何にして観禅を修習するか、という解説をする前、先に、我々は、純観乗者が証得する所の近行定、及び、止乗者が証得する所のジャーナが獲得することのできる実際の利益について、見ていくことにする。観の修習をする時、識別する対象は非常に多いため、疲労が常に発生する。この様な状況が発生した時、最もよいのは休憩する事である。《中部・二種尋経》の義注<注187>では、禅修行者が如何にして、ジャーナの中において休息するのかという、一つの例が挙げられている。当該の義註がいう所では、戦場において、時々、戦士は疲労する。しかし、敵軍が強く盛んであり、矢が雨の様に飛んでくる時、戦士は塹壕に帰ってくる。塹壕の中では、彼らは、敵軍の弓矢の飛んでくる脅威から免れて、休息することができる。体力が回復した後、再度塹壕から離れて、戦場に戻る。

ジャーナは、この塹壕の如く、観の修習の過程の中において、休息の場所とすることができる。ジャーナがなく、直接、四界差別から切り込む純観乗者は、近行定をもって、塹壕として、そこで休息することができる。この二種類の情況において、禅修行者は、明晰な、心新たな状態でもって、観の修習の戦場に戻ることができる。こうした事から、休息

処が一か所あるという事は、非常に大きな利益となるのである。次に、我々は、色聚の分析に戻って、如何にして観禅の修習をするのかを解説する。

明浄色聚と非明浄色聚

色聚は二種類に分類することができる:名浄色と非明浄色である。五種類(眼浄色、耳 浄色、鼻浄色、舌浄色、または身浄色)の内の一つが含まれる色聚を明浄色聚といい、そ の他の色聚は、非明浄となる。

如何にして色聚を分析するか

如何にして四界を見るか

あなたは先に個別の明浄と非明浄色聚の中の地、水、火、風の四界を識別しなければならない。あなたは、これらの色聚が極めて快速に生・滅しており、その速さ故に、それらを分析できない事を発見するであろう。いまだ、三種類の密集<注188>を看破していないが故に、この時点で、あなたはなお、概念法(pañnatti)の範疇にいて、勝義諦

(paramattha sacca) の領域には到達していない。あなたが、構成と形状の概念を看破できていないが故に、いまだ、粒子、小さな塊の概念から、離れられないでいる。もしあなたが、更に一歩進んで(修行を)しようとせず、これらの微小な粒子を観照しようとするならば、すなわち、色聚の生・滅をもって、観の修習とするのであるならば、あなたはただ、概念法に対して観の修習<注 189>をしているに過ぎないのである。故に、あなたは更に一歩進んで、単一の、一粒の色聚の中にある諸界を見ることができる様になるまで、色聚の分析を行わなければならない。その目的は、勝義諦を見る為、である。

もし、色聚が極めて快速に生・滅するのが原因で、あなたには、単一の、一粒の色聚の中の四界を識別することができないのであれば、あなたは、それらの生・滅を無視するのがよい。それはちょうど、あなたが会いたくない人に出会った時に、彼がそこにいない風に思うか、彼に注意を払わないという事に似ている。あなたは、こうして、色聚の生・滅に注意を払わず、ただ、単一の一粒の色聚の四界に専注しなければならない。禅定の力によって、あなたの、この様な修習は(実現)可能であるはずである。もし、いまだ成功しないのであれば、あなたは、全身の地界に専注し、その後に、単一の一粒の色聚の中の地界に専注する事を、交互に交代しながら実践する。水界、火界と風界についても同様であ

る。あなたは、単一の一粒の明浄色と単一の一粒の非明浄色の中の四界を識別する必要が あるのである。

上に述べた事柄は、我々が、パオ禅林(パオ森林僧院)において教導している所の順序である――諸界を逐一識別する事。経典において、同時にすべての諸界を識別しなければならない、と述べているが、しかし、それらの作者は、熟練した禅修行者であり、対象となる読者もまた、みな、熟練した修行者である。色法の諸界を識別する事は、極めて奥深い(行為である)が故に、初心者の観智の力は、通常、いまなお、すべての諸界を同時に見るというには、充分強力な力を有さない。

そのため、我々は、彼らに対して、先に、逐一、一か所づつ、諸界を識別して、容易(な修行)から難度を上げていく様にしているのである。彼らの修習が、非常に熟練した時、一粒の色聚の中の、すべての四界(八つの特徴)<注 190>を、同時に、見ることができる様になるのである。あなたが、すでに、単一の、一粒の明浄色聚と、単一の、一粒の非明浄色聚の中の四界を見る事ができるならば、それは止(サマタ)の修習の終結であり、心清浄(Citta-visuddhi)の終点であり、また、観の修習の始まりであり、見清浄(Diṭṭhi-visuddhi)の始まりであり、また、究極名色法(ñāmarūpa-pariggaha)の識別の始まりであると同時に、究極名色法の分析(ñāmarūpa-pariccheda)の始まりでもある。これが、四界差別(の修習)が、止(サマタ)と観(vipassanā)の両者を含む理由である。

(上記の修習に)成功した後、次には、順序よく、眼処、耳処、鼻処、舌処、身処と心処という、この六依処の中において、更に多くの明浄色聚と非明浄色聚の中の四界を識別しなければならない。上に述べた通り、明浄色聚と非明浄色聚には、みな、八種類の、最も基本的な色法が含まれている。今、あなたは、すでに、この四種類を識別したのであるから、次に、引き続き、残りの四種類を識別しなければならない:色彩、香、味と栄養素である。しかし、識別を開始する前、我々は先に、この四界を識別する為の、一般的な順序を解説したいと思う。

アビダンマの義註《去除愚痴》の中において、以下の様に言う:<注 191>

[&]quot; Sabbopi panesa pabhedo manodvārikajavaneyeva labbhati."

「すべての各種類の法は、皆、唯一、意門速行(javana)<注 192>によってのみ、認識、識知されえる」

一粒の色聚の中の地、水、火、風の四界は、唯一、単独に、意識を通してのみ、認知されるのであるから、故に、この種の方式でもって、一粒の色聚の中の色彩、香と味を認知することができる。意識を通してのみ、色彩を観照、見ることは非常に容易ではあるけれども、この種の方式でもって、香と味を識別するのは、難しい。というのも、我々は、終生、鼻と舌でもって、それらを認知する習慣を持つからである。故に、あなたの禅修行が、非常に強くて力のあるものになっている場合でないのであれば、あなたは鼻識または舌識を借りて、それらの識別を実践しなければならない。すでに、所縁の識別の、二種類の方法を説明した後、次に、色聚の中の色彩、香、味と栄養素の識別の方法がどの様なものであるかを、見てみようと思う。

如何にして色彩を識別するか

色彩(vaṇṇa)は、五番目の識別されなければならない色法である。それは、視覚の所縁(rūparammaṇa)であって、すべての色聚の中において、存在している。それは意識によって、非常に容易に単独に、識知される。というのも、色聚を見ることができた、という事はすなわち、あなたはすでに色彩を見たのだと、表明することができるが故に。色彩は、永遠に、物体の色彩であり、当該の物体は、すなわち、四界なのである。<注 194 >。

如何にして香を識別するか

香(gandha)は、識別されなければならない、六番目の色法である。それは臭覚の所縁(gandhārammaṇa)であり、同様に、すべての色聚の中に存在している。終生、鼻でもって臭いを嗅ぐ習慣を持っているが故に、識別の修習を始めたばかりの頃、あなたは、意識でもって、香を認知する時、鼻識を借りて、それを支援しなければならない。

この事を実践する為に、あなたは先に、この二種類の識が依存している所の色法、すなわち、鼻浄色と心処色を識別しなければならない。鼻浄色は、鼻 10 法聚の中の、10 番目の色法であり、心処色は、心 10 法聚の中の第 10 番目の色法である。鼻浄色を見つける為に、先に、鼻の中における四界を識別しなければならない。しかし、鼻の中で見つけたのは、鼻依処を擁する所の 10 法聚である事を確定する必要がある。それは、身依処を擁する 10 法聚ではなく、唯一、鼻 10 法聚のみ、鼻浄色を擁しているのである(が故に)。

次に、心処色を見つけなければならない。あなたは、明瞭(明亮)で、光明な、光輝く、意門(有分)<注 195>を識別しなければならない。あなたはすでに、六依処の明浄色聚と非明浄色聚の中の四界を識別したことがあるが故に、上記の事柄を実践するのは、容易である。すでに、鼻浄色(鼻門)と有分(意門)を識別したので、次に、識別した所の、浄色の鼻 10 法聚付近において、一粒の色聚の香を識別する。あなたは、香が、鼻門と意門を同時に衝撃するのを、見るであろう。

如何にして味を識別するか

味(rasa)は、七番目に識別しなければならない色法である。それは味覚の所縁(rasārammṇa)であって、他と同じく、すべての色聚の中において、存在している。香を識別するのと同じ様に、修習の初めには、あなたは、舌識の支援を受け、それをば意識への補助とし、味を認知しなければならない。ここにおいて、あなたは、前に述べたのと同じく、先に、二種類の、識が依存する所の色法を識別する必要がある、すなわち、舌浄色と心処色である。それを完成した後、次に、一粒の色聚の味を識別する。あなたは、舌の上にある唾液の中から、一粒の色聚を取り出して、識別を実践する。

如何にして栄養素を識別するか

食素(ojā=栄養素、以下同様)は、識別しなければならない、八番目の色法である。 前に述べたと同じく、色聚の中において存在する。食素は、以下の四種類に分類すること ができる: <注 196>

- 1) 業生食素(kammaja ojā)
- 2) 心<注 197>生食素 (cittaja ojā)
- 3) 時節生食素(utuja ojā)
- 4) 食生食素 (āhāraja ojā)

どの様な、任意の、一粒の色聚を検査しても、あなたは、その中に常に、食素を見つけ出すことができ、かつ、食素から、何度も(何代にも)、多くの色聚が生じているのを、見ることができる。すべての色聚の中に、必ず存在しているこの八種類の基本的色法を識別し終えたならば、あなたは、特定の色聚にのみ存在する所の、その他の三種類の基本的色法:命根色、性色と心処色を識別する事にチャレンジしなければならない。

如何にして命根色と性色を識別するか

命根(jīvitindriya)色は、唯一、業生色を維持する、その意味はすなわち、業生色聚の中においてのみ、存在する、という事である。前に述べた通り<注 198>、すべての明浄色聚は、みな、業生に属しており、故に、明浄色聚の中において、命根色の識別を開始する事は、最も容易な事柄である。一粒の眼 10 法聚<注 199>を識別すると、命根色が、ただ、所在する所の色聚の中において、色法を維持しているのが見えるが、その他の色聚の色法(を維持しているの)ではない(ことが分かる)。次に、あなたは、非明浄色聚の中の命根を識別する様、チャレンジしなければならない。身体の中では、三種類の非明浄色聚が、命根色が存在している:

- 1) 心 10 法聚<注 200> (hadaya-dasaka kalāpa) : 心臓の中にのみ、存在する。
- 2) 性 10 法聚<注 200> (bhāva-dasaka kalāpa) : 全身に分布している。
- 3) 命根 9 法聚<注 200>(jīvita-navaka kalāpa): 全身に分布している。

命根9法聚または性10法聚の中において、命根色を識別する事を開始するのは、最も容易な事柄である。この二種類の色聚を区別する為、あなたは、性色(bhāvarūpa)を探す様にチャレンジする。あなたは、先ほど、すでに、目の中の一粒の明浄色聚の中にある命根を識別することができた。今、引き続き、目の中において、一粒の、命根を擁する所の、非明浄色聚を探す。当然、命根9法聚と性10法聚は、六種類の感官の中において、見つけることができる。というのも、二者は同じ一つの場所に同居しているが故に:もし、性根色を擁しているならば、それは性根10法聚であり、もしそうでなければ、命根9法聚である。この種の方法でもって、性根が識別できる。また、その他の非明浄色聚を識別する。次に、耳、鼻、舌、身体と心臓の中の色聚の中において、それを探す。

如何にして心処色を識別するか

心臓の中の非明浄色を識別するには、あなたは、再度、明瞭(明亮)で、光明な、輝く意門(有分)に専注する。それを、非常に明確な状態で見る為に、指を軽く動かしてみて、かつ、指を曲げようとしている心を観察する。次に、有分が、どの様に、心処――非明浄の心 10 法聚に依存して、生起するのか、を識別する様、チャレンジする。あなたは、有分の下方にそれらを見つけることができるであろう。ここにおいて、あなたはすで

に、色聚の中のすべての、各種の、色法の識別を完成させた:地、水、火、風、色彩、匂い、味、食素(栄養素)、命根、性色と心処色である。

あなたは、すでに、六種類の感官すべての中において、相関する所の明浄と非明浄色聚の中の、それらを識別することができた。次に、あなたは、色法を識別する仕事とは、逐一、六種類の感官<注 201>を分析すること、すなわち、目、耳、鼻、舌、身体と心臓の中の色法であるが、かつ、その中の異なる類型の色聚を見ることである。あなたは、二種類の明浄色を分析する事から始めることができる。

如何にして一つひとつの感官を分析するか

如何にして浄色を分析するか

一つひとつの感官には、何種類もの色聚が同じところに混在している。その内、目、 耳、鼻と舌には、それぞれ、二種類の明浄色聚があるが、それは、それぞれの感官の明浄 色聚と、身体の明浄色聚と混ざり合って存在している。それはちょうど、米粉と小麦粉が 同じ所で混ざり合っている様なものである。

- 1) 眼 10 法聚 (cakkhu-dasaka kalāpa): 十番目の色法を眼浄色とする。
- 2) 身 10 法聚 (kāya-dasaka kalāpa) : 十番目の色法を身浄色とする。

身 10 法聚は、六種類の感官(目、耳、鼻、舌、身体と心臓)に分布しており、かつ、各々の場所において、特定の 10 法聚と混在している:目の中においては、眼 10 法聚と混在している;耳の中においては、耳 10 法聚 (sota-dasaka kalāpa) と混在している、等などである。この事を見るためには、あなたは、五種類の感官の中における、明浄色聚を分析し、かつ、一つひとつの場所における個別の浄色(眼浄色、耳浄色、鼻浄色と舌浄色)、及び当該の場所における身浄色を確定しなければならない。先ず、目から始める。

1) 眼浄色 (cakkhu-pasāda) : 色彩に対して、敏感である。身浄色は、接触(触所縁)に敏感である。この種の差異よって、あなたは、それらの間の区別を知る事ができる。先に目の中の四界を識別し、一粒の明浄色聚を見つけ、当該の色聚の明浄性を識別する。次に、目から一定の距離のある場所の一組の色聚の色彩を見つけて、もし、それが当該の浄色を衝撃するならば、当該の浄色は(眼 10 法聚の中の)眼浄色であり、そうでない場合は、すなわち(身 10 法聚の中の)身浄色である。

- 2) 身浄色 (kāya-pasāda): 触れる事、触所縁に敏感である。触所縁とは、地界、水界、 火界、風界の事である。再度、目の中の一粒の浄色を識別し、その後に、その付近の一組 の色聚の地界、火界、または風界を見る。もし、それが当該の浄色を衝撃するならば、す なわち、当該の浄色は、(身 10 法聚の中の)身浄色である。今、あなたはすでに、目の 中の眼浄色と身浄色の識別を行った。次に、同様の順序でもって、その他の諸々の処門を 識別する。まずは、耳から始める。
- 3) 耳浄色 (sota-pasada):音に対して敏感である。耳の中の一粒の浄色を識別し、その後に音声を聞く。もし、音声が、当該の浄色を衝撃するならば、それはすなわち、当該の浄色は(耳 10 法聚の中の)耳浄色である。次に、目の色法を識別したのと同じ方法によって、当該の身浄色を識別する。
- 4) 鼻浄色 (ghāna-pasāda): 臭い (香) に敏感である。鼻の中の一粒の浄色を識別し、その後に、近くにある一組の色聚の臭いを嗅ぐ。もし、それが当該の浄色を衝撃するならば、当該の浄色は、(鼻 10 法聚の中の)鼻浄色である。次に、目、耳の色法を識別したのと同じ方法によって、当該の身浄色を識別する。
- 5) 舌浄色 (jivhā-pasāda): 味に対して敏感である。舌の中の一粒の浄色を識別する。その後に、近くにある一組の色聚の味を味わう。もし、それが、当該の浄色を衝撃するならば、その浄色は、すなわち、 (舌 10 法聚の中の) 舌浄色である。次に、目、耳、鼻の色法を識別した時と同じ方法によって。当該の身浄色を識別する。

あなたが、五種類の感官の中の、一つひとつの処の二種類の浄色(身体には一種類しかない)を分析した後、引き続き、心臓の中の(身 10 法聚の中の)身浄色を識別する必要がある。上記が完成された後、あなたは、五種類すべての浄色の分析を完了した事になる。

如何にして性色を分析するか

性 10 法聚は、全身の、六種類の感官に分布しており、かつ、明浄色聚と同じ場所において、混在している。あなたは、命根を識別する時に、すでに、性 10 法聚を識別した事がある為、今、六種類の感官すべての中において、それらを識別するべきである。

目の中の54種類の色法

これまで、我々は、すでに、三種類の基本的な色聚について説明してきた:

- 1) 六種類の感官(目、耳、鼻、舌、身体と心臓)の中の10法聚;
- 2) 命根 9 法聚;
- 3) 八法聚。

我々は、すでに、目、鼻、耳、舌と心臓の中の、それぞれに存在する所の、7種類の色 聚、合計 63 種類の色法があるのを見て来た<注 202>。

しかし、一つひとつの処門色法を分析する事柄に関して、パーリ経典では、ただ、その中の、六種類の色聚(命根 9 法聚を除く)にのみ、言及しており、あなたは、54 種類の色法 (63-9=54) <注 203>にのみ、専注すればよい。命根 9 法聚は、少し後に、別の方式によって識別する。その上、あなたが見た様に、六種類の色聚の中の一種類は、身 10 法聚であり、故に、あなたが、身体自体(目、耳、鼻、舌と心臓以外)の色法を分析する時、ただ、五種類の色聚、すなわち、44 種類の色法を分析すればよいのである。

今、我々は、目を例にして、この 54 種類の色法を見てみようと思う。目の中には、合計 6 種類の色聚があり、あなたは、先ほど、前の 3 種類の色聚、合計 30 種類の色法を識別し、また分析した:

- 1) 眼 10 法聚<注 204> (cakkhu-dasaka kalāpa) : 色彩に対して敏感である。明浄である。業生色に属する;
- 2) 身 10 法聚<注 204>(kāya-dasaka kalāpa): 触所縁(地、火と風界)に敏感である。明浄である。業生色に属する;
- 3) 性 10 法聚<注 204> (bhāva-dasaka kalāpa) : 非明浄である。業生色に属する。

この他に、なお、三種類の色聚があるが、一つの種類ごとに、八種類の色法があるため、合計で、24 種類(3*8=24)となる。それらは、三種類の食素(栄養素)八法聚<注 204>であり、すべて、非明浄である:

- 1) 心生食素八法聚 (cittaja ojaţṭhamaka kalāpa)
- 2) 時節生食素八法聚(utuja ojaṭṭhamaka kalāpa)
- 3) 食生食素八法聚 (āhāraja ojaṭṭhamaka kalāpa)

前の三種類の色聚(10 法聚)は、みな業生であり、後ろの三種類の色聚(八法聚)は、 それぞれ、時節、心生と食生に分けることができる。ちょうど、本講話の始まりにおいて 説明した様に、色法の来源は、四種類ある<注 205>。

あなたは、すでに、業生色聚を識別したのであるから、次に、我々は、これらの八法聚が、どの種類の類型に属しているか、如何にして識別するのか、について説明する。

如何にして心生色法を識別するか

本講話の中の「はじめに」で説明<注 206>した様に、結生心を除いて、一つひとつの、心処色に依存して生起した所の心識は、皆等しく、大量の心生食素八法聚(cittaja ojaṭṭamaka kalāpa)を生じせしめる。それらは非明浄で、かつ、全身に分布している。故に、もし、あなたが有分に専注するならば、あなたは、多くの、心処色に依存した心識が、不断に色聚を産しているのを、見るであろう。もし、明晰に見ることができないのであれば、再度、有分に専注して、かつ、あなたの指を動かしてみる。この様にすれば、あなたは、心が、指を動かしたいと思う事によって、大量の色聚が産じられるという現象、また、これらの色聚は、身体のどの様な場所にも生じるのを、見ることができるであろう。

如何にして時節生色を識別するか

「はじめに」<注 207>に述べた如くに、火界(tejo)はまた「時節」(utu)とも呼び、すべての色聚の中において存在する。すべての色聚の中の火界は、時節生食素八法聚(utuja ojaṭṭhamaka kalāpa)を生じせしめる。それら自身には、また、火界を含有しており、当該の火界は、また、新しい代の時節生食素八法聚を生じることができる。あなたは、一つひとつの感官において、一つひとつの類型の色聚における、この様な再生の過程を見なければならない。

例えば、先に、一粒の眼 10 法聚の中の火界を識別し、その後に、それが時節生食素八 法聚を生じせしめるのを見るのである:これが第一代目である。次に、第一代目の時節生食素八法聚の中の火界を識別して、かつ、それが同じく、新しい色聚を生じせしめるのを見る;これが第二代目である。この様にして、眼 10 法聚 (それ自身は業生色に属する) <注 208>の中の火界が、四または五代の色聚を生じることができるのを見ることができるが、具体的に何代の色聚を生じせしめることができるかは、食物と業の力に依る。 <注 209>。あなたは、一つひとつの感官の中において、一つひとつの類型の色聚毎に、この

種の再生の過程を見なければならないと同時に、かつ、己自身自ら、一つひとつの種類の 色聚が、何代の時節生食素八法聚を生じせしめることができるかを、見なければならな い。

如何にして食生色法を識別するか

前に述べた通り <注 210>、身体の中には、ただ四種類だけ、無生命の時節生食素八法聚(utuja ojaṭṭhamaka kalāpa)があるが、それはすなわち:未消化の食物、すでに消化された食物(糞)、膿と尿である。そして、身体の消化の火(消化器官において、最も盛んである)は、すなわち、業生命根 9 法聚(jīvita navaka kalāpa)の火界である。 <注 211>

時節生食素八法聚の中の食素が、消化の火に出会う時、更に多くの色法を生じせしめる、すなわち、食生食素八法聚(āhāraja ojaṭṭhamaka kalāpa)である。それら自身はまた、食素を含んでいる――食生食素(āhāra ojā)で、そして、これらの食素はまた、同様の方式でもって、多くの代生じることができる。一日の内に摂取する食素は、上に述べた様に再生するが、それは一週間の長きにわたることができる。この期間内において、それは業生、心生と時節生色聚の中の食素、及び元々あった食生色聚の中の食素<注212>を支援して、支える。天界の食素は、一または、二か月の長きにわたって再生することができる。

上記の過程を観察する為に、あなたは、食事をする時に、禅の修習をするのがよい。あなたは、食生色聚が、消化器官――口腔、食道、胃と腸――から全身に拡散するのを見ることができる。あなたは、先に、これらの場所において、今食べたばかりの食物の中の四界を識別し、かつ、その中の色聚を見る様にする。消化の火(命根9法聚の中の火界)が、先ほど飲み込んだばかりの食物(時節生食素八法聚)の食素に出会う時、多くの代の食生食素八法聚が生じ、かつ、全身に散布されるのを、引き続き、観察する。それらは皆、不透明で、かつ、八種類の色法が含まれているのを見る。あなたは、また、食事の後、これらの過程を観察する事も出来る、胃と腸の中の未消化の食物を分析するのである。

次にあなたは、これらの食生食素八法聚が、如何にして全身に分布するのか、を識別しなければならない。ここでは、目に到達するのを例とする。目の中において、これらの色

聚の中の、八種類の色法を識別し、かつ、それらの食素が、食生食素に属している事を見る。その後、それが、眼 10 法聚の業生食素に出会う時、それは消化の火と一緒になって、眼 10 法聚(cakkhu-dasaka kalāpa)の中の食素が、四または五代の食生食素八法聚〈注 213〉を生じせしめるのを支え、助けるのを見ることができる。具体的に、どれだけの代生じるかは、この二種類の食素の強度によって決定される。同時に、この四または五代の色聚の中において、皆、時節が含まれており、故に、再度、それが、往時において、多くの代の新しい色聚を生じせしめた事を識別する。食生食素が目の中の業生身 10 法聚と性 10 法聚の中の食素に出会う時、四または五代の食生食素八法聚を生じせしめることができるのを識別する様、チャレンジする。この多くの代の、新しい色聚の中において、その時節は、同様に、多くの代の、新しい色聚を生じせしめることができる。

また、食生食素が、目の中の心生食素八法聚(cittaja ojaṭṭhamaka kalāpa)の中の食素に出会う時、二、または三代の食生食素八法聚を生じることができる。この多くの代の新しい色聚の中において、その時節は同様に、多くの代の新しい色聚を生じせしめることができる。このほかに、二種類の食生食素八法聚が存在する:先に存在したものと、新生のものと。先に存在した食生食素は、新生の食生食素八法聚の中の食素と消化の火に出会う時、10から12代の食生食素八法聚を生じせしめることができる。そして、その中の時節は、同様に、多くの代の新しい色聚を生じることができる。

すべての情況下において、どの様な色聚(業生、心生、時節生または食生)の食素であっても、ただ、消化の火の支援の下においてのみ、再度生じることができる。目の中のすべての類型の食素八法聚を識別し、それらが、如何にして生じ、それらが生じせしめた所の、色聚の中の色法は、如何にして再生するのかを、識別したならば、あなたは、目の中の 54 種類すべての色法の識別を完成したのだと言える。あなたはまた、同様の方法でもって、その他の五種類の感官(耳、鼻、舌、身体と心臓)の中のすべての色法を識別しなければならない。

結び

本日、我々は、非常に簡単に、如何にして色聚を分析するのか、について、説明した。しかし、実際の修行の時、(その実践の内容は)更にもっと複雑になる。例えば、詳細法を修行する時、《中部・界分別経》の中に記載されている所の、身体の 42 個の部分に関する分析に依拠しなければならない:地界 20 個、水界 12 個、火界四個と、風界六個<注 214>である。もし、あなたが、(これらを)如何にして修習するのかを、理解したいと思うならば、資格を有する老師(指導者)に親しまなければならない。系統的に修行する事を通して、あなたは、徐々に、四種類の原因によって生じる所の色聚——業生、心生、時節生と食生色聚の識別に関して、熟練することができる。

色法の識別を完成させた後、あなたは、一番目の観智――名色限定智 (Nāmarūpapariccheda-ñāṇa) の最初の部分を完成させる事になるであろう。 我々は、色法の識別 (Rūpakammatthāna) についての、結びをしたいと思う:

- ●色聚を見る為には、あなたは、地、水、火、風の四界に専注することを通して、近行定 に到達するまで、定力を育成しなければならない。
- ●色聚を見ることができる様になった後、あなたは、それらを分析しなければならない。 単一の、一粒一粒の色聚の中の、すべての、異なった色法を見る事を通して、それらを分析するのである。例えば:一粒の眼 10 法聚の中において、地、水、火、風、色彩、匂い、味、食素(栄養素)、命根と眼浄色が見えなければならない。
- ●簡略法であれば、あなたは、ある一つの感官の中の、異なる種類の、色法を識別しなければならない。その後に、再度、同様の方法でもって、残りの五種類の感官を識別する。
- ●詳細法であれば、あなたは、身体の 42 個の部分の中にある、すべての種類の色法を識別しなければならない。

あなたが、色法の識別(Rūpa-kammaṭṭhāna)を完成させた時、あなたは、一目で、六種類の感官を見ることができ、また一目で、42身分の中のすべての諸々の界を見ることができる程に、充分に熟練しているものと思える。あなたは、界から界へ、感官から感官へ、容易なものから難しいものへ、順序に従って、禅修行を修習しているのは、この目標に到達する為であった。これはちょうど、テラスの 10 本の手すりを見る時に、それらを、一本、二本、三本、四本・・・10 本と、逐一見ることができると同時に、一目で、10 本すべてを見ることができるのと同じである。あなたが、一目で、すべての種類の諸々の界を見ることができる時、それらは、あなたの観の修習の所縁とすることができる:あなたは、すべての諸々の界を無常・苦・無我<注 215>として、観照する。

しかし、もし、色法の識別を完成させた後であっても、なお、依然として、一目で、それらすべてを、見ることができないのであれば、逐一に、一つに続いてまた一つという風に観察して、見ることはできる。繰り返し練習して、その後に、一目でそれら全部を見ることが出来るかどうか、チャレンジしてみる。<注 216>色業処($R\bar{u}$ pa-kammaṭṭhāna)に関する解説はこれにて終了する。次に、我々は、名業処($N\bar{a}$ ma-kammaṭṭhāna)について説明する。



表 2a:28 色法

四大種(Mahābhūta)				
完成色(nipphanna-rūpa)				
1)地界(pathavīdhātu)	3)火界(tejodhātu)			
2)水界(āpodhātu)	4) 風界(vāyodhātu)			

24 種の所造色(upādāya - rūpa)

完成色(nipphanna-rūpa)						
境色(gocararūpa)	浄色(pasādarūpa)	1)食素(ojā)				
1)色彩(vaṇṇa)	1)眼浄色(cakkhu pasāda)	1)命根(jīvitindriya)				
2)音(声)(sadda)	2)耳浄色(sota pasāda)	1)心色(hadaya rūpa)				
3)香(gandha)	3)鼻浄色(ghāna pasāda)	性色(bhāvarūpa)				
4)味(rasa)	4)舌浄色(jivhā pasāda)	1)女性色(itthībhāvarūpa)				
[触(phoṭṭhabba)]	5)身浄色(kāya pasāda)	2)男性色(purisabhāvarūpa)				
非完成色(aniphana-rūpa)						
1)空界(ākāsa dhātu)	4)軽快性(lahutā)	7)色集積(upacaya)				
2)身表(kāya viññatti)	5)柔軟性(mudutā)	8)色相続性(santati)				
3)語表(vacī viññatti)	6)適業性(kammaññatā)	9)色老性(jaratā)				

表 2b: 眼の基本的色法

三種類の 10 法聚 [3*10=30] + 1 種類の 9 法聚 [9] + 三種類の八法聚 [3*8=24] = 64。

種類	眼十法聚	身十法聚	性十法聚	命十法聚	八法聚		
性質	明浄	明浄	非明浄	非明浄	非明浄	非明浄	非明浄
生因	業	業	業	業	心	時節	食
作用	色彩処門	触の処門	性別の区別				
1	地界	地界	地界	地界	地界	地界	地界
2	水界	水界	水界	水界	水界	水界	水界
3	火界	火界	火界	火界	火界	火界	火界
4	風界	風界	風界	風界	風界	風界	風界
5	色	色	色	色	色	色	色
6	香	香	香	香	香	香	香
7	味	味	味	味	味	味	味
8	食素	食素	食素	食素	食素	食素	食素
9	命根	命根	命根	命根			
10	眼浄色	身浄色	性根色				

《説明文》

a: 耳、鼻と舌に関しては、相互に、相応の交換をする。身体と心臓に関しては、次の表2cと2dを参照の事。

b:耳、鼻と舌に関して、それぞれ、耳10法聚、鼻10法聚、舌10法聚とする。

c: 耳門、鼻門、舌門は、それぞれ、音声、香と味とする。

d:耳門、鼻門、舌門は、それぞれ耳浄色、鼻浄色、舌浄色とする。身 10 法聚、性 10 法聚、命根 9 法聚と八法聚は、六種類の感官の中においては、みな同じである。



表 2c: 身体の基本的色法

二種類の 10 法聚 [2*10=20] + 1 種類の 9 法聚 [9] + 3 種類の八法聚 [3*8=24] = 54

種類	身十法聚	性十法聚	命十法聚		八法聚	
性質	明浄	非明浄	非明浄	非明浄 非明浄		非明浄
生因	業	業	業	心	時節	食
作用	触の処門	性別の区別				
1	地界	地界	地界	地界	地界	地界
2	水界	水界	水界	水界	水界	水界
3	火界	火界	火界	火界	火界	火界
4	風界	風界	風界	風界	風界	風界
5	色	色	色	色	色	色
6	香	香	香	香	香	香
7	味	味	味	味	味	味
8	食素	食素	食素	食素	食素	食素
9	命根	命根	命根			
10	身浄色	性根色				

《説明文》身 10 法聚、性 10 法聚、命根 9 法聚と八法聚は、六種類の感官の中においては、みな同じである。

表 2d:心臓の基本的色法

三種類の 10 法聚 [3*10=30] + 1 種類の 9 法聚 [9] + 3 種類の八法聚 [3*8=24] = 63

種類	心十法聚	身十法聚	性十法聚	命十法聚	八法聚		
性質	非明浄	明浄	非明浄	非明浄	非明浄	非明浄	非明浄
生因	業	業	業	業	心	時節	食
作用	意界、意 識界依処	触(地,火, 風)の処門	性別の区 別				
1	地界	地界	地界	地界	地界	地界	地界
2	水界	水界	水界	水界	水界	水界	水界
3	火界	火界	火界	火界	火界	火界	火界
4	風界	風界	風界	風界	風界	風界	風界
5	色	色	色	色	色	色	色
6	香	香	香	香	香	香	香
7	味	味	味	味	味	味	味
8	食素	食素	食素	食素	食素	食素	食素
9	命根	命根	命根	命根			
10	心色	身浄色	性根色				

a: 眼、耳、鼻、舌と身識は、それぞれ目、耳、鼻と身 10 法聚の中の 10 番目の浄色に依存して生起する。しかし、その他のすべての心識(意界と意識界を含む)はみな、心 10 法聚の中の心色に依存して生起する。(中国語)原文 P182 とその後の説明を参照の事。

b: 意界 (manodhātu) とは、五門転向と善、不善領受心である;

意識界(manoviññāṇadhātu)とは、推度、確定、速行、彼所縁、離心路心である(「表 1c: 五門心路、中国語原文 P 2 71 参照の事)

身 10 法聚、性 10 法聚、命根 9 法聚と八法聚は、六種類の感官の中においては、みな同じである。



脚注

<注 153>=異なる種類の色法を識別する事の必要性に関して、仏陀は《大牧牛者経》 (Mahāgopālaka Sutta)の中において、教導している;「処」と「依処」の区別は、注 22 を参照の事。

<注 154>=色聚と究極色法の区別は、問答 7-6 を参照の事。

<注 155>=界 (dhātu) : これ以上、分割する事ができない元素、物質。《多界経》 (Bahudhātuka Sutta) (M 3.125)。参照の事。《清浄之道・界詳論》は、「界」を「己自身の自性を保持しているが故に界と為す。」と説明する。 (attano sabhāvaṃ dhārentīti dhātuyo) (Vm.518)。

<注 156>=問答 2 を参照の事。

<注 157>=所造色:己自身を源とし、四大種に依存するが故に、この名がある。

<注 158> = パーリ語の、異なる類型の色聚に対する命名の方法は、「X を Y 番目の色聚とする」である。

<注 159>=いくつか、識別する必要があるものの、ここにおいて説明していない所造色 の色聚がある。例えば、音声 9 法/12 法聚、身表 9/12 法聚、語表 10/13 法聚、軽快 11 法聚。これら及びその他の諸界に関して、《清浄之道・色蘊論》(Rūpakkhandha-kathā)参照の事。

<注 160>=命根を擁する色聚の中の火界は、その他の俱生の八法聚を維持することができるが故に、これら八法聚自身には、命根はない。しかし、なお「心識と共存するもの」(saviññāṇaka)に属する。命根のエネルギーによる支えを離れれば、物質は非常に速くに腐乱する。まさに、人の死後、生命を有した身体は、無生命の死体に変化する様に。

<注 161>=「門」(dvāra) という語彙は、対象が心識によって知られる為に必要とする通路を指す。

<注 162>=《白毫光婆羅門経》(Uṇṇābhabrāmaṇa Sutta)(S.5.512)。この経は、 <はじめに>において、引用した。

<注 163>眼 10 法聚:八不離色(1、地、2、水、3、火、4、風、5、色彩、6、匂い、7、味、8、栄養素)+(9)命根+(10)眼浄色。

<注 164>=心 10 法聚:八不離色(1、地、2、水、3、火、4、風、5、色彩、6、匂い、7、味、8、栄養素)+(9)命根+(10) 心色。「表 2d:心臓の基本的色法」参照の事。

<注 165>=<はじめに>を参照の事。

<注 166>=男性根 (purisindriya) と女性根 (itthindriya) とも言う。

<注 167> = 《清浄之道》における、色法四因の順序は:1) 業、2) 心、3) 食、4) 時節である。ここにおいては、パオ・セヤドーの教えの順序である。

<注 168>=《大念処經・広言集諦》(Sasmudayasaccaniddeso)と《清浄之道・色蘊論》(Rūpakkhandhakathā)。

<注 169>=人が、母胎の中において結生する時、最初の色法は、ただ心 10 法聚、身 10 法聚、性 10 法聚しかなく、みな、業生色に属する。

<注 170>=「表 1c: 五門心路」を参照の事。

<注 171> = 仏陀による、この種の光明に関する描写は、<はじめに>を参照の事。; 更なる詳細な解説は、問答 4-10、参照の事。

<注 172>=よく言及される経、例えば《聖尋経》(Ariyapariyesanā Sutta)の中において、外道が悟りを得たばかりの仏陀に以下の様に言う「賢友よ、あなたの諸々の根は明浄であり、肌の色は清浄で光り輝いている。」(M.1.285)

<注 173>=《アヌルッダ大尋経》(Anurudhamahāvitakka Sutta)(A.8.30)

<注 174>=「火」(tejo) と「時節」(utu) は、語彙が異なるが、意味は同じである。

<注 175>=注 209 を参照の事。

<注 176>=「業生色」の章を参照の事。

<注 177>=仏陀の、究極色法を見る必要がある、と言う教えに関して、《大牧牛者経》 (Mahāgopālaka Sutta) (M.1.349) 及び<はじめに>を参照の事。

<注178>=注181、参照の事。

<注179>=アビダンマ七論の一番目。

<注 180>=<四界差別の修習>(Catudhātuvavatthānabhāvanā)(Vm.T.308)

<注 181>=地界の特徴(自性):

(1) 硬さ、(2) 軟らかさ、(3) 粗さ、(4) 滑らかさ、(5) 重さ、(6) 軽さ。

作用: (俱生色法としての) 立脚する足場;

現起(現象):受け入れる(同一の粒の中の色聚の中の俱生色法)。

水界の特徴: (7) 流動性;

作用: 俱生色法の増長;

現起(現象): (8) 俱生色法への粘着 [ここにおいては、時に、特徴と現起(現象)は同一視される]。

火界の特徴: (9) 熱さ、(10) 冷たさ;

作用:体温/老い/消化/発熱/成熟;

現起(現象):柔軟性の提供(生の食材を食べられる様に煮るのと同じ)。

風界の特徴: (11) 支持性;

作用: (12) 運動/推進性;

現起(現象):色法の帯動。

(《大教誨ラーフラ経》(Mahārāhulovāda Sutta)(M.2.114-7)及び《四界差別の修習》(Catudhātuvavatthāna-bhāvanā)(Vm.350)

<注 182> = 《増上心経》、またの名を《相経》(Nimitta Sutta)(A.3.103)という; 9) 《清凉経》(A.6.85); 10) 《覚支経》またの名を《火経》(Aggi Sutta)という。(S.5.194-5)。

<注 183>=五根のバランスに関しては、五根のバランスの章、及びその後記載の内容を 参照の事;七覚支のバランスに関しては、七覚支のバランスの章、及びその後記載の内容 を参照の事。

<注 184>=人によっては"pasāda"を「敏感物質」と訳すことがある。

<注 185>=色法と名法の密集に関して、問答3を参照の事。

<注 186>=Rūpa (色) +kalāpa (聚/構成)

<注 187>=《二種尋経》(Dvedhāvitakka Sutta)(M.A.1.210)

<注 188>=相続密集(santati ghana)、構成密集(samūha ghana)と作用密集 (kicca ghana)。色法と名法の密集に関して、詳細は問答 3 を参照の事。

<注 189>=概念法に対して観の修習を実践する事に関して、<はじめに>及びその後記載の内容を参照の事。

<注 190>=禅修行者は、すでに、12 個すべての特徴を識別し終えた。しかし、一粒一粒の色聚の中においては、ただ、8 個の特徴しか識別することができない:

- 1) 硬さ。2) 粗さ。3) 重さ: (または1) 軟らかさ。2) 滑らかさ。3) 軽さ:
- 4) 流動性。5) 粘着性;6) 熱さ(または冷たさ);7) 支持性。8) 推進性。 同じ一粒の色聚の中においては、対立する特徴が存在する事はない。

<注 191>=《分別[論]義註・一法義釈注解》(Ekakaniddesavaṇṇānā) (Vbh.A.766)

<注 192>=実際の識知の所縁は、意門心路の中の7個の速行心によって完成される。どの所縁であっても、どの根門を通って到達したかに関わらず、例外はない。<はじめに>及び「表1b: 意門心路」を参照の事。

<注 193>=仏陀の、意根がどの様にして、その他の五根所縁を了知するのかという事に 対する解釈は、《白毫光婆羅門経》を照の事。

<注 194>=パオ・セヤドーの解釈では、まさにガラスを見る事を通して、ガラスの透明性を見ることができるのと同じ道理でもって、四界を識別することを通して、色聚の透明性を見ることができる――四界は、ちょうど、透明性を擁する「ガラス」の様なものである。

<注 195>=「明瞭(明亮)な有分」という時、それは一種の隠喩的な言い方である。というのも、事実は、明亮なのは、有分によって生じる所の色聚であるが故に――心生色

聚、この種の色聚の中の時節は、更に進んで明亮な色聚を生じることができる。止観(サマタ・vipassanā)を修習する心は、汚れ(upakkilesa)がないが故に、生じる所の色聚は、猶の事、明亮である。詳細は「心生色」の章を参照の事。

<注 196>=業生、心生、時節生と食生色の解釈に関して、「心生色」の章及びその後の内容を参照の事。

<注 197>=パーリ聖典における用い方に基づくと、"citta"(心)と"viññaṇa"(識)は同義語である。《無聞経》(Assutavā Sutta)(S.2.61)参照の事。パーリ聖典の権威への尊重から、パオ・セヤドーは忠実に、具体的なパーリ聖典が使用している所の専門用語を採用する。故に、彼はよく、一つの事柄に対して、異なるパーリ語の専門用語を使用することがあるが、どの語彙を使用するかは、引用する経文によって決定される。

<注 198>=「業生色」の章を参照の事。

<注 199>=眼 10 法聚: 八不離色 [地、水、3-火、4-風、5-色彩、6-匂い、7-味。8-食素 (栄養素)] + (9) 命根+ (10) 眼浄色。

<注 200>=心 10 法聚: 八不離色 [地、水、3-火、4-風、5-色彩、6-匂い、7-味、8-食素 (栄養素)]+(9)命根+(10)心色。

性 10 法聚:八不離色+(9) 命根+(10) 性色。

命根 9 法聚:八不離色+(9)命根。

表 2b-2c、及びその後記載の内容を参照の事。

<注 201>=この六種類の感官は、また、六つの「依処」とする事も出来る。しかし、すでに説明したが、依処は、実際には、相応する色聚の中の 10 番目の色法を指している為、ここでは「感官」という語彙で以て、身体の具体的な感覚器官とした方が適切である、とした。例えば眼球等。

<注 202>=眼球を例に取ると、

- 1) 眼 10 法聚(10 種類の色法);
- 2) 身 10 法聚 (10 種類);
- 3) 性 10 法聚 (10 種類);
- 4) 命根 9 法聚 (9 種類);
- 5) 心生 8 法聚 (8 種類);
- 6) 時節生 8 法聚 (8 種類);
- 7) 食生 8 法聚 (8 種類);

(10+10+10+9+8+8+8=63)

耳、鼻、舌と心臓の中の色法の数は、上記と完全に同数である。身体には、身法 10 法聚 と性 10 法聚しかない為、故に、合計 53 種類の色法と言う事になる (10+10+9+8+8+8=53)。

<注 203>=42 身分(Vm.664「名色限定智」)を修習する時になってようやく、命根 9 法聚を分析する必要性が出てくる。しかし、もし禅修行者が希望するならば、この段階においても、命根 9 法聚の識別の修習をする事も可能である。

<注 204>=眼 10 法聚: 八不離色 [地、水、3-火、4-風、5-色彩、6-匂い、7-味、8-食素 (栄養素)] + (9) 命根+ (10) 眼浄色。

身 10 法聚: 八不離色+(9)命根+(10)身浄色。

性 10 法聚:八不離色+(9)命根+(10)性色。

食素 8 法聚: (8) 食素 (栄養素) を 8 番目の法とする八不離色。「表 2b:目の基本的色法」を参照の事。

<注 205>=色法の四種類の来源(業、心、時節と食)に関する簡単な説明は、「色法の四種の生因」の章及びその後に記載され内容を参照の事。

<注 206>=心生色法の簡単な説明は「心生色」の章を参照の事。

<注 207>=時節生色の簡単な説明は「時節生色」の章及びその後に記載される内容を参照の事。

<注 208>=業生色の簡単な説明に関しては、「業生色」の章と、その後に記載される内容を参照の事。

<注 209>=業生(kammaja)色聚の中の火界(tejo)は、五代の時節(utuja)色聚を生むことができる:業生→第一代の時節生→二代目の時節生→三代目の時節生→第四代目の時節生→第五代目の時節生。

<注 210>=食生色の簡単な説明に関しては、「食生色」の章及びその後に記載される内容を参照の事。

<注 211>=業生色の簡単な説明に関しては、「業生色」の章及びその後に記載される内容を参照の事。

<注 212>=大元の食生色聚。「むすび」の章を参照の事。

<注 213>=食生食素と消化の火は、支持因に属する。眼 10 法聚の中の食素は、生因に属する。

<注 214> = 《界分別經》(Dhātuvibhaṅga Sutta)。火界を以下の四つとする:1)温暖の火;2)老いまたは成熟の火;3)発熱の火;4)消化の火。

風界を以下の六つとする:1) 上行風;2) 下行風;3) 腹内風;4) 腸内風;5) 肢体循環風;6) 入出息。

<注 215>=詳細は、「如何にして思惟智を育成するか」を参照の事。

<注 216>=識別する為に二種類の方式:聚思惟(kalāpa sammāsana)と逐一法観(anupada)。《清浄之道・道非道智見清浄品》(Maggāmaggañāṇa-dassanavisuddhi niddesa)(Vm.692)参照の事。または、《逐一経》(Anupada Sutta)(M.3.93)参照の事。問答 4-6 でも、当該の經文に言及したことがある。

<注 217>=色法の識別を完成させた後、禅修行者は、すでに、すべての完成色(四大種と前に述べた 14 種類の所造色)及び 10 種類の非完成色の中の 9 種類(「色集積」参照の事)を識別し終えた。

<注 218>=触:身識の所縁は、単独の一界ではなく、四大種の中の地、火、風の三界である。食素はまた食色(āhārarūpa)とも呼ばれる。命根は、命色(jīvitarūpa)とも呼ばれる。心色は、心処(hadayavatthu)とも呼ばれる。性色は、性根(indriya)とも呼ばれる。その他の呼び方をされる可能性がある。

<注 219>=空界: 色聚の間の際、界の限界、色聚と色聚の区別するもの。

色軽快性/色柔軟性/色適業性:唯一、心生、時節生と食生色法の中にのみ、存在する。

色積集:胎児における、身体諸根の発生。唯一、縁起の修習の時においてのみ、識別する ことができる。(「如何にして過去世を識別するのか」を参照の事);

色相続:色積集の後、色法が生起する;色無常性:色法の壊滅(bhanga)。



問答(四)

問 4-1:

菩薩(弥勒菩薩を含む)は凡夫(puthujjana)ですか?もし、弥勒菩薩が我々と同じ凡夫であるならば、彼が、弥勒時代を成就するために、人間として下生する時、彼が成仏する状況(仏陀になる状況)と我々の情況とでは、どの様な部分が異なりますか?<注 220>

答 4-1:

異なる部分は、彼のハラミツ(pāramī)がすでに成熟している事である。

ちょうど、我々の釈迦牟尼仏が未だシッダッタ (Siddhattha) 太子であった時と同じである。これらの菩薩は、すでに無数の生において、彼らのハラミツを蓄積してある。10種類のハラミツがあるが、それは以下の通りである。

- 1) 布施 (dāna)。2) 持戒 (sīla)。3) 出離 (nekkhamma)。4) 智慧 (paññā)。
- 5) 精進(vīriya)。6) 忍耐(khantī)。7) 真実(sacca)。8) 決意(adhiṭṭhāna)。
- 9) 慈しみ (mettā)。10) 捨 (upekkhā)。

この 10 種類のハラミツが成熟する時、菩薩の出家して俗を離れる事を促す、たとえ彼が 未だ欲楽を楽しんでいたとしても。次の一生では、菩薩は、結婚して、子供を一人生む が、これは法の定律である。私は聖慈氏(Arimetteyya、旧訳弥勒)菩薩の妻と子の名前 を忘れてしまったが・・・。

上座部仏教三蔵に基づけば、それは彼の死後の一生である、というのも、仏陀を含むすべての阿羅漢は、般涅槃した後、二度と再生しないが故に。般涅槃とはすなわち、生死輪廻の終点であり、彼はどの様な場所にも、二度と生まれることはない。<注 221>

我々のシッダッタ菩薩を例に取ると:彼の最後の一生において、覚悟(覚醒、悟りを得る)する前は、彼も一人の凡夫であった。何故であるか?

シッダッタ太子が 16 歳の時、ヤショーダラという姫君を娶り、子供を一人もうけた。彼は 13 年間程の期間、欲楽を楽しんだ。彼には、左に 500 人の天女、右に 500 人の天女は

いなかったものの、2万人の妃に取り囲まれていた。これを欲楽の享受 (kāmasukhallikanuyogo) という。

これらの欲楽を放棄した後、彼は、ウルヴェラ林(Uruvela)の中で、苦行の修行をした。

6年の間、何の役にも立たない修行を経て、彼はそれを放棄し、中道の修行へと転換し、 久しからずして、正覚を証悟した。彼は、彼が覚悟(悟りを得た)の後、教えを展開した 所の、最初の経文――《転法輪経》(Dhammacakkappavattana Sutta)の中におい て、以下の様に宣言する。

"Kāmesu kāmasukkhallikānuyogo hīno,gammo, pothujjaniko, anariyo, anatthasamhito"

「すべての、諸々の欲に沈潜し迷い、欲楽を享受する者は、卑劣(hīno)で、粗で俗(gammo)で、凡庸(pothujjaniko)で、非聖(anariyo)で、無益(anatthasaṃhito)なものである"

(S.5.1081) 。

これは、欲楽の享受に沈潜し迷うことは、聖者の行為ではない、ということを意味している。欲楽は、無益である。それらは、世間的な利益を齎すことができる。例えば、人間の快楽(楽しみ)、天界の快楽と梵天の快楽。しかし、それらは、出世間の利益を齎すことはできない、すなわち、唯一、道智(maggañāṇa)と果智(phakla)を通してのみ得られる所の涅槃の楽(を得ることはできない)。故に、仏陀は、最初の説法の時に、欲楽に沈潜し迷う者は、なお凡夫にすぎないと宣告した。彼がいまだ菩薩であった時、彼もまた欲楽に沈潜し迷った、すなわち、王宮の中において、アソーダラーと共に生活したのである。当時、彼は一人の凡夫であった、というのも、欲楽を享受するのは、凡夫の行為であるが故に。我々の菩薩がこの様であっただけでなく、一人ひとりの菩薩もまたこの様である。ここにおられる聴衆の皆様の中に、多くの菩薩がおられる事と思う。あなた方に、どうかこの事をよく考えて頂きたい;ここにおられる菩薩は、凡夫(puthujjana)であるか、それとも聖者(ariya)であるか?

私は、あなた方が、その答えを知っている、と考えるものである。

問 4-2:

禅の修行の課程を修了した後、禅修行者は、道智と果智を証悟することができますか?もし、不可能であるならば、その原因は何ですか?

答 4-2:

できるかも知れない。これは彼のハラミツ(pāramī)による。樹皮を被ったバーヒヤ ダ ールチーリヤ(Bāhiya Dārucīriya)を例にすると<注 222>、彼はカッサパ仏

(Kassapa Buddha) の教法の時代に、止観の修習をして、すでに行捨智

(Saṅkhārupekkhā-ñāṇa) に到達していた。彼は、約2万年、修行を行ったが、如何なる道智も、果智も証悟する事はなかった。というのも、彼は、勝蓮華(Padumuttara)仏の授記を得、速通達者(khippābhiñňa)になり、釈迦牟尼仏の教法の中において、最も速く阿羅漢を証悟した弟子になった。ということは、彼のハラミツは、その時にようやく熟したのだ、と言える。<注 223>。

同様に、釈迦牟尼仏の教法の時代において、四無礙解智 (Paţisambhidā-ñāṇa) を証得した所の、その他の弟子たち (sāvaka) もまた、みな、過去の諸々の仏の教法の時代において、止観の修習を実践して、行捨智に到達してあったのである;これは法の定律である。彼らの証得した所の、四無礙解智は以下の通りである;

- 1) 義無礙解智 (Atthapaṭisambhidā ñāṇa) : 果に対応する、すなわち、苦聖諦への観智;
- 2) 法無礙解智 (Dhammapaţisambhidā ñāṇa) : 因に対応する、すなわち、苦集聖諦への観智;
- 3) 辞無礙解智 (Niruttipaṭisambhidā ñāṇa) : 語法に対応する、すなわち、特に、パーリ語法への智慧。
- 4) 弁無礙解智(Paṭibhānapaṭisambhidā ñāṇa):前の三種類の無礙解智への観智。

四無礙解を成就するには、五種類の因<注 224>がある;

- 1) 証得 (adhigama):すなわち、阿羅漢果を証悟する事、またはその他の何かの道果(の 証得);
- 2) 経教 (pariyatti): すなわち、経典の教理の学習;

- 3) 聴聞(savana);法義に対して、専注し、尊敬の念でもって聞く事;
- 4) 遍問 (paripucchā) : 聖典と義注の中の、奥深い段落と釈義について、よく研究する;
- 5) 宿行 (pubbayogo) :過去仏の教法の時代において、修習した止観が、行捨智 (Sankhārupekkhāñāṇa) に到達している事。

現在の教法の中において修行しても、なお、涅槃を証悟する事ができない人は、彼らのハラミツがいまだ未熟の為、である。また、(別の)原因は、彼らが、かつて、過去仏の授記を得たか、または、聖慈氏仏などの未来仏の教法の時代に輪廻(saṃsāra)から解脱しようと発願したのかも知れない。例えば、2000名の、みな、普通阿羅漢である比庫尼が、アジュタラにおいて、同じ日に、般涅槃した、という例がある。燃灯仏(Dīpaṅkara)の時代、彼女たちは、釈迦牟尼仏の教法の時代において、輪廻から解脱したいという発願をしたが、それはすなわち、四個の不可数(数える事の出来ない程の長時間)と、その上、また10万大劫という時間が必要であった。普通阿羅漢になる為には、それほど長い時間、ハラミツを積む必要はなかったが、しかし、この2000名の比庫尼が、長く生死輪廻の中において、それほどの長きに亘って流転したのは、彼女たちの心願でもあったわけであり、授記とは関係はなかった。

問 4-3:

もし、禅修行者が、修習の課程を完成させたものの、なお、道智と果智を証悟していない 時に、彼の定力が退失したならば、観智もまた退失しますか?

死後、彼は悪趣 (apāya) に生まれますか?

答 4-3:

彼の観智は、退失するかもしれない。が、しかし、この可能性は非常に小さい。もし、長 時間修行しないのであれば、彼の止観(サマタ・vipassanā)は、徐々に弱まる。

ただ、その修行の業力は、依然として存在する。パーリ経典の中において、関連する物語がある<注 225>。それはスリランカで発生した。当時、約30名の比庫(南伝の男性出家者 bhikkhu)とサーマネラ(sāmaṇera)は、カルヤーニー(Kalyānī)の塔寺を参拝した後、森林の小道から大通に出た時、一人の男性がこちらを歩いて来るのを見た。彼は路

傍の炭焼き場で仕事をしていて、満身灰だらけ、身には、同じ様な灰だらけの黄色の腰布を巻いているだけであり、まるで、その為、彼は、大きな木炭の様に見えた。彼は一日の仕事を終えたばかりで、拾ってきた、半分燃えた木炭を背中に担いで、頭髪を背中の後ろになびかせ、小さな道から出て来て、比庫たちの前に立った。

サーマネラたちは、彼を見た後、お互いを馬鹿にする様に笑い合った:

「あれは君の父親、あれは君の祖父、あれは君の伯父さん!」

彼らは、歩きながら、笑った。彼らは訊ねた:

「居士の方、あなたの名前は?」

この様に聞かれた男性は、懊悩を感じて、背中に背負った薪を降ろし、衣服を整え、大長老 (Mahāthera) に礼拝した、大長老に立ち止まって頂く為に。比庫たちは立ち止まったが、サーマネラたちは彼を取り囲んで、大長老の前で、彼を嘲笑した。この男性は、大長老に向かって言った:

「尊者、あなた方は、私を見ると、即、私を嘲笑する。あなた方は、袈裟さえ着ていれば、比庫の生活を履行していると自認している様です。が、しかし、あなた方は、いまだ、心一境性さえも成就していないではないですか」

「私は、かつては、あなた方と同じ様に、沙門でありました。私は、かつては、この教法の中において、大神通があり、大威力がありました。私は、大地の上を歩くが如くに、虚空を歩くことができたし、土の中においては、それが、空の如くに、入ることができました。遠くを近くに、近くを遠くに、変化させる事も出来ました;私は、一刹那において、10万個の輪囲世界を逼観することができました。しかし、あなた方は、今、私の手、爪を見ましたか?今では、猿の爪と同じです。」

彼は一本の木を指さしながら、続けて言った:

「私は以前、この木の下に座って、この手で、太陽と月を触ったものです。私は、太陽と月に座っていながら、まるで、地上に座っているのと同じ様に、それらでもって、私の足を拭いたものです。これらは、かつては、私に属していた神通ですが、しかし、放逸の為に、それらは退失してしまいました。放逸する勿れ!放逸によって、人々は、この様に、低いレベルに淪落します。しかし、あれら、精進に住む人は、生・老・死を終結させるこ

とができます。こうした事から、どうか私を、戒めとして下さい!決して、止観善法の修習を、疎かにしてはいけません。尊者の方々、どうかご精進を!」

彼は、この様に、彼らに対して、教誡と警告をなした。彼の言動に啓発・激励されて、30名の比庫は、悚懼感(恐怖心)を覚え、その場所に立ったまま、止観の修習を実践して、かつ、阿羅漢を証悟した。こうした事から、止観は、放逸(pamāda)が原因で退失する事があるが、しかし、その業力は、なお、存在する(と考えられる)。涅槃を証悟する事の出来る人間は、四種類ある。一番目は、独覚仏(pacceka buddha)であるが、ここでは解説しない。

その他の三種類はそれぞれ:

- 1) 菩薩。
- 2) 上席弟子 (aggasāvaka) または大弟子 (mahāsavaka)。
- 3) 普通弟子 (pakatisāvaka) である。
- 1) 我々の菩薩は、燃灯仏の時代において、すでに、八定(samāpatti)と、五種類の世間神通を成就していた。彼は、過去世において、止観を修習して、かつ、行捨智

(Saṅkhārupekkhā-ñāṇa) に到達していた。あの時、彼が希望さえすれば、彼は、燃灯仏が宣説する所の、四聖諦に関する、一首の、短い偈頌を聞いた後、即刻、迅速に涅槃を証悟する事は出来たのである。しかし、この様な形で涅槃する事を望まず、未来において仏に成りたいと発願したのである。この様にして、彼は、燃灯仏の授記を得た。

次の、四つの不可数(asaṅkhyeyya)及び 10 万大劫(kappa)の期間、すなわち、燃灯仏の時代から、カッサバ仏の時代まで、我々の菩薩は、9 生において、仏陀の教導の下において、出家し比庫となった。毎回の人生において、比庫となった時、我々の菩薩は、7 種類の修行<注 226>を実践した:

i)三蔵仏語<注 227>の暗誦(Tepiṭakaṃ Budhiavacanaṃ uggaṇhitvā) ii)四種類の遍浄戒<注 288>において、善く住する(catupārisuddhi sīle supatiṭṭhāya)

- iii) 13 頭陀支を受持する(terasa dhutaṅgāni samādāya)
- iv) 林野<注 229>に住する (araññaṃ pavisitvā)
- v) 八定 (attha samāpattiyo)
- vi) 五神通 (pañca abhiññā)
- vii)随順智<注 230>を得るまで(yāva anulomañānāṃ)、観禅を育成する (vipassanaṃ vaḍḍhatvā)。

これらのハラミツを円満する必要がある、その理由は、一切知智(Sabbaññuta-ñāṇa)を成就する為である。しかし、彼のハラミツが熟する前、すなわち、授記を得た後、シッダッタ太子として生まれる間の期間、それ以前に造(ナ)した所の不善業の為に、我々の菩薩は、時には畜生界に生まれる事もあった。ただし、比庫として生まれる生命の期間と、畜生として生まれる生命の期間の間は、相当久しい時間があった。これは菩薩としての定律である。

2) ある種の上席弟子もまた、授記を得ている事がある。例えばシャーリプトラ尊者とマハーモッガラーナ(Mahāmoggallāna)尊者は、最高見仏(Anomadassī Buddha)の授記を受けていた。大弟子もまた、授記を受けている事がある。カッサバ尊者と、アーナンダ尊者は、かつて、勝蓮華仏(Padumuttara Buddha)の授記を受けていた。我々の仏陀の時代、これらの、すべての弟子は、皆、四無礙解智<注 231>を擁する阿羅漢になった。

この種の阿羅漢もまた、多くの、過去仏の時代において、止観に精通し、かつ、行捨智 (Saṅkhārupekkhā-ñāṇa) に到達している。これは法の定律である。その様ではあって も、彼らが授記を得た後から、我々の仏陀の時代までに、それ以前の不善業の為に、彼ら の内の幾人かは、四悪趣に生まれる事もあり、時には、我々の菩薩と同じところに生まれることもあった。これは、上首弟子または大弟子の定律である<注 232>。

3) 普通弟子においては、もし、彼が、止観の修習を通して、

縁摂受智(Paccayapariggaha-ñāṇa)、または生滅智(Udayabbaya-ñāṇa)、または

行捨智(Saṅkhārupekkhā-ñāṇa)に到達するならば、今生において、何等の道果をも証悟できないとしても、彼は死後、四悪趣(apāya)のどれか一種類に生まれ変わる事はない。

この事に関して、《清浄之道》は、以下の様に解説する:

" Iminā pana ñāṇena samannāgato vipassako buddhasāsane laddhassāso laddhapatiṭṭho niyatagatiko cūḷasotāpanno ñāma hoti."

「この智を具足する観の修行者は、仏陀の教法の中において、安息を得、依処を得、名を小入流(cūļasotāpanna)に至る事が決定される<注 233>」(Vm.691)。

こうした事から、小入流は、天界に生まれ変わることができ、その後に、以下の様な、四種類の状況が発生する可能性がある。仏陀は《入耳経》(Sotānugata Sutta)の中において、以下の様に言う:〈注 234〉:

- 1) もし、小入流(小ヨルカ)が、天界に生まれた後、即刻、仏法を思惟するならば、その観智によって、明晰に法を見ることができ、かつ、迅速に涅槃を証悟することができる。
- 2) もし、彼が、観智でもって法を思惟することのないまま、涅槃を証悟する場合、それは、神通を擁して、天界に到った比庫が教える所の、法を聞いて、涅槃を証悟する(場合がある)。
- 3) もし、彼が、比庫の説法を聞く機会がない場合は、説法天人(Dhammakathikadeva)から、法を聞くことができる。例えば、童形梵天(Sanaṅkumāra Brahmā)等であるが、そして、彼は、法を聴聞する事を通して、涅槃を証悟する。
- 4) もし、彼が、天神の処から、法を聴聞する事ができないのであれば、過去世において、人間であった時の、その時の、同じ教法の時代に、共に修行した友人に出会う事が出来る。

これらの友人は:

「賢友よ、我々が過去において、人の世で修習した所の、某々の仏法を思い起こして下さい」と言う可能性がある。

この時、彼は仏法を思い出し、その時、もし、観を修習するならば、迅速に涅槃を証悟することができる。

小入流(小ヨルカ)が、天界に生まれ変わって後、迅速に涅槃を証悟する例は、沙門天子(Samaṇa-Devaputta)の物語に詳しい<注 235>。彼は、曾ては、一人の、止観の修習に精進していた比庫であったが、彼は修行中に死亡して、かつ天界に往生した。彼は、自分がすでに死亡した事を知らないでいて、生まれ変わった天界の宮殿の中において、引き続き、禅の修行をしていた。宮殿の中にいる天女が彼を見て、彼の前生は必ずや一人の比庫であったであろうと思い、その為、彼の目の前に鏡を置いて、かつ、ザワザワと音を立てた。彼は目を開けて、鏡の中の自分の姿を見て、非常に失望した。というのも、彼は天人になりたくはなく、ただただ、涅槃を証悟したかった故に。その為、彼は、即刻、人間界に降りていき、仏陀に謁見して仏法を聞いた。その時、仏陀はまさに、四聖諦の法を教導していたが、その聞法の後、沙門天子は、入流道智(Sotāpattimagga-ñāṇa)と入流果智(Sotāpattiphala-ñāṇa)を証悟したのである。

こうした事から、一人の普通弟子が、止観の修習において、非常に精進して、縁摂受智、生滅智または行捨智に到達するならば、彼が、今生において、いまだ、道果を証悟していないとしても、しかし、彼は、彼がすでに完成させた所の修行によって、彼の未来世のどれか一世において、証悟することができる(ものと思われる)。臨終の時、禅修行者は、強力な止観を擁していないかも知れないが、しかし、止観禅修行の善業は非常に強大であり、善相が彼の意門に顕現し、彼は、善相を所縁として死亡することができる。この種の善業によって、彼は必ず善趣に生まれ変わり、かつ、そこにおいて涅槃を証悟することができる。しかしながら、若し、彼が、観の修習を、臨死速行(maraṇāsanna-javana)の利那まで続けることができるならば、彼は、先ほど、我々が説明した所の、《入耳経》の中に出てくる、一番目の種類の人間になる事ができる。

問 4-4:

課程を完成させた禅修行者で、いまだ涅槃を証悟できていない者は、法住智 (Dhammaṭṭiti-ñāṇa) を得ることができますか? もし可能であるとして、この種の智慧は、退失する事がありますか?

答 4-4:

ええ、彼は、法住智を証得する事はできる。

"Pubbe kho Susīma dhammaţţhitiñāṇaṃ pacchā Nibbāne ñāṇaṃ."

「スシーマよ、先に法住智、その後に涅槃智である。」

これは、仏陀がスシーマに示した開示である<注236>。

スシーマは、「法を盗む」ために、出家した遊行僧(paribbājaka)であったが、しかし、仏陀は、彼が何日かの内に、涅槃を証悟するであろうことを観察・察知した為、彼を受け入れたのである。スシーマは、多くの阿羅漢が仏陀に謁見して、かつ、彼らが阿羅漢を証悟した事を報告しているのを聞いた為に、スシーマは、彼らには、八定と五神通があるのかどうか、を訊ねたのだが、彼らは「ない」と答えた。

「もし、八定と五神通を擁しないのならば、あなた方は、どの様にして、阿羅漢を証悟することができたのか?」彼らは答えて言う:

"Paññāvimuttā kho mayam、āvuso Susīma"。その意味は、

「賢友スシーマよ。我々は、純観乗(suddhavipassanā yānika)によって、煩悩を断じ除き、阿羅漢を証悟したのである。」

彼はその意味を理解できなかったので、仏陀に対して、同じ質問をした。仏陀は言う:

"Pubbe kho Susīma dhammaṭṭhitiññāṇaṃ pacchā Nibbāne ñāṇaṃ."

「スシーマよ。先に法住智、その後に、涅槃智である。」どの様な意味であろうか?

道智は、八定または五神通の結果ではなく、観智の結果である。故に、道智は、唯一、観智の後において生起する。《スシーマ経》の中において、すべての観智はみな、法住智に属している(と書かれている)。法住智は、すべての行法、縁生法(saṅkhāradhamma) すなわち、名色法とその因 無常・苦・無我の本質を観照する所の、観智である。故に、先に法住智があり、その後に、涅槃を所縁とする道智があるのである。次に、仏陀

成に、光に伝伝音があり、その後に、在業を所縁とする追省があるのである。 秋に、仏陀は《無我相経》(Anattalakkhaṇa Sutta)<注 237>で開示したのと同じ様な、三輪教説(teparivaṭṭa dhammadesanā)<注 238>を開示した。

開示・説法が終わると、スシーマは阿羅漢を証悟したのである、たとえ、彼には八定も五神通も擁することはないとしても、一人の純観乗者にはなれた。その時、彼は、はっきりと、仏陀の教法の真義を理解したのである。もし、禅修行者が、法住智を証得するならば、今生において涅槃を証悟することができなくても、彼の観智は消失する事はない、というのも、観の修習における業力は、非常に強大であるが故に。もし、彼が普通弟子であるならば、彼は、次の一世において、涅槃を証悟するであろう。

問 4-5:

禅修行者は、近行定<注 239>に近づくことによってだけでも、出世間の成就<注 240> に到達する事ができますか?

答 4-5:

可能である。近行定にも、明瞭(明亮)で、光輝く、燦爛とした光明があり、この光を借りて、彼は、色聚、色法、究極名法及びそれらの因を識別することができる。その後に、彼は順序に従って観の修習を続ければよい。

問 4-6: 刹那定(khaṇika-samādhi)だけを用いて、禅修行者は、受念処 (vedānānupassanā satipaṭṭhāna) を修行して、出世間の成就にまで到達することがで きますか?

答 4-6:

ここにおいて、我々は、刹那定に関する定義をしなければならない。刹那定とは何であるか?二種類の刹那定がある:

- 1) 止禅の刹那定
- 2) 観禅の刹那定

止禅には三種類の定がある:

- 1) 刹那定 (予備定の一種)
- 2) 近行定
- 3) 安止定。

止禅の刹那定は、特に、似相(例えば、入出息似相)を所縁とする定力を指すものである。それは、近行定の前の定力に属する。これは、止乗者(samatha-yānika)について述べたものである。純観乗者(suddhavipassanā-yānika)に関しては、もう一つ、別の刹那定がある。純観乗者は、通常、(その修行を)四界差別から始めるが、近行定または刹那定を証得した後、色聚及び色聚の中の四界を見ることができる。《清浄之道》では、

これを近行定であると言うが、しかし、《清浄之道》の復注では、これは一種の隠喩であって、実際には、真正なる近行定ではない、という。というのも、真正なる近行定は、非常に、ジャーナ<注 241>に近いが故に。

しかしながら、四界差別の修習においては、ジャーナを証得することはできない。禅修行者が個別の色聚の中の四界を見ることができる時、その時、彼はすでに、深い定を擁しており、また、明瞭(明亮)な、光輝く、燦然とした光明をも擁している。たとえそうであってもしかし、彼は、それらを所縁としてジャーナを証得することはできない。

その原因は、二種類ある:

- 1) 個別の色聚の中の四界を見る事、それはすなわち、究極色法(paramattharūpa)を見ることであるが、(修行者が)究極色法を見ることができるという事は、甚だ深く、微妙な事柄である。(しかし)彼は、究極法を所縁として、ジャーナを証得する事はできないのである。<注 242>
- 2) たとえ、禅修行者が、色聚を分析する時の定力が非常に深いものであったとしても、 ジャーナの深さに到達することはできない。何故であるか?

というのも、色聚は、生じるや否や、即刻滅し去る。このことは、所縁が常に変化していることを意味している。もし、常に変化している所の所縁に専注するならば、ジャーナを 証得することはできない。

故に、四界差別の修習では、ジャーナを証得する事が出来ない、という事を踏まえて、 我々は、個別の色聚の中の四界を所縁とした近行定は、真正なる近行定ではなく、それは 刹那定であることが分かるのである。

次に、我々は観禅における刹那定について、説明する。この事は《清浄之道・入出息》の一節において、解説されている<注 234>。ここにおいて、あなたは、観刹那定とは、究極名色法及び、その因の無常・苦・無我の本質を、徹底的に照見するものである、という事を、明確に理解しなければならない。究極名色法及びその因を見る事ができない者が、どうして、観刹那定を擁することが出来様か?不可能である!

止乗者が、観の修行をしたいと思う時、彼は、先に初禅に入る、例えば入出息初禅であるが、これは止に属する。出定後、彼は、初禅の34個の名法を識別し、かつ、これらのジャーナ法(jhāna dhamma)の生・滅の本質を無常・苦・無我として、観照しなければならない。これは、第二禅等などにおいても同様である。識別の時、定力は依然として存在する。彼は、ジャーナ法の無常・苦・無我の本質に専注するが、その問い、彼の定力は非常に深く、厚く、かつ、強力であり、その他の所縁に転移することがない。これは刹那定である、というのも、所縁が刹那に生・滅する、生じるや否や、即刻、滅し去るものであるが故に。

同様に、禅修行者が、究極名色法及びその因の無常・苦・無我の本質を照見することを通して、観の修習をする時、彼の心は、通常、所縁から偏離することはなく、彼の心は、三相の内の一に沈入しつづける。これもまた刹那定と呼ぶ。もし、禅修行者が、いかなる止禅の修習をも経ないで、究極名色法及びその因を徹底的に、明確に、見ることができるならば、勿論、彼は、止禅を修習する必要がない。しかし、それが可能でないならば、彼は、究極名色法とその因を見ることができる様になるため、一種類の止業処を選んで(修行して)、充分な定力を育成しなければならない。

しかし、仏陀は《相応部・蘊相応・定経》の中において、以下の様に言う:<注 244> "Samādhiṃ、bhikkhave、bhāvetha. Samāhito、bhikkhave、bhikkhu、yathābhūtaṃ pajānati."

「比庫たちよ。定を修習しなければならない。比庫たちよ。定力のある比庫は、如実に知ることができる。」

こうしたことから、あなたは、五蘊、五蘊の因を了知するため、及び五蘊の止息の為に、 定力を育成しなければならない;あなたは、それらの無常・苦・無我の本質を了知する為 に、定力を育成しなければならない。あなたは、阿羅漢道にある時と般涅槃の時、それら が、止息するのを見るであろう。仏陀は同様に、《諦相応・定経》の中において、四聖諦 を知見する為に、禅修行者に定力を育成する様にと、教導している。<注 245>。

もし、禅修行者がただ感受をのみ観照したいと思うならば、彼は、仏陀が述べた以下の事 実に注意を払わねばならない: "Sabbam bhikkhave, anabhijānam aparijānam avirājaym appajaham abhabbo dukkhakkhayāya. Sabbañca kho, bhikkhave, abhijānam parijānam virājayam pajaham bhabbo dukkakkhayāya."

「比庫たちよ。一切(全ての事柄)に対して、不証知(sabbam anabhhijānam)であり、

不遍知(aparijānaṃ)であり、不離棄(avirājayaṃ)であり、不捨断(appajahaṃ)である者は、苦を尽くす事はできない。

比庫たちよ。一切(全ての事柄)に対して、証知し、遍知し、離棄し、捨断する者だけが、苦を尽くす(bhabbo dukkhakkhayāya)ことができる。」

上に述べた経文は、《相応部・六処品》の《不遍知経》<注 246>からの引用である。 「一切(全ての事柄)」とは何であるか?それはすなわち、一切の名色法及びその因の事である。<注 247>。

三種類の遍知(pariññā)でもって、一切を了知した者でない限り、涅槃を証悟することはできない。唯一、三種類の遍知でもって、一切を了知した者だけが、涅槃を証悟することができる。同様に、仏陀は《諦品・尖頂閣経》の中において、もし、観智と道智でもって、四聖諦を了知する事が出来ないのであれば、輪廻(saṃsāra)を終結させることは、できない、と言う。〈注 248〉故に、もし、禅修行者が、涅槃を証悟したいと願うならば、彼は、必ず、三種類の遍知でもって、一切の名法、色法とその因を了知しなければならないのである。

三種類の遍知とは何か?それらは:

1) 知遍知 (ñāta-pariñnā): すなわち、

名色限定智(Nāmarūpa-pariccheda-ñāṇa)と、

縁摂受智(Paccayapariggaha-ñāṇa)である。

それらは、一切の究極名色法及びその因を了知する所の、観智である。

2) 審察遍知 (tīraṇa-pariñnā) : すなわち、思惟智 (Sammasana-ñāṇa) と

生滅智(Udayabbaya-ñāṇa)。この二種類の観の智慧は、究極名色法及びその因の無常・苦・無我の本質を明晰に了知する。

3) 断遍知 (pahāna-pariññā) : これは更に高度な観智である。すなわち、 壊滅智 (Bhaṅga-ñāṇa) から、道智 (Magga-ñāṇa) までを言う。

《第一不遍知経》(Paṭhama aparijānana Sutta)と《尖頂閣経》(Kūṭāgāra Sutta)という、この二つの経文の教えは非常に重要である。故に、もし、禅修行者が、受念処から、観の修習を始めたいのならば、彼は、以下の二点をしっかりと覚えておかねばならない:

- ●彼は、必ずや、すでに、究極色法を識別している事。
- ●受を識別するだけでは足りない。彼は、また、六門心路の中の、受に相応する名法を識別しなければならない。

ただ、実際は、一種類の法を識別するだけでも、覚悟(悟りを得る)することは可能である。しかし、その前提として、その前に、彼は、すべての、その他の法を識別した事がある、という事である、それは今生において、でもよいし、過去世において、でもよいが。シャーリプトラ尊者の例では、彼は、アッサジ尊者の誦した偈頌の一首でもって、入流聖者になる事ができ、その後に、彼は出家して、比庫になり、禅の修行を開始した。

《逐一経》<注 249>の中において、仏陀は、シャーリプトラ尊者が、如何に巧みに、善く、彼が証得した所の、ジャーナの一つひとつの名法<注 250>を、逐一、識別するかを、講述している。ただし、シャーリプトラ尊者が禅修行に、非常に精進しても、彼はなお、(その時までには)阿羅漢を証悟していなかった。

その後、ある日の事、仏陀は、シャーリプトラ尊者の甥に《長爪経》(Dighanakha Sutta)を教えていた時、一種の法を説明した:受(vadana)である。シャーリプトラ尊者は、その時、ゴータマ仏陀の後ろに立って、彼の為に扇子を揺らしながら、仏陀の説法を聞いていた。説法が終わると、シャーリプトラ尊者は、阿羅漢果を証悟し、彼の甥は、入流果を証悟していた。(M.2.206)。

彼は、ただ、一法をのみ観照したたけで、阿羅漢を証悟したのであるが、それは、彼が、それ以前に、すでに、すべての五蘊を識別してあったから、なのである。再度申し上げるが:仏陀は、もし、比庫が、三種類の遍知でもって、一切の名色法及びその因を了知することができないのであれば、彼は、涅槃を証悟する事は出来ない、という。故に、禅修行者は、ただただ、受(例えば、苦受)をのみ識別しようとし、究極名色法を徹底的に識別しようとしないならば、それは充分ではないのである。ここで言う「充分ではない」とは、涅槃を証悟する事はできない、という意味である。

問 4-7:

仏陀は大阿羅漢です。では、仏陀とその他の阿羅漢弟子、例えばシャーリプトラ尊者とマ ハーモッガラーナ尊者とは、どの様に違いますか?

答 4-7:

仏陀の阿羅漢道は、必ず、一切知智 (Sabbaññuta-ñāṇa) と相応している。

しかし、弟子の阿羅漢道は、その様ではない。弟子の阿羅漢道は、三種類の弟子菩提 (bodhi) が含まれる;

- 1) 上首弟子菩提(aggasāvaka bodhi)
- 2) 大弟子菩提(mahāsāvaka bodhi)
- 3) 普通弟子菩提(pakatisāvaka bodhi)。

弟子の阿羅漢道は、ある時には、

四無礙解智(Paṭisambhidā-ñāṇa) <注 252>と相応し、ある時には、六通(abhiññā) <注 253>と相応し、ある時には、三明(tevijja) <注 254>と相応し、ある時には、純粋に、ただ阿羅漢道であったりする;または俱分解脱(ubatobhāgavimutta) <注 255>、または慧解脱(paññāvimutta) <注 256>であったりするが、しかし、

一切知智(Sabbaññuta-ñāṇa)と相応することはできない。故に、シャーリプトラ尊者と、マハーモッガラーナ尊者の阿羅漢道は、みな、一切知智とは相応しない。

或いは、仏陀の阿羅漢道は、一切知智に相応するだけでなく、その上に、すべての、その 他の智慧、及び、仏陀が所有する所の、殊勝な徳行に相応するのだ、と言える。このほか に一点、諸仏は(ハラミツが熟したのが因で)無師で、己自身で、道智、果智と一切知智 を証悟するが、しかし、弟子は、唯一、仏陀または仏弟子から、四聖諦に関する法を聞いてのみ、道智と果智を証悟することができる。教師がいないならば、彼らは、独りで修行する事ができない。これが異なる所である。

問 4-8:

中陰身 (antarabhava) とは何ですか?

答 4-8:

上座部仏教の三蔵に基づくと、所謂、中陰身というものは、ない。死亡心(cuti-citta)及び、それに緊密に続く所の、結生心(paṭisndhi-citta)の間には、如何なる心識刹那または、所謂中陰の類の状態<注257>は、存在しない。もし、一人の人間が、天界に生まれ変わったならば、彼の死亡心と天界結生心の間には、如何なる心識刹那、または、所謂、中陰身も、存在しない。死亡が発生するやいなや、天界結生心は、即刻、生起する。同様に、もし、一人の人間が、死後、地獄に生まれ変わるとして、彼の死亡心と、地獄結生心の間には、所謂、中陰の類のものは、存在しない。彼は死後、直接、地獄に堕ちるのである。中陰身の概念は、通常、この様にして、生じる:

ある種の人々は、死後、短い間、暫定的に、鬼界(幽霊界)に生まれ変わり、その後に、また人間に生まれ変わる(事がある)。彼は、その鬼(幽霊)の生命を、所謂、中陰身だと思う。実際は、それは、中陰身とは、まったく関係がない。実際に発生している状況は以下の通りである:人間の死亡心が滅し去った後、鬼の結生心が、それに続いて生起する;鬼の死亡心が滅し去った後、引き続き、人類としての、結生心が生起する。この人は、彼の不善業によって、鬼界において苦を受けたが、しかし、不善業の業力は非常に速くに、消耗し尽くしたため、かつ、善業が熟したことが因となって、再度、人類の結生心が生起した。

そして、輪廻の真相を、己自身から見たことがない人、または縁起を知らない人は、あの 鬼界にいた短い生命をもって、中陰身であると、誤解するのである。もし、彼が観智でも って、縁起を識別することができるならば、この様な邪信は、消失するであろう。この様 なことから、我々は、あなたが、己自身の観智でもって、縁起を識別する様、提案する。 この様にすれば、中陰身の問題は、あなたの心中から消失するであろう。

問 4-9:

入出息念(ānāpānassati)の修行方法と四界差別は、同じですか?我々は、どうして、入 出息念の修行の後に、四界差別の修行を開始するのですか?

答 4-9:

違います。この二種類の方法は、同じではない。観の修習においては、名法、色法及びそれらの因を識別しなければならない。と言う事は、二種類の業処がある、という事である。仏陀が、色業処を指導する時、常に、四界差別の簡略法または詳細法を教導した。故に、もし、あなたが色法を識別したいのであれば、必ず、仏陀の指導に従って修行しなければならない。四界差別の修行には、深くて厚い定力があるのが望ましい、例えば、入出息第四禅などである。というのも、それは、我々が、明晰に、究極色法、究極名法及びそれらの因を見る為の支えとなるが故に。しかし、もし、あなたが、止禅の修習、例えば、入出息念を修習したいと思わないならば、あなたは、直接、四界差別の修行をすることができる。そこに問題はない。この問題に関しては、我々はすでに、前の段階で、解説を終えてある。

問 4-10:

セヤドーに、科学的な手法でもって、禅修行中に体験する光について、説明して頂けませんか?

答 4-10:

禅の修行中に見る光とは、何であるか?

結生心を除いて、一つひとつ、心処 (hadayavatthu) に依存して生起する所の心

(citta)は、みな、心生色法:心生食素八法聚(cittaja ojaṭṭhamaka-kalāpa) <注 258 >。 一個の心識は、多くの心生色聚を生む。心処に依存して生起する所の、心識、止禅心(samathabhāvanā-citta)と観禅心(vipassanābhāvana-citta)は、非常に強くて力があるものであり、これらは多くの色聚を生じせしめることができる。我々が、これらの色聚を分析する時、八種類の色法を見ることができるが、それらは:地界、水界、火界、風

界、色彩、匂い、味と食素(栄養素)である。その中の色彩という、この色法は、非常に 明瞭(明亮)である。止禅心と観禅心が強ければ強いほど、色彩はますます明るくなる。

色聚は同時に、また相続して(継続して)生起するため、一粒の色聚の色彩は、緊密にまとまって生じる。それはまさに、電燈の様であり、こうして光が生まれるのである。

次に、止禅心と観禅心によって生じた、一粒一粒の色聚もまた、火界が含まれる。この火界は、また多くの新しい色聚を生じせしめるが、それを時節生色という。というのも、それらは、時節(utu)と呼ばれ火界から生じるが故に。この現象は、体外でも発生するし、体内でも発生する。我々がこれらの色聚を分析する時、同じく、八種類の色法を見ることができる:地界、水界、火界、風界、色彩、匂い、味と食素(栄養素)。

色彩は(上に述べたのと)同じ様に、その中の一種類である。止禅心と観禅心の力によって、その色彩もまた非常に明るいものである。故に、一個の色彩の明亮さと、もう一つ別の、一個の明瞭さが緊密に同時に生じる時、電燈の様に光るのである。心生色法の光明と時節生色法の光明は、同時に生じる。

心生の「色彩」色法は、唯一、体内においてのみ、生じるが、しかし、時節生の「色彩」 色法は体内と体外において生じることができ、かつ、各方面、世界全体または輪囲世界 (cakkavāļa) に、又更に遠くにも、拡散することもできる。これの程度は、止禅心と観 禅心の強度によって決定される。仏陀の名色限定智によって生じた光明は、一万個の輪囲 世界を遍満することができたし、アヌルッダ(Anuruddha)尊者の天眼心

(dibbacakkhucitta) によって生じる光明は、一千個の輪囲世界を遍満することができた。その他の弟子の観智によって生じる光明は、彼らの止禅心と観禅心の強度に基づいて、各方面に向かって、一由旬(yojana)、二由旬などと異なっている。

多くの禅修行者は、生滅智の修行に到達すると、通常、この種の光は、一組の色聚であることを理解することができる様になる。しかし、止禅を修習している時、彼らは、なお、それが一組の色聚であることを理解することができない、というのも、これらの色聚は非常に微細であるが故に。止禅の修習をするだけでは、色聚を理解したり、照見したりするのは難しい。もし、あなたがそれを確実に理解したいと望むならば、生滅智まで、修行に励まなければならない。禅の修行中に体験する光に対する理解について、上に述べた事が、最も科学的(な説明)である。

問 4-11:

すでに 32 身分を識別できる様になった禅修行者は、目を開けたまま、他人の身体内部の 32 個の部分(身分)を見ることができますか?

答 4-11:

状況によっては、可能である。初心者は、目を開けている場合に見えるのは、外部に見える身体(身分)だけである。彼は、観智の眼でもってようやく、内在の身体を見ることができる。もし、あなたが、これらの事柄を科学的に理解したいというのであれば、己自身の観智でもって、見る様にチャレンジする事を勧める。しかしながら、マハーティッサ大長老(Mahātissa Mahāthera)は、彼の以前の修習によって、彼は目を開けて他人の骨格を見ることができた。彼は白骨想に精通しており、常に、内在の白骨でもって、不浄を修習して、初禅に到達した後、観の修習、すなわち、名色法、それらの因、及び無常・苦・無我の本質を識別していた。これが、彼にとっての、通常の修法であった。

ある日、彼は、托鉢の為に、アヌラダプラ(Anuradhapura)から、大村 (Mahāgāma) に行って、食を集めようとして(piṇdapāta)、大村に向かって歩いていた時、路上で、一人の女性が、彼の注意を引き付け様と思って、彼に向かって、大きな声で笑った。彼は、この笑い声を聞き、同時に、彼女の方を見たが、しかし、見えたのは彼女の歯だけであった。その為、それでもって白骨想の修習を始めた。それ以前の修行のおかげで、彼が見たのは、一幅の骨格であって、一人の女性ではなかった。彼には、一幅の骨格のみ見えた。その後に、彼は、自分自身の骨格に専注し、初禅に到達したので、迅速に観の修習を実践し、結果、路上に立ったまま、阿羅漢を証悟したのである。元々、その女性は、夫と喧嘩をして、実家へ帰ろうとしていたものである。彼女の夫が追いかけて来て、マハーティッサ大長老に出会ったので、訊ねた;

「尊者、あなたは、一人の女性が、道を歩いていたのを見ませんでしたか?」

大長老は答えた:「おお、施主よ(dāyaka)、私は男性とか女性とか、その様なものには 出会っていない。ただ、一幅の白骨が道を歩いていたのを見ただけである」。

当該の物語は《清浄之道・説戒品》(Vm.15) に見ることができる。この例では、マハーティッサ大長老の様に、徹底的に白骨想の修行をする禅修行者は、目を開けたまま、他人の骨格を見ることができる、ということを示している。

脚注

<注 220>=パオ・セヤドーの、当時の聴衆は、多くは北伝大乗の信徒であった。彼らの目標は、阿羅漢ではなく、仏陀になることである。

<注 221>=問答 5-4 に引用した仏陀の言葉を参照の事。

<注 222>=<抜希亜長老伝記>(Bāhiyatthera Apadāna)(Ap.2.54. 6 及びその義註)

<注 223>=<樹皮を被る抜希亜長老の物語>(Bāhiya Dārucīriyatthera vatthu) (A.A.1.216)

<注 224>=《清浄之道・慧の分類論》(Paññāpabhedakathā)(Vm.429)

<注 225>= 《分別[論]義注・経分別釈》(Suttantabhājanīyavaṇṇnā) (Vbh.A.406)

<注 226>=《陶師経》(Ghaṭikāra Sutta)。当該の經は、第1、2、3、4項のみ列挙。第五項目は、「往復義務実行の沙門法」(gatapaccāgatavattaṃ pūrayamānā samaṇadhammaṃ karontā)で、それはすなわち、不断に禅(止と観)の修習をする事であるが、それには外出して食を集める事、及び食を集め終わったならば、住居に帰る事が含まれる。菩薩の修行に関する描写のある文献から見て取るに、第五項は、第5、6、7項に分ける事ができる、と理解することができる。その他の語彙の解釈の中において、沙門法(samaṇadhamma)は、この7項の修行すべてを指すものと考えられる。(M.A.2.286)

<注 227>=これはすなわち、経典を学習する義務(ganthadhura)を言う。また「学」(pariyatti)とも言う:第7項は、観の修習の義務(vipassanādhura)を言う。すなわち、「修」(paṭipatti)である。

<注 228>=四種類の遍浄戒に関しては、問答 3 を参照の事。

<注 229>=林野の住む事は、13 種類の頭陀支の内に含まれるが、しかし、義注は、強調する為に、特にこの点を指摘している。

<注 230>=これはすなわち、行捨智(Sankhārupekkhā-ñāṇa)である。

<注 231>=四無礙解智に関しては、問答 4-2 を参照の事。

<注 232>= 《清浄之道・慧分類論》(Paññāpabhedakathā)(Vm.429)

<注 233>=《清浄之道》の復注は以下の様に解説する:勝義諦に基づけば、「安息」とは聖果の事で、「依処」とは聖道の事である。そして、彼は、この段階においてはいまだ道果を証悟していないものの、しかし、すでに、証悟の方法に依って修行しているため、すでに安息を得た者、すでに依処を得た者と同じとする。またあるいは、「安息を得る」は、すでに見清浄を証得した事を言う。

「決定至」は、善趣に生まれ変わること。入流聖は、すでに、出世間聖道でもって、徹底的に邪見と疑を断じ除いており、かつ、悪趣に堕ちない事が決まっている事であるが、修行がこの段階に到達した観修行者は、世間観智によって暫定的に邪見と疑を鎮伏する。それはちょうど、入流聖者と同じである、故に「小入流」と呼ばれる。

<注 234>=《耳入経》(Sotānugata Sutta) (A.4.191) ;

<注 235>=沙門天子の因縁に関しては、《天女経》(Accharā Sutta)の義注にある。 (S.A.1.46)

<注 236>= 《スシーマ経》 (Susīma Sutta) (S.2.70)

<注 237>=S.3.59 、<はじめに>の章に経の引用あり。

<注 238>=ここでの三論は、無常・苦・無我の三相を指す。

<注 239>=異なる禅定に関する説明は、問答 3-1 を参照の事。

<注 240>=ここは、道智と果智を証悟することに関する事柄であるとする。

<注 241>=近行定とは、ジャーナ心路の中の、意門転向心の後、種姓心の前の、三個の 速行心の事である。「表 1a: 禅定心路」及び関連する註釈を参照の事。

<注 242>= 《清浄之道・四界差別修習》 (Catudhātu vavatthāna bhāvanā) (Vm.308) の中において、以下の様に説明する。

四界差別の所縁は、自性法(sabhāvadhamma-ārammaṇattā)であるため、ただ、近行定にしか到達できない。安止(ジャーナ)ではない。復注では以下の様に言う。それを近行定と称するのは、ただ、世俗語(ruṭhīvasena)に依ったに過ぎない、と。しかし、〈念死論〉(Maraṇassati-kathā)(Vm.177)は以下の様に言う:出世間定及び第二、第四無色定に導く前行修習は、それらの所縁が自性性であっても、なお、安止定に属する、すなわち、ジャーナである。〈注 343〉を参照の事。

<注 243>=《清浄之道・入出息念論》(Ānāpānassatikathā)(Vm.235)

<注 244>=《蘊相応・定経》 (S.3.5)

<注 245> = 《諦相応・定経》(S.5.1071)。<注 38>で引用されている関連の經文を参照の事。

<注 246>=《第一不遍知経》(Pathama-aparijānana Sutta)(S.4.26)

<注 247>=当該の經の中において、仏陀は、「一切」を以下の様に説明している: 眼処、耳処、鼻処、舌処、身処と意処;色処、音処、香処、味処、触処と法処; 六内処と六外処が接触する時に生起する六識 (viññāṇa):眼識、耳識、鼻識、舌識、身 識と意識;

六識と共に生起する六触(phassa):眼触、耳触、鼻触、舌触、身触と意触; 及び、六触と共に生起する受(vedanā):眼触、耳触、鼻触、舌触、身触と意触によって 生起する所の楽受、苦受と不苦不楽受。

<注 248>= 《尖頂閣経》 (S.5.1114) <はじめに>の章において引用あり。

<注 249>= 《逐一経》 (Anupada Sutta) (M.3.93-96)

<注 250>=如何にして、ジャーナにおける、個別の名法をしきべつするのか、について、「如何にしてジャーナ心路を識別するのか」の章を参照の事。

<注 251>=証悟者の、過去世における修行の詳細は、問答 4-3、及び問答 5-2 を参照の事。

<注 252>=四無礙解智に関しては、問答 4-2 を参照の事。

<注 253>=1) 神変通(iddhividhā)、

- 2) 天耳通 (dibbasota)、
- 3) 他心通 (parassa cetopariyañāṇa) 、
- 4) 天眼通 (dibbacakkhu) 、
- 5) 宿住随念通(pubbe-nivāsānusatti)、
- 6)漏尽通(āsavakkhaya)。

<注 254>=上に述べた六通の内の 4、5、6項。

<注 255>=俱分解脱(ubhatobhāgavimutta);先に、無色定によって色界を解脱し、 次に、阿羅漢道によって、無色界を解脱する事。

<注 256>=慧解脱(pañnāvimutta): 純観阿羅漢の事。

<注 257>=詳細は、「表 1d: 死亡と結生」及び<注 317>を参照の事。

<注 258>=「心生色」の章を参照の事。



第五講 如何にして名法を識別するか

はじめに

前の法話において、我々は、如何にして四界差別(四界分別)を修習するか、及び、如何にして「色聚」と呼ばれる微粒子物質を分析するか、について、説明した。ここでは、我々は、観禅の次の段階――如何にして名法を識別する(Nāma kammaṭṭāna)のか、について説明する。〈注 259〉。 先に、我々は、簡単に、心の基本的理論に関する説明をしたい、と思う。というのも、名法を識別する為に、必要な事柄であるが故に。アビダンマの解釈では、心識は、所縁を識知する所の、心(citta)及び、心に随伴して生起する所の心所(cetasika)を含む、と言う。

52 種類の心所がある、例えば:触(phassa)、受(vedanā)、想(saññā)、思(cetanaā)、一境性(ekaggatā)、名命根(jīvitindriya)と作意(manasikāra)<注 260>。 合計 89 種類の心がある<注 261>。それらは、善、不善または無記として、三種類に分類することができるが、また、それが存在する界によって分類する事も出来る:

欲界(kāmāvacara)、

色界(rūpavacara)、

無色界(arūpavacara)の三種類<注 262>、

または世間 (lokiya) と出世間 (lokuttarā) の二種類。我々は、最も基本的な二種類の心について、研究する:

- 1) 心路(cittavīthi)心。
- 2) 心路以外の「離心路 (vīthimutta)」心:結生心、死亡心と有分心。

合計六種類の心路がある。前の五種類は眼門、耳門、鼻門、舌門と身門心路で、その所縁は、それぞれ、色彩(見る事ができる物)、音声、香、味と触であり、合わせて「五門心路(pañcadvāra vīthi)<注 246>」と呼ぶ。六番目の心路は、すべての所縁<注 265>をその所縁としており、「意門心路」(manodvāravīthi)<注 266>と呼ぶ。

一つひとつの心路は、皆、一系列の、異なる種類の、心識を含む。すべての心路の中における、心識は、みな、等しく、心の定律(cittaniyāma)によって生起する。もし、名法を識別したいのでれば、あなたは、この定律の順序に従って、それらを照見しなければならない。この事を実践する為に、あなたは、先に、入出息念(ānāpāna-ssati)、その他の止禅業処を通して、または四界差別によって、定力を育成しなければならない。

純観乗者は、名法を識別する(Nāmakammaṭṭāna)以前、先に、色法に対する識別(Rūpakammaṭṭāna)を完成させておかねばならない。しかし、止乗者は、先に色法を識別するのか、あるいは、先に、彼がすでに証得した所の、ジャーナ(色界<注 267>または無色界<注 268>)の名法を識別するのかを選ぶことができる。ただ、欲界名法を識別するのであるならば、彼は依然として、先に、色法の識別を完成させておかねばならない。<注 269>。

名法を識別する四つの段階

名法の識別は、四つの段階に分けることができる:

- 1) 内部に生起する所の、すべての種類の心(citta)の識別。
- 2) 能力の限りにおいて、すべての種類の、心の中の一つひとつの、名法 (ñāmadhamma) を識別する。
- 3) 六門(dvārā) 心路(vīthi) において、順序に従って生起する心を識別する。
- 4) 外部の名法 (bahiddhanāma) <注 270>を全体的に識別する。

如何にしてジャーナ心路を識別するか

もし、あなたが、すでにジャーナ(例えば入出息念ジャーナ)を証得しているのであれば、名法を識別する最も佳い方法は、ジャーナ心及びその相応する心所から着手する事である。それには、二つの理由がある:まず、ジャーナの修習をしている時、あなたは、すでに、五禅支を識別した事があるはずであるが、これは、あなたがすでに、これら相応する心所の識別にいくらかの経験を積んでいる、という事を意味する;次に、ジャーナ速行心(jhāna javana-citta)は、連続して、何度も生起するが故に、非常に顕著であり、結果、容易に識別できる、からである。それは、欲界心路(kāmāvacara vīthi)とは異な

る。欲界速行(javana)は、一個の新しい心路が生じる前、7 回だけ発生する。 <注 271 >

こうしたことから、ジャーナ名法を識別しようとするならば、あなたは、先に、入出息 念でもって、初禅を復習し、光が、明瞭(明亮)で、光輝いて、燦爛としている様にす る。出定の後、有分(意門)と入出息似相を、共に(一緒に)、識別する。似相が、有分 に出現する時、禅支のそれぞれの特徴の相に基づいて、五禅支の名法を識別する。

五禅支とは:

1) 尋(vitakka): 心をして、入出息似相に投入せしめ、かつ、それに安置せしめる。

2) 伺(vicāra):心をして、入出息似相に維持せしめる。

3) 喜 (pīti) : 入出息似相を喜ぶ、好む。

4) 楽 (sukha): 入出息似相の楽しさを体験する。

5) 一境性(ekaggatā):一心にただ、入出息似相にのみ専注する。

一つひとつの初禅速行心(javana-citta)の中の、すべての五個の禅支を、同時に識別することができる様になるまで、継続的に修行し、その後に、更に一歩進んで、34個すべての名法を識別する。あなたは、識(viññāṇa)、触(phassa)または受(vedanā)の中の、最も顕著なものから(識別を)開始して、その後に、一回ごとに、名法を追加していく;先に一個識別し、次に一個追加する様にすれば、二個の名法を識別することができる;更に一個増やせば、三個識別することができる。その後に、更に一個増やせば、四個識別することができる・・・。あなたは、あなたが、一つひとつの初禅速行心の中において、34個すべての名法が見える様になるまで、修習する。



1)心(citta)							
心所(cetasika)							
七遍一切心所(sabbacitta sādhāraṇa)	六雑心所(pakiṇṇaka)						
1) 触(phassa)	1) <u>尋(vitakka)</u>						
2) <u>受(vedanā)</u>	2) <u>伺(vicāra)</u>						
3)想(saññā)	3)勝解(adhimokkha)						
4)思(cetanaā)	4)精進(vīriya)						
5) <u>一境性(ekaggatā)</u>	5) <u>喜(pīti)</u>						
6)名命根(jīvitindriya)	6)欲(chanda)						
7)作意(manasikāra)							
19個の遍一切美心所(sobhaṇa sādhā	nrana)						
1) 信(saddhā)	11)心軽安性(cittalahutā)						
2)念(sati)	12)[名]身柔軟性(kāyamudutā)						
3)慙(hiri)	13)心柔軟性(cittamudutā)						
4)愧(ottappa)	14)[名]身適業性(kāyakammaññatā)						
5)無貪(alobha)	15)心適業性(cittakammaññatā)						
6)無瞋(adosa)	16)[名]身練達性(kāyapāguññatā)						
7)中捨性(tatramajjhattatā)	17)心練達性(cittapāguññatā)						
8)[名]身軽安(kāyapassaddhi)	18)[名]身正直性(kāyujukatā)						
9)心軽安(cittapassaddhi)	19)心正直性(cittujukatā)						
10)[名]身軽安性(kāyalahutā)							
1) 無痴(amoha) :慧根(paññindriya)							

次に、一系列の、初禅意門心路(manodvāra - vīthi)を構成している所の、六種類の、 心の中のすべての名法を識別する。その六種類とは以下の通りである:<注 276>

1)意門転向心(manodvārāvajjana):12 個の名法。

2) 予備心(parikamma): 34 個の名法。

3) 近行心 (uoacāra) ; 34 個の名法。

4) 随順心 (anuloma) : 34 個の名法。

5) 種姓心(gotrabhu): 34 個の名法。

6) 一系列の、相続して不断なるジャーナ速行心(jhānajavanacitta): 先ほど識別した所の、34個の名法。

これらの、すべての名法を識別するには、あなたは、再度、初禅を復習する、例えば入出息念処禅等。出定の後、再度、有分と似相を一緒に識別する。似相が有分に出現する時、生起したばかりの、ジャーナ意門心路を識別し、かつ、初禅意門心路の中の、一つひとつの種類の異なる心、及びそれらの、12または34個の名法を識別する。

次に、名法に対して、全体的な把握を行う為に、あなたは、すべての名法(nāma)の共相を識別しなければならない。すなわち、所縁に対して、向かう(namana)と粘着するのである。ここで言う所縁とは、入出息似相である。あなたは、同様の方法でもって、入出息念の第二禅、第三禅と第四禅の名法、及び、あなたが、その他の業処を修習してあって、かつ成就してあるなら、そのすべてのジャーナの名法、例えば:不浄、白遍と慈心ジャーナ等を識別し、また分析しなければならない。

そして、もし、あなたが、四界差別によって近行定に到達しただけであるならば、近行定によって、名法の識別を開始する事しかできない。というのも、ジャーナがないならば、ジャーナ心の名法を識別することは出来ないが故に。この種の状況の下では、あなたは、四界差別を復習して、近行定に到達し、結果、あなたの身体は、燦然と、発光した透明体である(はずである)。近行定の中において、しばし休んだ後、精神を渙発させ、清らかで明晰な心でもって、観の修習に向かい、近行定の名法を識別する。直前に止を修習して証得した所の、近行定またはジャーナの異なる心路を識別した後、引き続き、欲界心路(kāmāvacara)の異なる名法を識別する。



表 1b: 意門心路 (manodvāra vīthi) (色彩所縁を例にして)

- ●一個の心は、一個の心識刹那(cittakkhaṇa)をのみ、維持する。生(uppāda)↑、住(ṭhiti)|、滅(bhaṅga)↓の三段階を含む。
- ●一つひとつの心路の間には、多くの有分心が生起する(表 1d: 死亡と結生を参照の事。)
- ●意門心路の前は、一個の五門心路または、その他の意門心路である。

心識刹那	(心路の前)											(心路の後)
Cittakkhaṇa	⇒⇒⇒⇒	l⇒	2⇒	3⇒	4⇒	5⇒	6⇒	7⇒	8⇒	9⇒	10⇒	⇒⇒⇒⇒
所緣	前世臨終	色彩所緣 Rūpārammaṇa									前世臨終の所緣	
Ārammaņa	の所緣											
心	有分	意門転向	速行 彼所緣								斤緣	有分
Citta	Bhavaṅga	Manodvār-	Javana							Tadārammaņa		Bhavaṅga
		āvajjana	第一	第二	第三	第四	第五	第六	第七	第一	第二	
	$\uparrow \downarrow \downarrow$	1 ↓	$\uparrow \downarrow$	1 ↓	1 ↑ ↓	$\uparrow \downarrow$	1	$\uparrow \mid \downarrow$	$\uparrow \mid \downarrow$	1	1 ↓	$\uparrow \mid \downarrow$
	果報 Vipāka	唯作 Kiriya	業 Kamma 果報 Vipāka							Vipāka	果報 Vipāka	

「表 1 b: 意門心路」に関する更に一歩進んだ説明

認知とは、一個の固定した順序を持ち、それは、心の定律(cittaniyāmā)に照らして、進行する。認知によって、物(色彩)を見る、という事柄を例に取る: <注 277>

第一歩:眼門心路が所縁を「収取する」;色彩を認知する。(表 1c:五門心路、を参照の事。)

第二歩: 意門心路が色彩を感知する; 過去の色彩を識知する、すなわち、眼門心路の所縁 を識知する。

第三歩: 意門心路が、それはどの様な種類の色であるか、を識知する。色彩の名前を知る。

第四歩: 意門心路が、所縁の「意義」知る;全体の影像(イメージ)を見る、すなわち、 過去の経験(想(saññā) から確立された概念である。

第五歩:意門心路が、判断と感受を行う。これが、真正なる認知の開始である。それ以前の意門心路の中において、速行心の思は非常に弱いものであるため、造(ナ)された業は、ただ、当期の生命期間(pavatti)においてのみ、果報を生じるせしめ、結生心(paţisandhicitta)を生じることはできない。

第四個目の、意門心路から、概念が了知される:「男性」、「女性」、「罐」、「スカート」、「金」、「銀」など。また、当該の意門心路から、迷執(papaṅca)が始まり、業もまた、完成を得る。すなわち、一つひとつの速行心の中において、同一の所縁を縁に取る所の思(cetanā)心によって完成される。如理作意(yoniso manasikāra)を経て、善業は、完成する。

例えば:師長(指導者)、仏像、比庫を尊敬し、礼を尽くす;止禅業処を了知する;観智でもって、諸々の行を無常(anicca)・苦(dukkha)・無我(anatta)または不浄(asubha)として照見する。不如理作意(ayoniso manasikāra)を経て、不善業は完成する。例えば、自我(私の存在、私のエゴ)がある、夫、妻、子供、財産などが真実に存在している、それらが、常(nicca)、楽(sukha)、我(atta)または浄(subha)である、と思う。同じ所縁と想に対して、無数の意門心路(一系列の行(saṅkhārā))が発生して、心が新しい所縁に転向するまで、不断に認知を強化する。

如何にして欲界心路を識別するか

如理作意と不如理作意

禅定心路(色界または無色界意門心路)は、必ず善である。絶対に不善では有り得ない。しかし、欲界心路(五門心路、それとも意門心路の区別なく)は、善であったり、不善であったりする。これは、如理作意(yoniso manasikāra)または不如理作意

(ayoniso manasikāra) によって決定される。作意が、欲界心路が、善であるか、または不善でるかを、決定する。もし、あなたが、一個の対象を見たとして、それを色法、名法、因または果、無常・苦・無我または不浄と見做すならば、あなたの作意は、如理作意であって、速行心は善に属する。もし、あなたが一個の対象を見て、概念によってこれを視て、例えば人間であるとか、男性、女性、衆生、金、銀、または恒常であるとか、楽または我のものと見做すならば、あなたの作意は不如理作意であって、速行心は不善に属する。しかし、特殊な状況の下、概念に相関する所の速行心は、善で有り得る時もある、例えば慈心を修習している時や布施、供養をしている時。あなたがこれらの心路を識別する時、それらの間の区別を見ることができる。

如何にして意門心路を識別するか

欲界心路を識別する為には、あなたは意門心路から始めなければならない。というのも、その中の心識の種類が、比較的少ないが故に。あなたは、一個の善なる意門心路から、着手することができる。欲界善意門心路は、三個の、順序に従って生起する心によって構成されている:

- 1) 一個の意門転向心(manodvārāvajjana): 12 個の名法。
- 2) 7個の速行心(javanacitta): 善心であるが故に、その名法の数は、32/33/34/35; しかし、もし不善心であれば、16/18/19/20/21/22 である。
- 3) 二個の彼所縁心(tadārammṇacitta): 名法の数は、34/33/32/12/11 である。

まず先に、あなたは有分(意門)を識別し、その後に、目の中の一粒の色聚を取り上げて、眼浄色(cakkupasāda)を識別する。それがあなたの有分に顕現する時、あなたは如理作意でもって、それを以下の様に認知する:

「これは眼浄色である」

「これは色法である」

「これは無常である」

「これは苦である」

「これは無我である」または

「これは不浄である」

この様にすれば、欲界意門心路は生起する。次に、当該の意門心路の中の、異なる心識の各種の名法を識別する。方法は、禅定意門心路の識別と同じである;識、受または触などの、最も顕著なものから開始し、その後に、一回ごとに、一個の名法を追加していく;先に一個識別し、次に一個加える。この様にすれば、二個の名法を識別することができる;次に一個加える。この様にすれば、三個識別することができる;次に一個加える。この様にすれば、四個識別することができる・・・。

あなたが欲界善意門心路の中の、一つひとつの心識の、34、33、または32個の名法すべてを見ることができるまで、修習する。あなたは、満足するまで、この様に反復して識別しなければならない。あなたは、色業処(rūpakammaṭṭhāna)を修行している時、一つひとつの種類の色法によって生起する所の意門心路<注278>を観察しなければならない。

如何にして五門心路を識別するか

意門心路への識別を完成させた後、あなたは眼門心路から始めて、更に一歩進んで、五門心路を識別することができる。眼門心路の中の、一つひとつの心識の中の名法を識別する為に、あなたは、眼門心路を生じせしめる様にする。あなたは、先に、眼浄色(眼門)を識別し、その後に、有分(意門)を識別し、その後に、両者を同時に識別する。その後に、眼浄色の近くの一組の色聚の色彩に専注する。それは、眼門と意門に、同時に顕現し、かつ、如理作意によって、それを「これは色彩である」と認知する。この様にして、一個の眼門心路が生起すると、次には(心の定律(cittaniyāma)によって)同一の目標を縁に取った、意門心路が生起する。眼門心路は、7個の、順序良く生起した心によって構成されている:

- 1) 一個の五門転向心(pañcadvārāvajjana):11 個の名法。)
- 2) 一個の眼識 (cakkhuviññāṇa) :8個の名法。

3) 一個の領受心(sampaṭicchana): 11 個の名法。

4) 一個の推度心 (santīraṇa) : 11/12 個の名法。

5)一個の確定心(voṭṭhapana):12 個の名法。

6) 七個の速行心 (javanacitta) : 善心であるならば、名法の数は、32/33/34/35 でありえ

る。しかし、もし不善心であるならば、16/18/19/20/21/22で有り得る。

7) 二個の彼所縁心(tadārammaṇcitta): 名法の数は、11/12/32/33/34 であり得る。



表 1c: 五門心路 (pañcadvāra vīthi)

表 1c: 五門心路(pañcadvāra vīthi) (眼、耳、鼻、舌、身門心路,ここでは眼門心路を例にとる) 心識刹那 (心路の前) (心路の後) Cittakkhana 1⇒ | 2⇒ | 3⇒ 7=> $|9\Rightarrow|10\Rightarrow|11\Rightarrow|12\Rightarrow|13\Rightarrow|14\Rightarrow|15\Rightarrow|16\Rightarrow|17\Rightarrow$ 6⇒ ⇒...⇒ 色彩所緣 所緣 前世臨終の所緣 前世臨終 の所緣 Rūpārammaņa Ārammaņa 推度 有分 五門転向 眼識 領受 確定 速行 彼所緣 有分 Pañcadvār- Cakkhu Sampatic Santī-Bhavanga Vottha-Tadārammaņa Javana Bhavanga -波動 第1 第2 第3 第4 第5 第6 第7 第1 第2 過去āvajjana viññāņa chana raṇa 11 Atīta· ·calana | ·upaccheda Citta $\uparrow | \downarrow$ $\uparrow | \downarrow$ $\uparrow |\downarrow \uparrow \downarrow \uparrow \downarrow \downarrow \uparrow \downarrow \downarrow$ $\uparrow |\downarrow$ $\uparrow |\downarrow|$ 果報 果報 唯作 唯作 果報 果報 Vipāka Kiriya Vipāka Kiriya Kamma Vipāka Vipāka

「表 1c: 五門心路」への更に一歩進んだ説明

一個の心は、ただ一個の心識刹那(cittakkhaṇa)をのみ、維持するが、それは生 (uppāda) ↑、住(ṭhiti) |、滅(bhaṅga) ↓の三つの段階がある。五門心路によって、認知された色法所縁が、持続する時間は、17個心識刹那である。すべての五門心路(眼、耳、鼻、舌、身門)は、皆、同じ過程を遵守して、心の定律(ciyyaniyā)に基づいて進行する。故に、五門心路は、ただ所縁(眼門心路は、ただ色彩をのみ認識することができる)を「収取」するだけであって、所縁を「知る」ことはできない。色彩と、所縁に関して、「知る事」の発生は、四番目及びその後の意門心路<注 279>において、である。(表に関する説明終了。)

この後、一連の有分心が生じ、その後に、前に述べた三種類の意門心路心が発生する。

- 1) 一個の意門転向心。
- 2) 7個の速行心。
- 3) 二個の彼所縁心。これらの心路(眼門心路及びその後に続いて生起する所の、同一の対象を取る意門心路)の中の、一つひとつ心識の中の、異なる名法を識別するために、あなたは、以前に実践したのと同じ様に、識別、受または触等の、最も顕著なものから(識別を)開始し<注 280>、次に、前に実践したのと同じ様に、一回に一個、追加していく、一つひとつの心識の中の、異なるすべての名色法を見ることができるまで。

眼門心路を識別したのと同じ様に、次には、耳、鼻、舌、身体という、この四門の心路を識別する。この段階において、あなたはすでに、善心に相応する名法を識別する能力を擁する様になったので、今は、不善心相応の名法を識別する必要がある。この点を実践する為には、あなたは、善心を識別した時と同じ所縁を取ればよいだけである、が、しかし、これに代って、不如理作意を取れば、よい、という事である。上記は、簡略な説明に過ぎないが、しかし、ここにおいて挙げた例は、少なくとも、あなたが、内在の名法を識別する時に渉及する内容を理解する為には、充分である(と考える)。以下に総括する。

ここにおいて、あなたは、すでに、名法を識別する為の、前三段階を完成させた:

1) あなたはすでに、内在において生起する所の、すべての種類の心(citta)を識別した <注 281>

- 2) あなたはすでに、すべての種類の心の中の、一つひとつの名法(nāma-dhammā)を 識別した。
- 3) あなたはすでに、心の発生順序、すなわち、六門心路において生起する所の心路 (vīthi) を識別した。前に述べた通り、名法を識別するには、いまだ、四個の段階が残っている。それはすなわち、外在する名法の識別である。

如何にして外在の名法を識別するか

外在の名法を識別したいのであれば、あなたは先に、外在の色法の識別から始めなければならない。

先に内外の色法を識別する

先に、内在の四界の識別から開始する。その後に、あなたが着ている衣服の四界を識別する。あなたは、衣服が分解されて色聚になるのを見るであろうし、その上、あなたは、一粒一粒の色聚の中の八種類の色法を見ることができるであろう。それらは、時節生食素8法聚(utuja ojaṭṭhamaka kalāpa)であり、色聚の中の時節によって生じたものである。〈注282〉 あなたは、内在するものと、外在するものの色法を、交代しながら、三度または四度識別しなければならない。その後に、禅定の光の助けを借りて、もう少し遠い所にある色法を識別する。例えば、床など。あなたは、そこにおいて、一粒一粒の色聚の中の8種類の色法を識別することができるであろうから、その後、再度、内外を交替しながら、三度または四度、識別する。この種の方法を用いて、徐々に範囲を広げていき、あなたが坐禅している建物の色法、周囲の区域の色法、樹木を含む、その他の建築物の色法等など、あなたが、外部のすべての無生物の色法を識別できるまで実践する。識別の時、あなたは、無生物の物体の中に、心識と共存する色法(浄色など)があることを発見するであろう。それらは、樹木、建築物などの中にいる昆虫と、その他の小動物である。

すでに、外部のすべての無生物の色法を識別した後、引き続き、その他の有情生命の色 法を識別する。すなわち、心識と共存する所(saviññāṇaka)の外在の色法である。あな たは、それらの色法を識別しなければならない。そして、それらは男性でもなく、女性で もなく、人または有情でもなく、ただの色法に過ぎない、ということを理解しなければな らない。同時に、外在のすべての色法を、一緒に識別し、その後に、内在と外在するすべての、異なる種類の色法を識別する。この様な実践ができるためには、あなたは、先に、己自身の目の中の六種類の基本的な色聚<注 283>を観察し、その後の、外在する、その他の衆生の目の中の六種類の基本的色聚を観察しなければならない。前に、色法の分析をしたのと同じ様に、54 種類の色法を識別するが、しかし、今は、内在と外在の両者を識別しなければならない。<注 284>。また、同様に、この様な方法でもって、その他の五種類の感官及びその他の種類の色法もまた、識別しなければならない。

次に内外の名法の識別をする

色法の識別を完成させた後、引き続き、内在と外在の名法を識別しなければならない。 内在の名法の識別は、再度、意門心路の識別から始め、その後に、五門心路、それらの中のすべての善と不善の名法を識別する。外在の名法を識別したいのであれば、内在の名法を識別するのと同じ様に実践するが、しかし、その他の衆生の眼門と有分(意門)を、全体的に識別しなければならない。その後、一組の色聚の色彩が、この二つの門に顕現する時、その時に生起する所の眼門心路、及び、同一の目標を取って生起する所の多くの意門心路を識別する。この様に、不断に反復して、内外交替し(て実践し)、かつ、その他の四門の、一つひとつの門を、満足するまで、識別する。

もし、あなたがジャーナを擁するならば、外在するジャーナ意門心路を識別するべきである。それは、その他の禅修行者の上に発生するものである。禅定は、現代の人間世間の中においては、非常に稀なものではあるが、しかし、天界と梵天界において、あなたは、まsにジャーナの内にある衆生を見つける事が出来るであろう。前に述べた過程と同じく、無辺の宇宙に遍及する所の色法が見える様になるまで、あなたは、徐々に識別の範囲を拡大していき、その後に、あなたは、無辺の宇宙に遍及する所の名色法を、一緒に識別しなければならない。最後に、あなたは、智慧でもって、すべての、これらの名法と色法を確定しなければならない:無辺の宇宙に遍及して、衆生は見えず、男性または女性も見えず、ただ名と色があるのみ、と。名法の識別(Nāma-kammaṭṭhāna)(に関する説明)は、ここで終了する。

禅の修行がこの段階にまで到達したならば、あなたはすでに、定力を育成しており、かつ、それを運用して、無辺の宇宙に遍及する所の、28種類すべての色法<注285>、及

び、53 種類すべての名法<注 286>を識別した。ここに到れば、あなたは、すでに、一番目の観智——名色限定智(Nāmarūpaparicched-ñāṇa)を完成させたのだ、と言える。次の法話では、我々は、観智の次の段階——縁起の識別(paṭiccasamuppāda)の説明をする。



脚注

<注 259>= 「観」という言葉は、時には、16 のすべての観智の事を言い、それは、名色限定智と縁摂受智(名、色法を観照する智慧)を含む;ある時には、「観」は、思惟智から始まる所の、名色法を無常・苦・無我として覚知する智慧の事を言う。16 観智に関しては、問答 5 を参照の事。

<注 260>=こうした事から、名法は、1心+52心所=53種類の名法があることになる。

<注 261>=89 種類の心に関しては、第三節を参照の事。

<注 262>=

- 1) 三界(kāmāvacara): 欲界天、人道、餓鬼、畜生と地獄;
- 2) 色界 (rūpāvacara): 梵天界、ただ、微細な色法があるのみ;
- 3) 無色界 (arūpavacara) 名法のみがあって、色法がない。

<注 263>=これらの心識に関して、詳細は、「表 1d: 死亡と結生」及び関連する注を参照の事。有分心に関しては、問答 3 及び注 151 を参照の事。

<注 264>=「表 1c: 五門心路」を参照の事。

<注 265>=意根が、すべての所縁を取ることができる件に関して、《白毫光婆羅門経》を参照の事。

<注 266>=「表 1b: 意門心路」を参照の事。

<注 267>=すなわち、四種類の色界ジャーナ。

<注 268>すなわち、無色界ジャーナ。しかし、非想非非想処定は含まない。(《清浄之道・説見清浄品》(Ditthivisuddhiniddesa) (Vm.663)

<注 269>= 《清浄之道・説見清浄品》 (Diţṭhivisuddhiniddes) (Vm.664)

<注 270>=《念処經》(Satipṭṭhāna Sutta)は以下の様に言う:「かくのごとくに、または内心において、心を随観して住み、または外心において、心を随観して住む。」(M1.114)。上記の事は、他人の心を知る事のできる他心智(cetopariyañāṇa)のことを言っているのではなく、観智の力の事を言っているのである。故に、それは、通常は、具体的な外在する名法を識別することはできない。経文《蘊経》参照の事。

<注 271>=ジャーナ心路とは、すなわち、色界(rūpāvacara)または無色界(arūpāvacara)心路である。

<注 272>=下線のある五個の心所が、五禅支である。

<注 273>=一境性: 定(samādhi)の同義語。

<注 274>=美心所は、合計 25 種類ある、その内の 19 種類は、通一切美心心所である。

<注 275>=身/心軽安:身=三種類の名蘊(受・想・行)の事;心=識蘊。それらは、6 対の善名法の性質、特徴である:

- 1) 軽安(掉挙・不安と相反する)
- 2) 軽快性(昏沈・睡眠と相反する)
- 3) 柔軟性(己の見解に固執する事、傲慢と相反する)
- 4) 適業性(その他の諸々の蓋と相反する)
- 5) 練達性 (無進行等と相反する)
- 6) 正直性(虚偽、欺瞞、詐欺などと相反する)。

名身に軽安などの素質がある時、色身もまた、軽安等に変化する。故に、仏陀は、これらの名法の素質を二種類に分類した。

<注 276>=「表 1a: 禅定心路」を参照の事。

<注 277>=詳細は、問答 3-5、3-11、7-9、7-11、7-12 及び《アビダンマッタサンガハ》を参照の事。

<注 278>=色法を識別する時、すべての種類の色法を、皆、識別しなければならない。 しかし、観の修習の時(その無常・苦・無我の本質を観照する時)、ただ、完成色のみを 観照する。「表 2a:28 色法」において、すべての異なる種類の色法を列挙した<第四講 如何にして色法を識別するか>では、如何にしてそれらを識別するかを説明した。

<注 279>=「表 1b: 意門心路」を参照の事。

<注 280>=詳細は、表 1b と表 1c を参照の事。

<注 281>=出世間心は、この段階においては、いまだ体験する範囲内ではないことを知っているべきである。

<注 282>=時節生食素八法聚などに関しては、「食生色」の章を参照の事。

<注 283>=六種類の基本的色聚とは:1) 眼 10 法聚。2) 身 10 法聚。3) 性 10 法聚。4) 心生 8 法聚。5) 時節生 8 法聚。6) 食生 8 法聚。

<注 284>=実際には、あなたは、すでに、63 種類の色法を識別したが、しかし、ここにおいては、54 種類を識別するだけでよい。

<注 285>=28 種類の色法に関しては、28 色法の表を参照の事。

<注 286>=53 種類の名法に関しては、注 260、第五講を参照の事。



問答(五)

問 5-1:

八定(samāpatti)は、禅修行者を支えて、名色限定智(Nāmarūpapariccheda-ñāṇa)に 到達せしめ、(そうなれば、修行者は)名色の微妙な生・滅を見る事ができ、その事によって、これらの名色を厭い離れ、道智を証悟するに至ります。この事以外に、八定には、 その他の利益が齎される事は、ありますか?

答 5-1:

禅定には、五種類の利益がある;<注 288>禅定の、一番目の利益は、現法楽住 (diţṭhadhammasukha-vihāra) である:今生において、ジャーナの楽を享受する。これ は阿羅漢の事である。純観阿羅漢は、自ずと、出世間ジャーナ (lokuttāra-jhāna) を擁するが、しかし、彼らは世間ジャーナ (lokiya-jhāna) をも育成したいと願うかもしれない、というのも、彼らは、ジャーナにおける、現法楽住を享受したいと思うが故に。彼らは阿羅漢である為、すでに、道智を通して一切の煩悩を断じ除いているが(その意味は、すなわち、諸々の蓋はすでに断じ除かれている)、それゆえに、ジャーナを育成する事は、彼らにとって、非常に簡単な事である。彼らが、通常、ジャーナを育成したいと思う、もう一つの理由は、滅定(nirodhānisaṃsa)を成就したい為である。このこと(を成就するに)は、八定に精通しなければならない。

比庫(南伝の男性出家者 bhikkhu)の義務は、教理(pariyatti)を学び、止観を修習し(paṭipatti)、四道四果を証悟する事(paṭivedha)である。阿羅漢は、すでに、この義務を完成させており、故に、必ずしなければならない、何らかの仕事、というものはない。彼らが禅定を修習するのは、外でもなく、唯一、今生において、禅定の楽(jhānasukha)を享受する為である。禅定の、二番目の利益は、観の修習(vipassanānisaṃsa)である。<注 289>。

禅定は、観智の助縁である。というのも、ジャーナを擁すれば、禅修行者は、明晰に、究極名色法及びその因を照見することができるし、また、それらの無常・苦・無我の本質を観照することができる。禅修行者が、徹底的に観の修習を実践する時、特に、道智(magga-ñāṇa)、果智(phala-ñāṇa)、または行捨智(Saṅkhārupekkhā-ñāṇa)に到達

した時、ジャーナは、通常は、非常に安定しており、それらは、観智をして明晰、明瞭かつ、強くて力のあるものにならしめ、また、その強くて力のある観智は、相互作用の効果を発揮して、ジャーナを保護する事ができる為に、(ジャーナが)退失することがない。また、禅修行者が、長時間、観の修習を実践する時、疲労を感じる時がある。この時、彼は、長時間、ジャーナに入り、心を休息させなければならない。心が力を復活させた後、彼は、再び、観の修習に戻る。疲労が生じた時、彼は、再度、ジャーナに入り、休息することができる(休息するのがよい)。<注 290>

故に、禅定によって、観智は明晰、明瞭、強くて力のあるものになり、非常に良質な保護を得ることにもなる(事が分かる)。そして、観智は、ひるがえって、禅定の障礙になる煩悩を打ち壊すことができ、定力をして、安定せしめることができる。止が観を保護し、その反対もしかり、である。これより他に、八定の作用は、名色法及びその因を識別する援助となるだけでなはない、というのも、八定自身が、名法に属しており、識別される名法の中に含まれるのである<注 291>。

例えば:禅修行者が、初禅に入り、出定の後に、当該の禅相と相応する所の諸行 (saṅkhāra) を、無常・苦・無我として、思惟する。その後に、第二禅に入り、同様に実践する。彼は、この様にして、第四無色禅までの、八定すべてを思惟するのであるが、これを止観双運(yuganaddha)と言い、ちょうど、二頭の雄牛が、一輌の車を引くが如くに、彼を引っ張って、道、果と涅槃に向かわせることができる。<注 292>。

もし、禅修行者が、観の修習において、すでに行捨智(saṅkhārupekkhā-ñāṇa)に到達しているのであれば、彼は、ジャーナの諸行への識別を、有る一種類のジャーナに限定することができる。この様に、強くて力のある止が、強くて力のある観と結合するならば、禅修行者は、道果だけでなく、阿羅漢をも、証悟することができる。

禅定の三番目の利益は、神通(abhiññānisaṃsa)である:もし、世間神通、例えば: 宿住随念智(pubbenivāsānussatiabhiññā)

天眼通(dibbacakkhu)、

天耳通(dibbasota)、

他心通 (paracitta vijānana) と

種々の神変 (iddhividha) ——飛行、水上歩行等などを擁したいと思うのであれば、彼は、14 行相に基づいて、10 遍と八定 (samāpatti) を練習しなければならない。 <注 293 >。

禅定の四番目の利益は、「殊勝有」(bhavavisesāni-saṃsa)である。もし、禅修行者が、命終える時に、梵天界に生まれ変わりたいと希望するならば、彼は、例えば、10 遍、入出息念または慈心などのジャーナを、必ず、修習しなければならない。もし、梵天界に必ず生まれ変われる様、保証を得たいのであるならば、彼は、ジャーナをば、臨終の時まで、維持して不退転でなければならない。禅定の五番目の利益は寂滅(nirodhānisaṃsa)である:滅定(nirodhasamāpatti)とは、心(citta)、心所(cetasika)及び心生色法(cittajarūpa)の、暫定的な中断を言う。「暫定的」とは、すなわち、一日乃至7日間を言うが、これは、彼の決意(adhiṭṭhāna)の如何によるものである。

不来者(Anāgāmi)と阿羅漢だけが、滅定に入ることができる。阿羅漢に関しては、睡眠及び概念法を作意する以外において、彼が一日中、一昼夜、毎日、毎月、毎年見ているものは、名色及びその因の生・滅より他はなく、または壊滅をのみ見ているのである。<注2894>。彼は、時には、飽き飽きして、「無聊」を感じる事があり、その時は、これらの「壊滅法(bhaṅgadhamma)」を見たいとは思わなくなる。しかし、彼らの生命が、いまだ終了しておらず、般涅槃の時がいまだ到来していないが故に、彼らは、これらの壊滅現象を見なで済む様に、滅定に入るのである。どうして、彼らは、これらの現象を、止まることなく、見るのであろうか?それは、阿羅漢道が、一切の煩悩(五蓋を含む)を打ち壊した為に、そのことが原因で、彼らには定力がある。定力を擁する心は、究極法(paramatthadhamma)を如実に照見することができる。

こうした事から、究極名色法が、絶え間なく彼らの心の顕現する、それはすなわち、「壊滅法」である。彼が滅定に入る時――例えば七日と仮定して――彼はその間、壊滅法を見ることはない。というのも、入定の持続している期間、これらの現象を認知する心と、相応する心所は、みな中断されているが故に。阿羅漢は、涅槃果定に住する能力を擁するものの、しかし、彼らはやはり、滅定に住む傾向を持つ。というのも、涅槃果定は、無為法を所縁としているものの、なお、「受」の名法が存在しているが故に。しかし、滅定の中においては、僅かに残る行法は業生色、時節生色と食生色であって、心生色法はなく、心

識もない。滅定に入るためには、先に初禅に入らなければならない。その後出定して、初禅の諸法を無常・苦・無我として、観照する。その後、同様の過程でもって、順序よく無色界第二定——識無辺処禅(Viññāṇañcāyatana-jhāna)まで、修習する。

次に、第三無色定――無所有処禅(Ākiñcaññāyatana jhāna)に入り、出定後、以下の 四項目の決意をする:

- 1)寿命の限度を考慮して、寿命期間内において、滅定に入る時間(例えば7日間)を決意し、同時に、当該の時間が終了した後、出定すること(も決意する)。
- 2) 仏陀が彼を召見したいと思った時、彼は滅定から出定する。
- 3) サンガが彼を召喚したい時、彼は滅定から出定する。
- 4) 彼の周囲にある物品は、水または火などによって損壊されない。彼の袈裟と、坐っている場所(座席)は、定力によって保護される。しかし、その部屋の中にある家具、部屋そのもの、または建築物は、この第四項目の決意をなした後に初めて、保護を受けることができる。

次に、彼は、第四無色定――非想非非想処禅(Neva-saññānāsaññā-jhāna)に入る。 当該の定において、僅か、一または二個の心識刹那の定に入った後、彼は決意しておいた 期間――例えば7日間――滅定に入る。定の中において、彼は何物も見ることはない。 というのも、すべての心と相応心所は、みな、すでに中断されているが故に。<注 295 >。

問 5-2:

理論でもって、無常・苦・無我を覚知するのと、禅定でもって、究極法 (paramatthadhamma) を識別するのと、この二種類の方法の内、どちらの方が、比較 的容易に、速く、涅槃を証悟しますか?

答 5-2:

無常とは何か?

無常とはすなわち、五蘊<注 296>の事である。多くの義注では、この定義に触れている。もし、禅修行者が、五蘊を明晰に照見するならば、彼は、無常・苦・無我を知見する事に関して、問題はない。しかし、五蘊を照見することができないならば、彼はどの様にして、無常・苦・無我を知見することができるだろうか?もし、彼が、いまだ、五蘊を照見できないまま、この様な実践にチャレンジしようとするならば、彼の観禅は、ただの念仏儀式観禅に過ぎず、真正なる観禅ではありえない。唯一、真正なる観禅のみが、道智と果智を引き寄せることができる。

五蘊とは何か?

それらは、色蘊、受蘊、想蘊、行蘊と識蘊である。一つひとつの蘊は、過去、未来、現在、内在、外在、粗い、微細、劣等、優秀、遠いと近いの 11 種類に分類することができる。色蘊とはすなわち、28 色(rūpa)であり、受、想、行の三蘊は、52 心所(cetasika)であり、識蘊は、すなわち、89 心(citta)である。28 色は、「色」と称し、52 相応心所と 89 心は、合わせて「名」と称する。故に、五蘊と名色は、同じことであると言える。

これらはみな、究極名色法である。もし、禅修行者が、これらの究極名色法を見ることができたならば、彼は観の修習をして、これらの名色法の無常・苦・無我の本質を観照することができる。しかし、もし彼が、究極名色法を見ることができないのであれば、彼は、どの様にして、観の修習をするのであろうか?

というのも、名色法及びその因は、観智が必要とする対象であるが故に。これこそが、真正なる観禅なのである。唯一、真正なる観禅のみが、道智と果智を引き寄せることができる。仏陀は、《大念処經》<注 297>において、以下の様に指導して言う、涅槃を証悟する為の道は、ただ一本の道(ekāyana)しかない。他に道は無い、と。

この道とは何であるか?

仏陀は言う、先に定力を育成しなければならない。というのも、定力を擁する心は、究極名色法及びその因を知見することができるが故に、と。次に、定力を擁する心は、究極名色法及びその因の無常・苦・無我の本質を知見することができる。<注 298>しかし、我々は、涅槃を証悟するのに、どの道が一番速いかを言うことはできない。この事は、個人のハラミツ(pāramī)によるが故に。

例えば、シャーリプトラ尊者は、約二週間の時間をかけて、禅の修習に励み、結果、阿羅漢道果を証悟した。マハーモッガラーナ尊者は、僅か7日間であったが、バーヒヤダールチーリヤ(Bāhiya Dārucīriya)は、ただ、非常に短い、簡単な開示 "Diţţhe diţţhamattaṃ"(見るとは、ただ見るだけ) <注 299>を聞くだけで充分であった。彼らの阿羅漢を証悟する速度は、彼ら各々のハラミツによるのである。シャーリープトラ尊者とマハーモッガラーナ尊者が累積したハラミツは、一個の不可数(asṅkhyeyya)と 10万大劫(kappa)であり、バーヒヤは、約10万大劫であった。

シャーリプトラ尊者とマハーモッガラーナ尊者の阿羅漢道は、上首(上席)弟子菩提智 (Aggasāvaka-bodhiñāṇa) と相応し、バーヒヤの阿羅漢道は、大弟子菩提智 (Mahāsāvaka-bodhiñāṇa) に相応する。上首弟子の菩提智は、大弟子の菩提智より高いのである。<注 300>。

涅槃を証悟する為の道は、一本しかない為、これらの弟子は、発願しただけで阿羅漢を証 悟した訳ではなく、彼らが阿羅漢を証悟したのは、今生の精進が、過去世の精進(ハラミ ツ)の支援を受け得たが故なのである。

問 5-3:

生死輪廻(saṃsār)は無始無終です。そして、衆生は、無量で無辺です。故に、曾て、 我々の母親であった衆生もまた無量で無辺です。我々は、一切の衆生は、みな、かつて、 我々の母親であった事を思惟することを通して、どの様にして、慈しみを修するのです か?

我々は、一切の衆生は、みな、かつて我々の母親であった事を思惟する事を借りて、慈心 ジャーナ(mettā-jhāna)に到達することはできますか?

答 5-3:

慈心の修習に関して、過去と未来は関係がなく、現在だけが、関係している。唯一、現在の所縁のみが、慈心ジャーナ(mettā-jhāna)を生じせしめることができるが、過去または未来の所縁でジャーナは生じ得ない。我々は、死者に向かって慈愛を散布しても、ジャーナを証得する事は出来ない。無尽の輪廻(saṃsāra)の中において、どの一人の衆生であっても、かつて、我々の父親または母親でなかったことはない、と思えるが、しかし、

慈心を修習する事と、無尽の輪廻とは関係がない。故に、これは、かつての私の母親とか、これは、かつての私の父親とかを、考慮する必要はない。

仏陀は《応作慈愛経》(Karaṇīyamettā Sutta)の中において、以下の様に指導した:

" Mātā yathā niyamputtamāyusā ekaputtamanurakkhe; evampi sabbabhūtesu, mānasam bhāvaye aparimāṇam"

意味は、母親が、自分の生命を犠牲にしてまで、一人子を保護する様に、比庫もまた、一切の衆生に対して、慈愛を散布せよ。

これは仏陀の教えである。しかし、母親の様な心情だけに頼っては、ジャーナに趣く事はできない。慈愛を散布する時に、「この人が、安穏であれ、幸せであれ」と思惟するならば、ジャーナは生じる。

問 5-4:

(以下に列挙した質問を、まとめて回答する)

- ●仏陀の時代、菩薩は存在しましたか?もし存在したならば、何かの道果を証悟しましたか?または、彼は一人の凡夫(puthujjana)でしたか?
- ●なぜ、聖者 (ariya) は、菩薩になれないのでしょうか?
- ●聖弟子(sāvaka)は、心の意向を変更して、菩薩になることはできますか?もし、不可であるならば、その理由は何ですか?
- ●セヤドーの指導に従って修行したならば、禅修行者は、入流道果智 (sotāpattimaggañāṇa/sotāpattiphalañāṇa) を証悟することはできますか?

禅修行者は、菩薩道を実践したいという請願を理由として、道果を証悟しないという事を 選ぶことができますか?

答 5-4:

道果を証悟する前の段階で、禅修行者は、心の意向を変更することはできる。しかし、証悟した後では、変更は不可能である。仏陀は、多くの經文の中で、聖道は、正性定律 (sammattaniyāma) によって発生するのだと、教えている。正性定律とは:

- 1) 入流道(sotāpattimagga)は、入流果(sotāpattiphala)を生じせしめるが、その後、彼は、更に一歩進んで一来者(sakadāgāmi)になることができる。しかし、凡夫(puthujjana)の段階に戻ることはできない。
- 2) 一来者は、更に一歩進んで、不来者 (anāgāmi) になることができるが、しかし、入 流または凡夫に戻ることはできない。
- 3) 不来者は、阿羅漢になることができるが、しかし、一来、入流、または凡夫の段階に 戻ることはできない。
- 4) 阿羅漢は、死後、般涅槃するが、(これより) 更に低い聖者、凡夫またはその他の段階に戻ることはできない。

阿羅漢は、終極であり、これが正性定律(sammattaniyāma)である。阿羅漢に関しては、仏陀は、何度も、以下の様に言っている; <注 301>

" Ayamantimā jāti, natthidīni punabbhavoti."

「これが最後の生である。今、すでに後有は、無い。」

上記の事柄は、道果を証悟した後においては、菩薩になりたいと、心の意向を変更することはできない、という事を意味している。これより外に、仏陀または阿羅漢の授記を得た後もまた、心の意向を変更することはできない。しかし、ある種の人々は、未来まで待って後、阿羅漢を証悟したいと希望しながら、後に心の意向を変えて、この生において、阿羅漢を証悟したい、と思う(様になる)。《清浄之道》は、大僧護

(Mahāsaṅgharakkhita) 大長老の例をもって、この件について説明をしている。 <注 302>

彼は、四念処に精通し、すでに、止観を修習して、行捨智を証得しており、かつ、正念を 欠いた言動をしたことがなかった。彼が蓄積した止観のハラミツはすでに、充分に熟して おり、ただ、阿羅漢を証としたいと念願しさえすれば、よかった。しかし、彼は、聖慈氏 仏(Arimetteyya Buddha)に会いたいという希望を持っていたために、その教法の時代 になるまで待って後、阿羅漢を証悟することに決めた。我々が、先ほど提議した所の正性 定律に基づけば、もし、彼が今生において阿羅漢を証悟するならば、聖慈氏仏には会えな いのである。しかし、彼は臨終の時、多くの人々が参集して、彼に会いに来た。というの も、彼らはみな、彼が阿羅漢だと思っており、いまにも般涅槃するのだ、と考えた故に。 しかし、実際は、彼はいまだ、一人の凡夫であった。彼の弟子が、非常に多くの人々が、 彼がまさに、般涅槃しようとしていると考えて、この地に参集している、と報告した。

大長老は言う:

「おお、私は、本来は、聖慈氏仏に会いたいと思っていたが、しかし、今、大衆が雲集しているのであれば、私は、禅修行をしよう!」

彼は、観の修習を開始した。この時、彼はすでに、心の意向を変更したのであるが、また、彼は、過去生において、授記をえていなかったために、非常に速くに阿羅漢を証得したのである。仏陀の時代、当時の名を、アジタ(Ajita)といった聖慈氏仏以外に、仏陀がその他の菩薩に授記を与えたという記載はない。パーリ三蔵においても、聖慈氏仏の後において、何時、一人の仏陀が世に出るかということは、言及されていない。故に、我々は、仏陀の時代、一体何人の菩薩がいたか、という事に関して、説明ができないのである。

問 5-5:

解脱道(vimuttimagga)と菩薩道(仏陀になる道)<注 303>を、同時に修行することは可能ですか?もし、可能であるならば、どの様な方法ですか?

答 5-5:

解脱(vimutti)とは、煩悩を断じ除く事、または生死輪廻を離れること、という意味を持っている。(菩薩というのは)菩薩が仏陀に成なった後、般涅槃する時、生死輪廻から解脱する。もし、あなたが、一人の仏弟子であるあるならば、努力して、阿羅漢を証悟して、成就した後、(仏陀と同じ様に)あなたは、般涅槃の時、生死輪廻から解脱する。一人の人間が、仏陀であり、また同時に、弟子であることは、不可能であり、彼は、二者の内から一つを選択しなければならない。しかし、二者は、共に、阿羅漢を証悟した時に、生死輪廻から解脱する。阿羅漢を証悟する道とは、すなわち、最終的な解脱道(vimuttimagga)である。



問 5-6:

セヤドーの教える修行方法は、唯一、解脱道に適用しますか? それとも、菩薩道にも適用 しますか?

答 5-6:

二者共に適用できる。前の法話で、我々は、釈迦牟尼仏が、いまだ菩薩であった時、9生は、出家して比庫になった<注304>ものである、と説明した。もし、我々が、彼の9生における人生の修行に対して、注意を払うならば、それは、三学のみ:戒(sīla)、定(samādhi)、慧(Pañña)であった、と言う事を発見するであろう。菩薩は、八定、五世間神通を修行することができるし、また、観の修習を実践して、行捨智に到達することもできる。今、あなた方もまた、持戒の基礎の上に立って、止観の修習を実践している。あなた方が、三学を修習して、行捨智に到達した時、二つの道の中から、一つを選んで、進むことができる。もし、あなたが解脱したいのであれば、涅槃に向けて前進する道を選ぶことができる;もし、あなたが仏陀に成りたいのであれば、菩薩道を選ぶことができる。何の問題もない。

問 5-7:

阿羅漢が般涅槃をする前、すべての善業も悪業も、熟しますか?

答 5-7:

すべての、ということは、無い。有る種の善業、悪業は、熟して、果報を生じるかもしれない。もし、それらがいまだ熟さないならば、果報を生じることはなく、無効業

(ahodikamma) になり、如何なる果報の業をも生じない。例えば、マハーモッガラーナ 尊者の過去のある生における不善業は、彼が般涅槃する前に熟して、果報を生じた。過去 のある生において、彼は、失明している父母を殺そうと計画して未遂に終わった。この不 善業の為に、彼は地獄に堕ちて、数千年の痛苦を味わった。地獄から出た後、約 200 生において、殺害される憂き目にあったが、その 200 生では、毎回、頭蓋骨を含む、頭部を打ち砕かれた。何故であるか?

不善業が熟した故である。禅業と不善業は、すでに熟していない限り、それらは如何なる 果報をも生じることはない。それらは、業と呼ばれるだけである。

問 5-8:

仏陀は、覚悟(悟りを得る事)して、仏に成った後、:「一切の衆生は、如来の智慧徳相 を具備する」と言いましたか?

答 5-8:

今、あなたは、釈迦牟尼仏はすでに覚悟した、と認めている。あなたは、如来が覚悟した ことによる徳相が、一切の衆生の中に存在しているかどうか、思惟するべきである。特 に、あなた自身。あなたは、如来の如何なる徳相を擁しているか(よく考える事)。

問 5-9:

阿羅漢が持つ、己自身の五蘊への空観(suñnatā)と、外在する非生命物への空観は、同じものですか?涅槃と空境に入ることは、同じことですか?

答 5-9:

己自身の五蘊への空観と、外在する非生命物への空観は同じである。涅槃が空(suñnatā)という名を持つのは、聖道であるが故である。禅修行者が、諸行法(sankhāradhamma)を無我として了知して、己自ら涅槃を見る時、彼の道智を、空解脱と呼ぶ。まさに、道を空解脱と呼ぶ様に、道の目標——涅槃もまた空と呼ぶ。 ここで言う所の、空解脱とは、諸行法の無我の本質を照見する事を通して、煩悩から解脱する、煩悩から脱出する事を言うのである<注305>。

問 5-10:

すべての經文は、仏陀一人の述べた事(の記録)ですか?

答 5-10:

パーリ三蔵の大部分の經文は、仏陀の教説である。少しばかり弟子の教説も含む、例えば、シャーリプトラ尊者、マハーカッチャーヤナ(Mahākaccāyana)尊者とアーナンダ 尊者など。しかし、弟子の教説と仏陀の教説とは、意義において、同様である。 これらの經文の中において、例えば、マハーカッチャーヤナ尊者の語った《マハーカッチャーヤナー夜賢者経》 (M3.295) は、仏陀が「サードゥ」 (sādhu) と述べて認可を与えている点などが、その証明になる。

問 5-11:

我々は、定の中において仏陀に会うことはできないならば、我々は、神通力によって、仏 陀に会い、かつ、仏陀と、仏法について討論することは可能ですか?

答 5-11:

不可能である。神通の中の一種に、宿住随念通(pubbe-nivāsānussati)と呼ばれるものがある。もし、禅修行者が、この神通を擁しており、かつ、過去世において、仏陀に会ったことがあるならば、彼が見ることのできるのは、過去の経験に過ぎず、新しい経験ではない。もし、過去において、仏法を討論したことがあるならば、それは昔の古い問答であり、新しい問答ということは有り得ない。



脚注

<注 287>=ある種の人々は、「四禅八定」という言い方を好むが、しかし、これは不正確な言い方である。というのも、八定とは、四色界禅と四無色界禅であり、その中には、すでに、色界の四禅が含まれている。

<注 288>= 《清浄之道・修定利益論》(Samādhi-ānisamsakathā)(Vm.362)

<注 289>=これを、vipassanā の基礎的ジャーナ(vipassanāpādakajjhāna)と言う。《清浄之道》では、以下の様に説明する:「学人(非阿羅漢の聖者)と凡夫は、出定の後[想う]:『我々は、定の有る心でもって観の修習をしよう』すでに、vipassanā の近因となる安止定の修習を修習しているため、近行定の修習を含めて、障礙の中にあっても、vipassanā を証得するチャンスを得る、という功徳がある。」

その後に、《定経》(Samādhi Sutta)を引用して、以下の様に言う:「比庫たちよ。 定の修習をするべきである。比庫たちよ。定力のある比庫は、如実に了知することができ る。」

<注 290>=更に詳しい説明は、「定力の利益」の章を参照の事。

<注 291>=「名法の識別」の章及びその後の記述内容を参照の事。

<注 292>=《双運経》(Yuganaddha Sutta)(A. 4.170)において、説明されている。

<注 293>=《清浄之道・説神通品》(Iddhividhaniddesa)を参照の事。

<注 294>=「如何にして生滅智を育成するか」の章とその後の記載内容を参照の事。阿羅漢を証悟する道、及び阿羅漢の「永久住処」(ただ諸行の持続的生・滅をのみ見る)に関する詳細説明は、仏陀の《七処經》(Sattatthāna Sutta)(S.3.57)に詳しい。

<注 295>=《清浄之道・滅定論》(Nirodhasamāpattikathā)(Vm.879)

<注 296>=「無常とはすなわち、五蘊・・・」(Aniccanti khandapañcakaṃ Pañcakkhandhā aniccanti.)《分別[論]義注・経分別解釈》(Suttantabhājanīyavaṇṇanā)(Vbh。A. 154)参照の事。問答 3、にも引用あり。

<注 297>=《大念処經》 (D.2.373)

<注 298>=経文の引用は、注 39、を参照の事。

<注 299>= 《バーヒヤ経》 (Bāhiya Sutta) (U.10)

<注 300>=涅槃を証悟する四種類の人間に関して、問答 4-3、を参照の事。四種類の阿羅漢道に関しては、問答 4-7 を参照の事。

<注 301>=例えば、《浄信経》 (Pāsādika Sutta) (D.3.189)

<注 302>=《清浄之道・第一 5 種戒》(Vm.20)

<注 303>=パオ・セヤドーの当時の聴衆の、絶対的大部分は、みな大乗仏教徒であった。彼らの修行の目的は、阿羅漢(解脱)ではなく、菩薩道を行じて、仏陀に成る(一切衆生の救済)事であった。

<注 304>=問答 4-3 を参照の事。

<注 305>=涅槃の空観に関して、「無為法の知見」の章及び「涅槃三門」の章を参照の事。

<注 306>=「如何にして仏随念を修習するか」の最後の部分を参照の事。



第六講 如何にして縁起の連結を透視するか

はじめに

前の法話では、我々は、如何にして名法(nāma)を識別するのか、について説明した。また、それ以前では、如何にして色法(rūpa)を識別するのか、についての説明をした。もし、あなたが、すでに述べた所の方法で以て、名色法を識別することができるならば、あなたは、それらの因を識別することができ、また、縁起(paţiccasamuppāda)の識別もできる。縁起とは、過去、現在、未来の三世を貫く所の、因果の運用・作用である。仏陀は、聴衆の根器に基づいて、縁起を識別する四種類の方法を教えたが、五番目の方法はすなわち、シャーリプトラ尊者が教導し、かつ《無礙解道》

(Paţisambhidāmagga) <注 307>に記載されている方法である。

これら多くの方法を、すべて解説するのは、相当の時間を費やすことになるため、我々は、パオ禅林において、禅修行者によって、最も実践されている所の、二種類の方式を説明する。すなわち、シャーリプトラ尊者の教えた第五法、及び、仏陀が《長部・大因縁経》(Mahānidāna Sutta)と《相応部・因縁品》(Nidānavagga)などの経の中において指導した所の、第一法である。この二種類の方法は、共に、現在、過去と未来の五蘊(khandha) <注 308>を識別するものである。それらの中の、どれが因で、どれが果であるかを識別しなければならないのである。あなたが、このレベルの修行を、実践することが出来る様になったならば、更に一歩進んで、経典と義注の中において、教導する所の、縁起を識別するための、その他の方法を学ぶ事も可能である。

第五法

縁起の三輪転

縁起(paṭiccasamuppāda)は、12 支<注 309>を含む。それらは、三輪転(vaṭṭa)に分けることができる。それは、二個の因転輪(五因)と一個の果転輪(五果)<注 310> である:

1) 煩悩輪転 (kilesavatta) :

- i) 無明 (avijjā)
- ii) 愛 (taṇhā)
- iii) 取 (upādāna)
- 2) 業輪転 (kammavaṭṭa) :
- i) 行(saṅkhārā)
- ii)業有(kammabhava)
- 3) 果報輪転 (vipākavaṭṭa)
- i) 識 (viñnāna)
- ii) 名色 (nāmarūpa)
- iii) 六処 (salāyatana)
- iv)触(phassa)
- v) 受 (vedanā)

煩悩輪転とは、業輪転の因であり、業輪転は、果報輪転——生、老と死(第 11 支と第 12 支)——の因である。縁起の識別は、この三輪転の因果関係を透視することであり、過去を識別することから開始する。

如何にして過去世を識別するか

過去を識別する為に、あなたは、先に、蝋燭、花またはお香仏塔または仏像に供養し、かつ、生まれ変わりに関する願いを発する。例えば、比庫、尼僧、男性、女性、天人など。その後、あなたは、坐禅して、光が明瞭(明亮)で、燦然と光輝く様になるまで、第四禅に入らなければならない。次に、繰り返し、内在と外在の名色法(nāmarūpa)を識別する。この実践は非常に重要なものである。というのも、外在の名色法を識別できないのであれば、あなたが過去の名色法を識別しようとする時、非常に大きな困難に出会うが故に。

実は、過去の名色法の識別と、外在する名色法の識別は、非常に類似しているのである。次に、あなたは、仏塔または仏像に供養した時に生起した所の、名色法を、外在の所縁を識別するのと同じ様に、識別しなければならない。この様に実践する時、あなたが供養している時の、己自身の影像が出現するので、あなたはその映像の中の四界を識別しなければならない。当該の四界を色聚に分解した時、六門の中の、すべての異なる種類の色法を識別する、特に心処の54種類の色法を<注311>。

次に、あなたは、有分心及びその間に生起する所の、多くの意門心路を識別する。あなたは、この多くの意門心路の中において、繰り返し探す・・・煩悩輪転(kilesavaṭṭa)に属する意門心路(一つひとつの速行心識刹那の中には20個の名法がある)、及び業輪転(kammavaṭṭa)の意門心路(manodvāra vīthi)(一つひとつの速行心識刹那の中には、34個の名法がある)が見つかるまで、探すのである。

我々は、一つの例をあげて、説明する:蝋燭、花またはお香を仏像に供養し、比庫に生まれ変わりたいと発願した、というこの状況において:

- 1) 無明とは、「比庫」が、真実に存在しているという錯覚。
- 2) 愛とは、比庫としての生命を貪欲に求め、渇愛する事。
- 3) 取とは、比庫の生命に執着する事。

無明、愛、取という、この三者は、煩悩転輪(kilesavaţţa)を構成する心識の中において、見つける事ができる。もし、あなたが、女性に生まれ変わりたいと発願したならば:

- 1) 無明とは、「女性」が、真実に存在しているという錯覚。
- 2) 愛とは、女性としての生命を貪欲に求め、渇愛する事。
- 3) 取とは、女性の生命に執着する事。

上記の例の中で、行(saṅkhāra)は、供養(しようという)善思(kusala cetanā)、業は、それらの業力である。この二者が、縁起を構成する所の、業輪転(kammavaṭṭa)の心の中に出現する。あなたが、この様に、最近の過去における煩悩輪転と業輪転の名色法を識別することができたならば、次には、更に遠い過去にさかのぼって行く様にする。

供養する前のいくつかの時間に遡り、かつ、同様の方法を用いて、名色法を識別する。そ の後に、引き続き、少しばかり遡り、かつ、当該の識別の過程を繰り返する。

この種の方法を用いて一日前、一週間前、一か月前、一年前、二年前、三年前・・・等などの名色法を識知していき、最後には、あなたが今生において、生まれ変わった時の結生心(paţisandhi citta)の名色法<注 312>を識別するまで(当該の実践を続ける)。結生の因を探す時、あなたは、更に一歩進んで、後ろに向かって遡って行き、あなたの前世の臨終の時の名色法を見るか、または、臨終速行心(maraṇāsannna javana-citta)の所縁を見る。<注 313>。

臨終速行心の所縁は、三種類の可能性がある:

- 1) 業 (kammma) : あなたのその一生の、早い時期において、または、過去世において造(ナ) した所の、業の名法。例えば、あなたは、動物をと殺することと相応する所の瞋恚と怨恨、比庫に食べ物を供養する(心)に相応する喜悦、または禅修行に相応する平静(心)。
- 2) 業相(kammanimitta): あなたのその一生の、早い時期において、または、過去世において造(ナ)した所の、業と相関する所の影像。と殺者であれば、ナイフを見たり、または、と殺される動物の叫び声が聞こえる: 医者ならば、病気(の状態)が見える: 三宝弟子ならば、比庫、仏塔、仏像、花、供養の品などが見える: 禅修行者ならば、禅修行の業処の似相が見える。
- 3) 趣相 (gatinimitta): すなわち、まさに生まれ変わらんとしようとしている所の影像。

地獄に生まれようとする人間には、火が見えるであろう:

人間に生まれ変わろうとする場合は、母親の子宮(通常は赤い絨毯の様)が見える:

畜生に生まれ変わろうとしている場合は、森林または原野が見える:

天界に生まれ変わろうとしている場合は、天宮が見える。

これらの所縁の出現は、結生心(paţisandhi-citta)を生じせしめることのできる業力<注 314>の故である。あなたが、この点を識別する(ことができる)時、今生の果報

(vipāka) を引き起こす所の、諸々の蘊の行と業<注 315>、及びその前の無明、愛と取を識別することもできる。あなたは、当該の業輪転と煩悩輪転の、その他の名法をも、識別することができる。

実例

一名の女性禅修行者による識別

更に明瞭に理解するために、我々は、一名の禅修行者が、どの様な現象を識別することができるのか、例を挙げて説明する。彼女が、臨終の時の名色法を識別している時、彼女は、一人の婦人が、仏教の出家僧侶に果物を供養している業を見た。次に、彼女は、四界の識別から始めて、更に一歩進んで、当該の婦人の名色法を調べた所、その婦人は、非常に貧しくて、かつ、教育を受けたことのない村人である事を発見した。己自身の貧困の境遇に思いを致し、彼女は当該の僧侶に供養をし、同時に、来世には、都会に生まれて、教育を受けた女性になりたい、と発願した。

この例において:

- 1) 「都会において、教育を受けた女性」が、真実に存在すると錯覚するのは、無明 (avijia) ;
- 2) 教育を受けた女性の生命を貪欲に求め、渇愛するのは、愛(taṇhā);
- 3) 教育を受けた女性の生命に執着するのは、取(upādāna);
- 4) 果物を僧侶に供養した善行は、行(saṅkhāra);
- 5) 業、すなわち、それらの業力。

今生において、この禅修行者は、緬甸(ミャンマー)の大都市において、教育を受けた 女性となった。彼女は(正見でもって)、過去世において、果物を供養した所の業力が、 どの様にして、今生の果報五蘊を引き寄せたのか、を直接識別することができた。この種 の方法でもって、因果を識別する能力を、縁摂受智(Paccayapariggaha - ñāṇa)と言 う。

表 1d:死亡と結生

	前世								今生		
心識刹那	臨終心路(maraṇāsanna vīthi)の最後の心							一番目の	心心	十六個 の有分心	
Cittakkhaṇa	⇒	⇒	⇒	⇒	⇒	⇒		1=	⇒ 2=	⇒17⇒	
所緣 Ārammaṇa	臨終の所緣(業/業相/趣相)					前世	臨終の所緣	前世臨終の時の所縁			
心	第一速行	第二速行	第三速行	第四速行	第五速行	死	亡心 cuti	結生	:	有分 bhavanga	
Citta	1 ↑ ↓	1 ↑ ↓	1 ↓	1 ↓	11↓		$\uparrow \mid \downarrow$	1 ↑ ↓		↑ ↓	
心識刹那	今生の第一個の認知心路(意門心路)									(認知心路の後)	
Cittakkhaṇa	l⇒	2⇒	3⇒	4:	⇒ :	5⇒	6⇒	7⇒	8⇒	⇒⇒⇒⇒⇒⇒	
所緣 Ārammaņa		新しい諸蘊 (天人、人類、動物、餓鬼、地獄有情にとっては五蘊)								前世臨終の所緣	
心	意門転向	第一速行	第二速	第三 第三	速行 第	四速行	第五速行	第六速行	第七速行	有分 bhavanga	
Citta	1 1	1	111	. 1	14 1	111	$\uparrow \downarrow$	$\uparrow \downarrow$	111	1 ↑ ↓	

「表 1d:死亡と結生」への更に一歩進んだ説明

一個の心は、一個の心識刹那(cittakkhapa)を維持するが、それは生(uppāda) \uparrow 、住(ṭhiti) |、滅(bhaṅga) \downarrow という、三つの段階を持つ。認知とは、一つの、固定された過程であり、心の定律(cittaniyāmā)に従って進行する。故に:一期の生命の最後の心路:最後の心路の所縁は、三者の内の一つ:業、業相または趣相。当該の所縁は、次の一期の生命の離心路(vīthimutta)心の所縁となる<注 316>。

それらは、根門心路に依存せず、独自に生起する。それらは:

- 1) 次の一期の生命の一番目の心、すなわち、結生心(paṭisandhi-citta)。
- 2) 次の一期の生命の有分心 (bhavanga-citta)
- 3) 次の一期の生命の最後の一個の心識――死亡心 (cuti-citta) ――一期の生命の死亡心は、常に、以前の一世の臨終心路の業、業相または趣相を所縁とする。

一期の生命の、最後の一個の、心路は、必ず、ただ、五個の速行心があるだけである。 それらの思は、単独で、結生識を生じせしめることはできず、ただ、新しい一期の生命へ 向かうための、橋梁となるだけである。その後に、彼所縁が生起する可能性がある。 死亡心の前には、有分心が生起する可能性もある;それらが生起する時間の長短は、数 日、または数週間である可能性もある。一たび、死亡心が滅しさるやいなや、命根は断絶 し、残されたのは、一体の死体となる:無生命の色法である。一期の生命の一番目の心 路:結生心(一期の生命の、一番目の心)に密着して<注317>、その直後に、同一の所 縁を縁に取る、16個の有分心<注318>が生起する。その後に、必ず、一個の意門心路が 生起して、新しい五蘊を所縁として取るのである。

一名の男性禅修行者の識別

また別の多少異なる例を挙げる。一人の男性の禅修行者が、臨終の名色法を識別している時、四種類の業が、我先に熟せんとして争っていた。その中の一つは、仏典を教授する業、二つ目は、仏法を指導する業、三つ目は、禅修行の業、最後は、禅を教える業。

彼は、この四種類の業の内、どの業が、今生の果報五蘊を引き寄せたのかを追跡・調査した所、それは禅修行の業であった事を発見した。更に一歩進んで追跡・調査した所(どの

様な種類の禅修の業処を修習していたのかを、識別する)、それは観禅であり、まさに、名色法の無常(anicca)・苦(dukkha)・無我(anatta)の三相を観照している最中である事を発見した。更に一歩進んで追跡・調査した所、彼は、毎回の座禅の前と後において、(来世も)男性に生まれ、出家して比庫になり、仏陀の教法を宣揚したいと発願している事を発見した。

この例の中において、

- 1) 「男性、比庫または仏法を宣揚する比庫」が真実に存在していると錯覚するのは、無明 (avijjā)。
- 2) 男性、比庫または仏法を宣揚する比庫の生命を貪欲に求め、渇愛するのは愛 (tanhā)。
- 3) 男性、比庫または仏法を宣揚する比庫の生命を執取するのは取(upādāna)。
- 4) 観禅の修習を実践する善行は行(sankhāra)。
- 5) 業すなわち、それらの業力。

如何にして更に多くの過去世を識別するか

あなたが、上述の様に、前の一世を識知し、かつ、前の一世の五因(無明、愛、取、行と業)、及び、それらの、今生における五果(結生心(paţisandhicitta)、名色、六処、触と受)を見ることができたならば、あなたは、同じ方法でもって、過去の二番目の生、三番目の生、四番目の生という風に、能力の許す限り、多くの生を識別する必要がある。もし、過去生または未来世は、梵天界にいるならば、あなたは、三処(眼処、耳処と心処)しか見えない。(梵天界は)人類または欲界天の六処とは異なるのである。

如何にして未来を識別するか

ひとたび、この種の観智の力が育成されたならば(過去世の因と果を識別する事を通して)、あなたは、同様の方法を用いて、未来世の因と果を識別することができる。あなたは、なお変化が発生する可能性を擁する未来を見るであろう。それは過去因と現在因という二者の果報である。あなたが、いままさに実践中の禅修行もまた、これらの因の一であ

る。<注 319>。 未来を識別しようとするのであれば、先に、現在の名色法を識知することから開始し、その後に、今生の死亡の時まで、未来に向かって識別しなければならない。その時、業、業相または趣相が、今生において造(ナ)した所の、有る種の力として顕現する。この様にして、あなたは、未来世において生じるであろう結生名色法(paţisandhiñāmarūpa)を識別することができる。

能力に合わせて、出来る限り、多くの未来世を見なければならない。無明が無餘に滅尽した時、これは阿羅漢道(arahattamagga)を証悟した時に発生するのであるが、それはまた同時に阿羅漢を己自ら証悟する時でもある。引き続き、あなたは未来を識別し続けなければならない。そして、五蘊(すなわち、名色)が、無余に滅尽するのを見た時、それはすなわち、阿羅漢の生命の終焉であり、あなたが般涅槃する時である。この様に、あなたは無明が滅尽した為に、名色法が滅尽するのを見ることができる。あなたは、諸法(dhamma)が滅尽に塵滅して、二度と来生がない事を見るであろう。この種の方法でもって、過去、現在、未来の五蘊、及びそれらの間の因果関係を識別する。これがすなわち、我々が言う所の、第五法である。これは、シャーリプトラ尊者が指導したものである。識別が完成したならば、あなたは、仏陀の教えた第一法を学ぶことができる。



(一期の生命) 非阿羅漢	(次の一期の生命) 非阿羅漢	(最後の一生) 阿羅漢聖者	×
P P 果 P P 因	DD 果 DD 因DD	DD果DDI 因×	果×

	無明		無明		無明×	
識	行	識	行	龍	行×	識×
名-色		名-色		名-色	i	- 名-色×
六処		六処		六 処		六処×
触		触		触		触×
受	愛	受	愛	受	愛×	受×
P		P		P		
	取		取		取×	
生	業有	生	業	9 生	業有×	生×
	PP		PP		İ	
老.死	PP	老 . 列	E	老 .	死	老. 死×
		FF		PP		

第一法

縁起(paţiccasamuppāda)第一法<注325>は、時間の順序に従って、三世を貫く(状況を識別する)。それは、過去生の因、すなわち、無明と行から始まり、それらは、今生の果を造る:果報識(結生識から始まる)<注326>、愛、取、有、未来世を造る生、老、死及びすべての、各種の痛苦。あなたは、煩悩輪転の中において、無明、愛と取を見つけて、それが、如何にして業輪転を引き起こしたかを、及び業輪転の中の業力が、如何にして結生の時、及び生命の存続の期間の五蘊を生じせしめるかを、観照しなければならない。以上は、如何にして第五法と第一法に基づいて、縁起を識別するのか、という

簡単な説明である。まだ色々多くの細かい説明が必要であるが、あなたは、一人の、資格 のある老師(指導者)に従って、禅修行の時に、それらを学んで頂きたい。

あなたが完全に、過去、現在と未来の名色法の因果関係を識別する時、第二観智―― 縁摂受智(Paccayapariggha-ñāṇa)が完成したことになる。



脚注

<注 307>=<法住智義釈> (Dhammaṭṭhitiñāṇaniddeso) (Ps.1.45-47)。 また、《清浄之道・説慧地品》 (Paññābhūminiddesa) を参照の事。

<注 308>=パオ・セヤドーがここで述べているのは、観智の力である。それはすなわち、五取蘊を照見する能力である(《可食経》Khajjanīya Sutta)(S.A.3.79)。

彼が述べているのは、神通の属する所の宿住随念智 (pubbenivāsānussati abhiññā) ではない。この神通は、あなたに以下のものが見える様にせしめる:

- 1) 出世間法(lokuttaradhamma)と相応する所の諸蘊(khandhā)、すなわち、すでに、四道心と四果心の一を証悟した所の衆生の諸蘊(梵天界の四蘊または五蘊;欲界または人類の五蘊);
- 2) 五取蘊 (upādānakkhandhā) ;
- 3) 族姓、容貌、飲食、苦楽など;
- 4) 姓名、種族などの概念法。

<注 309>=1) 無明。2) 行。3) 識。4) 名色。5) 六処。6) 触。7) 受。8) 愛。

9) 取。10) 有。11) 生。12) 老、死、愁、悲、苦、憂、悩。

《大因縁経》(Mahānidāna Sutta)または《外道依処経》(Titthāyatana Sutta) (A.3.62)、〈はじめに〉の章を参照の事。 <注 310>=「表 3a: 生死流転の中の縁起」を参照の事。

<注 311>=方法は、<第四講 如何にして色法を識別するか>を参照の事。

<注 312>=五蘊有世間において、名色は、識に依存して生起する。反対も、然り。

<注 313>=「表 1d: 死亡と結生」を参照の事。

<注 314>=問答 3-12 を参照の事。

<注 315>=これ以外に、非果報 (avipāka) 蘊がある。それらは、業によって生じた果ではなく、ある種の因 (hetu) によって生じた果 (phala) である。たとえば、心生色法。

<注 316>=離心路:文字の上における意義は、「脱離心路」であり、また「離門 (dvāravimutta)」とも言う。すなわち、「門において離脱する」である。説明に関しては、<注 151>を参照の事。

<注 317>=この図表が示す通り、三種類の生存界のある一地(一つの場所)で死亡した後、引き続き、密接した形で、三界のその他の一地に生まれ変わる。しかしながら、ある種の人々は、「中陰」(antarābhava)の存在を主張する。それは、死亡心の生起した後、結生心の生起する前の、ある種の、存在状況であると、仮設されている。この種の間違った見解は、《論事・中有論》(Antarābhavakathā)の中において、すでに論駁されている。当該の論では、この種の仮設は、仏陀の教導した三界の他に、また別の生存界があるのだと宣言している、と指摘している。この種の誤解は、異なる種類の不来聖者への誤読(誤解)から来ているし、また、短時間の餓鬼(peta)生命への誤解からも来ている。問答 5-8 において、この事に関する説明がある。

<注 318>=無想有情(asaññasatta)の死亡は、例外である。彼らの前世臨終の所縁は、遍相であり、名法への強烈な嫌悪を伴っている。彼らが結生する時、色法のみがあって、名法、結生心、死亡心または臨終心路はない。次の一生の結生心の所縁は、その無量の長きにわたる、以前の過去生の業、業相または趣相である。

《五論再復注》(Pañcappakaraṇa anuṭīka)"Paccayapaccanīyānulomavaṇṇanā" 第 190 節の解釈では、当該の原則は、無想有情界(その後、必ず欲界に生まれ出る)に適用されるし、また、無色界(その後、同等のまたは更に高度な無色界に生まれ変わるか、または欲界に生まれ変わる)にも適用される、という。

<注 319>=未来がどの様に変化するか、という件に関して、「第三聖諦」の章とその後に記載される内容を参照の事。

<注 320>=生(jāti)は諸蘊であり、また、名色の顕現である。詳細は、《清浄之道・説慧地品》(Paññābhūminiddesa)(Vm.641)を参照の事。

<注 321>=仏陀は、二種類の方法によって、指導した:通俗教説(vohāradesanā)と勝義教説(paramatthadesanā)である。縁起の12支の中、生と老・死は、通俗教説に属し、それらは、勝義教説の識、名色、六処、触、受の五支に相当する。例えば、仏陀は、《大一有経》(Pathamabhava Sutta)の中において、生死流転の過程を教導している:「アーナンダ、欲界果報と業が存在しないならば、欲有は、顕現することができるであろうか?・・・色界果報と業が存在しないならば、色有は、顕現することができるであろうか?無色界果報と業が存在しないならば、無色有は、顕現することができるであろうか?無色界果報と業が存在しないならば、無色有は、顕現することができるであろうか?

(「できません、尊者」)

「そうである、アーナンダ。業は田地であり、識は種であり、愛は水分である。無明によって障蓋されている有情は、愛によって下界(欲界)、中界(色界)、上界(無色界)に結縛されて、識住立(viññāṇam patiṭṭhitaṃ)する。この様にして、未来において、再有が生起する。」

<注 322>=非阿羅漢と阿羅漢の二者の生命の中における果報:過去世の業行が、当該の世の結生心及びその後に従って(生起する所の)心識の生起を引き起こし、同時に、名色、六処、触と受も生起する。仏陀は《大因縁経》(Mahānidāna Sutta)の中において、以下の様に言う。一期の生命の内、結生の時の名色と識の生起にのみ、遡って追跡できる:「この生において、識別され得る所の、最も遠くで発生した輪転、それはすなわち、名色と識が一緒になって、相互に縁となりつつ、転起した所のものである。」(D.2.116)。

<注 323>=非阿羅漢の生命の因:非阿羅漢は、無明を擁している。故に、受があり、受があることによって、愛と取があり、そのため、生命の業力が生じる。すなわち、業行である。その意味はすなわち、彼らは死後、結生心を生起せしめる。

<注 324>=阿羅漢の生命の因: すでに無明がないが故に、愛と取もない。それはすなわち、未来の生命を引き起こす業力――業行がないことを意味している。このことは、彼らが死後、二度と再び結生心が生起することはない、という事である。それ以前においてや、五種類の果は、已然として、運用され、作用する。

<注 325>= 《大因縁経》(Mahānidāna Sutta)、《因縁品》(Nidānavagga)

<注 326>=実際の例として、パオ・セヤドーは、仏陀が、過去世の不善業の為に、背中の痛み(苦俱行身識(dukkhasahagata kāyaviñāṇa))を体験した事を挙げる。



問答(六)

問 6-1:

入出息念(ānāpānassati)を修習したものの、しかし、禅相を見ることができない禅修行者は、彼の修行のレベルを上昇させ、かつジャーナを証得する為に、どの様にして、己自身の身・心を検査をすればよいですか? 言い換えれば、禅相が出現するためには、どの様な条件が必要ですか?

答 6-1:

どの様な種類の業処であっても、修行を継続することは必要である。入出息念に関して、 どの様な姿勢であっても、呼吸に正念を置かねばならないし、また、その様に実践する時 に、敬虔な気持ちをもって、実践しなければならない。行(歩く)、立つ、坐る時、常 に、その他の対象に注意を向けてはならない。ただ、呼吸をのみ、覚知しなければならない。 い。出来る限り、頭で色々考え事をするのをやめる事。おしゃべりもやめる。

もし、あなたが、持続して、不断に努力するならば、専注力は、徐々に成長する。唯一、深くて重厚で、強くて力のある専注力を擁する時にのみ、禅相は生じる。禅相、特に似相がないならば、禅修行者は、ジャーナを証得することはできない。というのも、入出息ジャーナの所縁は、入出息似相であるが故に。

問 6-2:

座って修行をする時の資性は、初心者にとって、専注とジャーナに入る能力に影響を及ぼ しますか?ある種の禅修行者は、椅子に座って禅の修行をしますが、彼らは、ジャーナに 入ることができますか?

答 6-2:初心者について言えば、坐っている姿勢が一番よい。しかし、入出息念 (ānāpānāssati) について、充分なハラミツを擁する人は、どの様な姿勢においても、ジャーナに入ることができる。善くて、巧みな禅修行者は、どの様な姿勢であっても、禅に入ることができる。こうしたことから、彼らは、ベンチや椅子に座って修行しても、ジャーナに入ることができる。

シャーリプトラ尊者とスプーティ(Subhūti)尊者は、非常に良い例である。シャーリプトラ尊者は、滅定(nirodhasamāpatti)<注 327>に精通していた。彼は、村に行って托鉢する時、供養の品を受け取る前に、一軒一軒の家の門の前で滅定に入り、滅定から出てからしか、供養を受け取ることは、なかった。これは、彼の習慣であった。

スブーティ尊者は、慈心禅に精通しており、彼は、供養を受ける前、一軒一軒の門の前で、慈心禅に入り、慈心禅から出定した後、ようやく供養の品を受け取った。彼らは、なぜ、この様にしたのか?

彼らは、施主に最大の利益を得て貰いたいと願ったのである。彼らは、彼らがこの様に実践すると、無量で殊勝な善業が施主の心路において、生じることを理解していた。彼らは、施主への慈愛から、この様に実践したのである。こうしたことから、彼らは、立った姿で、入定することができた。入出息念に関しても、同様な理解ができる。

問 6-3:

入出息第四禅の対象は何ですか?もし、第四禅には、呼吸がないのであれば、禅相はある のでしょうか?ないのでしょうか?

答 6-3:

入出息第四禅には、入出息はないものの、しかし、似相は存在する。入出息似相は、普通の、自然は呼吸によって生じる。故に、所縁は依然として、入出息(assāsa-passāsa)である。《清浄之道》復注の説明<注 328>を参照の事。

問 6-4:

禅修行者は、入出息念から無色禅 (arūpa-jhāna-samāpatti) に入ることはできますか? または、慈心禅に転換することはできますか?

答 6-4:

禅修行者は、入出息第四禅から、直接無色禅に入ることはできない。なぜであるか?

無色定、特に空無辺処禅(Ākāsānañcāyatana jhāna)は、遍相を除去することによって成就されるからである。遍相を除去して、残された空間(ākāsa)に専注した後、空無辺処禅の所縁は、ようやく発現する。禅修行者に、当該の空間が見えたならば、それを徐々に拡大していかねばならない。それが各方面に拡大された時、遍相は消失する。禅修行者は、更に進んで、当該の空間を、無辺の宇宙にまで拡大しなければならない。これが空無辺処禅の所縁である;そして、それ自身(禅心)は、また、識無辺処禅

(Viññāṇañcāyatana jhāna) の所縁である。そして、空無辺処禅心の不存在は、無所有処禅(Ākiñcaññāyatana jhāna) の所縁であり、無所有処禅心はまた、非想非非想処禅 (Nevasaññāyatana jhāna) の所縁である。こうしたことから、四無色禅は、みな、逼禅の第四禅及びその所縁であることが分かる。 遍相を取り除かないのであれば、無色禅を証得することはできない。

故に、もし、禅修行者が、入出息念によって第四禅に到達した後、続いて無色定を証得したいと思うのであれば、彼は先に十遍(限定虚空遍を除く)<注 239>の一つを修習して、第四禅に到達しておかねばならない。この様にして初めて、彼は無色定<注 330>に入ることができる。

もし、彼が、入出息第四禅から、慈心(mettābhāvanā)の修習に転換したいと思うならば、彼は、その様にすることは可能である。問題は無い。彼は、入出息第四禅の光を借りて、慈心の所縁として決めたその人を照見しなければならない。もし、彼の光の強さが足りない時、多少問題が出現するかも知れないが、この種の情況は、あまり多くない。もし、遍禅の第四禅を証得した後、特に白遍第四禅の場合、彼は、非常に速く慈心ジャーナを成就することができる。この様なことから、我々は、慈心を教導する前に、先に白遍の修習を教導するのである。<注 331>

問 6-5:

自分が死亡する時間を決定(選択)するには、どの様にしたら、よいでしょうか?

答 6-5:

もし、あなたが、入出息念(ānāpnāssati)を修習して、すでに、阿羅漢道に到達しているのであれば、あなたは、般涅槃の正確な時間を知ることができる。

《清浄之道》では、一人の、経行の時に、般涅槃した大長老<注 332>の例を挙げている。彼は先に、経行の道の上に、一本の線を引き、その後に、彼に同伴する比庫たちに、彼は、あの線に到達した時、般涅槃するのだ、と告げた。そして、彼の宣言した通りのことが発生した。非阿羅漢に関しては、もし、彼らが、過去において、縁起

(paţiccasamuppāda) を修習して、過去、現在と未来の因果関係を識別したことがあるならば、彼らもまた、彼らの寿命の限界を知ることができる。ただ、上に述べた様な、大長老の様な正確さには欠ける。彼らは、正確な時間を知ることはできない。ただ、死亡する大まかな時間なら、知ることができる。しかし、これらの人々は、己自身の願望に従って死を選択し、かつ般涅槃する訳ではなく、業の法則に従うのである。シャーリープトラ尊者は、以下の様な偈を読んでいる;

"Nābhinandāmi maraṇaṃ, nābhinandāmi jīvitaṃ; kālañca paṭikaṅkhāmi, nibbisam bhatako yathā"

「私は死にたくない、私は生きていたくない、私は(その)時を待っている、役人が給料 を待つが如くに。」

決定した死亡の時間に死亡するのを「決定死 (adhimutti-marana)」と言う。

この事は、通常は、はらみつの熟した菩薩にのみ、実践が可能である。

彼らはどうしてこの様にするのか?彼らが天界に生まれ変わると、そこではハラミツを積むチャンスがない。彼らは、天界で時間を浪費したくないと思い、故に、ハラミツを積むために、人間社会に生まれ変わる様、決意死を実践するのである。

問 6-6:

もし、ある日、我々が、意外な出来事で死亡するならば、例えば、飛行機事故等、我々の 心は、身体的な如何なる痛苦にも見舞われない様にする為、その時身体から「離れる」こ とが出来ますか?どの様にすれば、それは実現できますか?禅修行者はその時、(日ごろ の)修行の力を借りて、無畏で、自在でいられますか?この様になるためには、どの程度 の禅定が必要ですか?



答 6-6:

要求される禅定のレベルは神通(iddhividha abhiññā)である。あなたは、これら神通の力を借りて、危険から抜け出すことができる。しかし、もし、あなたの不善業が、すでに熟して、悪報を生じているならば、逃げることはできない。あなたは、マハーモッガラーナ尊者の例を知っているだろうか。彼は神通に精通していたが、しかし、不善業が熟したあの日、彼はジャーナに入ることができなかった。これは、煩悩または蓋障が原因ではなく、ただ、すでに熟した所の、不善業による。故に、強盗たちは、彼の骨を、米粒の様に、細かく打ち砕くことができた。〈注 334〉。

強盗たちは、彼がすでに死んだと思い、ようやくそこを離れたが、その時、彼はようやく、ジャーナに入ることができ、神通力を回復することができた。彼は彼の身体が元に戻る様にと決意(adhiṭṭhāna)し、かつ、仏陀の所へ行って、彼が般涅槃することの許可を得た。

その後、彼はカラシーラ寺に戻り、かつ、そこにおいて涅槃した。彼の、あの不善業は、 先に果報を生じ、その後にエネルギーを失った後、その時初めて、彼は神通力を回復する ことができた。こうしたことから、もし、あなたが、まさに熟せんとする不善業がなく、 かつ、神通力を擁するのであれば、あなたは、飛行機事故においても、難から脱出するこ とはできる。しかし、普通の禅定と観智では、あなたを、この類の災難から守ることはで きない。実際、我々は、一人の人間が、これらの災難に遭遇するのは、彼の不善業が、熟 したためである、と言える。心は、身体から離れることはできない。というのも、心は、 必ずや、六処の内の一に依存して、初めて生起するが故に。六処とは、眼処、耳処、鼻 処、舌処、身処と心処である。この六処とは、すなわち、あなたの身体である。人間の世 界において、心識は、依処を離れては、生起することができない。故に、心は、身体から 離れることができないのである。<注 335>

しかしながら、もし、あなたが、ジャーナを擁するのであれば、我々は、あなたが危険に 見舞われた時、迅速に、ジャーナに入ることを勧めたい。これは、あなたは、観禅に、禅 に自在に入れる事を意味する。もし、あなたが、危険に見舞われた時に、禅に入ることが できたならば、この種の善業は、あなたを救うかもしれない。しかし、我々は、必ずそう なる、と保証することはできない。もし、死亡の時に、ジャーナの中にあるならば、あな たは梵天界に生まれ変わることができる。もし、あなたが、観の修習に精通しているならば、危険に見舞われた時、あなたは、観の修習をするのがよい。

あなたは、諸々の行法(saṅkhāradhamma)の無常(anicca)、苦(dukkha)、無我(anatta)の本質を識別しなければならない。もし、あなたが、死亡の発生する前に、観の修習を徹底的に実践したならば、あなたは、何か一つの聖道(magga)と聖果(phala)を証悟することができ、かつ、死後、善趣に生まれ変わることができる。もし、あなたが阿羅漢を証悟することが出来たならば、般涅槃するであろう。しかし、あなたには神通もなく、ジャーナもなく、観の修習の能力もないならば、あなたは、善業に頼って、難から逃れることはできる。

もし、あなたには、長寿を保証する所の、充分に強力な善業があるならば、あなたには、 難から逃れる僥倖のチャンスは残されている。まさに、マハージャナカ(Mahājanaka) 菩薩の様に。ある時、彼は、(自分の乗る)船が遭難したが、彼は、唯一の生存者となっ た。彼は、大海の中で、七日七夜、奮闘し、泳ぎ続け、最後に、一人の天人が彼を救った のである。

問 6-7:

道果を証悟した聖者(ariya)は、もはや凡夫(puthujjana)に戻らない。これは正性定律(sammatta niyāma)である。同様に、授記を獲得した人は、菩薩道を放棄することはできない。これも正性定律である。しかし、仏陀は、一切の法は、無常<注 336>であると宣言している。これらの正性定律は、無常の法則と合致していますか?

答 6-7:

ここにおいて、あなたは、正性定律とは何か、恒常とは何か、を理解しなければならない。業果の法則に従えば、不善業 (akusalakamma) は、悪報を生じ、善業 (kusalakamma) は、善報を生じる。これは業の定律 (kammaniyāma) である。この事は、善業と不善業が恒恒 (nicca) であることを意味しているのであろうか? この事を考えてみて欲しい。もし、善業が恒常であるならば、如何の様に思惟してみる:今、あなたは、仏陀の教導したアビダンマを聴聞しているが、これは聞法善業 (Dammma-sāvana kusalakamma) である。これは恒常であるか?この点を考えてみ

て欲しい。もし、それが恒常でるならば、この一生の終わりまで、あなたは、ただこの一

種類の業しかなく、その他の業は、ありえない。あなたは、理解できますか?

善業は善報を生じ、不善業は悪報を生じる。これは自然法則である。しかし、だからといって、業は恒常であるということを意味しない。善思(kusalacetanā)と不善思(akusalacetanā)は業であり、それらは、生起するやいなや、即刻滅し去る。それらは無常であり、無常である事が、それらの本質である。しかし、業力――業果を生じせしめる所の、潜在的エネルギ――ーは、猶、名色流の中において、存在するのである。

仮に、ここに一株の芒果(マンゴー)の樹があるとして、今、樹には、実が実っていない。しかし、いつの日か、ある日、実が結果する。これは自然法則である。あなたは、果実を生じせしめる潜在エネルギーは、樹木の中にある、と言うことが出来る。では、その潜在エネルギーとは、何か?

もし、その樹の葉、枝、樹皮と幹を研究したとしても、我々は、それを見つけだすことはできない。しかし、見つけられないからといって、それが存在しない、とは言えない。というのも、いつの日にか、その樹には、実が成るが故に。同様に、我々は、善業と不善業は、恒常であるとは言えない。我々は、業力は、潜在エネルギーの一種の方式をとって、名色流の中において存在し、かつ、いつの日にか、この業力が熟した時、その果報が生じるのだ、と言うのである。

今、我々は、正性定律(sammatta niyāma)について、説明しようと思う。我々は、道法と果法は、正性定律に属する、と言う。しかし、我々は、それらは恒常(nicca)である、とは言わない。それらは、また無常(anicca)なものである。しかし、道智の潜在エネルギーは、道、果と涅槃を証悟した人の名色流の中において、保存される。この種の潜在エネルギーの存在は、正性定律でり、かつ、定律による結果も存在する。例えば、入流道(Sotāpatti magga)の潜在エネルギーは、入流果(Sotāpatti phala)を生じせしめることができるが、同時に、更なる高度な果位の助縁となる。そして、それは、比較的低いレベルの果位を生じることはない。これもまた定律である。ここいおいて、あなたは以下の事柄を考える必要がある:阿羅漢を証悟することは決して容易なことではない。あなたは、極めて大きな精進を実践して修行しなければならないし、同時に、堅固な気力もまた必要である。たとえば、釈迦牟尼菩薩は、彼の最後の一生において、非常に熱心に6年間、修行に精進し、その後、一切知智(Sabbaññuta-ñāṇa)と相応する所の、阿羅漢果を証悟したのであるが、それが如何に困難な事柄であったことか、あなたは想像できるに違いない。<注 337>。

こうしたことから、無数の困難を遍歴して、阿羅漢を証悟した後、彼がまた凡夫 (puthujjana) に戻ることがあるとしたなら、修行の成果は、どうなるのであろうか? あなたは、この点を子細に考えてみて下さい。この点に関して、我々は、菩薩は、どの様な条件のもとで、授記を得ることができる(できた)のかを、見てみたいと思う。 <注 338 >。

" manussattam lingasampatti, hetu satthāradassanam : Pabbajjā guņasampatti, adhikāro ca chandatā ; Aṭṭhadhammasamodhiānā abhinīhāro samijjhati,"

彼は、以下の8項目の条件を具備した時、初めて授記を獲得することができた:

- 1) Manussattam: 彼は人間である。
- 2) Lingasampatti:彼は男性である。
- 3) Hetu (因または根):彼は充分なハラミツを擁している。仏陀が誦する、四聖諦に関する短い偈頌を聞くだけで、阿羅漢を証悟することができる。その意味はすなわち、彼はすでに、徹底的に観の修習を実践して、行捨智 (Saṅkhārupekkhā-ñāṇa) に到達している、ということである。
- 4) Satthāradassanaṃ(己自身、自ら、導師に会う):彼は、一人の仏陀に出会った。
- 5) Pabbajjā (出家): 彼は出家して、隠者または比庫になる。また、業果の法則に関して、堅固で迷う事のない信心 (=確信) がある。
- 6) Guṇasampatti (功徳の成就) : 彼はすでに、八定 (samāpatti) と五種類の世間神通 (abhiññāṇa) を成就している。
- 7) Adhikāro (増上行):彼は、仏陀の授記を受けるだけの、充分なハラミツを擁している。

その意味は、彼は、過去生においてすでに、一切知智(Sabbaññuta-ñāña)を証悟するために必要とされる修行をハラミツとして、積んでいる事。言い換えれば、彼は、過去仏の教法の時代において、一切知智の明(vijjā)と行(caraṇa)の種を蒔いてあること。

《ヤソーダラー本行》(Yasodharā Apadāna)によると、未来のシッダッタ太子は、かって、数千万仏の前で、一切知智を証悟し、かっ、それらの仏陀の指導も下に、すべてのハラミツを蓄積することを発願した(未来のアソーダラー妃は、彼のために発願した)。

彼が累積したハラミツの内の、一種の方式は、身体をもって橋として、燃灯仏 (Dīpaṅkara Buddha) と 10万人の比庫に踏ませ、(道を)渡らせたことである。この様にすれば、自分自身の命を失ってしまう事を、明確に知っていながら、そうしたのである。

8) Chandata (意欲):彼は、充分に強烈な、一切知智を証悟したいという意欲がある。この意欲は、どれほどの強さがあるであろうか?仮に、輪囲世界全体が、赤く焼けた炭火で満たされているとして、ある人が、この世界の端から、この焼け誇っている炭火の、もう一つの端まで歩いて行けるならば、一切知智を証悟することができる、と告げたならば、彼は、何等の躊躇もすることなく、この燃え盛る炭火の上を歩いて行くであろう。今、私はあなたに訊ねたい:あなたは、この炭火の上を歩くことができますか?輪囲世界全体でなくとも、仮に、この台湾から、(緬甸の)パオ森林僧院まで、燃え盛る炭火が敷かれているとして、あなたは、歩いて行くことができますか?もし仮に、この方式でもって、確実に一切知智を証悟することができるならば、菩薩は、必ずや、燃え盛る炭火を踏み越えて行く。これが、彼にとっての、一切知智への強烈な意欲なのである。

もし、一人の菩薩が、この 8 項目の条件を具備しているならば、彼は、確実に、仏陀から 授記を得ることができる。我々の釈迦牟尼菩薩は、燃灯仏時代において、名を善慧 (Sumedha) と言い、隠者であった。彼は、この 8 項目の素質を擁していたため、燃灯仏の授記を得たのである:<注 339>。

「あなたは、四個の不可数(asaṅkhyeyya)と10万劫(kappa)の後に、一切知智を証悟する。名を果徳瑪という。」授記は「必定である」ということの意味は何であるか? 授記は、それが改変できない、という意味で必定であるが、しかし、それが恒常である、ということを意味しない。燃灯仏の名色法は、無常であり、善慧の名色法もまた、無常である。これは事実である。菩薩が、いまだ一切知智を証悟していないのであれば、この業力、特に、彼のハラミツの業力は、消失することがない。燃灯仏の話、すなわち、彼の授記もまた、改変することはなく、嘘ではなり得ない。もし、それらの話が改変可能であるならば、授記は、本物ではない。その時、もう一つ、別の問題が起きる。すなわち、仏陀は嘘を言う、虚言有り、ということである。仏陀は、上に述べた8項目の条件が同時に具備されているのを見て、授記を授ける。

例えば、一人の、経験豊かな農民が、一株の、各種の条件が整ったバナナの樹を見る時、 あなたに、このバナナの樹は、四か月後に、結果するであろう、と告げるに違いない。何 故であるか?

というのも、彼は農業に精通しており、また、樹にある花と細い葉を確認してある(からである)。同様に、一人の人間に、同時に、この8項目の条件が具備されているならば、仏陀は、彼が、一切知智の果を証悟できるであろと、見出すことが出来る。こうして、彼は、仏陀から授記を受けるのである。燃灯仏の時代、我々の釈迦牟尼菩薩は、善慧隠者といい、一人の凡夫(puthujjana)であった。シッダッタ太子となった時、彼が証悟する前は、已然として、一人の凡夫であった;

唯一、証悟した後になって初めて、彼は釈迦牟尼仏になることが出来た。一切知智と相応する所の、阿羅漢道を証悟して後、彼は、彼の阿羅漢道を改変することはできない、これが正性定律(sammattaniyāma)である。ここで言う正性定律とは、阿羅漢道の結果は、改変できない、という事を指している。このことは、阿羅漢道が恒常である、という事を意味しない。それは、その様な結果が生じるのは、一種の、改変できない業力である、という事を意味しているのである。

これは、具体的には、何を指しているのか? それは、阿羅漢道は、必ずや、阿羅漢果を生じせしめ、かつ、一切の煩悩、一切の不善業と一切の善業を断じ除くことを意味している。そうでないならば、般涅槃の後、それらの実が結果してしまう。この種の業果の法則を、正性定律と言い、それは改変できないものなのである。故に、正性定律と授記は、無常の法則に違反しない(ことが分かる)。ここで、更に説明を加える。発願したり、願望したりするだけでは、一切知智を証悟することは、出来ない。菩薩が授記を獲得する時、同時に、8項目の条件が具備されていなければならない。その上、授記に頼っただけでは、仏果を得ることは出来ない。

授記を獲得した後、彼らは、引き続き、三つのレベルの、10種類のハラミツを蓄積しなければならない:

- 1) 10 種類の普通ハラミツ (pāramī) <注 340>: 彼らの子女、妻と外在の財物を布施する。
- **2**) 10 種類の中等ハラミツ (upapāramī) : 彼らの肢体と器官の布施。たとえば、目とか 手とか。

3) 10 の究極ハラミツ (paramatthapāramī) : 彼らの生命を布施する。

合計、30種類のハラミツがある。我々は、それえらを以下の様に帰納することができる;

- 1) 布施 (dāna)。
- 2) 持戒 (sīla)。
- 3) 禅の修習 (bhāvana) : 止と観 (サマタ・vipassanā)。

これらは、皆、殊勝な善業である。菩薩は、生命のあるもの、ないものの財産、彼らの肢体と生命を捨棄することを通して、これらのハラミツを円満しなければならない。もし、あなたが、あなた自身を一人の菩薩であると信じるならば、あなたは、これらのハラミツを円満させたいと思いますか?もし、可能であるならば、かつ、あなたは、かつて、仏陀の授記を獲得してあるならば、あなたは、いつの日にか、一切知智を証悟することができる。しかし、上座部の教法によれば、同一の一個の時期には、一人の仏陀しか、出現を許さない。彼らは、どれくらい長い時間を費やして、はらみつを円満するのであろうか?我々の釈迦牟尼菩薩は、授記を獲得した後、四個の不可数と10万大劫の時間を使って、ハラミツを蓄積した。これは最も短い時間である。しかも、授記を獲得する前、彼は、すでにどれくらいの時間、修行していたか、を我々は確実に断言することが出来ない。故に、あなた方は、以下の事を覚えておく事:ただ発願したり、希望するだけでは、仏陀に成ることは出来ない事を。

問 6-8:

普通弟子が、止観(サマタ・vipassanā)の修習をして、縁摂受智、生滅智または行捨智まで到達した後に、死んだならば、彼は四悪趣に堕ちない。たとえ、放逸が原因で、彼の止観(の力)が退失しても、かつて修行した所の、止観の業力は、已然として存在する。 《入耳経》もまた、彼は迅速に涅槃を証悟する、と言う。<注 341>。

それでは、セヤドーは、6月2日の問答の中において、なぜ、已に授記を獲得した菩薩 (たとえ、彼が、修行によって、すでに行捨智に到達してあろうとも)、悪趣に堕ちる可能性がある、とお答えになったのでしょうか? <注 342>。どの様な経典に、これらの事柄が書かれていますか?

答 6-8:

これは、菩薩道と普通弟子の道が異なるためである。あなたは、パーリ聖典の《仏陀史》 (Buddhavaṃsa) と《所行蔵》 (Cariyāpiṭka) を参照することができる。

この二種類の道は、どの様に異なるか? 菩薩はすでに、仏陀の授記を獲得しているものの、しかし、その時の彼は、いまだハラミツが熟しておらず、一切知智は証悟していない。彼は、更に一歩進んでハラミツを育成しなければならない。例えば、燃灯仏の授記を獲得した後、我々の釈迦牟尼菩薩は、引き続き継続して、四個の不可数と 10 万大劫の時間の長きにわたって、ハラミツを累積しなければならなかった。授記を獲得した後から、後ろから数えて二番目の生の間において、菩薩は、過去の不善業が原因で、動物に生まれ変わったこともある。その時、彼は、それらの不善業を徹底的に打ち壊すことはできなかった。

故に、あれら不善業が熟した時、彼は、それらの果報から逃げる事ができなかった。これ は正性定律である。しかし、すでに縁摂受智、生滅智または行捨智に到達している普通弟 子、彼らのハラミツは、道智と果智を証悟するには、充分に足りている。その為、彼ら は、今生または来生において、道果を証悟し、己自ら涅槃を見ることができる。これもま た正性定律である。

問 6-9:

阿羅漢もまた、他人に授記を与えることができます。ここで言う授記、その定義は、どの 様なものでしょうか?どの様な経典またはソースを読めば、この様な資料に出会うことが できますか?

答 6-9:

《仏陀史》(Buddhavaṃsapāļi)と《本行》(Apadānapāļi)とを、確認する事。

天眼 (dibbacakkhu) 智の内の、二番目の智――未来分智 (Anāgataṃsa-ñāṇa) を具備する阿羅漢だけが、授記を与えることができる。彼らは、数量の限定された未来生をのみ、見ることができるが、しかし、仏陀の様に、無数生 (asaṅkhyeyya) または多くの劫 (kappa) を見る事は出来ない。

問 6-10:

非想非非想処定 (Nevasaññānāsaññāyatana samāpatti) の中において、観の修習はできますか? どの様な経典または資料を見れば、これに関する回答が得られますか?

答 6-10:

如何なる禅定においても、観の修習は出来ない。非想非非想処定もまた、一種の禅定である。何故であるか? というのも、観の修習の対象は、通常は、ジャーナを育成する為の対象とは異なるが故に。<注 343>

我々は、ただ単一で、かつ、同一の所縁(例えば、入出息禅相または遍相)に専注する事を通して、禅定を育成するが、しかし、異なる所縁を観照する事を通して、観の修習をする。例えば:入出息ジャーナの所縁は、入出息似相でる――これは概念法であり、究極法ではない。しかし、観智の対象は、概念法ではなく、究極名色法及びその因であり、その中には、ジャーナ名法(例えば、初禅の34種類の名法、第二禅の32種類の名法、第三、第四禅と無色禅の31種類の名法)も含まれる。<注344>。

唯一、ジャーナから出定した後に、ようやく、ジャーナ心及び相応する心所に対して、観禅の修習を実践することができないのであるが、非想非非想処には、31種類の名法があり。《中部・逐一経》<注 345>では、この事に言及してある。当該の經典の中において、仏陀は、シャーリプトラ尊者が、入流果を証悟した後の、15日間の禅の修習方法に関して、詳細に講述している。例えば、シャーリプトラ尊者は、初禅に入り、出定後、初禅の34種類の名法の生・住・滅を逐一識別し、かつ、それらの無常・苦・無我を観照した。彼は、この種の方法を用いて、無所有処禅まで識別し続けた。これを逐一法観(Anupadadhamma vipassanā)と言う——逐一に名法を識別するのである。

しかし、彼が、非想非非想処定に到達した時、その名法を、全体的にしか、観照することができなったが、これを聚思惟観(kalāpasammasana bhikkhavā)と言う。

仏陀だけが、非想非非想処禅の名法を逐一、識別することができる。というのも、それら は極めて微細であるためであって、たとえシャーリプトラ尊者の様な上首(上席)弟子で あってさえも、それらを逐一、識別することはできないのである。

問 6-11:

一人の、精神異常者、幻聴のある者、脳疾患を患う者、中風または大脳神経失調症の者は、この種の法門を修行することはできますか?もし、可能であれば、どの様な注意点がありますか?

答 6-11:

この種の人々は、禅の修行はできる。しかし、通常は、あまり成功しない。というのも、彼らは、充分に長い時間専注することができないが故に。「充分に長い時間」とは、一人の人間の専注力が強くて力のある時、それが数時間維持できる事をいい、また、多くの回数座れなければならない。この種の人間の専注力は、通常、不安定であり、これが問題である。もし、彼らが、数多くの回数、数日、数か月座ることができて、彼らの専注力が維持できるならば、成功する可能性もあるかも知れない。パターチャーラーの物語は、有名な例である:彼女の夫、二人の子供、父母と兄弟は、同じ日に死亡し、その事によって、彼女は悲哀の為に発狂し、裸で四方八方彷徨って歩いた。ある日、彼女は仏陀が説法をしている沙瓦提城の掲徳林に来たが(この時)、彼女の前世において累積したハラミツが熟した。そのことが原因で、また同時に、仏陀の慈悲によって、彼女は敬虔な態度で仏法を聞くことができた。彼女の心は、徐々に落ち着いて来て、かつ、法を領悟した。

彼女は非常に速くに、入流者(Sotāpana)に成った。彼女は出家して比庫尼となり、引き続き禅の修行をして、彼女の定力と観智を維持した。ある日、彼女の禅修行のハラミツが熟し、五種類の世間神通と四無礙解智<注 346>を具備する阿羅漢になった。比庫尼サンガの中において、彼女は戒律に一番に精通していた。彼女は、厳格に戒律を守り、義注を含め、戒律を熱心に学んだ。

勝蓮華仏(Padumuttara Buddha)の教法の時代から、カッサパ仏(Kassapa Buddha)の教法の時代まで、彼女は、ハラミツの累積を実践しつづけた。特に、カッサパ仏の教法の時代、当時、彼女はキキー王(Kikī)の娘であって、彼女は、童真梵行(komāribrahmacariya)を、二万年の長きにわたって守った。童真梵行とは、五戒の事を指し、その中の離欲邪行学処を、完全な梵行を守る事に替えた。

彼女は、在家居士の身分のまま、戒(sīla)、定(samādhi)、慧(Paññā)の三学を、 二万年の長きにわたって育成した。これらのハラミツは、果徳瑪仏(ゴータマ仏陀)の教 法の時代において、熟したのである。こうしたことから、彼女は発狂したことがあるが、理智を回復し、三学を善く学び、阿羅漢を証悟したのである。この種の人々が、禅の修行を実践する時、kalyāṇamitta(善友)、すなわち、良い指導者、良い友人及び良い修行仲間が必要であり、また、適切な薬物、適切な食物もまた、大きな助けになるものである。しかし、我々の経験によると、彼らの大多数の人々は、長時間の専注を維持することが出来ず、(修行に)成功することは、難しい。

問 6-12:

人間関係が上手くいかない人でも、第四禅に到達することに成功したならば、彼の、他人の付き合い方が、改善されることがありますか?ジャーナに到達すると、この種の問題を 改善することが出来ますか?

答 6-12:

これらの問題は、通常は、瞋(dosa)によるもので、これは、五蓋の一つである。人間は、この種の態度を改めないならば、ジャーナを証悟することはできない。もし、彼が、この種の態度を改めることができるならば、彼は、ジャーナを証得することができるだけでなく、道果、また阿羅漢まで、証悟することができる。一つの有名な例は、チャンナ長老(Channa Thera)である。彼と我々の菩薩は、同一の日に、カピラヴァッツゥ(Kapilavatthu)の浄飯王(Suddhodana)の王宮で生まれた。彼は、浄飯王の女奴(女奴隷)の息子であった。幼い時、彼はシッダッタ太子の遊び友達であったが、この事は、後々になって、彼の心に、非常に大きな傲慢の心が生まれることになった。

彼は、常にこの様に思った:

「これは私の国王、仏陀は私の遊び友達、法は我々の法、彼が俗世を離れて出家する時、 私は彼に付き従って、アノーマー (Anomā) の河畔まで行ったが、この様にした者は、私 以外、誰もいない。シャーリープトラとマハーモッガラーナ等も、後になって花開いただ けではないか・・・。」

こうしたことから、彼は常に、言葉粗く、シャーリプトラ尊者、マハーモッガラーナ尊者 とその他の大長老を尊重することがなかった為に、彼と友好関係を築こうという人間は皆 無であった。仏陀在世の時代、彼は、未だジャーナまたは道果を証得することができなか ったが、それは、彼が、傲慢と瞋恨を取り除くことができなかった故である。 仏陀が般涅槃する夜、仏陀は、アーナンダ尊者に、チャンナ尊者に対して、梵罰(brahmadaṇda)、すなわち、誰ひとりとして、チャンナ尊者と会話してはならない、たとえ彼が自ら人と対話したがっていたとしても、という罰を実行する様、委託した。誰も彼と会話しなくなった時、彼の傲慢と瞋恨は消失した。この種のサンガカンマ(saṅghakamma)は、仏陀般涅槃五か月の後、コーサンビー(Kosambī)のゴーシターラーマ(Ghositārāma)において行われた。

チャンナ長老は、ゴーシターラーマを離れ、バラナシの近くの鹿野苑の仙人落処に行った。彼は、禅修行に精進したが、どの様に努力しても、成就することが出来ない。故に、ある日、彼はアーナンダ尊者の所へ行って、助けを乞うた。彼はなぜ、成就することができない?彼は、五蘊の無常・苦・無我の本質を観照したが、縁起(paţiccasamuppāda)を識別することを欠いていた。

故に、アーナンダ尊者は、如何にして縁起を識別するかを教え、かつ、《カッチャーナゴーッタ 経》(Kaccānagotta Sutta)<注 347>を教導した。アーナンダ尊者の法話を聞き終わると、チャンナ尊者は入流道果を証悟した。彼は引き続き修行して、非常に速くに、阿羅漢を証悟した。こうしたことから、一人の人間が、己自身の悪劣な性格を改め、止観(サマタ・vipassanā)を正確に修習するならば、ジャーナ、聖道と聖果を証得することができる(事が分かる)。



脚注

<注 327>=この定に関しては、問答 5-1 を参照の事。

<注 328>=この種の情況において、普通の、自然な呼吸によって生じた入出息似相もまた、入出息 (assāsa-passāsa) と呼ぶ。 (Assāsa-passāsa nissāya uppannanimittaam-pettha assāsa-passāsa sāmaññameva vuttaṃ.) (Vm.T.215)

<注 329>=関連の内容は、<注 114>を参照の事。

<注 330>=如何にして無色禅を修習するかについて、詳細は、「四無色禅」の章を参照の事。

<注 331>=関連の詳細は。問答 2 を参照の事。

<注 332>= 《清浄之道・入出息念論》(Ānāpānassati kathā)(Vm. 238)

<注 333>=《長老偈・シャーリプトラ長老偈》(Sāriputtattheragāthā)(Thg.1002)

<注 334>=詳細は、問答 5-7 を参照の事。

<注 335>=身・心(名色)の相互依存関係に関しては、「第一と第二聖諦」の章を参照の事。

<注 336>=仏陀は、「諸法無常」と述べたことはない。正確には「諸行無常」である。 (Dhp.277)

<注 337>=我々の菩薩は、過去世において、護明という名の婆羅門に生まれ変わった時、カッサバ仏を軽蔑する悪業をなしたことがあった為に、彼が今生において、出家した後、6年の苦行をせざるを得なかった余報が存在した。セヤドーが、ここにおいて、菩薩の6年間の苦行に触れたのは、証悟する事の困難さを説明したかった為である。

<注 338>=《仏陀史・善慧発願論》(Sumedhapatthanākathā) (Buddhayamsa.2.59)

<注339>=同上。

<注 340>=10 ハラミツの具体的な名称は、問答 4·1 を参照の事。

<注 341>=《入耳経》(Sotānugata Sutta)(A. 4.191)。

<注 342>=問答 4-3 を参照の事。

<注 343>=第二と第四無色禅は例外である。専注するのは、その前の、無色禅禅心――これは概念法ではなく、究極法である。<注 242>を参照の事。また、「四無色禅」の章を参照の事。

<注 344>=如何にしてジャーナ心路を識別するか、に関しては、「ジャーナ心路の識別」の章を参照の事。

<注 345>= 《逐一経》 (Anupada Sutta) (M.3.93-97)。 受にのみ焦点を当てて観の 修習を実践することに関する問答においても、この経に言及した。問答 4-6 を参照の事。

<注346>=四無礙解智に関しては、問答4-2を参照の事。

<注 347>= 《カッチャーナゴーッタ経》(Kaccānagotta Sutta)(S.2.15)及び《チャンナ経》(Channa Sutta)(S.3.90)を参照の事。



第七講 己自ら涅槃を見る為に如何にして観智を育成するか

くはじめに>

前の講話において、我々は、如何にして第五法と第一法に基づいて、縁起を識別するのか、を簡単に説明した。本日、我々は、己自ら涅槃を見る為に、如何にして観智を育成するか、を説明する。己自ら涅槃を見る為には、順序に従って、16 観智(ñāṇa)を育成する必要がある。一番目の観智は名色限定智(Nāmarrūpapariccheda-ñāṇa)である。我々は、名色を説明する時に、すでに、この種の観智についての解説をした。

二番目の観智は縁摂受智(psccayapariggaha-ñāṇa)である。前の講話で、如何にして過去、現在、未来の三世の名色の因果関係を識別するか、すなわち、如何にして縁起を識別するか、を解説した時、この種の観智の説明をした。この二種類の観智を育成した後、あなたは、特相<注 348>、作用、現起(現象)と近因に基づいて、すべての名法、すべての色法とすべての縁起支を識別することを通して、それらを完成させなければならない。この事は、簡単な方式を用いて説明するのは、非常に困難であるため、最も良いのは、実際の修行の時に、詳細を把握することである。次に、我々は、その他の観智について、触れてみたい。

如何にして思惟智を育成するか

三番目の観智は、思惟智(Sammasana-ñāṇa)、すなわち、諸々の行法を、グループに分けて、思惟するのである:異なった分類によって、諸々の行法の無常(anicca)・苦(dukkha)・無我(anatta)の三相<注349>を観照する。

二類、すなわち、名と色

五類、すなわち、五蘊<注350>

12類、すなわち、12処<注351>

12類、すなわち、12縁起支<注352>

五蘊を思惟することを例にとる。仏陀は《無我相経》(Anatta-lakkhana Sutta) < 注 354 > の中において、正智でもって五蘊(すべての色、受、想、行、識別)を観照する所の、三種類の方式を教導している。

「これは私のものではない (netam mama)」。

「これは私ではない (nesohamasmi)」

「これは私の自我 (エゴ、私自身) ではない (na mesoattā) 」 <注 355>

《蘊経》(Khandha Sutta)において、仏陀は、五蘊の一つひとつを、以下の様に分類する:過去、未来、現在、内、外、粗い、微細、劣等、優秀、遠いと近い。<注 356 >。この種の観智を育成するには、あなたは、先に第四禅を復習し、禅定の光を、明瞭(明亮)に、燦然と光輝くものにする。もし、あなたが、純観乗者であるならば、四界差別しか修習したことがないが、その場合は、更に定力を高めて、光が、明亮で強く盛んになる様にする。この二種類の情況において、みな、先に色法を(修習の対象として取る事を)第一類とし、六根門の完成色<注 357><注 358>を逐一識別する。それらの生・減を見て、かつ、それらを無常(anicca)として、了知する。あなたは、この様に、何度も繰り返して、内観、外観、内外観の実践をしなければならない。外観の時、近くから遠くまで、徐々に観照の範囲を広げて行き、無辺の宇宙に至る(様にする)。その後、同様の順序に従って、色法が生・滅するのを、不断に継承しなければならない痛苦を観照し、それを苦(dukkha)と了知する。最後に、色法には、永恒なる自我というものはない事を観照して、それを無我(anatta)と了知する。

次の一種類で、観照しなければならないのは、名法の無常・苦・無我である。先に、識別を(開始)する前に、先ほど識別していた所の、六門中の、すべての名法を識別する、すなわち、一つひとつの門毎の心路(vīthi)の中の、一つひとつの心識刹那の中の、心と、相応する心所、及び、各々の心路の間に生起する所の、有分心を識別するのである。観照の順序は、色法と同様である。この二種類(現在の六門の名色法)を観照し終えたならば、今、あなたは、(以前に)すでに識別したことのある、結生心から死亡心までの間の、今生の名色法の無常・苦・無我を観照しなければならない。あなたは、再度、三相を観照する。一度に一個、何度も繰り返し、内観と外観を実践する。今生を観照し終えたな

らば、あなたは、縁起を識別していた時に識別していたのと同じ様に、過去、現在、未来 の三世の無常・苦・無我を観照する。ここにおいて、あなたは、すでに識別したことのあ る、過去、現在、未来の三世のすべての名色法の三相を観照しなければならない。一回に つき一個、内観外観、繰り返し実践する。

次に、あなたは、縁起第一法<注359>に基づいて、過去、現在、未来の諸々の縁起支の無常・苦・無我を観照しなければならない。一回につき一個、繰り返し、内観外観を実践すること。この段階において、あなたは、あなたが非常に快速に更に高度な観智を育成しており、順序に従って、阿羅漢まで証悟せんとする事を発見するかも知れない。もし不可能であるならば、他にある幾種類かの練習方法が、あなたの観智を増強することができる(に違いない)。

如何にして観智を強化するか

40 行相

一番目の練習は、40 行相随観法 (cattārīsākāra anupassanā) <注 360 > であり、過去、現在、未来の内外名法の無常・苦・無我を観照する。それらは、みな、パーリ語では、"to"の語尾で終わっている為、我々は、40 の"to"と呼んでいる。無常想は 10:

- 1) 無常 (aniccato)
- 2) 毀 (palokato)
- 3) 動 (calato)
- 4) 壊 (pabhaṅguto)
- 5)不恒 (addhuvato)
- 6) 変易法(vipariṇāmadhammato)
- 7) 不実 (asārakato)
- 8) 無有 (vibhavato)
- 9) 死法 (maranadhammato)
- 10) 有為 (saṅkhatato)。

苦想は25:

- 1) 苦 (dukkhato)。2) 病 (rogato)。3) 悪 (aghato)。4) 出来物 (gaṇdato)。
- 5) 箭 (sallato) 。6) 疾 (ābādhato) 。7) 禍 (upaddavato) 。8) 怖畏 (bhayato)
- 9) 難 (ītito) 。10) 災患・災難 (upasaggato) 11) 非保護所 (atāṇato)
- 12) 非非難所 (alenato) 。13) 非帰依処 (asaraṇato) 。14) 殺戮者 (vadhakato)
- 15) 悪の根 (aghamūlato) 。16) 患 (ādīnavato) 。17) 有漏 (sāsavato)
- 18) 魔食 (mārāmisto)。19) 生法 (jātidhammato)。20) 老法 (jarādhammato)
- 21) 病法(byādhidhammato)。22) 愁法(sokadhammato)。23) 悲法(paridevadhammato)
- 24) 悩法(upayāsadhammato)。25) 雑染法(saṃkilesikadhammato)。

無我相は5:

- 1) 無我 (anattato) 。2) 空 (suññato) 。3) 敵 (parato)
- 4) 無 (rittato)。5) 虚 (tuccato)。

40 の"to"を用いて、過去、現在、未来の内外の名色法を観照する時、有る種の人々の観智は、阿羅漢を証悟することができる程、向上する。もし、不可能である場合、色七法(rūpasattaka)と、非色七法(arūpasattaka)<注 361>を練習することもできる。

色七法

色七法を用いて、四種類の生因の色法(業生色、時節生色、心生色と食生色)<注 362 >を識別する方法である。

- 1) 色七法の第一法は、この一期の生命の結生から死亡の間の色法を、無常・苦・無我として観照する。内観、外観する。
- 2) 色七法の第二法は、本期の生命の中の、異なる段階の色法を、無常・苦・無我として 観照する。内観、外観する。あなたは、本期の生命を、100年と見做して、それを三個の 時期に分割する。一期は、33年である。その後、一つひとつの期間の色法が、そこにおい

て、生起し、かつ、滅し去って、次の期間に引き継がれることがない事を観照する。すな わち、無常・苦・無我である。次に、本期の生命を、更に短く区切り、同様に、かの如く に観照する。

100年の生命を:

- 10個の期間に区切る。一つひとつの期間は、10年である;
- 20個の期間に区切る。一つひとつの期間は、5年である;
- 25個の期間に区切る。一つひとつの期間は、4年である;
- 33個の期間に区切る。一つひとつの期間は、3年である;
- 50個の期間に区切る。一つひとつの期間は、2年である;
- 100個の期間に区切る。一つひとつの期間は、1年である;
- 300個の期間に区切る。一つひとつの期間は、四か月である;
- 600個の期間に区切る。一つひとつの期間は、二か月である;
- 2400個の期間に区切る。一つひとつの期間は、半月である。

最後に、毎日を二個の期間に区切る。次に、六個の期間に区切る。一つひとつの種類ごとの情況を観照する。色法は、その時、その時に、生起し、かつ滅し去る。次の時期、時間に引き継がれることはない。それはすなわち、無常・苦・無我である。

更に一歩進んで、時間を短縮して、身体の一つひとつの動作の過程(を観照する):前進、戻る、前を見る、横を見る、手足の曲げ伸ばし。次に、一歩一歩の歩みを、6個の段階に分割する:足を上げる、もっと上げる、前に移動する、落下させる、地面に触れる、踏みしめる。(上に述べたのと)同様に、この100年の生命の中の、一つひとつの段階における色法の無常・苦・無我を観照する。

3) 色第三法は、食生色の無常・苦・無我<注 363>を観照する。あなたは、この 100 年の生命の中の、その毎日において、飢餓の時の色法と満腹した時の色法を観照しなければならないし、かつ、飢餓の時の色法は、満腹した時の色法に引き継がれることはない事を見なければならない。(その反対も然り)。

- 4) 色第四法は、時節生色の無常・苦・無我を観想する。あなたは、この 100 年の生命の中の、その毎日において、暑い時の色法と、寒い時の色法を観照しなければならないし、かつ、暑い時の色法は、寒い時の色法に引き継がれることはない事を見なければならない。(その反対も然り)。
- 5) 色第五法は、業生色の無常・苦・無我を観照する。あなたは、この 100 年の生命に中の、その毎日において、六根門の一つひとつの根門の色法が、その場で生起し、かつその場で滅し去って、その他の根門に行くことがない事を観照しなければならない。
- 6) 色第六法は、心生色の無常・苦・無我を観照する。あなたは、この 100 年の生命の中の、その毎日において、楽しい、愉快な時の色法、及び不愉快、悲しい時の色法を観照しなければならない。
- 7) 色第七法は、今現在の、無生物の色法の、無常・苦・無我を観照する。無生物の色法 とは、命根と五浄色等の業生色のない色法を指す。たとえば:鉄、鋼、銅、金、銀、プラ スチック、真珠、宝石、貝殻、大理石、珊瑚、土、岩石、セメントと植物等。この種類の 色法は、外界にのみ存在している。

以上が色七法である。

非色七法

非色七法において、あなたは、色七法の三相を知見することができる所の、観の修習心(名法)の無常・苦・無我を観照しなければならない。この事は、あなたの観照の対象は、観の修習心で有る事を意味しているが、それはすなわち、その後に生起する所の観の修習心でもって、一つひとつの情況下における、観を修習する心<注364>を観照するのである。

1) 非色七法の第一法は、先に、色七法の色法を、無常・苦・無我として観照するものの、しかし、これらの色法は、一つの全体(kalāpa)として、観照する。そして、引き続き、次に、これらの色法を知見することのできる名法の無常・苦・無我を観照するのである。この事は、あなたが、これらの色法の全体を無常であると観照した後、次に、その後に生起する所の観の修習心によって、その前の、観の修習心自体の、無常・苦・無我を観

照するのである。これらの色法の全体を苦及び無我として、観照する方法は、上に述べた のと同じである。

- 2) 非色第二法は、色七法の一つひとつの法における、名法の無常・苦・無我を観照する。これは、あなたが再度、色七法の一つひとつの色法を無常として観照した後、次に、引き続いて、その後に生起する所の観の修習心でもって、その前の観の修習心自体の無常・苦・無我を観照する、という事を意味する。これらの色法を苦及び無我として観照する方法は、前に述べたのと同じである。
- 3) 非色第三法は、再度、色七法の一つひとつの名法を無常・苦・無我として観照するものであるが、しかし、連続して四回、観照しなければならない。これは、あなたが、再度、色七法の一つひとつの色法を無常であると、観照した後、二番目の観の修習心でもって、一番目の観の修習心を、無常・苦・無我として観照し、次に、三番目の心でもって、二番目の心を観照する・・・五番目の観の修習心でもって、四番目の観の修習心の無常・苦・無我を観照することを意味する。これら色法の苦及び無我を観照する方法は、上に述べたものと同じである。
- 4) 非色第四法は、前のものと同じであるが、しかし、引き続き、11番目の観の修習心でもって、10番目の観の修習心の無常・苦・無我を観照するものである。
- 5) 非色第五法は、名法の無常・苦・無我を観照して、邪見 (ditthi) 取り除くものである。
- ここにおいて、あなたが観照するのは、色七法(を観照する所)の、観の修習心である。 その後、ひとたび、無常想と苦想が強くて力のあるものに変化したならば、無我想を強化 しなければならない。
- 6) 非色第六法は、名法の無常・苦・無我を観照して、我慢(māna=慢心)を取り除くものである。あなたは、再度、色七法の観の修習心を観照する。その後、ひとたび、苦想と無我想が強くて力のあるものに変化した時、無常想を強化しなければならない。苦想と無我想の支援の下、強化された無常想は、我慢(慢心)を取り除くことができる。

7) 非色七法は、名法の無常・苦・無我を観照して、欲 (nikanti) を取り除くものである。あなたは、再度、色七法の観の修習心を観照する。その後に、ひとたび、無常想と無我想が強くて力のあるものに変化したならば、苦想を強化しなければならない。無常想と無我想の支援の下、強化された苦想は、欲を取り除くことができる。以上が、非色七法である。

もし、過去、現在、未来及び内外の名色法に対して、これらの練習を完成させることできるならば、それは最も良いことである。勿論、これらの練習が、絶対に必要である、という訳ではないが。この練習を完成させた後、名色法は、あなたにとって、非常に明晰なものになる。今、すでに、如何にして、諸々の行を分類しながら、観智を育成するかについての説明を終えた。次に、我々は、如何にして生滅智を育成するか、について解説する。

如何にして生滅智を育成するか<注365>

くはじめに>

生滅智 (Udayabbaya-ñāṇa) は、諸々の行法の生起と壊滅を知見する智慧である。諸々の行法とはすなわち:内外及び過去、現在、未来における、名色、五蘊、12 処、18 界、四聖諦、縁起<注 366>の事である。生滅智は、実際には、二種類の智が含まれる:

- 1) 縁(paccayato)に依る智:すなわち、諸々の行法の縁生と縁滅;
- 2) 刹那 (khaṇato) に依る智: すなわち、諸々の行法の、刹那生と刹那滅。

諸行法の縁生と縁滅を観照するため、あなたは、我々が前の講話で解説した所の、縁起法(例えば、第五法)に基づいて、観照を実践しなければならない。<注367>。

諸行法の刹那生・滅を観照するために、あなたは、すでに識別したことのある、一つひとつの世の、結生から死亡の間の、すでに識別したことのある、心路の中の、一つひとつの心識刹那の五蘊が如何に生と滅(を繰り返しているか)を観照しなければならない。

生滅智を育成するには、二種類の方法がある:簡略法(ただ、諸行法の刹那生・滅性をのみ、観照する)及び詳細法(諸行法の縁生縁滅性と刹那生滅性を、同時に観照する)、で

あるが、ここでは、我々は詳細法をのみ、説明する。詳細法による修行は、三つの段階に 分けることができる:

- 1) 生 (udaya) をのみ観じる: すなわち、諸行法の因縁生と刹那生。
- 2) 滅(vaya) をのみ観じる: すなわち、諸行法の因縁滅と刹那滅。
- 3) 生・滅(udayabbaya)を観じる:すなわち、諸行法の縁生、縁滅と刹那生、刹那滅。

如何にして縁起第五法に基づいて生滅智を育成するか

生起随観の法

生滅智の詳細法の育成を開始する時、あなたは、繰り返し、諸行法の因縁生と刹那生を、観照しなければならない。これを生起随観の法(samudaya-dhammānupassī)と言う。たとえば、先ほど提起した所の、縁起第五法に基づいて、色法の因縁生起を観照するものである。その意味はすなわち、あなたは、再度、逆観によって、過去生の臨終の刹那に到り、今生の業生色法<注368>を引き起こした(udaya)所の、過去の五因を観照する、ということである。あなたは、逐一、(1)無明、(2)愛、(3)取、(4)行と(5)業が如何にして生起し、かつ、(それらによって如何にして)今生の業生色法の生起が引き起こされるのかを、観照しなければならない。

次に、あなたがすでに識別したことのある、結生から死亡の間の心路の中の、一つひとつの心識刹那の業生色法の刹那生起を観照する。このことは、あなたは、離心路心(vīthimutta citta) <注 369>が生起(udaya)する時の五蘊、及びあなたが、かつて識別したことのある所の、その間に生起した所の、すべての六門心路(vīthi)の中の、一つひとつの心識刹那が生起する時の五蘊を、観照しなければならない、という事を意味している。すでに識別したことのある一つひとつの過去生、及び般涅槃までのすべての未来世もまた、この様に観照する。<注 370>。

次に、順序に従って、時節生色、心生色と食生色<注 371>の因縁生起を観照する。 あなたは、以下の様に観照しなければならない:

心は、如何にして、心生色の生起を引き起こすか

時節は、如何にして、時節生色の生起を引き起こすか

食素は、如何にして、食生色の生起を引き起こすか

一つひとつの種類毎の情況に対して、同じく、一つひとつの種類毎の色法の刹那生起を観 照しなければならない。

完成した後、あなたは、同様の方法によって、名法の因縁生と、刹那生を観照しなければならないし、また、あなたがすでに識別したことのあるすべての過去生と未来世のすべての心路中の名色法の生起を観照しなければならない。しかしながら、これらを詳細に列記するのには、非常に多くの時間を必要とする為、我々はそれらを略して、一つひとつの種類の情況下で、如何にして色法を観照するのか、について説明するにとどめた。

壊滅随観の法

色法の因縁生(udaya)と刹那生を見た後、今、あなたは、ひらすら、それらの壊滅(vaya)をみることのみが要求される。これは、壊滅随観の法(vayadhammānupassī)である。無明、愛、取、行と業力<注 372>の滅は、阿羅漢を証悟する時に発生し、五蘊の寂滅は、般涅槃の時に発生する。あなたは、異なる種類の無明、愛、取、行と業力の因縁生が、一つひとつの異なる生命の期間において発生するのを識別するが、しかし、寂滅は、唯一、同一の生命の期間に発生する。すなわち、五蘊は、般涅槃の時、二度と生起することはない。しかし、我々は、真正の涅槃とは何か、阿羅漢道とは何かを、はっきりと知ることはない。というのも、未だ、四道智(magga-ñāṇa)を証悟していないが故に。

その為、ただ、諸蘊が二度と生起することがないことを知る事を通して、般涅槃の発生を理解するより外ないのである。例えば、あなたは、再度、縁起第五法に基づいて、色法の因縁滅(nirodha) <注 373>を観照する時、すなわち、あなた後ろに向かって、阿羅漢になるまでを観照し、かつあなたが阿羅漢道(Arahatta-magga)と阿羅漢果

(Arahatta-phala) を証悟するのを見た時、すべての煩悩は無余に滅尽し、かつ、その一生が終了する時には、すべての行法もまた止息する:

これは直接、あなたは、あなたの般涅槃が見えたということであり、その後、二度と、新しい名色法が生起したり、滅したりすることはない。もし、あなたが、今生において、阿羅漢を証悟するのであるならば、このことは未来に属する;もし、あなたが、未来のどれかの一世において、阿羅漢を証悟するのであれば、これもまた未来に属する。あなたは、逐一、それぞれ個別に、

(1)無明、(2)愛、(3)取、(4)行と(5)業の滅尽(nirodha)、及びそれらによってなされる所の、業生色法の滅尽を見なければならない。この種の方法を用いて、業生色法の因縁滅を見た後、今は、唯一、それの刹那滅を照見する。その後、あなたは、すでに識別したことのある、一つひとつの過去生と、未来世の中<注374>の結生と死亡との間の、すでに識別したことのある心路の中の一つひとつの心識刹那の業生色法の刹那滅を観照しなければならない。その意味するものは、すなわち、あなたは、再度、離心路心(vīthimutacitta)の壊滅(vaya)の時の五蘊、及びあなたがすでに識別した所のその間に生起した所のすべての六門心路(vīthi)の中の一つひとつの心識刹那が壊滅する時の五蘊<注375>を観照しなければならない、ということである。

次に、あなたは、順序に従って、心生色、時節生色と食生色の因縁滅を観照しなければならない。あなたは、以下の事を観照しなければならない:

心の滅は、如何にして心生色の滅を引き起こすか

時節の滅は、如何にして時節生色の滅を引き起こすか

食の滅は、如何にして食生色の滅を引き起こすか

一つひとつの種類毎の情況の下、一つひとつの種類の色法の刹那滅を観照しなければならない。 完成した後、あなたは、又、名法の因縁滅と刹那滅を観照しなければならない。

生滅随観の法

あなたが、すでに、名法と色法の因縁滅と刹那滅の観照を終わらせた後、次に、再度、繰り返し、不断に、それらの生起と壊滅を観照しなければならない。これは、生滅随観の法(samudayavayadhammānupassī)である。それは、先に、名色法の因縁生と因縁滅を観照した後、その後に、それらの刹那生と刹那滅を観照することが含まれる。順序に従って、三種類の方式に基づいて、それらを観照する:

- 1) 因及びその果の生起
- 2) 因及びその果の壊滅
- 3) 因及びその果の無常

例えば、あなたは、逐一以下の観照を実践する:

1) 一つひとつの種類の因、(1) 無明、(2) 愛、(3) 取、(4) 行と(5) 業の生起が、 如何にして業生色の生起を引き起こすか。

- 2) 上に述べた諸因の壊滅が、如何にして業生色の壊滅を引き起こすか。
- 3) 一つひとつの種類の因及びその所生色は、皆無常である事。

この事から類推して、あなたは以下の観照を実践する:

- 1) 心は、如何にして心生色の生起を引き起こすか
- 2) 心の滅は如何にして心生色の壊滅を引き起こすか
- 3) 心の無常、心生色の無常。

また、同様の方法でもって、時節生色と食生色を観照する。

以上が、色法の因縁の生・滅と刹那滅を観照する方法である。その後、あなたは、名法の因縁の生・滅と刹那生・滅を観照しなければならない。こうしたことから、あなたは、先ほど述べた方法に基づいて、五蘊の因縁の生・滅と、刹那生・滅を観照しなければならないし、また、それらの無常・苦・無我の三相もまた、観照しなければならない。あなたは、この様に、内在する五蘊、外在する五蘊、及び過去、現在と未来の五蘊を観照しなければならない。

如何にして縁起第一法に基づいて生滅智を育成するか

その後、あなたは、縁起第一法<注 376>に基づいて、この種の観智を育成しなければならない。この様な状況の下、諸行法の因縁生を知見するために、あなたは、順序に従って、逐一、縁起の諸々の支を照見し、かつ以下のものを観照しなければならない<注 377>:

- [1] 無明 (avijjā) の縁によりて、行 (saṅkhārā) が [生起] する。
- [2] 行の縁によりて識 (viññāṇa)、
- [3] 識の縁によりて名色 (nāmarūpa)、
- [4] 名色の縁によりて六処 (saļāyatana)、
- [5] 六処の縁によりて触(phassa)、
- [6] 触の縁によりて受 (vedanā)、
- [7] 受の縁によりて愛(taṇhā)、
- [8] 愛の縁によりて取 (upādāna)、

- [9] 取の縁によりて有 (bhava)、
- [10] 有の縁によりて生(jāti)、
- [11] 生の縁によりて
- [12] 老死(jarāmaraṇa)、愁(soka)、悲(parideva)、苦(dukkha)、憂(domanassa)、悩(upāyāsa)。

この様にして、この苦蘊の全体が生起する。阿羅漢の証悟と、その後の、般涅槃の時の、 諸行法の因縁滅を知見する為、あなたは、順序に従って、逐一、縁の滅する所の諸支を照 見しなければならないし、また以下のものを観照しなければならない<注 378>。

- [1] 無明の無余に離(離れる)、尽(尽きる)によりて、行が滅する。
- [2] 行が滅するが故に、識が滅する、
- [3] 識が滅するが故に、名色が滅する、
- 「4] 名色が滅するが故に、六処が滅する、
- [5] 六処が滅するが故に、触が滅する、
- [6] 触が滅するが故に、受が滅する、
- 「7] 受が滅するが故に、愛が滅する、
- [8] 愛が滅するが故に、取が滅する、
- [9] 取が滅するが故に、有が滅する、
- [10] 有が滅するが故に、生が滅する、
- [11] 生が滅するが故に、
- [12] 老、死、愁、悲、苦、憂、悩が滅する。

この様にして、苦蘊の全体が滅尽する。先ほど、あなたが諸行法の因縁の生・滅と刹那 生・滅を観照した様に、(次に)あなたは、順序に従って、逐一、諸々の支の縁起と縁滅 を照見する。例えば、無明に関して、あなたは以下の様に観照する;

- 1) 無明の縁によりて行が生じる。
- 2) 無明の無餘の離、尽により、行が滅する。

3) 無明は、無常である。行は無常である。

同様の方式でもって、内外交替して、過去、現在と未来の、一つひとつの縁起支を観照 する。以上は、諸行法に対して、生滅智を育成する所の、非常に簡単な説明である。

如何にして 10 種類の汚垢 (汚れ、汚染) を克服するか

この段階において、あなたが、これらの方法に基づいて修行し、かつ、観智が益々強くなる時、10種類の汚垢(汚れ、汚染、dasa upakkilesa)が生起する可能性がある。 それらは:<注 379>

- 1) 光明 (obhāsa) 。2) 智 (ñāṇa) 。3) 喜 (pīti) 。4) 軽安 (passaddhi) 。5) 楽 (sukha) 。6) 勝解 (adhimokkha) 。7) 策励 (paggaha) 。
- 8) 現起(現象)(念)(upaṭṭhāna)。9) 捨(upekkhā)。10) 欲(nikanti)。

光明と欲を除いて、その他の汚れは、みな、善の法に属し、それ自身は、汚垢ではない。しかし、それらは、不善法の所縁に成り得る(あなたはそれらに執着するかもしれない)。これが、それらが、「汚垢」と呼ばれる原因である。もし、あなたが、この 10 種類の汚垢のどれかを体験したならば、それらの無常・苦・無我を観照することを通して、生じるかも知れない執着と貪欲を克服するべきである。この様にして初めて、あなたは引き続き、前進することができる。

如何にして壊滅智を育成するか

生滅智を育成した後、あなたは、諸行法の観智に対して、すでに、堅固で純粋であるが故に、次には、壊滅智(Bhaṅga-ñāṇa)を育成する必要がある。ここまでは、あなたは、ただ諸行法の刹那滅(vaya)と壊滅(bhaṅga)をのみ専注すればよく、行法の生起(uppāda)、行法の住立(ṭhiti)、個別の行法の相(nimitta)を、または行法の因縁転起(pavatta)を見る必要はなかった。観智の力を借りて、あなたは、諸行法の壊滅をのみ観照し、かつ、それらの無常・苦・無我を覚知する。

- 1) 諸行法の衰壊、敗落と壊滅を観照して、それらの無常を知見する;
- 2) 諸行法が、持続的に壊滅する恐怖を観照して、それらを苦として知見する;

3) 諸行法の中において、永恒なる実質はないことを観照して、無我を知見する。

あなたは、名色法の壊滅を無常・苦・無我として観照するだけでなく、また、この様に 観ずることのできる観の修習心の壊滅をも、観照しなければならない。この事は、あなた が先ほど、色法の壊滅を観照し、かつ、それを無常として了知したが、これは、一番目の 観の修習心に相当する、ということを意味している。次に、二番目の観の修習心を用い て、一番目の観の修習心の壊滅を観照し、かつ、それもまた無常であると、了知する。 同様の方法を用いて、名法を観じ、その後に、色法と名法をば、観照して、それらを苦・ 無我と了知する。あなたは、何度も繰り返して、これらの練習を実践しなければならな い。内外交替し、過去、現在と未来の色法と名法、因行法と果行法を観照する。この種の 方式に基づいて、持続的に諸行法の壊滅・尽滅、止息を識別する。あなたのその強くて力 のある観智は、順序に従って前進して行き、次の六種類の観智へと続いて行く。

己自ら前の11種類の観智を知る

この段階に到ると、あなたはすでに、16 観智の内の、前の 11 種類を育成したのだ、と言える。あなたが育成した所の、前の 5 種類の観智とは:

- 1) 名色限定智(Nāmarūpaparicchedā-ñāṇa)<注 380>。
- 2) 縁摂受智(Paccayapriggha-ñāṇa)<注 381>。
- 3) 思惟智(sammasana-ñāṇa)<注 382>。
- 4) 生滅智(Udayabbaya-ñāṇa)<注 383>。
- 5) 壊滅智(Bhanga-ñāṇa)<注 384>。

次に、あなたが、順序に従って育成しなければならない6種類の観智は、以下の通り:

- 6) 怖畏智 (Bhaya-ñāṇa)。
- 7) 過患智(Ādīnava-ñāna)。
- 8) 厭離智(Nibbidā-ñāṇa)。
- 9) 欲解脱智(Nuncitukamyatā-nāṇa)。
- 10) 審察智 (Paṭisaṅkhā-ñāṇa)。
- 11)行捨智(Saṅkhārarupekkhā-ñāṇa)。

あなたは、すでに、徹底的に、前の五種類の観智を育成してあるが故に、この六種類の 観智もまた、非常に快速に育成することができる。上記の観智に関して幾つかの説明をし たいと思うものの、時間が無いので、省略する。

涅槃を知見する

これらの観智を成就した後、引き続き、一つひとつの行法の壊滅と消失を観照し、かつ、心に、それらから解脱したいという願望を抱きつつ、あなたは、最終的に、すべての行法が止息したのを発見する。あなたの心は、自ら涅槃を実見する(実際に見る): それは、完全に、(無為)を覚知し、涅槃を所縁とする。このことは、道心路(Maggavīthi)が生起した時に、発生する。それらは、

- 12) 随順智(Anuloma ñāṇa)
- 13) 種姓智 (Gotrabhu ñāna)
- 14) 道智(Magga ñāna)
- 15) 果智 (phala ñāṇa)
- 16) 省察智(Paccavekkhaṇa-ñāṇa)。

上記における最後の、五種類の智は、道心路が生起する時に、生起する。それは、7種類の心を含むが、(発生する)段階を追って、以下の通りとなる。

- 1) 意門転向心:諸行法を、無常・苦・無我として観照する。具体的には、生起する行捨 智<注 385>に基づいて決定する。引きつづいて密接して、三個の予作(予備)速行心 (javana) が生起する。同様の方法によって、諸行を観照する。
- 2) 予作 (予備) (parikamma) <注 386>。
- 3) 近行 (upacāra)
- 4) 随順 (anuloma)

この三個の速行心は、事実上は、12番目の観智を構成している:随順智(Anulomañāṇa)は、何に随順しているのか?直前の心及び、その後の心に、随順している。こうした事から、それらの作用とは、種姓智の為の準備をすることであり、種姓智に接近し、か

- つ、随順するのであると言える。それらの重複は、直前に生起した所の、有為法を所縁とする8種類の観智(生滅智から行捨智まで)をば、無為法を所縁とする、道果智の37法 <注387>に渡り、至らせしめる為の、準備を整えているのだ、と言える。随順智は、諸行法を所縁とした所の、最後の一種類の観智である。
- 5) 第四番目の速行心は、涅槃を所縁とする。これは、13番目の観智である:種姓智 (Gotrabhu ñāṇa)。種姓心は、(無為)涅槃を知見するものの、しかし、それは、煩 悩を断じ除くことができない。それの作用は、凡夫種姓から、聖者種姓に変更することである。
- 6) 五番目の速行心が生起すると、それは涅槃を所縁とする。これは、相応する煩悩<注 388>を打ち壊すことのできる 14 番目の智である: 道智 (magga-ñāṇa)。
- 7) 六番目と七番目の速行心<注 389>が生起するが、それは涅槃を所縁とする。それらは、15番目の智である:果智(Phala-ñāṇa)。

省察智

この後、引き続いて、最後の一種類の智が生起する。すなわち、第 16 番目の智である:省察智(Paccavekkahṇa-ñāṇa)。五種類の、異なる省察がある:

- 1) 道智の省察
- 2) 果智の省察
- 3) すでに断じ除いた煩悩への省察
- 4) いまだなお、断じ除いていない煩悩への省察<注390>
- 5) 涅槃への省察

この時、あなたは、真正なる四聖諦智を成就し、かつ、己自ら、涅槃を証したのである。 この種の証悟を通して、あなたの心は、邪見から抜け出して、かつ清浄なものとなった。 もし、引き続き、この様に修行するならば、あなたは、阿羅漢と般涅槃を証悟することが できるだろう。この種の、観智に関する修行は、まだ、各種の細目があるが、しかし、 我々は、講話の内容を、出来る限り、簡潔で要領を得たものにするため、それら(の説 明)は、割愛する。この種の修行を学ぶ最も良い方式は、資格を有する老師(先生)の指導の下、禅修行の過程を完成させるものである。この様であれば、あなたは、系統的な方式に基づいて、順序に従って、学ぶことができる。



脚注

<注 348>=特徴: <注 87>を参照の事。

<注 349>=<智論> (Paññākathā) (Vm.T.) 及び、〈説道非道智見清浄品〉 (Maggāmaggañāṇadassanavisiddiniddesa) (Vm.694)。

<注 350>=五蘊:色、受、想、行、識。<花経>の経文参照の事。

<注 351>=12 処:眼/色、耳/音声、鼻/香、舌/味、身/触、意/法。関連する経文は<世間経>及びその後の記載を参照の事。

<注 352>=12 縁起支:

1) 無明、2) 行、3) 識、4) 名色、5) 六処、6) 触、7) 受、8) 愛、9) 取、10) 有、11) 生、12) 老死、愁、悲、苦、憂、悩。

<注 353>=18 界:12 処及び相応する六識:眼識、耳識、鼻識、舌識、身識と意識(12 <math>+6=18)。

<注 354>= (Anattalakkhaṇa Sutta) (S.3.59)。 <はじめに>においてこの経を引用した。

<注 355>=<教誡チャンナ経> (Channovāda Sutta) の義注では、以下の様に説明する。「これは私のものではない。」、これは私ではない。これは私の自我ではない」を無常・苦・無我の観照 (の対象・内容とする)。復注では、以下の様に説明する。「これは私のものではない」は、苦の観照、「これは私ではない」は無常の観照とする。 (M.A.3.391)。

<注 356>=《蘊経》(Khandha Sutta)(S.3.48)。<はじめに>において、この経を引用した。

<注 357>=完成色に関して、「表 2a:28 色法」を参照の事。

<注 358>=具体的な方法は、「結び」の章を参照の事。

<注359>=縁起第一法に関して、詳細は、「第一法」の章を参照の事。

<注 360>= 〈説道非道智見清浄品〉(Maggāmaggañāṇadassanavisuddhiniddesa) (Vm.697)

<注 361>= 〈思惟色七法論〉 (Rūpasattakasammasanakathā) (Vm.706)、 〈思惟非色七法論〉 (Arūpasattakasammasanakathā) (Vm.717)。

<注 362>=この四種類の色法に関して、「色法の四種の生因」の章及びその後記載の内容を参照の事。

<注 363>=あなたは、食生色法の支援の下に生起する所の、四種類すべての色法を識別しなければならない。当該の原則は、業生色、心生色と時節生色にも、同様に適用される。

<注 364>=観の修習心:意門心路を観ずる。それはすなわち、一個の意門転向心、七個の速行心であるが、ある時には、その後の二個の彼所縁心も含む。意門転向心には、12個

の名法があり、一つひとつの速行の名法は、34、33 または 32 である。「表 1b: 意門心路」を参照の事。

<注 365>=ここでいう「壊滅」は、"vaya"である:「寂滅」は"nirodha"である。 この二つのパーリ語は、同義語ではあっても(それぞれ、この様に表現される)。

<注 366>= 〈説道非道智見清浄品〉(Maggāmaggañāṇadassanavisudhiniddesa) (Vm.723)

<注 367>=「第五法」に関しては、「第六講」及びその後に記載の内容を参照の事。

<注 368>=業生色法の簡単な説明は、「業生色」の章及びその後に記載の内容を参照の事。

<注 369>=離心路心(vīthimutta citta):結生心(paṭisandhi citta)、有分心と死亡心(cuti citta)。離心路心などに関する簡単な説明は、「表 1d:死亡と結生」及び<注 151>を参照の事。

<注 370>=ある時には、禅修行者は、今生からだけ観照を始め、その後に、過去生と未来世を観照する。

<注 371>=心生色、時節生色と食生色の簡単な説明は、「心生色」の章及びその後に記載される内容を参照の事。

<注 372>=過去の行(阿羅漢を証悟する前を指す)によって生じた所の、業力な、なお 楽受と苦受を齎すけれども、しかし、阿羅漢を諸語した後の行は、如何なる業力も生じる 事がないし、また、如何なる新しい果報も齎す事はない。

<注373>=因縁滅を観照する為の根拠とする第五法は、「第六講」を参照の事。

<注 374>=パオ・セヤドーが、禅修行者に向けて指導をする時、ある時は、先に今生を 観照させ、その後に過去生と未来世を観照させる。

<注 375> = 離心路心などの簡単な説明に関しては、「表 1d: 死亡と結生」と、<注 151>を参照の事。

<注376>=また、「第一法」の章を参照の事。

<注 377>《大貪愛尽経》(Mahātaṇhāsaṅkhaya Sutta)(M。1.404)

<注 378>=同上。

<注 379>=〈観の汚垢論〉(Vipassannupakkilesakathā)では、以下の様に言う。禅修行者は、いまだ経験のしたことのない光明を体験するであろう。いまだ経験したことのない名色の智、喜び、疲れを知らぬ軽安、極めて微妙な楽、極めて強い信心(=確信)と決意、完璧なるバランス、持続的な策励、強固な正念と極めて安定した捨、これらのすべては、以前には経験したことがないものばかりである。これまで、経験したことがないが故に、禅修行者は、非常に容易に、これは道であり、果であると誤解し、それらに執着し、かつ、邪見と我慢(慢心)を形成する。そして、これらの現象は、所謂「観の汚垢」(vipassanupakkilesa)になる可能性がある。それらは非常に危険なものである。というのも、禅修行者をして、正道から偏離させ、邪道に進ませるからである、(Vm.634)。

<注 380>=「第四講 如何にして色法を識別するか」の章及びその後に記載の内容、及び、「第五講 如何にして名法を識別するか」の章及びその後に記載される内容を参照の事。

<注 381>=「第六講 如何にして縁起の連結を透視するか」の章及びその後に記載される内容を参照の事。

<注 382>=「如何にして思惟智を育成するか」の章及びその後に記載される内容を参照の事。

<注 383>=「如何にして生滅智を育成するか」の章及びその後に記載される内容を参照の事。

<注 384>=「如何にして壊滅智を育成するか」の章及びその後に記載される内容を参照の事。

<注 385>=第 11 番目の観智。

<注 386>=ある種の情況の下、もし、禅修行者の観智が非常に強い場合、この心は生起しない。一番目の速行心は、「近行」(upacāra)で、すなわち、ここでの三番目の心である。また、「表 1b: 意門心路」を参照の事。

<注 387>=それらは、37 菩提分法(Bodhipakkhiyadhamma): 四念処、四正勤、四神足、五根、五力、七覚支、八支聖道。簡単な説明は、〈説智見清浄品〉

(Ñāṇadassanavisuddhiniddesa) (Vm.817-826) を参照の事。

<注 388>=例えば、入流道心は、前の三結(saṃyojana)を断じ除く:

- 1) 有身見(sakkāyadiṭṭhi);
- 2) 仏、法、僧に対する疑惑;
- 3) 戒禁取。また、彼を、人趣より更に低い趣に、生まれ変わらせることになる、貪、瞋恚、痴を断じ除く事ができる。唯一、阿羅漢を証悟した時にのみ、完全に煩悩を断じ尽くすことができる。

<注 389>=もし「予作」(parikamma)心が生起しないのであれば、これらの心は、第 五、第六と第七番目の速行心(合計三個)でもって、必要とされる七個の速行心を構成す る。また、「表 1b: 意門心路」を参照の事。 <注 390>=一番目、二番目と五番目の項目の省察は、自動的に発生する;三番目と四番目の項目は、意図的に省察しなければならないし、かつ、如何にして進行するかを知っていなければならない。



問答(七)

問 7-1:

想と想蘊、受と受蘊の間には、どの様な区別がありますか?

答 7-1:

- 11 種類の想(saññā)を合わせて想蘊(saññākkhandha)と呼ぶ。
- 11 種類の受(vedānā)を合わせて受蘊(vedānākkhandha)と呼ぶ。どの様な 11 種類か?

過去、未来、現在、内、外、粗い、微細、劣等、優秀、近いと遠い。五蘊のすべては、みな、この様に理解しなければならない。《相応部・蘊品・蘊経》(Khandha Sutta、Khandhavagga、Saṃyutta-nikāya) <注 391>を参照の事。

問 7-2:

記憶、推理と創造力は、どの様な心所に属しますか?それらは、五蘊の一部分ですが、では、なぜそれらは苦(dukkha)なのですか?

答 7-2:

記憶とは何か?

もし、あなたが、止禅の業処、例えば、遍相または入出息禅相を覚えていられるならば、それは正念(sammāsati)である。もし、あなたが過去、現在と未来の究極名色法(paramatthanāmarūpa)及びその因を見ることができ、かつ、それらを無常(anicca)・苦(dikkha)・無我(anatta)として、観照することができるならば、これもまた正念であるが、それはすなわち、観智と相応する念である。この種の念と、32種類の名法は相応しており、また、四種類の名蘊(nāmakkhandha)に帰納することができる。仏、法、僧、及び過去に行った布施を憶念するのも、正念である。もし、ある種の行為を憶念して、善法(kusaladhammā)が生じるならば、それもまた正念に属する。しかし、もし、不善法(akusaladhammā)が生じるのであれば、これらは、不善法に相応する所の、不善想(akusalasaññā)に属するが、これらもまた、四種類の名蘊に帰納することができる。善の名蘊と不善の名蘊は、皆無常である。それらは、生じるや否や、即刻滅し去る。(それらは)絶え間ない生・滅の制約を受けているが故に、苦なのである。

問 7-3:

「対象を縁に取る」とは、どの様な種類の心所ですか?

答 7-3:

すべての心(citta)と、相応心所(cetasika)は、みな対象を縁に取る。対象がなければ、それらは生起することができない。心と心所は、能縁であり、対象としての所縁(ārammaṇia)がない時、能縁(ārammaṇikadhamma)は、生起することができない。能縁(ārammmaṇika-ママア)は、所縁を縁に取ることの出来る法、または現象であり、言い換えれば、すなわち、対象を識知することのできる法である。もし、識知されるべき対象がないならば、識知できる法もない。異なった組み合わせの心と相応心所は、異なる所縁

を対象に取る。合計 89 種類の心(citta)と、52 種類の相応心所(cetasika)があり、それらはみな、それぞれ個別の対象を縁に取る。

たとえば、道心、果心及びその相応心所(Maggacitta-cetasika)、Phalacitta-cetasika)は、唯一、一個の対象——涅槃をのみ縁に取り、入出息ジャーナ心とその相応心所は、唯一、一個の対象——入出息似相を対象に取り、地遍ジャーナは、唯一、地遍似相を対象に取る。それらは、出世間心と色界心であるが、しかし、欲界心(kāmāvacaracitta)は、ある時は善きもの、ある時は悪いものという風に、異なる対象を縁に取る。もし、あなたが、これらのことを詳細に理解したいのであれば、「アビダンマ」を学習しなければならない。更に詳しく言えば《アビダンマッタサンガハ》(Abhidhammatthasaṅgaha)の中の、〈所縁の章〉〈注 392〉である。

問 7-4:

サンガの為に作業(奉仕)することは、己自身の禅修行に影響しますか?

人によって異なりますか? それとも、ある程度の定力を育成した後であれば、奉仕をしても、禅修行に影響を及ぼすことはないですか?

答 7-4:

仏陀は、かつて、以下の行為をする比庫を批判した;

事務を楽しむ者(kammārāmatā);

おしゃべりを楽しむ者 (bhassārāmatā);

睡眠を楽しむ者 (niddārāmatā) ;

交際を楽しむ者 (sanganikārāmatā) ;

諸々の根を守らない者(indriyesu aguttadvāratā);

飲食において節度を知らない者(bhojāne amattaññutā);

睡眠を制御しない者(jāgariye ananuyuttā):

「睡眠の制御」とはすなわち、睡眠を節制し、止観の修習に勤める事; 怠惰(kusita/kosajja):止観の修習に精進しない事。

こうしたことから、もし、あなたがサンガの為に、または己自身のために、これらの事柄 (仕事、作業)をしなければならないならば、なるべく早く完成させて、その後に、平静 な心でもって、禅の修行をする事。もし、余りに作業(奉仕)に耽溺するならば、それは 禅修行の障礙になる。というのも、その様であるならば、禅修行の所縁に対して、強くて 力のある正念を獲得できないが故に。作業(奉仕)に耽溺していては、良好な定力を得る ことはできない。

問 7-5:

もし人が、邪悪な動機を抱えて、ジャーナを求めて、それを達成したならば、この人にとって、ジャーナに到達することは、何の利益がありますか? また、彼が、サンガのお金 <注 393>を持ち出して己自身の為に使い、かつ、その行為を間違ったものであると認めない場合で、この人が第四禅に到達することがあるならば、彼の心または見解が変化することはありますか?

答 7-5:

この種の状況は、居士と比庫によって、分けることができる。もし、一人の比庫が、戒律に違反したならば(āpatti)、この事はジャーナを証得する為の障礙になる。

たとえば:もし、彼が、サンガの如法の資具を借用後、己自身のものとしたならば、ジャーナを証得することは難しい。彼がこの罪行(āpatti)を懺悔しない限り。<注 394>。 その意味はすなわち、彼によって私的に用いられた資具などと等価の資具を弁償しなければならず、また、その後に、サンガまたはもう一人の別の比庫に己自身の罪行を懺悔

(āpatti-paṭīdesanā) しなければならない。過失を認めて糺した後、彼は止観の修行を実践して、初めてジャーナ、聖道と聖果を証得することができる。もし、過失を糺さないままであっても、彼が真にジャーナを証得することができたならば、それは、彼が真正の比庫ではなかったということである。この場合、所謂犯戒は、実際は犯戒に当たらない、ということになる。

居士に関して言えば、戒行の清浄は、やはり必要である。彼らは、できれば、禅修行の前に、己自身の戒行を清浄にしておくこと、すなわち、五戒または八戒を受持する事(が望ましい)。この様に、禅の修行期間において、彼らの戒行が清浄なものであるならば、ジャーナを証得することは出来る。たとえ、彼らの、禅修行前は邪悪なものであっても。

例えば《法句義注》では、クッジュッタラー(Khujjuttarā)という女性下僕の物語<注 395>を述べている。彼女は、ウデナ王(Udena)の皇后であるサーマーヴァティー (Sāmāvatī) の女性下僕であった。ウデナ王は、毎日、皇后の花を買う為に、八個の金貨を彼女に渡した。しかし、クッジュッタラーは、毎日、四個の金貨を自分のポケットに入れ、その残りの四個の金貨でもって、花を買った。

ある日、仏陀とサンガの人々が、花屋の家で供養を受けたが、クッジュッタラーもまた、 花屋で手伝いをして、食べ物を供養をした。食事の後、仏陀は仏法を開示したが、その 時、クッジュッタラーは、己の偸盗の行為を恥じ、かつ、二度と盗まない事を決意した。 彼女の決意は、仏法を聞くことを通して、戒行が清浄になった一つの例である。禅の修行 を通して、クッジュッタラーは、入流者(sotāpanna)になった。その日、彼女は四個の 金貨を自分のポケットに入れることはなく、八個の金貨すべてを使って、花を買った。彼 女がサーマーヴァティー皇后に花を渡した時、皇后は非常に驚いた。というのも、花は、 これまでよりも、非常に多かった故に。その後、彼女は、己自身の過誤を懺悔した。

次に、アングリマーラ尊者の物語について、考えてみる。彼は出家して比庫になる前は、一人の悪名紛々で有名な殺人犯であった。しかし、比庫になった後、彼は己自身の戒行を清浄にして、かつ、禅の修行に精進し、阿羅漢を証悟する事ができた。また、以下の事実を思惟して頂きたい:生死輪廻の中において、一人ひとりの人間は、みな、善き事も悪い事もなしていて、悪事を働いたことのない者はいない。<注 396>

しかし、彼らが、禅修行の期間において、己自身の戒行を清浄にすることができるならば、それ以前の悪行は彼らのジャーナの証得の障礙になることはない。当然、前提として、彼らは、かつて、五無間業(anantariyakamma)<注 397>のどれをも成していない事。五無間業とは:

- 1) 母殺し。
- 2) 父殺し。
- 3) 阿羅漢殺し。
- 4) 悪心によって、仏陀に出血させる。
- 5) サンガを分裂せしめる。

もし、ある人が、以前に、これらの悪行のどれか一種類をなしているならば、彼は、ジャーナ、道と果を証得することはできない。例えば、未生怨王(Ajātasattu)。未生怨王は、充分なハラミツを持っていて、《沙門果経》(Sāmañña-phala Sutta)<注 398>を聞き終わった後に、入流者になることができたが、しかし、彼は己自身の父親ビンビサーラ王を殺したことによって、如何なる果位も証悟することができなかった。

あなたは、ジャーナを証得した後において、この種の人の心または見解に変化があるかどうかを、問うている。ジャーナは、長時間、諸々の蓋を鎮伏することができる。「長時間」の意味は、もし、彼らが、一時間入禅するならば、その一時間の内は、諸々の蓋は生起することがない、ということである。しかし、彼らが出定すると、諸々の蓋は、なお、不如理作意によって、再度出現する。故に、我々は、この種の人の心は、ジャーナによって変化を齎すことができるかどうか、断定的に言うことはできず、ただ、彼は、ジャーナの中において、諸々の蓋は生起しない、と言えるだけである。〈注 399〉。

しかし、いくつかの例外はある。たとえば、大龍大長老(Mahānāga Mahāthera)は、 止観の修習を 60 年以上続けたが、しかし、彼はなお、一人の凡夫(puthujjana)であっ た。状況はその様ではあっても、強くて力のある止観の修習によって、彼は、その 60 年 の間、如何なる煩悩も生起することがなかった。故に彼は、己自身は、阿羅漢であると思 っていた。しかし、彼の一人の弟子、法施阿羅漢(Arahant Dhammadinna)は、彼が いまだに凡夫であることを知っていて、彼は、この事実を知っていることを間接的に説明 した。大龍大長老は、彼がいまなお凡夫である事を発見して、再度、観の修習を実践し、 何分間の間に、阿羅漢を証悟したのである。しかし、この様な例は、極めて特殊なものに 属する。

あなたは、もう一つの事柄も、覚えておいた方がよいであろう:彼は、教理(pariyatti)に博通しており、また、実修(paṭipatti)にも精通していて、業処導師(瞑想指導者)(kammaṭṭhānācariya)であり――多くの阿羅漢が、彼の弟子であった――如法施尊者。彼は、止観に精通していたが、しかし、内心において、相似した禅修行の体験によって、誤解が生まれることがある。故に、もしあなたが、「私はすでに初禅を証得した」等々と自認するのであれば、あなたは、多くの日数、多くの月日を用いて、徹底的に、あなたの体験を検査しなければならない。なぜであるか?

もし、それが真正なジャーナと、真正な観智であるならば、それらはあなたに利益を齎し、かつ、あなたが真正な涅槃――上座部仏教の中における「浄土」 <注 401>を証悟するのを支援するであろう。しかし、虚偽のジャーナと虚偽の観智は、この種の利益を齎すことはない。あなたは真正なる利益を得たいか、それとも、虚偽の利益を得たいか?この問題は、各々が、己自身に向かって問うて頂きたい。こうしたことであるが故に、我々は、あなた方に、「私は初禅を証得した」等々と、他人に対して、急いで告げてはならない、と注意を促す。というのも、ある種の人々は、あなたを信用しないが故に。あなたの禅修行の体験は、真正である可能性もあるが、また、虚構である可能性もある。まさに、大龍大長老の様に。あなたは、この問題に注意を払わなければならない。

問 7-6:

色聚と究極色法の間には、どの様な違いがありますか?

答 7-6:

色聚(rūpa-kalāpa)は微小粒子で、禅修行者がこれらの微小粒子を分析するならば、究極色法(paramattharūpa)を見ることができる。一粒一粒の色聚の中には、少なくとも八種類の色法がある:地、水、火、風、色彩、匂い、味と食素(栄養素)である。この八種類の色法は、究極色法に属する。ある種の色聚は、9番目の色法を擁している:

命根色(jīvitarūpa);また別の種類のものは、10番目の色法を擁している:性色 (bhāvarūpa)または浄色(pasādarūpa)。この八種類、9種類または10種類の色法 は、究極色法に属する。

問 7-7:

禅修行者が、色聚と究極色法を識別した後、彼の心(citta)と見(diṭṭhi)は、改変されますか?

答 7-7:

彼が、観智でもって、一粒一粒の色聚の中の究極色法を見た時、彼の心と見解は改変されるが、しかし、それは暫定的なものである。というのも、観智は、ただ暫定的に、邪見と

その他の煩悩を鎮伏することができるに過ぎないが故に。唯一、聖道(ariyamagga)のみ、段階を追って、徹底的に、邪見とその他の煩悩<注403>を断じ除くことができる。

問 7-8:

禅定は、どの様にして、心を清浄せしめますか(cittavisuddhi)? 禅定は、どの様な煩悩(kilesa)を取り除くことができますか?

答 7-8:

禅定の修習は、直接五蓋を対治する。近行定と初禅は、長時間五蓋を取り除くことができる。第二禅は、尋(vitaka)と伺(vicāra)を取り除くことができる。第三禅は、喜(pīti)を、第四禅は、楽(sukha)を取り除くことができる。心は、この様に、禅定によって浄化され、かつ、それは、心清浄(cittavisuddhi) <注 404>と称される。

問 7-9:

観の修習は、どの様にして、見を清浄せしめますか(diţţhivisuddhi)?観の修習は、どの様な煩悩(kilesa)を取り除くことができますか?

答 7-9:

究極名色法及びその因と、それらの無常・苦・無我の本質を見る前、禅修行者は邪見または間違った考えを持っている可能性がある。たとえば、「これは男性、女性、母親、父親、己自身」等々。しかし、彼が、明晰、明確に、究極名色法とその因、それらの無常・苦・無我の本質を見た後、この種の邪見は、暫定的にではあるが、取り除くことができる。

何故に、取り除くことができるのか?

というのも、彼が見るのは、ただ究極名色法及びその因だけであるが故に;彼はまた、それらが、生起するや否や、即刻滅し去るのを見るが、これはそれらの無常の本質である; それらは常に、生・滅の圧迫・脅威を受けているが、これはそれらの苦の本質である; これらの名色法及びその因の中において、自我というものはないが、これはそれらの無我の本質である;これこそが観智(vipassana-ñāna)であり、それは正見(sammāditthi) であり、邪見(micchādiṭṭhi)を取り除くことができる。観智はまた、貪執(貪欲による執着)と我慢(我ありと言う傲慢心)等、邪見を伴う煩悩を取り除くことができる。 故に、禅修行者が、観の修習を実践する時、正見が現起(現象)する。

しかし、これは暫定的なものである。というのも、彼が禅の修行を停止した時、邪見、不如理作意(ayoniso manasikāra)は再度生起するが故に。彼は、再度「これは男性、女性、母親、父親、己自身」等々と認識し、貪執、我慢、瞋恚怨恨等の相応の煩悩もまた、再度生起する。しかし、彼が再度観の修習を実践する時、この種の邪見はまた、再び消失する。故に、観智は、ただ、暫定的に、邪見とその他の煩悩を取り除くことができるのである(と知ることができる)。しかしながら、彼が、聖道と聖果を証悟する時、彼の道智(maggañāṇa)は、邪見とその他の煩悩を、段階を追って、徹底的に、断じ除くことができる。<注 405>

問 7-10:

心(citta)と見(ditthi)の間には、どの様な違いがありますか?

答 7-10:

心(citta)はすなわち、「識」または「意」であるが、しかし、心清浄の中においては、 それは特に、一種の心を指す:近行定心(upacārasamādhi)または安止ジャーナ心 (appanājhāna citta)<注 406>である。見(diṭṭhi)とはすなわち、邪見であり、そ れは一種の心所(cetasika)である。それは、四種類の貪根心と一緒に生起する。貪を根 とする心(lobhmūlacitta)は、ある時は邪見と相応し、ある時は、慢と相応する。

この種の邪見は我想(attasaññā)と言うが、それは二種類ある:

- 1) 世間通称我論(lokasamaññā-attavāda): これは、世間的な習慣が原因で生起する所の邪見であり、それはすなわち、男性、女性、父親、母親などが存在するという考え方・概念。
- 2) 我見(attadiţţhi): これは、貪愛(taṇhā)によって生起する所の邪見。すなわち、一個の、壊滅しない私、自我(atta)が存在するという認識。この、壊滅しない私、自我が存在するというのは、世界は創造主(paramatta、至上我)が作ったのだという考え方も含む。

31 界の中において、「私(自我)」というものはなく、ただ名色法及びその因があるのみであって、それらは常に、無常・苦・無我なのである。この31 界の外にもまた、私、自我というものは、ない。この種の観智を観正見(vipassanā sammādiṭṭhi)と言い、それは、暫定的に、我見を含む邪見(micchādiṭṭhi)を鎮伏することができる。しかし、道智(maggañāṇa)、すなわち、道正見(magga sammādiṭṭhi)は、完全に邪見を断じ除くことができる。

故に、実際には、三種類の見がある:

- 1) 邪見 (micchāditthi)。
- 2) 観正見 (vipassanā sammādiţţhi)。
- 3) 道正見 (magga sammādiṭṭhi)。これは出世間 (lokutara) 正見に属する。

《長部・梵網経》(Brahmajāla Sutta)の中において、62 種類の邪見すべてについての 議論が載っているが、それらは、皆、所謂「有身見」(sakkāya)と呼ぶ所の、我見を源 としている。有身(sakkāya)とはすなわち、五蘊のことであり、故に、有身見とはすな わち、五蘊を自我(己自身)と見做す見(見解)のことである。正見には、多くの種類が 存在する。たとえば、「四諦正見」(Catusacca sammādiṭṭhi)と呼ばれる所の正見;

名色摂受正見(nāmarūpapariggaha sammāditthi): すなわち、名色限定智;

ジャーナ正見 (jhāna sammādiţţhi): 禅支と相応する所のジャーナの智;

業自属正見(kammassakatā sammāditthi): すなわち、縁摂受智;

観正見(vipassanā sammādiţṭhi): 名色法及びその因の無常・苦・無我の本質への観智;

道正見(magga sammādiṭṭhi):涅槃に関する智;

果正見(phala sammādiṭṭhi): 涅槃に関する智。

問 7-11:

禅修行者は、日常生活と止観の修行において、どの様に、如理作意(yoniso manasikāra)の練習をしますか?<注 407>

答 7-11:

最も好い如理作意は観の修習である。もし、あなたが観の修習の段階まで修行したならば、あなたは、真正なる、最も好い如理作意を擁することになる。もし、あなたが、日常生活の中において、観の修習ができるのであれば、それは善果を生じることができる。例えば、己自身自ら、涅槃の聖道聖果を見る等。しかし、もし、あなたがいまだ観の修習の段階に到達していないならば、あなたは諸行無常(sabbe sañkhārā anicca)の事実を思惟しなければならない。これも如理作意であるが、しかし、力は非常に弱い、レベルの低いものである。あなたはまた、四梵住(brahmavihāra)を修習してもよい。特に、捨梵住(upekkhābragma-vihāra)(を修習するのがよい)。これは殊勝な如理作意である。というのも、捨梵住の修習とはすなわち、業果の法則に基づいて、衆生に対応する事を意味しているが故に:

"Sabbe sattā kammassakā" ——「一切の衆生は、みな、業の主人である。」

あなたは、時には、不如理作意の後果を思惟してみるのもよい。不如理作意は次から次へと、踵を接して、多くの不善業を引き寄せるが、これらの不善業は、(あなたにおいて) 四悪趣 (apāya) に生まれ変わらせしめ、多くの苦痛を与えることになる。この事に思いを致すことができるのも、また如理作意である。あなたは、日常生活の中において、それを練習しなければならない。

問 7-12:

作意 (manasikāra) と七覚支 (bojjhanga) の修行とは、どの様な違いがありますか?

答 7-12:

あなたが七覚支を修習する時、七覚支は、通常、作意を含む 34 個の名法の先頭にあるものである。ある時には、この 34 個の名法は、「観智」と呼ばれる。というのも、第 34 番目の名法——智慧($Pa\tilde{n}a$)が、最も主たる要素を占めるが故に。この事に関連して、あなたは、以下の三種類の作意のある事を知らねばならない:

1) 所縁が基本的原因の作意(ārammaṇa patipādaka manasikāra): すなわち、作意心所。その作用は、所縁をして、明晰に禅修行者の心中において、顕現せ しめる事。 2) 心路が基本的原因の作意(vīthi paṭipādaka manasikāra):

すなわち、五門心路(pañcadvārāvīthi)の中の五門転向心(pañcadvārāvajjana)。その作用は、五門心路が、みな、それらの、各々の所縁を縁に取れる様にする事。

3) 速行が基本的原因の作意(javana paṭipādaka manasikāra):

すなわち、意門心路(manodvāravīthi)の中の意門転向心、及び五門心路の中の確定心 (manodvārāvajjana)。その作用は、速行(javana)の現起(現象)。

もし、それが如理作意である時、凡夫(puthujjana)と有学聖者(sekha)に関して言えば、速行は善であり、阿羅漢に関して言えば、ただの唯作(kiriya)になる。それが不如理作意の時、速行は必ず不善であるが、しかし、この事は、阿羅漢には発生しない。

問 7-13:

セヤドーに、あの禅修行修習表についての説明をして頂けますか?

もし、この種のシステムに従って修行するならば、30種類以上の業処を修行しなければならないのでしょうか?この様にすることは、どの様な利益がありますか?

答 7-13:

我々は、あの図表に、興味を感じない。あの図表は、図表が大変に好きな学校の教師が描いたものに基づいて、作製されたものである。パオ森林僧院では、我々は、多くの種類の止業処を、あれら修習をしたいと思っている禅修行者に教導する。もし、彼らが業処のすべてを修習したいと思わないのであれば、そして、ただ一種類、例えば入出息念

(Ānāpānassati) をのみ、修したいのだと思うならば、我々はその一種類の止業処をのみ、教導する。彼らがジャーナを擁する様になった後、我々は、彼らに直接、系統的に、順序よく観の修習を指導する。

止観の修習を実践する時、障礙が出現する可能性がある。たとえば、貪(rāga)、瞋(dosa)と妄想(vitaka)であるが、これらは、彼らの禅定と、観の修習に悪影響を及ぼすことがある。以下の禅修行業処は、これらの障礙を対治する所の、最も佳い武器である。仏陀は《メギヤ経》(Meghiya Sutta)<注 408>の中において、以下の様に、教導している:

Asubhā bhāvetabbā rāgassa pahānāya.

貪愛 (rāga) を捨断したいのであれば、不浄 (asubhabhāvanā) を修習しなければならない;

Mettā bhāvetabbā byāpādassa pahānāya.

瞋恚(byāpāda)を捨断したいのであれば、慈心(mettābhāvanā)を修習しなければならない;

Ānāpānassati bhāvetabbā vitakkupacchedāya.

尋(vitaka、妄想)を捨断したいのであれば、入出息念を修習しなければならない。

次に、定力を擁している心は、如実に究極法(paramatth-dhamma) <注 409>を知見することができる。禅定の修行の中において、八定(samāpatti)は、非常に高度で、また深く、力のあるものである。故に、徹底的に八定を修行したいと思う人に対して、我々は、彼らにまた、逼禅を教導する。もし、完全にあの図表を理解したいと思うならば、あなたは、道智と果智を証得するまで、止観の修習を実践しなければならない。唯一、その時に初めて、あなたは、完全にあの図表を理解することができる。なぜ、我々は、あの図表に対して、興味を感じないのであるか?

というのも、一枚の紙では、全体的な体系を説明することができないが故に。私は、かつて、ミャンマー語で、3600 余ページという、多くの枚数<注 410>を用いて、この修行体系全体の説明をなした。一枚の紙では、足りないのである。

問 7-14:

憤怒の心は、多くの代の時節八法聚(utuja ojaṭṭhamakakalāpa)を生じて、目に怒りの 光を四方に照射せしめることができますか?

答 7-14:

いわゆる「心が光を生じる」という言い方は、一種の隠喩である。というのも、実際上、結生心(paṭisandhicitta)を除いて、心処(hadaya-vatthu)に依存して生じるすべての心は、みな、心生色聚(cittajakalāpa)<注 411>を生じせしめることができるが故に。これらの色聚の中には、必ず色彩(vaṇṇa)がある。もし、心が、止の修習または観の修習の心に属するのであれば、それは非常に明瞭(明亮)なものである。パーリ聖典、義注

及び復注の中で、これらの事柄に関する提言が存在するが、しかし、それらは、瞋恚怨恨 の心が生じせしめる所の、心生色法もまた、光が生じる、ということには言及していな い。

問 7-15:

名色法を識別する心は、名色に含まれますか?それは智慧に含まれるのではないですか?

答 7-15:

そうです<注 412>。あなたは、観智のすべての段階において、それを識別することができる。特に壊滅智($Bhaṅga\~naṇa$)の段階では。《清浄之道》の中において、以下の様に言う:<注 413>

" Ñātañca nāṇañca ubhopi vipassati."

所知(ñāta)と能知(ñāna)の二者を観照する。

「所知」(知られるもの)とは、五蘊とその因を言い、観智によって了知されるべき対象である。「能知」(知るもの)とは、五蘊とその因を了知する――すべての行法(saṅkhāra dhamma)――無常・苦・無我の本質を了知する所の、観智を指す。観智は、智慧、観正見に属する。

観正見は通常、33 または32 個の名法と共に生起するが故に、それぞれ34 または33 個の名法があることになり、それらは「観智」と称される。それらは名法に属する。というのも、それらはみな所縁――諸々行法の無常・苦・無我の本質に向かうが故に。なぜ、観智自身を無常・苦・無我として照見しなければならないのか?というのも、有る種の、禅修行者は、以下の様に問うか、または想う:観智自体は、常であるのか、無常であるのか、楽であるのか苦であるのか、我であるのか無我であるのか?この問題を解決するために、あなたは観の修習心自体を無常・苦・無我として照見しなければならない。特に、一つひとつの速行刹那の中の、観智を先頭とした34個の名法(を照見しなければならない。)この他に、ある種の禅修行者は、己自身の観智に執着するかもしれない。彼らは、観の修習が巧みであり、かつ成功するが故に、驕慢になる。これらの煩悩を予防し、取り除く為に、あなたは、観智または観の修習心自体を無常・苦・無我として観照しなければならないのである。<注414>

問 7-16:

どの様にして、長時間修行したため、または一人で森林に住むために生じる退屈心と、 (修行を)面倒だと感じる心を克服しますか?これらの心は、不善法ですか?

答 7-16:

この種の心は、懈怠(kosajja)と言う。通常は、貪または瞋恚等と相応する所の微弱な不善法である。この種の心は、不如理作意によって生起する。もし、一人の人間が、不如理作意を改めて、如理作意と取り換えるならば、彼の禅修行は成功する。この種の心を克服するため、あなたは、時には、我々の釈迦牟尼菩薩が仏陀になったのは、彼の堅忍不抜が源となっていることを憶念するべきであり、また、あなたはそれらの精進努力、万難を履歴して初めて禅修行の成就を見、かつ、最終的に阿羅漢を証悟した聖者たちの物語を憶念するべきである。奮闘を経ないで、卓越した成就を得ることが出来る人はいない。

禅修行では、堅持することは必要であり、如理作意もまた非常に重要である。あなたは、 縁生法の無常・苦・無我の本質に留意することにチャレンジするべきである。もし、この 様にするならば、いつの日か、あなたは成功するに違いない。

問 7-17:

セヤドーに、無明 (avijjā)、愛 (taṇhā)、取 (upādāna) という、これらに相応しないという願望 (を実現する) 例を説明して頂きたい。

答 7-17:

もし、あなたが、善業をなしている時に、観の修習を実践し、これらの善業の無常・苦・無我の本質を観照するならば、無明(avijjā)、愛(taṇhā)、取(upādāna)は生起しない。もし、あなたには、観の修習をする能力がないのであれば、以下の様に発願することもできる:

" Idam me puññam, nibbānassa paccayo hotu."

――「私のこの功徳が、涅槃を証する縁となります様に!」

問 7-18:

もし、五蘊が無我であるならば、では、誰が仏法を開示しているのでしょうか?言い換えれば、もし五蘊が無我であるならば、セヤドーが仏法を開示している、という状況は生じない。故に、五蘊と自我(己自身)とは、関係があるのではないでしょうか?

答 7-18:

二種類の真諦がある:世俗諦(sammutisacca)と勝義諦(paramatthasacca)である。 あなたは、この二種類の真理を明確に区別しなければならない。世俗諦で言えば、仏陀は 存在し、セヤドーは存在し、父親は存在し、母親は存在する;しかし、勝義諦では、仏陀 はいないし、セヤドーもいないし、父親もいない、母親もいない。もし、充分に強い観智 があるならば、あなたは、この事を、己自ら見ることができる。もし、あなたが観智でも って、仏陀を観照するならば、あなたは究極名色法を見ることになり、それはすなわち、 五蘊であるが、それらは無常・苦・無我であって、所謂「己自身、我(自我)」というも のはない。

同様に、もし、あなたが、観智でもって私、父親、母親などを観照するならば、あなたが 見えるものは、同じく究極名色法、すなわち、五蘊であり、それは同じく、無常・苦・無 我であり、所謂「私(自我)」というものは、ない。言い換えれば、仏陀はいない、セヤ ドーはいない、父親、母親等などはいないのである。五蘊及びその因は、行法と呼ぶ。故 に、行法が行法を開示しており、時には、涅槃を開示することもあるが、しかし、根本的 に、所謂「私(自我)」というものは、ない。例えば、もし、ある人があなたに問うたと する:

「うさぎの角は、長いか、短いか?」あなたはどの様に回答するか? または、彼はこの様に質問する:

「亀の身体にある毛は、黒いかまたは白いか?」あなたはどの様に回答するか?

もし、「私(自我)」が、まったくもって不存在であるならば、「私(自我)」と五蘊の間の関係性を問う事はできない。たとえ仏陀であっても、この類の問題には、答えられないであろう。何故であるか?

仮に、あなたが、うさぎの角は長いと言えば、あなたは、うさぎに角がある事を認めたことになる;仮に、あなたが、うさぎの角は短いと言えば、あなたは、うさぎに角がある事を認めたことになる。次に、あなたが、亀の毛は黒いと言えば、あなたは、亀には毛がある事を認めたことになる。あなたが、亀の毛は白いと言えば、あなたは、亀には毛がある事を認めたことになる。同様の理屈で、もし、仏陀が五蘊と「私(自我)」は関係がある、と言ったならば、それは、彼が「私(自我)」というものが存在する事を認めたことになる。もし、彼が、五蘊と「私(自我)」は関係がない、と言えば、それもまた、「自我」が存在することを認めたことを意味する。これが、なぜ、仏陀もまた、この類の問題に、回答をしないのか、という「理由」である。こうしたことから、我々は、あなたに対して、修行して、観禅の段階にまで到達する様、チャレンジする事を提案する。その時初めて、あなたは、この種の邪見を取り除くことができる。

問 7-19:

仏陀は、かつて、比庫に「蛇呪」を教えました。「蛇呪」を誦念する事と、慈しみの修行は同じでしょうか? 呪を念じることは、仏教に入り込んできた、婆羅門教の伝統ではないですか?

答 7-19:

呪とは何か? 「蛇呪」とは何か? 我々は、呪が、インド教(婆羅門教)から伝承されてきたものかどうかは、知らない。しかし、上座部の経典の中に、護衛経(paritta Sutta)としての、《蘊護衛》(khandha Paritta)<注 415>というのがある。
仏陀は、比庫たちに対して、この護衛経を、毎日念誦する様に教えた。一条の戒律(Vibaya)が以下の様に規定されている。もし、林野に住む比庫または比庫尼は、毎日、この護衛経を少なくとも一回念誦しないのであれば、すなわち、彼または彼女は戒を犯したことになる、と。仏陀ご在世の時代、ある時、一人の、森林に住む比庫が、毒蛇にかまれて死んだ。このことが因と縁になり、仏陀は《蘊護衛》(Khandha Paritta)を教導した。この護衛経の目的は、慈心の修習と似ている。この經文は、異なる方式によって、異なる類型の蛇または龍に対して、慈愛を散布するものであるが、その中には、三宝、仏陀と阿羅漢の功徳に関する真実語が含まれる。

今夜、我々はこの護衛経を念誦する。それは非常に強くて力のあるものである。あなたは、それを「蛇呪」と呼んでもよい。名称自体は重要ではなく、あなたは、己自身の好みに応じて、何と呼んでも問題はない。ミャンマーでは、ある種の比庫は、この護衛経を用いて、毒蛇に咬まれた人を治療するが、その結果は非常に有効である。彼らは、この護衛経を何度も念誦し、その後に毒蛇に咬まれた人に、護衛水を飲ませる。その時、彼らの体内にあった蛇毒は、徐々に消える。彼らは、通常は、健康を取り戻すことができる。

ただし、効果は、人によって異なる。

仏陀が、この護衛経を教導したのは、比庫が毒蛇に咬まれて傷付かない様にするためである。もし、比庫が、敬虔な気持ちで、この護衛経を念誦し、かつ、蛇類を含む一切の衆生に慈愛を散布するならば、彼は、危険に遭遇することがない。もし、彼が、その上、戒律を受持するならば、彼は、通常、傷害に会う事も無い。



脚注

<注 391>=《蘊経》(Khandha Sutta)

<注 392>=例えば、菩提長老の《アビダンマ概要精解》

<注 393>=仏陀は以下の様に制定した。比庫は、金銭を、どの様な形式においても、収受(受取り収める)、接収(接して収める)、擁有(所有する)、または処理すれば、それは皆、厳重な戒律違反(Vinaya)の行為になる。パオ・セヤドーは、この戒律を遵守し、かつ教導する。

<注 394>=この問題は、二種類の戒律違反と関連する:

一つ目は、サンガの財産の一時的利用、立て替えで、(サンガは、金銭の処理をすることができない。しかし、居士であれば、サンガに代わって、金銭の保管と処理をすることができる。たとえ、彼が、サンガからこの様にする様にと、委託されていなくとも); もう一つは、金銭の使用と処理に関して。一番目の戒律違反行為に関して、再度戒律を犯すことはできない――金銭を使用すること――これでもって救済(する事はできない)。この場合、唯一、如法の道筋によって、すなわち、如法によって獲得した所の(かつ、比庫が購入したものではないもの)、如法の資具(金銭は、如法の資具ではない)によって、サンガに向け弁償することによって救済される。

この問題に回答する時、パオ・サヤドーは、「如法の資具」という言葉を用いて、この種 の戒律違反と救済行為を解説するものである。

<注 395>=<Sāmāvatīvatthu> (Dhp.A. 223)

<注 396>=言い換えれば、もし、一人の人間が、過去において、悪行をなしたことが原因で、ジャーナを証得することができないのであれば、どの様な人であっても、ジャーナを証得することはできない。

<注 397>= 《潰爛経》 (Parikuppa Sutta) (A. 5. 129)。この五種類の業は「無間」と言う。というのも、それらは必ず、今生において熟し、かつ、無間大地獄または、その中のある種の小地獄に生まれ変わることになるが故に。未生怨王がそうであった様に。

<注 398>=《沙門果経》(D. 1.253)

<注 399>=ジャーナ、観智と見解に関して、問答 7-7 と問答 7-9 を参照の事。

<注 400>=<観之汚垢論>(Vipassanupakkilesakathā)(Vm.733)

<注 401>=浄土:大乗仏教のいう所の「西方浄土」「極楽浄土」、そこの教主の名前を 阿弥陀仏といい、ただ彼の名号を唱えれば、そこに往生することが出来るとの事である。 大まかに言えば、大乗仏教の伝統的な目標は、浄土に往生することであるが、その理由 は、すべての往生者が、みな、仏陀になることができる、というものである。

そして、仏陀になったならば、再度戻ってきて、一切の世界の衆生を普度する。パオ・セヤドーがここでいう所の「上座部仏教の浄土」とは、大乗の聴衆の為に述べたもので、それは、涅槃の隠喩の一種である。彼は、涅槃を、どこか一つの場所として設定している訳ではなく、また、何らかの方式によって、「西方浄土」と、比較しようとしている訳でもない。「出世間地(lokuttarabhūmi)」の解説を参照の事。

<注 402>=色聚と究極色法の違いに関しては、「如何にして色聚を見るか」の章を参照の事。

<注 403>=ジャーナ、観智と見解に関しては、問答 7-5、7-9 を参照の事。

<注 404>=異なるジャーナに関しては、「如何にしてジャーナを証得するか」とその後に記載の内容を参照の事。

<注 405>=ジャーナ、観智と見解に関しては、問答 7-5、7-7 を参照の事。 <注 406>=異なる禅定に関しては、問答 3-1 を参照の事。

<注 407>=如理作意と不如理作意に関しては、「如理作意と不如理作意」を参照の事。

<注 408>=《美奇亜経》 (A.9.3; U.31)

<注 409>=「定力の育成」の章と「第三聖諦の知見」の章において、仏陀のこれらの話を引用した。

<注 410>=パオ・セヤドーの五冊の巨著《趣向涅槃之道》 (Nībbānagāminīpaṭipadā)。 <注 411>=心生色法に関する説明は、「心生色」の章を参照の事。止観の心が生じさせた光に関しては、問答 4-10 を参照の事。

<注 412>=この件に関しては、「非色七法」とその後に記載される内容、及び「如何に して壊滅智を育成するか」及びその後に記載される内容を参照の事。

<注 413>=<壊滅随観智論>(Bhaṅgānupassanāñāṇakathā)(Vm.742)

<注 414>=仏陀は《第二智事経》(Dutiyañāṇavatthu Sutta)の中において、かつて、この種の修法を指導したことがある。当該の經の中において、仏陀は、一つひとつの縁起支の現在、過去と未来の、法に依って作用する所の智を了知する事に関して説明した。同時に、「当該の法住智(Dhammaṭṭhitiñāṇaṃ)、これもまた尽法(khayadhammaṃ)、壊法(vayadhammaṃ)、離法(virāgadhammaṃ)と滅法(nirodhadhammaṃ)(と説いた)。義注では、「反観の観」(vipassanā-paṭī-vipassanā)(S.2.34)と言う。

<注 415>= 《蛇王経》(Ahirāja Sutta)が、《蘊護衛》(Khandha Paritta)と言われる理由は、当該の經が、異なる類別(蘊)に基づいて、一切の衆生に慈愛を散布するが故である:四種類の蛇、足無衆生(魚、水蛭、ミミズなど)、二足衆生(鳥、天神、人類)、四足衆生(象、犬、トカゲ等)及び多足衆生(蟻、ムカデ、蚊、サソリ、蜘など)。



第八講 仏陀の弟子と教法に対する期待

(ウィサカ祭における法話) <注 416>

仏陀寿行の捨棄

仏陀は木橘村(Veluva)において、彼の最後の、一個の、雨安居(vassa)を過ごした。その時、彼は、重病に見舞われた。アーサーラハ(Āsāļha、太陽暦7月)の満月の日、過去の業が原因で、仏陀は極めて激烈な、忍び難い背痛を感じた。過去のある一生において、後に釈迦牟尼仏と成る所の菩薩は、相撲取りであった。ある時、彼は対戦相手を打ち負かして地面にたたきつけただけでなく、相手の背骨を折ったのである。この不善業(akusala kamma)は、釈迦牟尼仏が般涅槃する10か月前に熟して、かつ果報を生じた。この種の業の力は非常に強烈であって、それは死亡するまで延々と継続するものであった。この種の苦痛を「死によってようやく終わる苦受」(maraṇantika vedāna)と言う。それは、死亡が発生して初めて消失するものである。〈注417〉。

この種の苦受が生じることを防止する為、仏陀は阿羅漢果定に入り、かつ決意 (adhiṭṭhāna) をした。仏陀は、先に色七法観(rūpasattaka vipassanā)と非色七法観(arūpasattaka vipassanā)<注 418>に基づいた阿羅漢果定

(arahattaphalasamāpatti) に入った。これらの観法を完成させた後で、かつ、阿羅漢果 定に入る前、仏陀は以下の様に決意した:

「今より、私が般涅槃する日まで、この苦受が二度と生起しない事を願う。」

その後、彼は、阿羅漢果定に入った。阿羅漢果定は、涅槃を所縁とする阿羅漢果心が、長時間継続的に生起するものを言う。当該の観の修習は強くて力のあるものであるが故に、阿羅漢果定もまた強くて力のあるものとなる。観の修習の効力と阿羅漢果定の効力によって、この種の苦受は、仏陀の般涅槃の日までの、10か月の間、生起することがなかった。しかし、仏陀は、般涅槃<注 418/A>)まで、毎日、阿羅漢果定に入る必要があった。雨安居の後、仏陀は、四方に遊行し、最後に、ベサーリー(Vesāī)に来た。ウェサーカの月の、満月の三か月前、すなわち、太陽暦2月の満月の日、仏陀は、チャーパーラ廟(Cāpāla Cetiya)において、寿行の捨棄(āyusṅkhāra ossajjana)を決定した。

何の意味であるか?仏陀はその日、以下の様に決意した:

"Temāsamattameva pana samāpattim samāpajjitvā tato param na samāpajjissāīti cittam uppādesi."

「今日より、ウェサーカ月の満月の日まで、私は、阿羅漢果定に入るが、その後においては、二度と入ることはない。」 (D.A2.169)

仏陀の期待

こうして、仏陀は、その日、大林(Mahāvana)精舎の講堂での集会において、比庫サンガの前において、彼はすでに寿行を捨棄した事を宣言した。彼は比庫サンガに向かって以下の様に言った:

"Tasmātiha, bhikkhave, ye te mayā dhammā abhiññā desitā, te vo sādhukam uggahetvā āsevitabbā bhāvetabbā bahulīkātabbā."

「故に、比庫たちよ。あれら、私がすでに証知して、かつ教導した所の法を、あなた方は、しっかりと学んだ後、習近し(繰り返し修習する事)、修習し、それら(の修習)を多くなすべきである」(D.2. 184)。

仏陀は、彼自ら証知した所の、法をのみ、教導した。仏陀は、ここにおいて、彼の教法への期待を宣告し、かつ、以下の様に指示した:

- 1)彼らは、仏陀の教法(Dhamma)を徹底的に暗記し、念誦する事。しかし、ただ学び暗記し、念誦するだけでは足りない。これが、仏陀の一番目の希望、期待である。
- 2) 仏陀は、彼らは、彼の教法を実践しなければならない、と指示した。

そのパーリ語は āsevitabbā であるが、それは、我々は、法を了知する為に、禅の修習を反復して繰り返し実践しなければならないことを意味する。ここ(中国語訳)では、習近と訳した。これが、仏陀の二番目の希望、期待である。

3) 最後に、仏陀は、彼らは法を修習(bhāvetabbā) しなければならない、と教導した。 我々が、法を実践する時、成長と進歩は欠かせないものとなる。何の意味であるか? 我々が法を修習する時、心路の中において、善法(kusaladhamma)のみが生起する(はずである)。 すなわち、戒善法(sīlakusaladhamma)、

定善法(samādhikusaladhama)、

慧善法 (Paññakusaladhamma) である。

これらの善法は不断に、絶え間なく阿羅漢果を証悟するまで、生起し続けなければならない。仏陀の弟子(sāvaka)であるならば、阿羅漢果を証悟して初めて、彼の修行

(bhāvanā) は、完成した、と言える。故に、仏陀の弟子は、目標を達成する日まで、仏陀の教法を修習しなければならない。阿羅漢果を証悟する為に、我々は一筋に修行しなければならない。まさにこのことが原因で、仏陀は、bahulīkātabbā(多くをなすべきである)、すなわち、不断の修行する様にという、指示を与えたのである。 これが、仏陀の三番目の希望・期待である。これらの期待が、仏陀の心路の中において出現した。

何故であるか?

"Yathayidam brahmacatiyam addhaniyam assa ciraţţhitikam"

「かくの如くに、この梵行は、久しく、保つ事を得なければならない、久しく、留まる事を得なければならない。」 (D. 2. 184)。

以上(の事柄)は、純正な教法が、長く久しく伝承されていく様にと(指示されたのである)。

仏弟子の責任

一人ひとりの仏弟子は、純正な教法が消失しない様に、それを維持、保護しなければならない。これは非常に重要なことである! 我々は、努力しなければならない。

我々は、何に対して、努力しなければならないのか?私は、再度、もう一度、述べる:

- 1) 我々は、仏陀の教法を、徹底的に学習し、暗記し、念誦する事に努力しなければならない;
- 2) 我々は、仏陀の教法を修行し、かつ、己自自ら、それらを体験し、了知する事に努力しなければならない;
- 3) 我々は、仏陀の教法を、阿羅漢果を証悟するまで、修行する事に努力しなければならない。

我々は如何にして世間を利益するか

我々は、以下の様にして初めて、仏陀の希望の下において、生きているのだ、と言える。我々は、なぜ、この様にしなければならないのか?

" Tadassa bahujanahitāya bahujanasukhāya lokānukampāya atthāya hitāya sukhāya devamanussānam"

「多くの人々の利益の為に、多くの人々の楽の為に、世間を憐憫し、諸々の天と人々の利益、福利、楽しみの為に。」(D.2.184)

もし、我々が、仏陀の期待通りに修行するならば、我々は、仏法を遺産として、後の世代に伝承することができ、諸々の天と人類に以下の様な教誨を教導することができる;

- 1) 徹底的に、仏陀の教法を学び、暗記し、念誦する。
- 2) 仏陀の教法を修行し、かつ、己自ら、それらを知見し、了知する。
- 3) 仏陀の教法を、阿羅漢果を証悟するまで、修行する。

この様に実践する事を通して、諸々の天と人類は、涅槃を証悟するまで、この世間において、利益と安楽を得ることができる。しかし、もし我々が、仏法を研鑽も、修習も、暗誦も、念誦も、修行もしないのであれば、己自身に仏法の智慧がない、というのに、如何にして、諸々の天と人類に仏陀の教法を教えようと言うのか?如何にして、彼らに仏法を修行せしめようと言うのか?

こうしたことから、もし、我々に、仏陀の教法に対して、充分に強い信心 (saddhā=確信) があるのであるならば、我々仏弟子は、阿羅漢果を証悟するまで、これらの教法を学び、暗誦し、念誦し、修行の中において、それらを実践し、それらを育成しなければならない。

我々は如何にして信心(=確信、以下同様)を表現するか

あなたは、仏陀の教法に対して、充分に強い信心を擁しているか?

《陶師経》 (Ghaṭīkāra Sutta) の義注の中において、以下の様に言う:

" Pasanno ca pasannākāraṃ kātuṃ sakkhissati."

「信心 (=確信) のある者は、修と学によって敬虔を表現する。」 (M. A. 2. 284)

もし、一人の男性または女性が、敬虔さを表現できないのであれば、我々は、彼または彼女が、真正なる信徒である、とは言えない。もし、あなたに、仏陀の教法に対して、真正なる信心(=確信)があるならば、あなたは、それらを徹底的に学ばなかればならないし、それらを修行しなければならないし、かつ、阿羅漢果を証悟するまで、決して止まる事がない。これらは、仏陀が般涅槃する前(に残した所)の重要な遺教である。

もし、我々が、父母に対して信頼があれば、我々は、彼らの教導を受け入れる。

同様に、我々は、我々の父の話を聞き、従わねばならない――我々の父とは仏陀である。

我々は、何を学び何を修行しなければならないか

では、これらの教法とは何であるか?それらは:

- ●四念処 (cattāro stipatthānā)
- ●四正勤 (cattāro sammappadhānā)
- ●四神足(cattāro iddhipādā)
- ●五根 (pañcindriyāni)
- ●五力 (pañca balāni)
- ●七覚支(satta bojjjañgā)
- ●八支聖道 (ariyo atthañgiko maggo) (D. 2. 184)

それらは、合わせて 37 菩提分法(budhipakkhiyadhamma)と呼ぶ。我々は、以下に、簡単に説明する。パーリ聖典の中において、仏陀は聴衆の根性(性質、性格)に基づいて、異なる方式を用いて、37 菩提分を教導した。パーリ聖典の教法は、37 菩提分に帰納することができる;もし、それを濃縮するならば、ただ、八支聖道となる;更に纏めれば、ただ三学になる:戒、定、慧である。

修行の基礎

まず先に、我々は、戒を学び、かつ、戒を持さねばならない。もし、戒学を理解しないならば、我々は、己自身の行為を浄化することができない。次に、我々は、心をコントロールし、心をして専注せしめる為に、止禅を学ばなければならない。もし、止禅を理解しないのであれば、如何にして己自身の心をコントロールするのか?その後、我々は、如何

にて智慧を育成するのかを学ばなければならない。もし、慧学を理解しないのであれば、 我々は如何にして慧を育成するのか?

故に、我々の行為を浄化する為、我々の心をコントロールする為、かつ、我々の智慧を育成する為、先に心を込めて、仏法を学ばなければならず、次には、阿羅漢果を証悟するまで、それらを実践し、育成しなければならない。仏陀は、《大般涅槃経》

(Mahāparinibbāna Sutta) の中において、彼の弟子に対して、以下の様に、何度も策励している:

"Iti sīlam, iti samādhi, iti Paññā. Sīlaparibhāvito samādhi mahapphalo hoti mahānisamso. Samādhiparibhāvitā Paññā mahapphalā hoti mahānisamsā.

Paññāparibhāvitam cittam sammadeva āsavehi vimuccanti, seyyathidam - kāmāsavā bhavāsavā diṭṭhāsavā avijjāsavā."

「これが戒(sīla)、これが定(samādhi)、これが慧(Paññā)である。戒の遍修による定は、大果報あり、大功徳あり;定の遍修による慧は、大果報あり、大功徳あり;慧の 遍修による心は、完全に 欲漏(kāmāsavā)、有漏(bhāvāsavā)、見漏 (diṭṭhāsavā)、無明漏(avijjāsavā)の諸漏の中から解脱することができる。」(D. 2. 186)

我々一人ひとりは、皆心を有している。もし、戒を基礎として、次に、己自身の心をコントロールするならば、この専注する心の力は非常に奇妙なものであって、当該の心は、究極色法を透視することができる。色法は、原子より更に微細な色聚の方式によって生起するが、我々の身体は、すなわち、これらの色聚によって構成されている。専注の心は、これらの色聚を、分析することができるだけでなく、専注の心は、究極名法をも透視することができる。専注の心は、それらの因を透視することができるし、専注の心は、また、名色法及びその因の生起、壊滅の本質を透視することもできる。この種の観智を智慧と言う。この種の智慧の進展は、戒を基礎とした禅定に依る。専注の心と智慧は、共に、心志力(心の志向性のよる力)であり、この種の心志力は、すべての執着、すべての煩悩とすべての痛苦を断じ除いて、涅槃の証悟へと導き向かわせることができる。

人間、一人ひとりには、皆、心がある。心が、禅定を通して、完全に展開されたならば、観智、またすなわち、智慧であるが、それは、一人の人間を、食染と生死輪廻の中から、徹底的に解脱せしめることができる。しかし、禅定は、戒を基礎していなければならない。在家居士で言えば、五戒は必要である。すなわち:

- 1) 殺生から離れる。
- 2) 与えられていないものを取る事から離れる。
- 3) 欲邪行から離れる。
- 4) 虚妄語から離れる。
- 5) 放逸の因となる諸々の酒類から離れる<注420>。

この五戒は、すべての在家の仏弟子が、皆、遵守しなければならないものである。この 五戒の内のどれか一条を違反するならば、この人は、即刻、自動的に真正なる仏弟子 (upāsaka 近事男/upāsikā 近事女)の身分を失い、かつ、彼の、三宝への帰依もまた失効 する。仏弟子はまた、邪命から遠く離れなければならない。すなわち、殺生、不与取(窃 盗)、欲邪行、虚妄語、離間語、粗悪語または雑穢語等の手段でもって獲得した銭財を使 用してはならない。彼らは、五種類の正当でない交易に従事してはならない:武器の販 売、人間の売買、と殺される畜生の売買、酒類などの麻酔品の売買、及び毒薬の売買。

こうした事から、戒行は、すべての仏弟子にとって、非常に重要なものとなる。このことは、ただ涅槃を証悟するためにだけでなく、死後、善趣に生まれ変わることができる様になる為でもある。戒行が不清浄な者は、死後、善趣に生まれ変わることは容易ではない。というのも、死亡する時、それらの悪行が、通常、彼の心に粘着し、彼の心中に浮現するが故に。それらの悪行の一つを、心の所縁として取れば、この人は、通常は、四悪趣の一に堕落する。戒行は、今生において、利益と楽しさを得る為にも、非常に重要である。清浄なる戒行がないのであれば、利益と楽しさを得ることは出来ない。性格が劣悪な人間は、当然、どこにおいても、仇敵が存在する;そして、どこにおいても仇敵の存在する人間は、如何なる楽しさをも、得ることができないのである。

止禅と観禅

仏陀はまた、以下の如くの教導を行った:

"Yo ca vassasatam jīve, dussīlo asamāhito;

ekāham jīvitam seyyo, sīlavantassa jhāyino."

もし、人が 100 歳まで生きても、戒もなく、定力もないのであれば、一日生きて、戒を持して、禅定の修行をする方がよい。(Dhp.110)

何故であるか?

というのも、禅定を通して、完全に展開された心は、大智慧を生起することができ、己自ら涅槃を見ることができ、己自ら、生死輪廻の終点を見ることができ、かつ、一切の煩悩と痛苦を根こそぎ断じ除くことができるが故に。こうしたことから、我々は、戒行を基礎として、止禅と観禅を修行する必要があるのである。我々は、四念処(Cattāro satipatthānā)を修行しなければならない。

- 1) 身随観念処(kāyānupassanā satipaṭṭhāna)
- 2) 受随観念処(vedanānupassanā satipaṭṭhāna)
- 3) 心随観念処(cittānupasanā satipaṭṭhāna)
- 4) 法随観念処(dhammānupassanā satipaṭṭhāna)。

「身」(kāya)とは何であるか? 観の修習には、二種類の身がある:色身(rūpa-kāya)と名身(nāma-kāya)である。色身は、28種類の色法によって構成されており、名身はすなわち、心とその相応する心所によって構成されている。言い換えれば、この二種類身とは、すなわち、色、受、想、行、識の五蘊(khandha)である。そして、呼吸、32身分の不浄(asubba)、四界等の止禅の所縁もまた「身」(kāya)と呼ぶ。何故であるか?

それらもまた、色法によって構成されているが故に。例えば、呼吸は、心生色聚によって構成されている。もし、これらの色聚を分析するならば、一粒一粒の色聚の中には、9種類の色法が含まれていることを発見する:地界、水界、火界、風界、色彩、匂い、味、食素(栄養素)と音声。骨格は、同様に、色聚によって構成されており、生きている人間の

骨格は、合計 6 種類の色聚が存在する。もし、これらの色聚を分析するならば、それらは 53 種類の色法が含まれていることを発見するであろう。<注 421>

故に、身随観(kāyānupassanā)において、仏陀は、二種類の禅修行を教導した:止と観である。入出息念(ānāpānassati)と32身分などは、身随観の内に含まれる。故に、もし、あなたが、入出息念を修習しているのであれば、あなたは、すなわち、身随観を修習しているのである。これらの止禅は、すべて身随観に属する。あなたが、止の修習に成功した後、観禅に転向して、色法と名法を識別し、分析することができる。

色業処 (Rūpakammaṭṭhāna) を修習する時、あなたは、28 種類の色法を識別するが、それもまた身随観である;

名業処(Nāmakammaṭṭhāna)を修習する時、あなたは、受を識別するが、それは受随観 (vedanānupassanā)である;

心を識別する時、それは心随観(ciţṭānupassanā)である;

触を識別する時、それは法随観 (dhammānu-passanā) である。

しかし、ただ受、心と触を識別するだけでは、観智を成就するには充分ではなく、そのほかに、残りの相応心所を識別しなければならない。名法と色法を識別した後、我々は、それらの過去、現在と未来の因と縁を識別しなければならないが、これは縁摂受智

(Paccayapariggaha-ñāṇa) である。縁摂受智を成就した後、あなたは、正式に観の修習を開始するが、この時、あなたは、色、受、心または触を観照する事に重きを置く。

しかし、「重きを置く」は、あなたがただ一種類のみ識別すればよいのだ、という事を意味しない。あなたは、色法を識別する事に重点を置いてもよいが、しかし、名法を疎かにしてはならなず、同時に、受、心と法の識別も実践しなければならない。<注 422>

あなたは受の観照に重きを置いてもよい。しかし、ただ受を観照するだけでは足りないのであって、あなたはそれと相応する所の、名法、依処と所縁を観照しなければならない;五種類の依処と、それらの所縁はみな色法である。心随観と法随観に関しても、また同様である、<注 423>

ここにおいて、vipassanā は、名色法およびその因の無常・苦・無我の本質を観照するものである(という事が分かる)。これらの法は、生起するやいなや、即刻滅し去る。故に、それらは無常である;それらは、不断に生・滅の圧迫に瀕しており、故にそれらは苦である。これらの法の中において、霊魂というものは存在せず、堅固な、永恒で不滅な実質は存在しておらず、故に、それらは無我である。名色法及びその因と果の無常・苦・無我の本質を識別する事は、すなわち、観禅と言う。あなたが、止禅と観禅の修行をする時、我々は、あなたが、四念処を修行しているのだ、と言うことができる。

四念処を修行する時、あなたは、充分に四正勤 (Cattāro sammappadhāna) を策励しなければならない。すなわち:

- 1) 未だ生起しない不善法が生起しない様に努力する。
- 2) すでに生起した不善法を取り除く事に努力する。
- 3) いまだ生起しない善法(定善法、観禅法、道善法等)が生起する様に努力する。
- 4) すでに生起した所の善法を、阿羅漢果を証悟するまで育成する様に努力する。

どの様に修行するべきか? あなたは、四念処に従って修行しなければならない。 修行の時、あなたは、上に述べた四正勤を、充分に策励しなければならない:「たとえ私 の血と肉が枯れ果てて、ただ筋と骨が絡むだけになても、私は決して禅修行を放棄しな い!」

修行する時、あなたは、四神足(Cattāro Iddhipādā、成就の為の四種類の基礎)を擁しなければならない:

- 1) 欲 (chanda) : 我々は、涅槃を証悟するのだという、強くて力のある意欲を擁しなければならない。
- 2) 精進(vīriya): 我々は、涅槃を証悟するのだという、強くて力のある精進を擁しなければならない。
- 3) 心 (citta) ; 我々は、涅槃を証悟するのだという、強くて力のある心を擁しなければならない。
- 4) 観 (vimaṃsa): 我々は、涅槃を証悟するのだという、強くて力のある観智を擁しなければならない。

もし、充分に強烈な意欲を擁するならば、我々は、目標を達成することができる; 充分な意欲を擁しさえすれば、実現しないものは何もない。

もし、充分に強烈な精進を擁するならば、我々は、目標を達成することができる: 充分な精進を擁しさえすれば、実現しないものは何もない。

もし、充分に強烈な心を擁するならば、我々は、目標を達成することができる; 強くて力のある心を擁しさえすれば、実現しないものは何もない;

もし、充分に強烈な観智が擁するならば、我々は、目標を達成することができる; 唯一、充分な智慧を擁する時、実現しないものは何もない。

四念処を修習する時、我々は、五根(pañcindriyāni) <注 424>もまた、備えておかねばならない。すなわち:

- 1) 信(saddhā): 我々は、仏陀及びその教法に対して充分に強い信仰(信じて敬う)事が必要である。
- 2) 精進(vīriya):我々は、充分に強力な精進を実践しなければならない。
- 3) 念 (sati) : 我々は、禅修行の所縁に対して、充分に強い正念を擁しなければならない。止の修習の所縁に関しては、それは、入出息禅相または遍相などの単一の目標でなければならない。観の修習の所縁に関しては、それは名法、色法およびその因のみでなければならない。
- 4) 定 (samādhi): 我々は止と観の所縁に対して、充分に強力な専注力がなければならない。
- 5) 慧 (Paññā): 我々は止と観の所縁に対して、充分な了知を擁しなければならない。 この五根は、禅修行者の心を制御し、これをして、涅槃に向かって導く所の、八支聖道から離れない様にする。

もし、この五根の内のどれか一根でも欠けるならば、あなたは、目標に到達することが 出来ないし、あなたの心をコントロールする事も出来ない。この五根は、あなたの心をコ ントロールする力を有し、心をして、禅修行の所縁から離れない様にする。この種の力を 心志力(bala)と言う。心志力の角度から見て、五根は五力(Pañca Balāni)とも言 う。四念処以外に、七覚支(Satta Bojjhaṅgā)もまた非常に重要である。それらは:

- 1) 念 (sati)。
- 2) 択法 (dhammavicaya) 、すなわち、観智。
- 3) 精進 (vīriya)。
- 4) 喜 (pīti)。
- 5) 軽安(passaddhi)。
- 6) 定 (samādhi)。
- 7) 摿 (upekkhā)。

最後は、八支聖道(Ariyo Aṭṭhaṅgiko Maggo)である。

- 1) 正見 (Sammā-diṭṭhi)。
- 2) 正思惟 (Sammā-saṅkappa)。
- 3) 正語 (sammā-vācā)。
- 4) 正業(Sammā-kammanta)。
- 5) 正命(Sammā-Ājīva)。
- 6) 正精進 (Sammā-vāyāma)。
- 7) 正念 (Sammā-sati)。
- 8) 正定 (Sammā-samādhi)。

言い換えれば、これらは、戒(sīla)、定(samādhi)、慧(Paññā)の三学である。 我々は、系統的にこの三学を修行しなければならない。これらを纏めると、37 菩提分法 (bodhipakkiya-dhamma) になる。仏陀は、彼の弟子が、阿羅漢果を証悟するまで、これらを研鑽、学習し、実践するのを期待、希望した。もし、この様に実践するならば、 我々は、この遺産を後の代の人々に伝承したことになる。この様であれば、我々と後の代の人々は、涅槃を証悟するまで、この世間において、利益と楽しさを獲得することができる。

仏陀のサンガに対する教誡

仏陀は、更に一歩進んで言う:

"Handa dāni, bhikkhave, āmantayāni vo, vayadhammā saṅkhārā, appamādena sampādetha."

「比庫たちよ。今、私はあなた方に告ぐ:『諸行法は皆、滅法である。不放逸によって成就せよ!』」 (D.2.185)

すべての名色法及びその因は、行法(saṅkhāra)と言う。というのも、それらは、それぞれ個別の因と縁によって生じるが故に。諸行法は無常なものである。あなたは、無常の本質を忘れてはならない。無常の本質を忘れたが故に、あなたは己自身、息子、娘、家庭等に、心において期待が生じる。もし、あなたが無常の本質に対して理解があれば、この一生をかけて、それから離脱する事に努力するはずである。故に、仏陀の、我々に対する教誠を忘れてはならない:

「比庫たちよ。今、私はあなた方に告げる:『諸行法は滅法である。不放逸によって成就 せよ!』」

仏陀は続けて言う:

"Na ciram Tathāgatassa Parinibbānam bhavissati. Ito tinnam māsānam accayena Tathāgato parinibbāyissati."

「如来は、 久しからずして、般涅槃する。今から三か月の後、如来は、般涅槃する。」 これは、彼が完全に世間から離れる事を意味する。これらの話を聞いた人々は、悲しん だ。仏陀はまた言う:

" Paripakko vayo mayham, parittam mama jīvitam."

「私も年を取った、私の寿命は多くは無い。」

仏陀は、アーナンダ尊者に彼の老いの境遇を語った:

「アーナンダ、私はすでに老い、老いの境遇にあり、年長になり、旅程は尽き様としている。年はすでに暮れて、80歳になる。アーナンダ、まさに古い車を、修理しながら使っている様に、アーナンダ、如来の身体もまた同様に、支えによって維持されている。」

「アーナンダ、如来が一切の相を作意せず、ある種の受を滅し、無相心定<注 425>を成就して住する時、アーナンダ、その時初めて、如来の身体は、問題が解消する。」 (D.2.165)

仏陀は言う:

" Pahāya vo gamissāmi, katam me saraņamattano."

「あなた方を捨てて行く。己自身を頼りとせよ。」

これは、彼らから離れて、仏陀は般涅槃に入り、去る事、彼はすでに己自身の帰依処を阿 羅漢果にまで高めている事を意味している。

仏陀の比庫に対する提案

仏陀は何故以下の様に言うのか:

「故に、アーナンダよ。己自身を島として住し、己自身を帰依(処)とし、他のものを帰依(処)としない;法を島として住し、法を帰依(処)とし、その他のものを帰依(処)としない。

アーナンダ、比庫は如何にして、己自身を島として住し、己自身を帰依(処)とし、他の ものを帰依(処)にしないのか;

如何にして、法を島とし、法を帰依(処)とし、その他のものを帰依(処)としないのか?」 (D. 2. 165)

仏陀の回答は以下の通りである:

" Appamattā satīmanto susīlā hotha bhikkhavo, Susamāhitasaṅkappā, sacittamanurakkhatha."

「比庫は不放逸たれ。念を具備し、浄戒を持し、定を得る事に善く、善く思惟し、己自身 の心を保護すべし。」 (D. 2.185)

" Susīlā hotha bhikkhavo"の意味は:

「比庫たちよ。あなた方は、己自身の行為を浄化することに努力しなければならない。完全なる清浄な戒行を具足した比庫になる様、努力しなければならない。」

この事は、我々は、戒学を育成する必要がある事を意味している。

すなわち:正語、正業と正命。

Susamāhitasaṅkappā: "susamāhita"の意味は、我々は必ず、定学を修習しなければならない、という事である。すなわち:正精進、正念と正定。

- "saṅkappā"は、慧学の事。すなわち、正思惟と正見。
- "Appamattā"の意味は、観智を通して、諸行法の無常・苦・無我の本質を照見する事。
- "Satīmanto"の意味は、我々が戒、定、慧の三学を修習する時、充分は正念を擁する必要がある、という事。

こうした事から、我々は、正念を擁し、かつ、不放逸でなければならない。

何において正念を保持するか?

四念処、名色法、または諸行法において正念を保持する必要がある。

最後に仏陀は言う:

"Yo imasmim dhamma-vinaye, appamatto vihessati.

Pahāya jātisaṃsāraṃ, dukkhassantaṃ karissati."

「この法と律において、不放逸に住む者は、生死輪廻を捨て、苦の果てるを成す」 故に、もし、生死輪廻の終点に到達したいと願うならば、我々は仏陀の教導、すなわち、 八支聖道を遵守しなければならない。

我々をして、臨終の時が来る前に、精進努力せんものを!

一切の衆生、安楽であれ、と願う!



脚注

<注 416>=ウェサーカ祭:上座部仏教の中において、仏陀の誕生、成仏、般涅槃の日は、陽暦 5月(古インドの Vesāka 月)の満月の日であった為、この名称がある。

<注 417>=《大般涅槃経》(Mahāparinibbāna Sutta)の義注(D.A.2.164)。

<注 418>=色七法観と、非色七法観に関しては、「色七法」の章及びその後に記載の内容を参照の事。

<注 419>=仏陀の修行した観智と入果定に関しては、「仏陀の比庫への提案」の章節の注 A を参照の事。

〈注 420〉=穀酒、果実酒と酒類(surā-meraya-majja):仏陀が《律蔵・飲酒学処》 (Surāpānasikkhāpadaṃ)(Pc.328)で述べた内容と、《長部・シンガーラ経》 (Siṅgāla Sutta)の義注(D. A. 3.247)、復注と《分別[論]義注・学処分別》 (Sikkhāpadavighaṅga)(Vbh. A. 703)の解釈によると、surā は、穀酒、例えばビール、麦芽酒などを指す;meraya は、果実酒の事で、例えば葡萄酒等、発酵酒と蒸留酒(例えばウィスキー、ブランデー等)を含む。majja は、酒類、アルコール、麻酔性飲料の総称である。

<注 421>=詳細は「如何にして色聚を分析するか」の章及び「表 2c: 身体の基本的色法」を参照の事。

<注 422>=四念処。1) 身;2) 受;3) 心;4) 法。

「法」は、名身(nāmakāya)のその他の構成部分を指す。仏陀はまた、法を、五蘊、12 処、五蓋、七覚支と四聖諦として解説している。実際は、法の多くの方面を完全に分けることは出来ない。というのも、一つひとつの方面は、その他の全ての方面が含まれているが故に。例えば、四聖諦を徹底的に知るという事は、すなわち、八支聖道を徹底的に知る事であり、徹底的に八支聖道を知る事は、すなわち、徹底的に七覚支を知ることであり、それはすなわち、名色法、五蘊、12 処、等などを徹底的に知る事でもある。故に、覚悟(悟り)を実現させる為に、37 菩提分法(bodhipakkhiya-dhamma)のすべてを、徹底的に知る必要があるのである。

<注 423>=パオ・セヤドーの、観の修習において、ただ受だけを観照することに関する説明は、問答 4-6 を参照の事。

<注 424> = 五根の説明に関して、「五根のバランス」の章とその後に記載される内容を参照の事。

<注 425>=無相の涅槃を所縁とする阿羅漢果定に関しては、章節の注 A を参照の事。

<注A>=果徳瑪仏は、三種類の阿羅漢果定を擁していた。

- 1) 道無間果定(Maggānantaraphalasamāpatti)。
- 2) 受用果定 (Valañjanaphalasamāpatti) 。
- 3) 寿行果定(Āyusaṅkhāraphalasamāpatti)。
- 1) 道無間果定:この種の阿羅漢果定は、阿羅漢聖道善業の後、即刻、生じる。それは、 絶え間なく、果報を齎すという特徴がある。また、刹那果定(Khaṇika phala-samāpatti) とも言う。仏陀の阿羅漢聖道の後において、絶え間なく生起した三個の果心刹那は、まさ にこの種の果定に属するものである。
- 2) 受用果定:これは、一人の阿羅漢が、その意欲に基づいて、進入し、かつ受用する阿羅漢果定である。涅槃の寂静の楽を享受する果定であり、同じく、刹那果定(Khaṇika-phalasamāpatti)とも言う。仏陀は、この種の果定に、随時進入する、法話をしている最中であっても、聴衆が随喜によって「サドー」と言うときであってもさえも。
- 3) 寿行果定:この種の阿羅漢果定は、常に、色七法観と非色七法観の修行の後に生起する。これは、我々の菩薩が、大菩提樹の下において、覚悟(悟り)を得た時に修していた観法である。

仏陀は、木橘村において、背中の痛みが発生したその日から始めて、彼が般涅槃するまでの間、毎日、この様に観の修習を実践していた。すなわち、この観法を完成させた後、この種の阿羅漢果定に入る前、仏陀は観から出て、かつ、決意する:

「今日から、大般涅槃の日まで、この苦受が再び生起することの無い様に願う」

そして、続いて、観の修習を行い、その後に、阿羅漢果定に入るのである。刹那果定と、 寿行果定の間の区別は、入定の前に修習していた所の、観法の違いである。刹那阿羅漢果 定は、ただ涅槃の寂静の楽を享受するだけであって、入定の前は、普通の観法を修習する だけでよい;寿行阿羅漢果定は、更に大きな努力を払って、更に高レベルの観法、すなわ ち、色七法(rūpasattaka)と非色七法(arūpasattaka)を修習することを要求される。 二者の効果もまた異なる;刹那阿羅漢果定は、定に住している間のみ、病痛を鎮伏するこ とができる。それはちょうど、一つの石を水の中に投げ込んだ所、石の衝撃の残る期間のみ、水面を清潔に出来るが、その後には、水草はまた元の様に、繁るのと同じである。 寿行阿羅漢果定は、決意した期間内(ここでは 10 か月)痛苦を鎮伏することができる。 ちょうど、一人の、強健な男子が、湖の中に入って、水草を清掃するのと同じで、相当の長時間、水草が水面を覆うことはない。



第九講 最も殊勝な布施

(施主、主催者及び支援者への随喜の法話) <注 426>

はじめに

二種類の布施がある:

- 1) 大果報を齎す布施
- 2) 果報を齎さない布施

あなたは、どちらが良いですか? 仏陀が、その弟子(sāvaka)に対して、その教法の中において、布施に関して、どの様な期待をしていたか、を見てみよう。あなたの選択は、仏陀と同じであり得るし、仏陀と異なることもあり得る。仏陀の選択に関して、我々は《中部・布施分別經》(Dakkhināvibhaṅga Sutta)を見てみようと思う。

ある時、仏陀は、釈迦国のカピラワットゥー城のガジュマル園にいた。その時、マハーパジャーパティゴータミー (Mahāpajāpatigotamī) が、一対の新しい布を持って、仏陀の所へ来た。仏陀に礼拝した後、彼女は傍に坐って仏陀に言った:

「尊者。この一対の新しい布は、私が、バカワトの為に、己自ら紡ぎ、己自ら織ったものです。尊者、バカワトの私への憐憫により、これを受け取ってください」

「ゴータミー、サンガに布施しなさい!あなたがサンガに布施をする時、私とサンガを敬った事になります」

彼女は、三度同じ事を言って布施することを求めましたが、仏陀は三度、同じ言葉でもって、回答した。

アーナンダ尊者は、仏陀に言う:

「尊者、マハーパジャーパティゴータミーの持ってきた、この新しい布を受け取って下さい!

尊者、マハーパジャーパティゴータミーは、バガワトを色々支えてきました。彼女はあなたの叔母であり、養母であり、保母であり、乳母であり、バガワトの生母が亡くなった時、彼女があなたに、乳を与えたのです。仏陀もまた、マハーパジャーパティゴータミーに多く支援しました。

尊者、マハーパジャーパティゴータミーはバガワトによって、仏に帰依し、法に帰依し、 サンガに帰依しました。

尊者、マハーパジャパティゴータミーは、バガワトによって、殺生を離れ、不与取を離れ、欲邪行を離れ、虚妄語を離れ、酒類等の放逸の因から離れました。

尊者、マハーパジャパティゴータミーは、バガワトによって、仏に対して、不動の浄信を 具足し、法に対して、不動の浄信を具足し、サンガに対して、不動の浄信を具足し、聖者 の喜ぶ戒を具足しています。

尊者、マハーパジャパティゴータミーは、バガワトによって、苦に対して疑いがなく、苦の集に対して疑いがなく、苦の滅に対して疑いがなく、苦の滅に向かう道に疑いがない。 尊者、バガワトは、マハーパジャパティゴータミーに対しても、多くの支えがあります。」

師長(指導者)の弟子への恩徳

仏陀は以下の様に回答した:

「まさにその通りである。アーナンダよ。アーナンダ、もし、弟子が師長によって、仏に帰依し、法に帰依し、サンガに帰依するならば、アーナンダ、私は言う。この弟子は、礼拝、立って迎える事、合掌、恭敬行、衣、食べ物、座臥処、病人の必要としている医薬品と資具の提供を行う事を通しても、師長の恩徳に報いる事は難しい、と。

アーナンダ、もし、弟子が、師長によって、殺生を離れ、不取与を離れ、欲邪行を離れ、 虚妄語を離れ、酒類等の放逸の因から離れたならば、アーナンダ、私は言う。この弟子 は、礼拝、立って迎える事、合掌、恭敬行、衣、食べ物、座臥処、病人の必要としている 医薬品と資具の提供を行う事を通しても、師長の恩徳に報いる事は難しい、と。

アーナンダ、もし弟子が、師長によって、仏に対して、法に対して、サンガに対して不動の浄信を具足し、聖者の喜ぶ戒を具足するならば、アーナンダ、私は言う。この弟子は、礼拝、立って迎える事、合掌、恭敬行、衣、食べ物、座臥処、病人の必要としている 医薬品と資具の提供を行う事を通しても、師長の恩徳に報いるのは難しい、と。

アーナンダ、もし、弟子が、師長によって、苦に対して疑いがなく、苦の集に対して疑い がなく、苦の滅に対して疑いがなく、苦の滅に向かう道に対して疑いがない時、アーナン ダ、私は言う。この弟子は、礼拝、立って迎える事、合掌、恭敬行、衣、食べ物、座臥 処、病人の必要としている医薬品と資具の提供を行う事を通しても、師長の恩徳に報いる のは難しい、と。」

ここにおいて、我々は、仏陀の述べた所の意味を検討してみたいと思う。

もし、弟子が、師長の指導によって四聖諦を了知したならば、彼の四聖諦の観智は、彼が、恭敬し、師長に四資具を供養した、その行為より更に利益がある。もし、彼が、入流道智(Sotāpattimagga-ñāṇa)と入流果智(Sotāpatti-phala-ñāṇa)を通して四聖諦を知見したならば、この種の観智は彼が四悪趣(apāya)から離脱する支えに成る。

この種の結果は、極めて殊勝である。あれら、善行の育成を疎かにしている人々は、通常、皆四悪趣において、徘徊する。四悪趣は、彼らの家(Pamattassa ca nāma cattāro apāyā sakagehasadisā) <注 427>の様である。彼らは、ただ、偶に善趣に来るだけであるが故に、四悪趣から離脱するのが極めて難しい。弟子が、恭敬し、師長に四資具を供養する行為は、この種の結果と共に語るのは、全くもって出来ないのである。

次に、もし、弟子が、一来道智(Sakadāgāmimagga-ñāṇa)と一来果智

(Sakadāgāmiphala-ñāṇa) を通して、四聖諦を知見したならば、彼は、ただ、もう一度だけ、人間界に生まれ変わる。もし、彼が不来道智(Anāgami-magga-ñāṇa)と不来果智(Anāgamiphala-ñāṇa)を通して、四聖諦を知見したのであれば、彼の観智は彼が11種類の欲界を超越する事を助けることができる。彼は、必ずや、ただ梵天界にのみ生まれ変わることが必定であり、この欲界に戻ってくることはない。梵天界の楽しさは、欲界より、はるかに上回る。梵天界には男女の別なく、娘や息子や家庭というものはなく、騒乱と争いもないし、どの様な飲食もない;彼らの寿命は極めて長く、誰も彼らの楽しみを打ち壊すことは出来ないし、彼らもまた、如何なる危険にも、出会う事はない。しかしながら、いまだ阿羅漢果を証悟していないならば、彼らは、依然として、堕落、死亡と輪廻による再生に堕ちる事を免れえない。

次に、もし、弟子が、阿羅漢道(Arahattamagga)と阿羅漢果(Arahattaphala)を通 して四聖諦を知見したならば、彼の観智は、彼をして輪廻を離脱する事を導くことができ る。般涅槃の後、彼は必ず、涅槃に到達する事が出来、二度と、どの様な痛苦に出会うこ とはなく、二度と、生、老、病、死などを有することがない。これらの利益は、弟子が、 恭敬し、師長に四資具を供養する行為より、更に高貴である。たとえ、弟子が供養した資 具を積み重ねて、その高さが、須弥山より高くても、これらの供養は、師長の恩徳に報い るには足りない。というのも、生死輪廻から離脱する事、生、老、病、死から離脱する事 の方が、更に尊いからである。

弟子が了知する所の四聖諦とは何であるか?

- 1) 苦聖諦 (Dukkhasacca): これがすなわち、五取蘊である。もし、弟子が師長によって苦聖諦を了知したならば、この種の観智は、恭敬し、師長に四資具を供養する行為より、更に尊い。
- 2) 苦集聖諦(Samudayasacca): これはすなわち、縁起である。もし、弟子が師長によって、苦集聖諦を了知したならば、この種の観智もまた、恭敬し、師長に四資具を供養する行為より、更に尊い。
- 3) 苦滅聖諦(Nirodhasacca): これはすなわち、涅槃である。もし、弟子が、師長によって、苦滅聖諦を了知したのであれば、この種の観智もまた、恭敬し、師長に四資具を供養する行為より、更に尊い。
- 4) 苦の滅に向かう道聖諦(maggasacca): これはすなわち、八支聖道のことである。またすなわち、観智(vipassanāñāṇa)と道智(Maggañāṇa)である。

もし、弟子が、師長によって、観智と道智を具足したのであれば、これらの観智は、恭敬し、師長に四資具を供養する行為より、更に尊い。というのも、これらの観智の智慧は、彼をして生死輪廻から離脱せしめるが故に。また、恭敬し、四資具を供養する行為は、生死輪廻から離脱する為の、直接の原因になることはないが、しかし、四資具を供養することは、間接的に、サマタ・vipassanā(止観)の修行及び涅槃を証悟する為の助縁とすることは可能である。

失ってはならない良機(チャンス)

ここにおいて、私は、更に一歩進んで解説をしたいと思う。五蘊は、すなわち、第一聖 諦――苦聖諦である。五蘊の中には、色蘊(rūpakkhandha)が含まれる。色(rūpa) は、異なる類型の色聚(微小な粒子)の方式でもって生起する。異なる類型の色聚を分析 する時、合計で、28 種類の色法を見ることができる。この問題に関して考えてみて下さい: 仏陀の教法以外に、どの様な教師、指導者も、これら類型の色法を、また、どの様にそれらを区別するのか、を教えられない。仏陀とその弟子だけが、これらの類型の色法を識別することができ、かつ、どの様にそれらを区別するのか、を指導することができる。

この他に、五蘊の中においては、四種類の名蘊(nāmakkhandha)が含まれる。結生識、有分と死亡心を除いて、これらの名法は、心路の方式でもって、生起する。仏陀は、一個の心識刹那(cittakkhaṇdha)の中に、幾つの相応心所(cetasika)と一個の心(citta)が相応するのかを、正確に教導すると同時に、如何にしてそれらを識別し、区分するのか、も教導する。仏陀の教法を除いて、どの様な教師、指導者もこれらの名法を明晰に掲示し、教導することはできない。というのも、その他の教師、指導者で、それらを完全に理解している人はいないが故に。しかし、もし、釈迦牟尼仏の弟子が、仏陀の指示に基づいて、精進し、かつ系統的に修行したならば、彼は、これらの名法を、明晰に識別することができる様になる。これは、仏弟子の特有の機遇(境遇、チャンス)であり、あなた方は、この良機(チャンス)を逃してはならないのである!

次に、縁起は第二聖諦――苦集聖諦である。仏陀はまた、彼の弟子たちに、どの様にして、縁起を識別するのか、を教導した。仏陀の弟子が、仏陀の教導に基づいて縁起を識別した時、彼は因と果の間の関係を、充分に了解することができた;彼はこうして、過去の因が現在の果を生じせしめる事、及び現在の因が未来の果を生じせしめる、という観智を了知することができた;彼は、過去、未来と現在の三時の中において、創造神は存在せず、創造神が、何かの結果を創造しているなどということはないし、また、どの様な事物も、因なく生じることはない、という事を、了知した。この種の智慧は、仏陀の教法の中においてのみ、獲得することができる。あなた方は、この良機(チャンス)を逃してはならないのである!

次に、弟子が縁起の識別をする時、彼は、過去世と未来世を見ることができる。もし、 あなたが、多くの過去世を識別するならば、あなたは、どの様な種類の不善業が、悪趣に 生まれ変わらせるか、どの様な種類の善業が、善趣に生まれ変わらせるのか、という観智 を獲得することができる。31 界及び業果法則に関する智慧は、唯一、仏陀の教法の中にお いてのみ、獲得することができる。仏陀の教法の外において、31 界及び、それぞれの界に 生まれ変わることになる業果の法則を、理解できる人間はいない。あなた方は、この良機 (チャンス)を逃してはならないのである!

次に、もし、弟子が、未来世の因と果を識別することができるならば、彼は、名色法の 止息を見ることができるし、彼の名色法が、いつ、止息するのかもまた、完全に知ること ができる。これが、第三聖諦――苦滅聖諦である。この種の智慧は、唯一、仏陀の教法の 中においてのみ、獲得することができる。あなた方は、この良機(チャンス)を逃しては ならないのである!

最後に、仏陀はまた、第四聖諦を教導した――寂滅の境地に到達する方法、すなわち、サマタ・vipassanā(止観)である。止観はまた、すなわち、八支聖道でもある。名色限定智と縁摂受智は正見(sammā-diṭṭhi)に属するが、名色法が止息する智慧もまた正見に属するし、八支聖道の智慧もまた、正見に属する。心を四聖諦に投入するのは、正思惟(sammā-saṅkappa)に属する。正見と正思惟は、観(vipassanā)に属する。

観の修習の為には、我々は、止の定力が必要であるが、これはすなわち、正精進(sammā-vāyāma)、正念(sammā-sati)と正定(sammā-samādhi)である。

我々がサマタ・vipassanā(止観)の修行をする時、戒清浄を基礎としなければならないが、それはすなわち、正語(sammā-vācā)、正業(sammā-kammanta)と正命(sammā-ājīva)である。戒(sīla)を基礎として、サマタ・vipassanā(止観)の修習をするのは、すなわち、八支聖道を修行しているのである。この八支聖道は、唯一、仏陀の教法の中においてのみ、見つけることができる。あなた方は、この良機(チャンス)を逃してはならないのである!

何故であるか? 四聖諦の観智は、弟子をして、生死輪廻から離脱せしめ得るが故に。

14 種類の個人施 (個人による布施)

前に述べた通り、弟子の布施をする行為は、輪廻を離脱する為の支え、支援とすることができる。この講話の始めに解説した所の《布施分別經》の中において、仏陀は 14 種類の個人施(pāṭipuggalika dakkhiṇa)に言及している:

「アーナンダ、ここにおいて、14個の個人施がある:

- [1] 仏陀に対して行う布施。これは一番目の個人施。
- [2] 独覚仏に対して行う布施。これは二番目の個人施。
- [3] 如来の弟子阿羅漢に行う布施。これは三番目の個人施。
- 〔4〕阿羅漢果を証悟する為に修行する行道者に対して行う布施。これは四番目の個人施。
- [5] 不来者 (anāgāmi) に対する布施。これは五番目の個人施。
- [6] 不来果を証悟する為に修行する行道者に対しる布施。これは六番目の個人施。
- [7] 一来者 (sakadāgāmi) に対する布施。これは六番目の個施。
- [8] 一来者を証悟する為に修行する行道者に対する布施。これは七番目の個人施。
- [9] 入流者 (sotāpanna) に対する布施。これは九番目の個人施。
- 〔10〕入流者を証悟する為に修行する行道者に対する布施。これは 10 番目の個人施。
- [11] 外道の離欲者に対して行う布施。これは11番目の個人施。
- [12] 有徳の凡夫(puthujjana)に対して行う布施。これは 12 番目の個人施。
- [13] 無徳の凡夫に対して行う布施。これは13番目の個人施。
- [14] 動物に対して行う布施。これは14番目の個人施。

続いて、仏陀はこの14種類の布施の利益について説明する:浄心によって、動物に布施をするのは、100倍の布施の効果を期待できる。その意味は、100世の中において、果報が生じる、という事である。ここでいう「浄心」とは、何等の見返り、例えば、布施を受け取った側からの援助などを求めない事を言う。業果の法則に対して充分な確信を持つ者にとって、彼が布施をするのは、ただ善業を累積したいが為である。例えば、誰かが、大に餌を上げる時に、「これは私の犬だ」と思うならば、この種の考え方は、清浄心ではない。ただし、もし、ある人が、鳥、例えば鳩に餌を上げるならば、この種の布施は清浄である。というのも、彼は、鳥から、どの様な見返りも求めないが故に。この事は、以下に述べる例についても、同様である。

例えば、一人の人が、比庫に対して、必需品を布施して、この事によって彼の商売に成功を齎す様に願ったのであれば、この布施は、清浄心で行われたのではない。この種の布施波羅蜜は、殊勝な利益を齎すことはできない。仏陀は更に一歩進んで言う:

浄心でもって、無徳の凡夫に布施したならば、1000倍の布施の果報を期待できる。

有徳の凡夫に布施したならば、10万倍の布施の果報を期待できる。

外道の離欲者に布施したならば、1万億倍の果報を期待できる。

入流者を証悟しようと修行している行道者に対して布施したならば、無数、無量の布施の 果報を期待できる。

いわんや、入流者に対して、

いわんや、一来果を証悟しようと修行している行道者に対して、

いわんや、一来者に対して、

いわんや、不来果を証悟しようと修行している行道者に対して、

いわんや、不来者に対して、

いわんや、阿羅漢果を証悟しようと修行している行道者に対して、

いわんや、阿羅漢に対して、

いわんや、独覚仏に対して、

いわんや、如来、阿羅漢、正自覚者に対して。

ここでいう布施とは、一膳の食事に足りる食べ物を言う。

もし、布施者が、何回も布施するならば、例えば、年間、月間において布施を続けるならば、これらの布施の利益は、言葉では語れないほどのものとなる。

以上は、異なる種類の個人施(pāṭipuggalika dakkhiṇa)(の説明)である。

七種類のサンガ施

仏陀は、続いて、アーナンダ尊者に説明する:

「アーナンダ。ここに七種類のサンガ施(saṅghikadāna)がある:

- [1] 仏陀をトップとする〔比庫と比庫尼〕の二つのサンガに対して、布施をする事。これが一番目のサンガ施。
- [2] 如来が涅槃した後、〔比庫と比庫尼〕の二つのサンガに対して、布施をする事。これが二番目のサンガ施。
 - [3] 比庫サンガに対して布施する事。これが三番目のサンガ施。

- [4] 比庫尼サンガに対して布施する事。これが四番目のサンガ施。
- [5] 『サンガの中から、これだけの比庫、比庫尼を、私に派遣して下さい』と言って、 布施をする事。これが五番目のサンガ施。
- [6] 『サンガの中から、これだけの比庫を私に派遣して下さい。』と言って、布施をする事。これが、六番目のサンガ施。
- [7] 『サンガの中から、これだけの比庫尼を私に派遣して下さい。』と言って、布施を する事。これが七番目のサンガ施。

上に述べたものが、七種類のサンガ施である。仏陀は、引き続いて、個人施とサンガ施と を比較する:

「アーナンダ、未来において、袈裟で襟を作り、無徳で、悪法の多くの種姓が存在するであろう。あれら無徳の者をサンガだと思って、布施をするならば、アーナンダ、私は言う。その様であっても、当該のサンガ施の功徳は、無数であり、無量である。アーナンダ、私は言う。どの様な場合であっても、個人施がサンガ施より更に大きな果報が齎されるという事は無い」

この意味は、サンガ施(saṅghikadāna)は、個人施(pāṭipuggalika dakkhiṇa)より 更に功徳が大きい、という事である。もし、マハーパジャーパティゴータミーが、袈裟を 仏陀を指導者と仰ぐサンガに布施したならば、より多くの、殊勝な功徳を得ることにな り、その果報は、数えることができない程であり、量ることができない程である。故に、 仏陀は、彼女に、袈裟をサンガに布施する様に、勧めたのである。仏陀はまた、布施の四 種類の清浄に関しても、説明した。

四種類の布施清浄

「ここに、四種類の布施の清浄がある。どの様な四種類であるか?」

- [1] 布施の行為があり、施主による浄化であって、受者は浄化とは無縁。
- [2] 布施の行為があり、受者による浄化があって、布施者は、浄化とは無縁。
- [3] 布施の行為があり、施主も、受者も、浄化とは無縁。
- [4] 布施の行為があり、施主、受者共に、浄化の因。

- [1] 布施の行為が、施主によって浄化され、受者は無縁というのは、どの様な事であろうか?ここにおいて、施主は、有徳で、善法者で、受者は無徳で、悪法者である。この様な布施は、施主によって浄化され、受者とは無縁である。
- [2] 布施の行為が、受者によって浄化され、施主とは無縁、というのは、どの様な事であろうか?ここにおいて、施主は無徳、悪法者、受者は有徳、善法者である。この様な布施は、受者によって浄化され、施主とは無縁である。
- [3] 布施の行為が、施主が因でもなく、受者が因でもなく、浄化されないのは、どの様な事であろうか? ここにおいて、施主は無徳、悪法者、受者は無徳、悪法者。この様な布施は、施主とも、受者とも関係なく、浄化されない。
- [4] 布施の行為が、施主と受者共に因となって、浄化されるというのは、どの様に事であるか? ここにおいて、施主は有徳、善法者、受者は有徳、善法者。この様な布施は、施主、受者共に因となって、浄化される。これが、四種類の布施清浄である。

仏陀は更に一歩進んで説明する:

「もし、有徳者が、無徳者に布施をした時、如法に得たものである事と、浄信の心<注 428>によって、業の果報は広大で有る事を信じるならば、当該の布施は施主の因によって浄化される。」

殊勝な利益を得るためには、施主は、四項目の条件を具備していなければならない。その様に(条件が揃っているの)であるならば、受け取る側が、徳行の無い人であっても、当該の布施は、施主によって浄化される。義注では、ヴェッサンタラの例を挙げている。 我々の菩薩が、過去の一生において、ヴェッサンタラとして生まれ、彼の息子と娘(すなわち、未来のラーフラと蓮華色(Uppalavaṇṇā))を徳行の無い、品性下劣のジュージャカ(Jūjaka)婆羅門に布施した。

この布施は、ヴェッサンタラが、布施ハラミツを円満する最後の一回であった。この最後のハラミツを円満した後、彼は正覚を証悟する準備に入り、ただ機の熟するのを待った。この一回の布施ハラミツと、それより前の、その他のハラミツによって、彼が、一切知智(sabbañnuta-nāṇa)を証悟するのは、必定であった。

こうしたことから、我々は、あの時の布施は、彼が正覚を証悟する為の助縁であり、それはヴェッサンタラによって、浄化されたのである、という事が出来る。当時のヴェッサンタラは、徳行があり、品性が善良であった:布施した品は、正当な手段によって、獲得し

たものである;彼の心は、清浄で、汚染がない。というのも、彼には、ただ一つの願望——正覚の証悟——しかなかったが故に;彼は、業果の法則及びその果報に対して、充分に強い信心(=確信)を擁していた。こうしたことから、あの時の布施は、施主によって浄化されたのである。(M.A.3.381)

ある人が、徳行無く、その心は不清浄で、執着、瞋恚に満ち、業果の法則を信じず、正当でない方法で獲得したものを、徳行のある人に布施したならば、この種の布施は、受者の因によって、浄化される。義注は、漁夫の例を挙げている。一人の、スリランカのカルヤーニ(Kalyānī)の河口に住んでいる漁夫が、かつて、三度、一人の、すでに阿羅漢を証悟した大長老に食べ物を供養した。臨終の時、漁夫は、大長老に対してなした所の、供養を思いだし、心中に、天界の美しい風景が現起(現象)した。そして、この世を去る前に、親戚たちに言った:

「あの大長老が私を救ってくれた!」

そして、死後、彼は天界に往生した。この種の情況において、漁夫は徳行無く、品性は劣悪であったが、しかし、布施の受者が、有徳の人であったため、この布施は、受者の因により浄化されたのである。徳行の無い人で、その心が不清浄で、執着、瞋恚等で充満していて、業果の法則を信じず、不当に得たものを、一人の徳行の無い人に布施する時、この種の布施は、施主をも、受者をも因とせず、浄化されない。

義注では、一人の猟師の例を挙げている。その猟師は、死後、餓鬼趣に生まれ変わったが、彼の妻が、彼の名義でもって、一人の戒徳のない、品性が下劣な比庫に布施をした。その為、その餓鬼は、「サードゥ」(Sādhu)という随喜の言葉を述べることができなかった。 何故であるか? というのも、施主も徳行の無い、品性が下劣な人間である――彼女は猟師の妻として、夫と共に動物を殺した;また同時に、彼女が布施したものは、不当な手段で獲得したもの、すなわち、動物を殺して得たものであった;彼女の心は、不清浄に満ちていた。というのも、彼女が(己自身の心が不清浄である事)を知っているならば、夫と共に、動物を殺すという行為をしないが故に。彼女は、業果の法則、及びその果報に関して、充分に強い信心(=確信)がなかった。

もし、彼女が、業果の法則を、深く信じるならば、殺生はしないはずである。受者も徳 行が無く、品性が下劣である時、この種の布施は、施主の因にもよらず、受者の因にもよ らず、浄化されることがない。彼女は、同じ方法によって、三度、布施を行ったが、しか し、何等のよい結果が生まれることはなかった。

その餓鬼は叫んだ:

「一人の戒徳のない人間が、三度、私の財産を盗んだ。」

その後、猟師の妻は、一人の戒徳のある比庫に食べ物を供養した所、当該の布施は、浄化 することを得た。その時、餓鬼は随喜して、「サードゥ」と言う事が出来たため、餓鬼趣 から離脱することができた。

(ここにおいて、我々は、みなさんに申し上げたい。もし、あなたが布施の中から、善報を得たいと思うのであれば、あなたは、以下の四種類の条件を具備しておらねばならない:

- 1) あなたには、徳行が必要である。
- 2) あなたの布施する品物は、正当な方式で獲得したものである事。
- 3) あなたの心が、清浄で、汚れていない事。
- 4) あなたは、業果の法則およびその果報に関して、充分な強い信心(=確信)がある事。

これより外に、もし、あなたが受者であり、かつ、施主に対して、充分に強い慈悲の心があるならば、あなたには徳行があると言える。もし、あなたの徳行に、ジャーナと観智が伴うならば、それは更に良いことである。

何故であるか? というのも、この種の布施は、施主に更なる殊勝な果報を齎すが故 に。)

次に、以下に述べる布施——四番目の布施の清浄——

施主の因と、受者の因によって、浄化された布施、に留意して頂きたい。

この種の状況において、施主は、四種類の条件を満たす必要がある:

- 1) 施主に徳行がある事。
- 2) 施主の布施する品物は、正当な方法で獲得したものである事。
- 3) 施主の心が清浄で、汚れのない事。

4) 施主は、業果の法則と及びその果報に関して、充分に強い信心 (=確信) を擁している 事。

同時に、受者もまた徳行が必要である。この種の布施に関して、仏陀は言う:

「アーナンダ。私は、この種の布施は、大きな果報を齎す、と言う。」

この種の布施は、数えきれない、量りしれない果報を生じることができる。もし、受者の 徳行がジャーナ、観智または道果智を伴うものであるならば、布施の功徳は、極めて殊勝 なものとなるのである。

功徳無量なる布施の六種類の要素

ここにおいて、我々は、もうひとつ別の經文《増支部・六集・六支布施経》(C halangadāna Sutta)を見てみたいと思う。ある時、仏陀が沙瓦提城の付近のジェータ林 給孤独園にいた。当時、ヴェルカンダ(Velukanḍa)に住む一人の在家仏弟子ナンダマーター(Nandamātā)が、ちょうど食べ物を供養していた。彼女の布施は、六種類の要素を具備していた上に、応供者はシャーリプトラ尊者とマハーモッガラーナ尊者が率いる比庫サンガであった。仏陀は天眼でもって、この布施を見た後、比庫たちに言った:

「比庫たちよ。ヴェルカンダのナンダマーター近事女は、シャーリプトラとマハーモッガラーナが率いる比庫サンガに、六支の具備した布施を行った。

比庫たちよ。六支の具備した布施とは、何であるか?ここにおいて、比庫たちよ。施主に 三支、受者に三支ある。何が施主の三支であるか?

ここにおいて、比庫たちよ。

- [1] 施主には、布施をする前に、喜悦がある。
- [2] 布施をする時、心に歓喜がある。
- [3] 布施をした後、満足の心がある。

これが、施主の三支である。何が、受者の三支であるか?

ここにおいて、比庫たちよ。

[1] 受者は、すでに、貪を離れている。または、貪を調伏して、道を行じている。

- [2] すでに、瞋恚を離れている。または、瞋恚を調伏して、道を行じている。
- [3] すでに、痴を離れている。または、痴を調伏して、道を行じている。 これらが、受者の三支である。」

合計、六種類の要素がある。もし、布施において、この六種類の要素が具足してあるならば、それは、無量で崇高な果報を齎すであろう。

仏陀は更に一歩進んで説明する:

「比庫たちよ。この六支の具足する布施の功徳は、衡量する事が容易ではない:

『これほど多くの福徳果、善果があり、楽しさを齎し、天に生まれ、楽の報いあり、天界 に導かれ、愛され、楽、意のままであり、幸福で利あり、楽しい。』その大きな功徳は、 無数、無量によってのみ、計算され得る。

比庫たちよ。大海の水が計量しがたいのと同じ様に:

『これほど多くの桶の水がある、これほど多くの幾百の桶の水がある、

これほど多くの幾千の桶の水がある、または、これほど多くの、10万桶の水がある。』 その大水の集まりは、無数、無量によってしか計算できない。

同様に、比庫たちよ。この六支を具備した布施の功徳は衡量することができない:

『これほど多くの福徳果、善果、楽しさを齎し、天に生まれ、楽の報あり、天界に導かれ、愛され、楽であり、意のままであり幸福で利益あり、楽しい。』

その大きな功徳の蘊は、唯一、無数、無量によってのみ、計算され得る。」(A.6.37)

何故であるか?施主は、《布施分別經》の中において言及されている所の、四種類の要素 が具備されているが故に:

- 1)彼女には徳行がある。
- 2) 彼女の布施したしたものは、正当な方式で獲得したものである。
- 3) 彼女の心は、清浄で汚れがない。
- 4) 彼女は、業果の法則及びその果報に対して、充分に強い信心(=確信)を擁している。

施主はまた、《六支布施経》の中において言及されている三種類の要素を具備している:

- 1) 布施する前に喜悦がある。
- 2) 布施する時に心に歓喜がある。
- 3) 布施の後、満足がある。

これらの条件は、施主にとって、非常に重要である、施主が男性であろうと、女性であろうとも。もし、彼または彼女が数えきれない、量りしれない善の果報を獲得したいと期待するならば、それらを具足する様に、努力しなければならない。しかし、《布施分別經》に基づくと、受者もまた、徳行を擁しなければならない。《六支布施経》に基づくと、受者もまた、すでに、サマタ・vipassanā(止観)を修行して、阿羅漢果に到達した比庫または比庫尼か、または今まさに貪(lobha)、瞋(dosa)、痴(moha)を断じ除く為に、サマタ・vipassanā(止観)を育成している所の、比庫または比庫尼である必要がある。

リトリート期間における布施

今、(台湾の) 壱同寺において、多くの比庫と比庫尼が、貪、瞋恚、痴を徹底的に断じ除く為に、サマタ・vipassanā(止観) を修習している。彼らは皆、戒徳を擁している。故に、我々は以下の様に言うことが出来る:

ここには、今、布施するに値する者がいる;

施主は徳行があると思える;

彼らの心もまた、清浄で汚れがないと思われる;

彼らによる布施の品物は、正当な方式で獲得したものである;

彼らは、三宝に対して、業果の法則及びその果報に対して、充分に強い信心(=確信)を 擁していると思える;

彼らは、布施をする前に、喜悦がある;

布施をする時に、心に歓喜がある;

彼らは、布施をした後、満足した。

こうした事から、我々は、この二か月の間に実施された布施は、仏陀の期待に沿うものであり、それらは崇高な布施である、と考えるものである。

施主の心願

もし、施主が、未来において、善の果報を得たいと願うならば、この善業は、必ずや、 彼らの希望に沿うものとなるであろう。

何故であるか? 仏陀は《布施再生経》 (Dānūpapatti Sutta) の中において、以下の様に言う:

" Ijihati bhikhave sīlavato cetopaņidhi visuddhattā."

「比庫たちよ。持戒者の心願は、〔戒〕清浄によって、達成される。」 (A.8, 35) 故に、徳行の有る者の善業は、彼の心願を達成させることができる:

もし、彼が、正自覚仏陀になりたいと発願するならば、彼は正自覚仏陀になることができる。

もし、彼が、独覚仏になりたいと発願するならば、彼は独覚仏になることができる。

もし、彼が、上首(上席)弟子(aggasāvaka)になりたいと発願するならば、彼は上首弟子になることができる。

もし、彼が、大弟子(mahāsāvaka)になりたいと発願するならば、大弟子になることができる

もし、彼が、普通弟子(pakatisāvaka)になりたいと発願するならば、彼は普通弟子になることができる。

しかし、これもまた、彼のハラミツが熟して初めてその様な結果が齎されるのであって、 ただ発願するだけでは、上に述べた、各種の菩提(bodhi)を成就するには、足りないの である。次にまた:

もし、彼が、次の一世において、人間社会における楽しみを獲得したいと希望するならば、彼は、人間社会における楽しみを得ることができる。

もし、彼が、天界に往生したいと願うならば、彼は、天界に往生することができる。

もし、彼が、梵天界に往生したいと願うならば、この善業をば、彼が、梵天界に往生する 為の助縁とすることができる。

何故、この様に言うのであるか?

もし、彼の布施が、上に述べた通りの、あれらの条件を具備しているのであれば、すなわち、布施の前、布施する時、布施した後、彼の心は、喜悦で充満しており、清浄で、汚染なく、楽しいものであるならば、かつ、布施の品物と受者を所縁として、受者が彼の心の慈の修習(mettābhāvanā)の所縁となるならば、彼の、受者に対する慈心は、強大なものになる。

もし、彼がその時、慈心禅を修習するならば、彼の慈心ジャーナは、彼の死後、彼をして、梵天界に往生せしめるであろう。

この様に、彼の布施は、彼が梵天界に往生する為の、助縁となる。こうしたことから、 もし、施主が、死後、梵天界に往生したいと願うならば、彼は、ジャーナを証得するま で、慈心を修習しなければならない。

もし、彼が、すでに、慈心ジャーナに到達しており、かつ、食べ物を供養するのであれば、彼の善業は、彼が梵天界に往生する為の、殊勝で、また極めて力のある助縁になるものである。

故に、もし、あなたが、未来において、好い果報を得たいと願うのであれば、あなたは、 ジャーナを証得するまで、慈心を修習しなければならない。人の楽しさ、天の楽しさ、梵 天の楽しさという、三種類の楽しさの中において、梵天の楽しさが、最も高等である。 どの様な世間の楽しさをもってしても、梵天の楽しさと比べられるものはない。31 界の中

最も殊勝な世間的布施

において、それは、最も殊勝な楽しさなのである。

これこそが、本講話の始めに言及した所の、一番目の布施、すなわち、大果報を齎す布施である。あなたは、この種の布施が好きであろか?もし、そうであるならば、以下の《布施分別經》から引用した偈頌を聞いて頂きたい:

"Yo vītarāgo vītarāgesu dadāti dānaṃ Dhammena laddhaṃ supasannacitto Abhisaddahaṃ kammaphalaṃ ulhāraṃ Taṃ ve dānaṃ āmisadānānamagganti."
「もし、阿羅漢が阿羅漢に布施する時、如法によって得た品物、及び浄信の心により、業の果報の広大なるを信じるならば、これは、最上の世間施となる。」

この様な状況において、施主は、四種類の要素を擁している:

- 1) 施主は阿羅漢である事。
- 2) 施主の布施した品物は、正当な方式で獲得したものである。
- 3) 施主の心は清浄で、汚染のない事。
- 4) 施主が、業果の法則、およびその果報に対して、充分に強い信心(=確信)を擁している事。ただし、五番目の要素もまた、必要とされる。すなわち:
- 5) 受者もまた阿羅漢である事。

仏陀は、以下の様に言う:

この種の布施は、世間的布施の中においては、最も殊勝な布施である。すなわち、一人の 阿羅漢が、もう一人の阿羅漢に対して布施をするのである。彼は、この種の布施が、最も 殊勝である、と讃嘆する。

何故であるか? この種の布施は、如何なる果報をも生じることがない。

何故であるか? 施主は、すでに、無明と生命への一切の執着を断じ除いているが故に。

業、すなわち、行(sańkhāra)の主因は無明(avijjā)と愛(taṇhā)である。この種の布施の中において、行とは、布施を受者に供養する善行の事を言う。しかし、この種の行は、如何なる果報をも生じる事がない。というのも、それには、支持因が欠けているが故に:無明もなければ、愛もないが故に。もし、一本の木の根が、すでに、完全に、破壊され尽くしているならば、如何なる果実をも生じることがない。同様に、阿羅漢の布施は、どの様な果報をも生じることがない。というのも、彼はすでに、徹底的に、無明と愛の根を、断じ除いているが故に。

《経集・宝経》 (Ratana Sutta) の中において、仏陀は以下の様な偈頌を誦した:

"Khīṇaṃ purāṇaṃ nava natthi sambhavaṃ, virattacittā'yatike bhavasmiṃ;
Te khīṇabījā avorūļhichandā, nibbanti saṅghe ratanaṃ paṇītaṃ, etena saccena suvatthi hotu."

已尽旧者新不生(旧者は尽きて、新者は生じない)

於未来有心離染 (未来に於いて、心は染を離れる)

彼尽種子<注 429>不増欲(種子は尽きて、欲の増す事はない)

諸賢寂滅如此灯(諸々の賢者は、この灯の様に寂滅する)。

此乃僧之殊勝宝(これはサンガの殊勝な宝)

以此実語願安楽! (この真実語をもって願う、安楽のある事を!)

これは、真実語の宣言である。この真実語の宣言によって、ヴェーサリー城のすべての居住民は、危難<注30>から脱出することができた。阿羅漢の布施は、最も殊勝である。というのも、それはどの様な未来の果報をも生じることがないが故に。未来がなく、生、老、病、死がない時、それは最も殊勝である。これが、今回、一番最初に開示(講話)した時に言及した所の、二番目の布施である:果報なく、結果が生じない布施。しかしながら、上に述べた一番目の布施、すなわち、果報を生じる布施、例えば人々に楽しさを齎したり、天の楽しさ、または梵天の楽しさを齎すものには、依然として苦が存在する。

最低限の苦とは、施主は、依然として、生、老、病、死に出会わなければならない事。もし、施主が、依然として、欲楽の対象、それが生命のあるものであっても、無生命のものであっても、それらに執着するならば、これらの対象が破壊されたり、死亡した時、彼は、愁、悲、苦、憂、悩に巻き込まれることになる。

この問題について考えて頂きたい:

ある種の布施が、生、老、病、死、愁、悲、苦、憂、悩を齎す時、我々は、それを殊勝である、と言えるかどうか?また、この問題について考えて頂きたい:ある種の布施は、如何なる果報も生じることがなく、生なく、老なく、病なく、死なく、愁なく、悲なく、苦なく、憂なく、悩がない時、我々は、それを殊勝でないと、言えるであろうか?これが、なぜ、仏陀が二番目の布施を最も殊勝であると、讃嘆する理由である。今、あなた方は、開示の始めに、我々が言及した二種類の布施の意味を理解できたと思う。

- 1) 大果報のある布施。
- 2) 果報のない布施。

あなたは、どの種類の布施を好むであろうか?

今、あなた方は、答えを得た。

如何にして最も殊勝な布施を実践するか

しかし、もし、施主が阿羅漢でない時、彼は、どの様にして、二番目の布施を行うことができるであろうか?

上に述べた《六支布施経》の中において、仏陀は、二種類の方式でもって、この種の布施を実践することが出来る、と教導した:受者が、すでに、食、瞋、痴を断じ除いているか、または、まさに食、瞋、痴を断じ除く為に尽力しているか。もし、施主もまた、食、瞋、痴を断じ除く為に尽力していて、布施の時に、観の修習をするならば、あなたは、この種の布施もまた、最も殊勝な布施で有る、と言える。

観の修習とはすなわち:<注 431>

彼は、己自身の名色法を識別し、かつ、それらの無常(anicca)・苦(dukkha)・無我(anatta)の本質を観照する;

彼は、外在の名色法の無常・苦・無我の本質を観照する。特に受者の名色法を;

彼は、布施の品物の究極色法の無常・苦・無我の本質を観照する;

彼は、布施の時に生起した所の、善名法の無常・苦・無我の本質を観照する。

彼が布施のした物の中の四界を観照する時、簡単に、色聚を見ることができる。これらの 色聚を分析する時、彼は、八種類の色法、すなわち、地界、水界、火界、風界、色彩、匂 い、味と食素(栄養素)を識別することができる。

これらの色聚は、一代一代ごとの時節生色(utujarūpa)であり、一粒一粒ごとの色聚の中の火界によって生じるものである。<注 432>。次に、あなたは、それらの無常・苦・無我の本質を観照する。もし、施主が、この種の観智を修習することができるならば、布施を実践する時に、彼の貪、瞋、痴は、鎮伏されるが、その時、この種の布施は、通常は、果報を生じることがない。<注 433>。この様であるが故に、我々は、この種の布施もまた最も殊勝である、と言うのである。

施主は、布施の実践の前、布施の後、または布施の時、この種の観智を修習することができる。しかし、彼の観智は、強くて力のあるものでなければならず、少なくとも、壊滅智(Bhaṅga-ñāṇa)の段階まで到達しておかねばならない。この様にして初めて、この種

の観智を修習することができる。我々もまた、この良機 (チャンス) を逃すことない様 に。この種の機遇は、唯一、仏陀の教法の中においてのみ、存在する!

しかし、あなたは訊ねるかも知れない。もし、我々に観智がないのであれば、如何にして、この種の布施を実践することが出来るであろうか、と。我々は、あなたに、布施の時、以下の様に発願する様にと、提案する;「この布施が、涅槃を証悟する助縁となります様に!」

というのも、仏陀は、布施をする時、涅槃を証悟する様、発願する様にと、教導している が故に。

我々は、再度《宝経》の偈頌を誦して、今回の開示(法話)を終わりにしたい、と思う: "Khīṇaṃ purāṇaṃ nava natthi sambhavaṃ、virattacittā'yatike bhavasmiṃ; Te khīṇabījā avirūlhichandā、nibbanti dhīrā yathāyaṃ padīpo. idampi saṅghe ratanaṃ panītaṃ、etena saccena suvatthi hotu." 已尽旧者新不生、於未来有心離汚。彼尽種子不増欲、諸賢寂滅如此灯。

一切の衆生、安穏で、楽しくあれと願う!

此乃僧之殊勝宝、以此実語願安楽!



脚注

<注 426>=布施が行われた後の開示(法話)。まさに、ここでの状況と同じである。パーリ語では、anumodana 開示(法話)と言う。modana とは「歓喜」、anu とは「重複して」という意味。anumodana 開示(法話)とは、すなわち、施主の心を激励する随喜の開示(法話)すなわち、励ましの法話、である。彼らが行った善業と功徳を増強せしめて、これを信に銘記させる。

<注 427>=《法句義注・護眼長老の物語》(Cakkhupālattheravatthu)(Dhp.A. 1)

<注 428>=期待や執着、憤怒などがない。

<注 429>=種、すなわち、輪廻再生に到らせる種の事:無明、愛と業力。

<注 430>=ヴェサリーは、かつて、干ばつ、飢餓、邪悪アカ(下等の天神)と疫病に侵害された都市であった。ヴェサリーの住民は、仏陀に対して、彼らを助けてくれる様に頼んだ。仏陀は、彼らに《宝経》(Ratana Sutta)を、護衛として教導した。

<注 431>= 《パッターナ》(Paṭṭhāna、アビダンマ第七部論)「善三法」 (Kusalattika 1.423)

<注 432>=時節生色に関しては、「時節生色」の章を参照の事。

<注 433>=観智において、通常は、業が未来において、果報を生じせしめない様にすることが出来る。故に、「業の尽きるを促す業」(kammakkhayakarakamma)と呼ぶ。厳格に言えば、ただ、四道智のみが、真正に業の尽きるを促す業である。観智は、時には、随眠を因として、善の果報を齎すこともあるが、しかし、強くて力のある観智(少なくとも壊滅智の段階まで修行済み)は、道智の生起する近因であるが故に、業の尽きるを促す業、と呼ぶこともできる。



付録 1 40 種類の禅修業処

仏陀の教導した40種類の止禅業処<注434>の部分の、経典の出所<注435>。

逼 10+不浄 10+随念 10+

梵住 4+無色 4+想 1+差別 1

=合計 40。

十遍

《結集経》(Saṅgīti Sutta)(D.3. 346)

《マハーサクルダーイ Sutta》 (Mahāsakuludāyi Sutta)

(M.2.250)

《逼経》(Kasiṇa Sutta)(A.10.25)

十不浄

《大念処經》(Mahāsatipaṭṭhāna Sutta)(D. 2.379)

《身至念經》(Kāyagatāsati Sutta)(M. 3. 154)

十随念: 仏随念、法随念、僧随念

《大般涅槃経》(Mahāparinibbāna Sutta)(D. 2. 159)

《族旗頂経》(Dhajagga Sutta)(S. 1. 249)

戒随念

《大般涅槃経》(Mahāparinibbāna Sutta)(D. 2. 159)

《ウポーサタ経》 (Uposatha Sutta) (A. 3. 71)

捨随念

《大名経》 (Mahānāma Sutta) (A. 6.10)

天随念

《ウポーサタ経》 (Uposatha Sutta) (A. 3. 71)

《大名経》(Mahānāma Sutta)(A. 6. 10)

死随念

《第一念死経》(Paṭhamamaraṇassati Sutta)(A.6. 19)

《第二念死経》(Dutiyamaraṇassati Sutta)(A. 6. 20)

身至念<注 436>

《大念処經》(Mahāsatipaṭṭhāna Sutta)(D. 2. 377)

《身至念經》(Kāyagatāsati Sutta)(M. 3. 154)

入出息念

《大念処經》(Mahāsatipaṭṭhāna Sutta)(D. 2. 374)

《身至念經》(Kāyagatāsati Sutta)(M. 3. 154)

寂止随念<注 437>

《マハーマールキャ経》(Mahāmālukya Sutta)(M . 2. 133)《定經》(Samādhi Sutta)(A. 5. 27)

四梵住

慈梵住

《鋸喩経》(Kakacūpama Sutta)(M.1. 277)

《蛇王経》(Ahirāja Sutta)(A. 4. 67)

慈梵住、悲梵住、喜梵住、捨梵住

《三明経》(Tevijja Sutta)(D. 1. 556)

《マガデーワ経》(Maghadeva Sutta)(M. 2. 310)

《ケーサムッティ経》 (Kesamutti Sutta) <注 438> (A. 3. 66)

四無色:空無辺処、識無辺処、無所有処、非想非非想処

《大因縁経》(Mahānidāna Sutta)(D. 2. 129)

《聖尋経》 (Ariyapariyesanā すなわち、) <注 439>

 $(M \circ 1. 277-278)$

《不動利益経》(Āneñjasappāya Sutta)(M.3. 68-71)

《ジャーナ経》 (jhāna Sutta) (A. 9. 36)

一想:食厭悪想

《食厭悪経》(Āhārepaṭikūla Sutta)(S.5. 250)

《第一想経》(Paṭhamasaññā Sutta)(A. 5. 61)

《第二想経》(Dutiyasaññā Sutta)(A.5. 62)

一差別:四界差別

《大念処經》(Mahāsatipaṭṭhāna Sutta)(D. 2. 378)

《身至念經》(Kāyagatāsati Sutta)(M.3. 154)



注

<注 434>=<説取業処品>(Kammaṭṭhānaggahaṇaniddeso)(Vm.47)

<注 435>=ここで列挙している経典の出所は、ただ例を列挙したにすぎない。更に多くの経典が、これらの業処に言及している。

<注 436>=《清浄之道》においては、「身至念」とは、特に、32 身分業処の事を指す。 しかしながら、仏陀の言う身至念は、非常に多くの含意を擁する。たとえば、《長部・大 念処經》(Mahāsati-paṭṭhāna Sutta)において、仏陀は32 身分を含む、14 種類の身随 観を教導した。一部分を開示して、開示が終了する度に、仏陀は「比庫は、かくの如く に、身において、身を随観して住む。」と言った。また《中部・身至念經》 (Kāyagatāsati Sutta)においては、四種類の色界ジャーナをも、含む。

<注 437>=これは、涅槃の功徳を随念するもの。

<注 438>=《カーラーマ経》(Kālāma Sutta)

<注 439>=Pāsarāsi Sutta とも言う。

(『親知実見』翻訳完了。2021年7月17日)

